京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　二〇一五－一七

円勝寺跡・成勝寺跡・白河街区跡・岡崎遺跡

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

円勝寺跡・成勝寺跡・白河街区跡・岡崎遺跡

2016年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

円勝寺跡・成勝寺跡・白河街区跡・岡崎遺跡

2016年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

序　　文

京都市内には、いにしえの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、京都市美術館再整備事業に伴う円勝寺跡・成勝寺跡・白河街区跡・岡崎遺跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

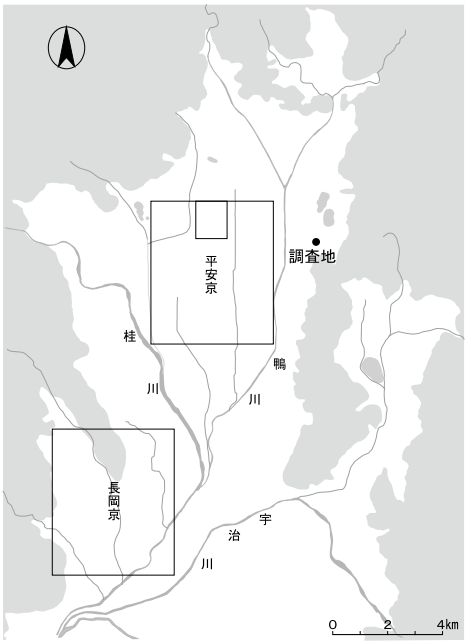
平成28年12月

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

所　長　　井　上　満　郎

例　言

1	遺跡名	円勝寺跡・成勝寺跡・白河街区跡・岡崎遺跡 （文化財保護課番号　13 R 450）
2	調査所在地	京都市左京区岡崎円勝寺町124（京都市美術館敷地内）
3	委託者	京都市　代表者　京都市長　門川大作
4	調査期間	2015年10月13日～2016年２月29日
5	調査面積	1,294㎡
6	調査担当者	金島惠一・近藤奈央・伊藤　潔・辻　裕司
7	使用地図	京都市発行の都市計画基本図（縮尺１：2,500）「御所」・「吉田」・「三条大橋」・「岡崎」を参考にし、作成した。
8	使用測地系	世界測地系　平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
9	使用標高	T.P.：東京湾平均海面高度
10	使用土色名	農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』に準じた。
11	遺構番号	通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
12	遺物番号	種類ごとに通し番号を付し、写真番号も同一とした。
13	本書作成	近藤奈央・上村和直・松吉祐希
14	執筆分担	近藤奈央：下記以外すべて 上村和直：４－（３） 松吉祐希：瓦類観察表 付章１：パリノ・サーヴェイ株式会社
15	備考	上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。
16	協力者	調査・資料整理に際して、下記の方々からご教示を頂いた。記して、感謝を申し上げます。 網　伸也、伊藤淳史、小野映介、桐井理揮、高 正 龍、鈴木久男、中居和志、長宗繁一、西山良平、肥後弘幸、森岡秀人 （五十音順、敬称略）



（調査地点図）

目　　次

１．調査経過 …… 1
２．位置と環境 …… 3
（１）地理的環境 …… 3
（２）歴史的環境 …… 3
（３）周辺の調査 …… 4
３．遺　　構 …… 9
（１）基本層序 …… 9
（２）遺構の概要 …… 11
（３）第３面の遺構 …… 11
（４）第２面の遺構 …… 11
（５）第１面２期の遺構 …… 13
（６）第１面１期の遺構 …… 21
４．遺　　物 …… 26
（１）遺物の概要 …… 26
（２）土器類 …… 27
（３）瓦類 …… 52
（４）土製品 …… 58
（５）金属製品 …… 59
（６）石製品 …… 60
（７）木製品 …… 63
（８）植物遺存体 …… 70
５．ま と め …… 72
（１）第３面〔旧石器時代〕 …… 72
（２）第２面〔弥生時代後期から古墳時代後期〕 …… 72
（３）第１面２期〔平安時代中期末から鎌倉時代前期〕 …… 74
（４）第１面１期〔鎌倉時代後期から江戸時代〕 …… 78
（５）出土遺物について …… 78
付章１　自然科学分析 …… 80

図　版　目　次

図版１　遺構　第３面平面図（１：300）
図版２　遺構　第２面平面図（１：300）
図版３　遺構　第１面２期平面図（１：300）
図版４　遺構　第１面１期平面図（１：300）
図版５　遺構　調査区西壁・南壁断面図（１：200、１：50）
図版６　遺構　調査区中央部西壁・中央部南壁断面図（１：200、１：50）
図版７　遺構　流路1100西岸遺物出土状況図（１：50）
図版８　遺構　護岸1215実測図（１：50）
図版９　遺構　建物１・４実測図（１：80）
図版10　遺構　建物２実測図（１：80）
図版11　遺構　柵１・５実測図（１：80）
図版12　遺構　柵２～４実測図（１：80）
図版13　遺構　井戸830・620、土坑516実測図（１：20、１：40）
図版14　遺構　土坑335・518・616・721実測図（１：20）
図版15　遺構　溝440・840・900・1000断面図（１：50）
図版16　遺構　溝900西肩護岸実測図（１：20）
図版17　遺構　土坑243・267・735・396実測図（１：20）
図版18　遺構　土坑895・896・1095実測図（１：40）
図版19　遺構　溝840実測図（１：50）
図版20　遺物　流路1100西岸出土土器実測図１（１：４）
図版21　遺物　流路1100西岸出土土器実測図２（１：４）
図版22　遺物　流路1100西岸出土土器実測図３（１：４）
図版23　遺物　流路1100西岸出土土器実測図４（１：４）
図版24　遺物　流路1100西岸出土土器実測図５（１：４）
図版25　遺物　流路1100西岸出土土器実測図６（１：４）
図版26　遺物　流路1100西岸出土土器実測図７（１：４）
図版27　遺物　溝900出土土器実測図１（１：４）
図版28　遺物　溝900出土土器実測図２、土坑516出土土器実測図（１：４）
図版29　遺物　井戸830、土坑335・518出土土器実測図（１：４）
図版30　遺物　土坑616・721、井戸1210出土土器実測図（１：４）
図版31　遺物　溝840出土土器実測図（１：４）
図版32　遺物　軒丸瓦拓影及び実測図１（１：４）

図版33　遺物　軒丸瓦拓影及び実測図２（１：４）
図版34　遺物　軒丸瓦拓影及び実測図３（１：４）
図版35　遺物　軒丸瓦拓影及び実測図４（１：４）
図版36　遺物　軒丸瓦拓影及び実測図５（１：４）
図版37　遺物　軒丸瓦拓影及び実測図６（１：４）
図版38　遺物　軒丸瓦拓影及び実測図７（１：４）
図版39　遺物　軒丸瓦拓影及び実測図８（１：４）
図版40　遺物　軒丸瓦拓影及び実測図９（１：４）
図版41　遺物　軒丸瓦拓影及び実測図10（１：４）
図版42　遺物　軒丸瓦拓影及び実測図11（１：４）
図版43　遺物　軒平瓦拓影及び実測図１（１：４）
図版44　遺物　軒平瓦拓影及び実測図２（１：４）
図版45　遺物　軒平瓦拓影及び実測図３（１：４）
図版46　遺物　軒平瓦拓影及び実測図４（１：４）
図版47　遺物　軒平瓦拓影及び実測図５（１：４）
図版48　遺物　軒平瓦拓影及び実測図６（１：４）
図版49　遺物　軒平瓦拓影及び実測図７（１：４）
図版50　遺物　軒平瓦拓影及び実測図８（１：４）
図版51　遺物　軒平瓦拓影及び実測図９（１：４）
図版52　遺物　軒平瓦拓影及び実測図10（１：４）
図版53　遺物　軒平瓦拓影及び実測図11（１：４）
図版54　遺物　軒平瓦拓影及び実測図12、刻印瓦拓影及び実測図１（１：４）
図版55　遺物　刻印瓦拓影及び実測図２、ヘラ記号瓦拓影及び実測図（１：４）
図版56　遺物　鬼瓦拓影及び実測図（１：４）
図版57　遺構　１　第３面　調査区西半　北調査区全景（北から）
　　２　第３面　調査区西半　南調査区全景（北から）
　　３　植物の塊検出状況（南調査区、北東から）
　　４　木の根検出状況（南調査区、北から）
図版58　遺構　１　第２面　調査区西半全景（北東から）
　　２　第２面　調査区北東全景（北西から）
図版59　遺構　１　第２面　調査区南東全景（北東から）
　　２　流路1100西岸断面（調査区西半、東から）
図版60　遺構　１　流路1100遺物出土状況（調査区西半、北東から）
　　２　流路1100遺物出土状況（調査区北西部、東から）
　　３　流路1100西岸遺物出土状況（北から）

図版61　遺構　1　流路1100東岸（調査区北東部、北東から）
2　護岸1215（東から）
図版62　遺構　1　第１面２期　調査区西半全景（北から）
2　第１面２期　調査区東半全景（北西から）
図版63　遺構　1　溝1000全景（北から）
2　溝1000遺物出土状況（北西から）
3　溝1000断面（Ａ－Ａ’地点、南から）
図版64　遺構　1　井戸830縦板外面（北から）
2　井戸830埋土断面（北から）
3　井戸830完掘状況（北から）
4　井戸1210（北西から）
図版65　遺構　1　井戸888・1205（北東から）
2　井戸888曲物出土状況（南西から）
3　柱穴569平瓦・軒丸瓦検出状況（東から）
4　柱穴780平瓦検出状況（南西から）
5　土坑516（北から）
図版66　遺構　1　土坑335（西から）
2　土坑518（北東から）
3　土坑616（北から）
4　土坑721（東から）
図版67　遺構　1　溝900中央断面・西岸護岸検出状況（南西から）
2　溝900北端、上層東岸検出状況（北西から）
図版68　遺構　1　溝900東肩遺物出土状況（北西から）
2　溝900西岸護岸杭（南から）
3　溝900鬼瓦出土状況（南西から）
4　溝440・840・900断面（Ｃ－Ｃ’地点、北西から）
図版69　遺構　1　第１面１期　調査区全景（北から）
2　井戸1096（東から）
3　石組1089（西から）
図版70　遺構　1　土坑396（北から）
2　土坑895（西から）
3　土坑243（東から）
4　土坑267（北東から）
5　溝840（南東から）
図版71　遺構　1　溝840西岸石組（南東から）

２　溝840東岸下層石組（北西から）
図版72　遺物　流路1100出土土器１
図版73　遺物　流路1100出土土器２
図版74　遺物　流路1100出土土器３
図版75　遺物　流路1100出土土器４
図版76　遺物　流路1100出土土器５
図版77　遺物　流路1100出土土器６
図版78　遺物　流路1100出土土器７
図版79　遺物　溝1000・井戸620・土坑616出土土器
図版80　遺物　溝900出土土器
図版81　遺物　土坑335・735・溝440・840出土土器、輸入磁器、縄文土器、墨書土器
図版82　遺物　軒丸瓦１
図版83　遺物　軒丸瓦２
図版84　遺物　軒丸瓦３
図版85　遺物　軒丸瓦４・軒平瓦１
図版86　遺物　軒平瓦２
図版87　遺物　軒平瓦３
図版88　遺物　刻印瓦・鬼瓦
図版89　遺物　土製品、金属製品、石製品
図版90　遺物　木製品

挿　図　目　次

図１　調査地位置図（１：2,500）　…… 1
図２　調査区配置図（１：1,000）　…… 2
図３　調査前全景（北西から）　…… 2
図４　作業風景（北東から）　…… 2
図５　周辺調査位置図（１：3,000）　…… 5
図６　基本層位図（１：40）　…… 9
図７　調査区西壁断面（東から）　…… 10
図８　流路1100断面図（１：100）　…… 12
図９　建物３柱穴671根固石検出状況（北から）　…… 14
図10　建物３実測図（１：80）　…… 15

図11　井戸888・1205実測図（１：40）…… 17
図12　井戸1210実測図（１：40）…… 18
図13　溝440・840・900断面図（１：50）…… 20
図14　井戸1096実測図（１：40）…… 22
図15　石組1089実測図（１：40）…… 22
図16　溝840南　東肩下層石積実測図（１：50）…… 24
図17　溝440漆塗椀出土状況（南東から）…… 24
図18　縄文土器実測図（１：２）…… 27
図19　形式分類１（１：６）…… 29
図20　形式分類２（１：６）…… 30
図21　形式分類３（１：６）…… 32
図22　流路1100東岸出土土器実測図１（１：４）…… 40
図23　流路1100東岸出土土器実測図２（１：４）…… 41
図24　溝1000出土土器実測図（１：４）…… 42
図25　井戸620出土土器実測図（１：４）…… 43
図26　溝900出土白色塊付着土器（220）…… 43
図27　土坑735出土土器実測図（１：４）…… 47
図28　溝440出土土器実測図（１：４）…… 49
図29　輸入陶磁器実測図（１：２、１：４）…… 50
図30　墨書土器実測図（１：４）…… 51
図31　刻印拓影（１：１）…… 57
図32　土製品実測図（１：４）…… 58
図33　金属製品拓影及び実測図（１：２）…… 59
図34　石製品実測図１（１：１、１：２、１：４）…… 61
図35　石製品実測図２（１：４）…… 62
図36　木製品実測図１（１：４、１：８）…… 64
図37　木製品実測図２（１：４）…… 66
図38　木製品実測図３（１：８）…… 68
図39　遺構変遷図１〔弥生時代後期から古墳時代後期〕（１：500）…… 73
図40　遺構変遷図２〔平安時代中期末から鎌倉時代前期〕（１：500）…… 75
図41　遺構変遷図３〔鎌倉時代後期から江戸時代〕（１：500）…… 77
図42　調査地点の層序及び分析層準…… 81
図43　暦年較正結果…… 84
図44　花粉化石群集の層位分布…… 87
図45　植物珪酸体含量密度の層位分布…… 88

図46　花粉化石 …… 92
図47　植物珪酸体 …… 93

表　目　次

表１　周辺調査一覧表 …… 6
表２　遺構概要表 …… 10
表３　遺物概要表 …… 26
表４　軒瓦遺構別出土数量表 …… 53
表５　軒瓦分類別出土数量表 …… 54
表６　主要遺構出土樹種同定一覧表 …… 69
表７　第３面土壌サンプル種実等一覧表 …… 70
表８　放射性炭素年代測定結果 …… 84
表９　花粉分析結果 …… 86
表10　植物珪酸体含量 …… 88

付　表　目　次

付表１　縄文時代から古墳時代土器類観察表 …… 94
付表２　平安時代から室町時代土器類観察表 …… 103
付表３　軒丸瓦観察表 …… 112
付表４　軒平瓦観察表 …… 117
付表５　刻印瓦・ヘラ記号瓦・鬼瓦観察表 …… 122
付表６　土製品観察表 …… 125
付表７　金属製品観察表 …… 125
付表８　石製品観察表 …… 126
付表９　木製品観察表 …… 127

円勝寺跡・成勝寺跡・白河街区跡・岡崎遺跡

1．調査経過

本調査は、京都市美術館の再整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査である。複数年にわたって同敷地内で調査が計画されており、今回はその第２期となる。調査地は、京都市左京区岡崎円勝寺町に所在する。平安時代後期に建立された六勝寺のうち、円勝寺及び成勝寺の推定地に位置し、弥生時代から古墳時代の集落跡である岡崎遺跡の範囲のほぼ中央にあたる。

今回の調査に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「文化財保護課」という）による試掘調査が６箇所で行われ、平安時代後期やそれ以前の遺構が良好に遺存していることが確認された。この調査結果を踏まえて、文化財保護課より発掘調査の指導を京都市美術館が受け、その依頼を受けた公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が、前年度に引き続き、調査を実施する運びとなった。

調査区は、第１期調査区の南側にあたる京都市美術館敷地の西側に設定した。調査面積は総計1,294㎡である。

調査は2015年10月13日から付帯工事を開始し、京都市美術館玄関前に敷設されたコンクリートを撤去した後、重機により盛土及び耕作土などを掘削した。遺構面は弥生時代から古墳時代と平安

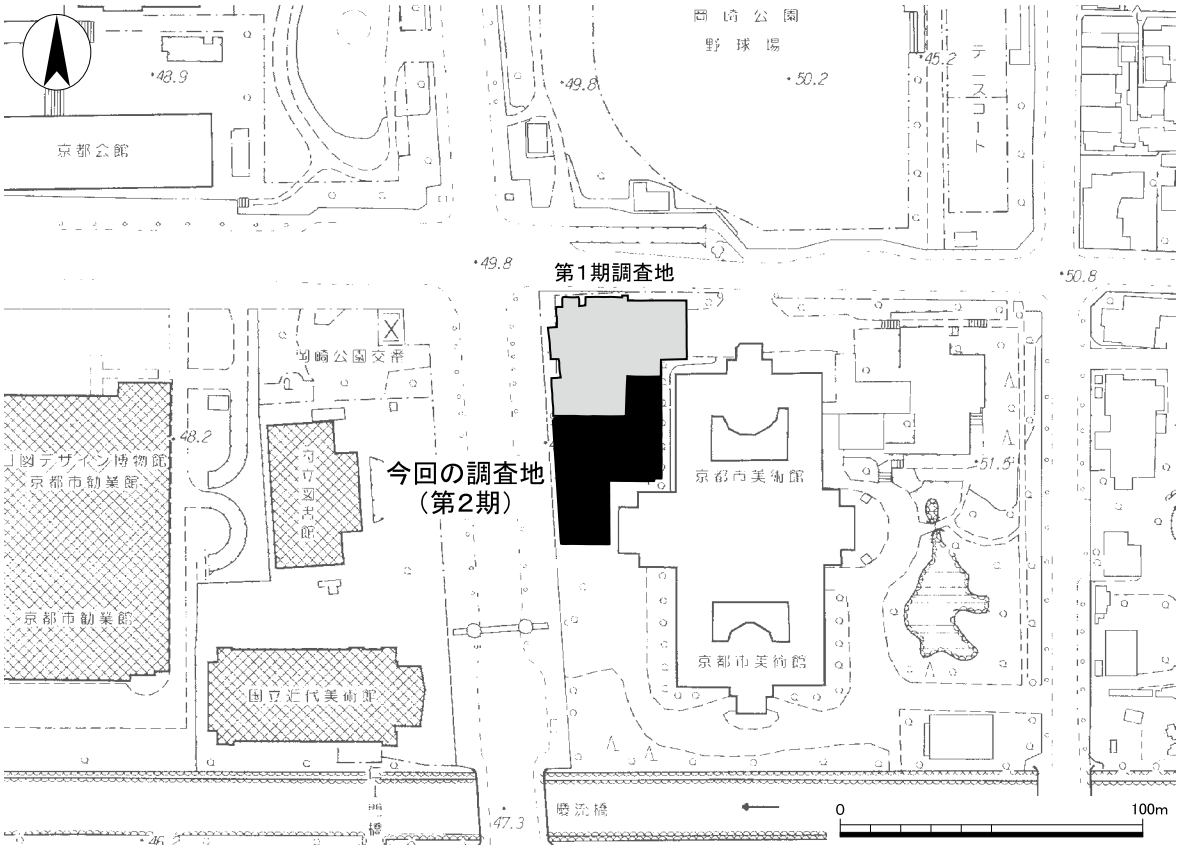


図１　調査地位置図（１：2,500）

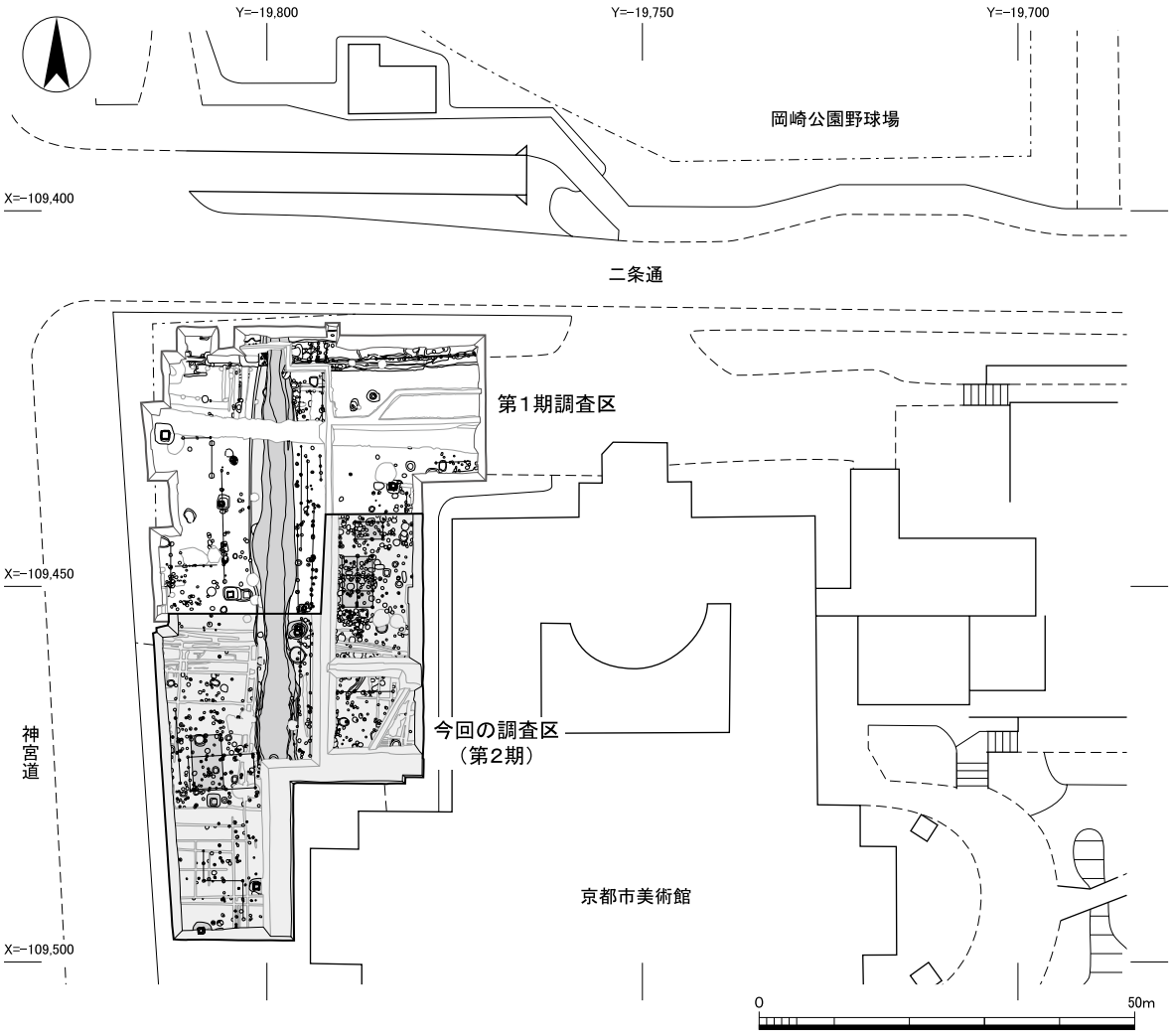


図２　調査区配置図（１：1,000）

図３　調査前全景（北西から）

図４　作業風景（北東から）

時代から江戸時代の２面であるが、2016年２月１日から調査区西半の２箇所で、下層（旧石器時代）の補足調査を行った。各遺構面の記録作業などを行い、２月29日にすべての作業を終了した。

調査期間中2015年12月26日には現地説明会を開催し、500名を超える見学者の参加があった。

その他、旧石器時代から古墳時代の環境復元を行うために花粉及び植物珪酸体の分析、自然流路の形成時期を特定するために炭素14年代測定などの科学分析を行った。

２．位置と環境

（１）地理的環境

調査地は、北に吉田山、東から南に如意ヶ岳（大文字山）や栗田山が連なる東山、西に高野川と合流して南流する鴨川に囲まれた、岡崎地域南辺に位置する。この一帯には、白川によって形成された礫質砂層の扇状地が広がり、北東から南西方向に緩やかに傾斜する地形となっている。礫質砂層は、比叡山系に分布する花崗岩が風化した砂を主体とした基盤層である。

白川は、比叡山と如意ヶ岳間の山麓を源流とし、吉田山の東側を流下して岡崎に至る。有史以前の白川は吉田山北側を西に向かって流れる流路もあったが、弥生時代前期末の土石流発生以後に、東山山麓に沿って南へ流れる現在の流路に収束したと考えられている[1)]。吉田丘陵南端から調査地周辺では、北東から南西方向の傾斜に沿った流路跡が幾筋も確認されている。弥生時代から古墳時代には、河道は定まらず、広範囲に砂礫層が広がり、微高地と湿地が混在していたと考えられるが、平安時代前期までには、現在の京都市動物園東側の河道へ安定したとみられる。

（２）歴史的環境

今回の調査地である京都市美術館の敷地は、六勝寺のうち円勝寺とその西側に造営された成勝寺の推定地に位置し、院政の舞台となった白河街区跡の中心部にあたる。白河街区は、平安時代後期に大規模に開発された鴨川の東岸地域にある。平安京の二条大路を延伸した二条大路末と、その東端に造られた広路（車道）と呼ばれた南北街路、それに面して建立された法勝寺を基軸とし、周辺一帯の街路や街区が整備された。11世紀末から白河南殿などの院御所やそのほか多くの寺院が建てられ、周辺にはそれらに関わる雑舎や宅地、工房などが建ち並んでいたとされている。

この岡崎地域の利用は平安時代前期に始まり、当初は別業地や景勝地、葬送の地であった。９世紀中頃に藤原良房の白河別業が造られ、白河殿や白河第とも呼ばれていた。藤原摂関家累代の所領地となり、桜の名所としても知られ、天皇の行幸も行われた。基経、忠平と受け継がれ、11世紀初頭には藤原道長が所有するところとなり、その後藤原頼通に伝領された。その息子の師実の時に、白河天皇に白河殿が献上されたのを契機とし、承保二年（1075）に法勝寺の造営が着手された。法勝寺は承暦元年（1077）に供養され、康和四年（1102）に堀河天皇による尊勝寺、元永元年（1118）に鳥羽天皇による最勝寺、久安五年（1149）に近衛天皇による延勝寺が次々と御願寺として供養された。このように、天皇や皇族により「勝」字の入る六つの寺院が建立されたことから、これらは「六勝寺」と総称された。また、円勝寺や成勝寺の南側には、善勝寺（藤原顕季、11世紀末から12世紀前半頃に造営）、証菩提院〔中宮篤子、大治四年（1129年）〕が建てられていたとされる。

円勝寺は大治三年（1128）に鳥羽天皇の皇后待賢門院（藤原璋子）の御願により創建された。木作り始めは天治二年（1125）で、大治元年（1126）に東塔（三重塔）が最初に建立されている（『永昌記』）。翌二年に中塔（五重塔）や西塔（三重塔）が供養された（『中右記』）。金堂や五大堂（桁

行五間)、薬師堂（九間仏堂）などは大治三年（1128)、御堂（六時堂）は大治五年（1130）である(『帝王編年記』)。その他、寝殿、西北廊、御湯屋、二階門、鐘楼、西面門、築垣があったという。伽藍配置は不明であるが、３基の塔を「東・中・西」と呼ぶことから、東西一直線に並んでいたとも、一町の場合は東西幅が狭くなることから、塔の配置をずらしていたとも推定されている。また、「池水波平」という記述があることから（『圓勝寺供養呪願』)、園池の存在も指摘されている。位置は法勝寺と最勝寺に隣接していたといい（『本朝続文粋』)、『長秋記』からは二条大路末に面していたとされる。寺域は南北一町という見解は同じでも、東西一町または二町という２説が存在する。元暦二年（1185）の地震により、築地及び中塔の九輪が破損した。建久九年（1198）に修正会が行われた記録が残る。

成勝寺は保延五年（1139）に崇徳天皇の御願により創建された（『帝王編年記』)。金堂（七間四面)、東西軒廊、東西廻廊、経蔵、鐘楼、南大門、北門、東西門があった。他に、五大堂、観音堂、総社、宝蔵、政所、修理所が推定されている。建物の位置関係を記述した文献史料が存在していないため、伽藍配置は不明である。寺院の位置は、六勝寺周辺の行程が描写された『明月記』に、南に押小路末、西に尊勝寺南大門から南へ延びる南北街路、北に二条大路末があり、それらに接していたという記述がみられる。寺域は南北・東西ともに一町と推定されている。現在地に置き換えると、京都府立図書館付近や旧勧業館付近とした説があり、未だに定説を見ていない。仁安三年(1168）に鐘楼が焼亡、建久六年（1195）に台風で南大門が倒壊した。

円勝寺・成勝寺ともに承久元年（1219）の別々の火災により、主要伽藍（金堂、塔）が焼失するが、文献史料からその後も存続していたことがわかる。応仁・文明の乱が勃発した応仁元年(1467）の翌年、残っていた建物も戦火によって焼失し、両寺院ともに廃絶したとされる（『坊目誌』)。

それ以降のことは不明であるが、室町時代には「岡崎郷」と呼ばれており、耕作地としての利用が行われていたとみられる。

明治初頭に加賀藩前田家の屋敷地となるが、移転後は再度耕作地となった。明治28年（1895）に第４回内国勧業博覧会が開催され、その跡地が整備されて明治37年（1904）に岡崎公園として開設された。明治42年（1909）には京都市商品陳列所や京都府立図書館などが建設され、近代都市京都の文化的側面を担う地域として発展した。昭和８年（1933）には大礼記念京都美術館が京都市商品陳列所跡に建設され、戦後にＧＨＱの接収、解除後に京都市美術館となって現在に至る。

（３）周辺の調査（図５、表１）

調査地周辺では、岡崎遺跡や白河街区、六勝寺の各寺院跡についての様々な調査成果が上がっている。今回調査した遺構や遺物の時期を対象として、主な調査の概要を記す（図・表は以下省略)。

旧石器時代の調査では、平安神宮火山灰と名付けられた姶良丹沢（ＡＴ）火山灰が確認されている（７～９・12・16地点)。検出した標高は44.0～48.0ｍ、現地表からの深さが約６ｍに及ぶ地点もあった。いずれも２次堆積とみられる。これらＡＴ火山灰層のほとんどは、泥炭層に挟まれた状

態で検出されており、京都市動物園の調査[2)]では、ＡＴ火山灰の直上に堆積していた泥炭層を踏み込んだ大型偶蹄類の足跡が検出された。また、12地点でも大型偶蹄類の右足跡が発見されている。これらの調査により、旧石器時代の生活面が良好に遺存していることが明らかになった。平安神宮火山灰の上下の層順では、寒冷地特有の地層の攪乱現象が確認されている。その他、大山系火山灰（上のホーキ火山灰、約20,000年前、９地点）、Ｕ－Ｏｋｉ火山灰（港火山灰、約10,700年前、12地点）やＫ－Ａｈ火山灰（横大路火山灰、約7,300年前、12地点）が確認されている。

縄文時代の遺構は確認されていないが、縄文時代中期前葉から縄文時代晩期後葉の磨滅や風化していない土器・石器が、後世の流路埋土から出土している（12・16地点）。北方の聖護院遺跡では遺構が検出されており、岡崎一帯にも集落が広がっていた可能性がある。

岡崎遺跡の主体をなす弥生時代から古墳時代の遺構は多く確認されており、集落の様相が明らかになりつつある。弥生時代後期の竪穴建物１棟（９地点）、弥生時代後期から古墳時代前期の方形周溝墓10基（７地点）、弥生時代後期から古墳時代初頭の環濠１条（16地点）、古墳時代後期の竪穴建物７棟（７・９地点）や掘立柱建物１棟（９地点）、古墳２基（12地点）である。弥生時代から古墳時代の流路は（５・７～９・12・14～16地点）で確認されている。北西から西に展開していた集落や墓域が、この流路とその西側に掘られた16地点の環濠に限られていたことが明らか

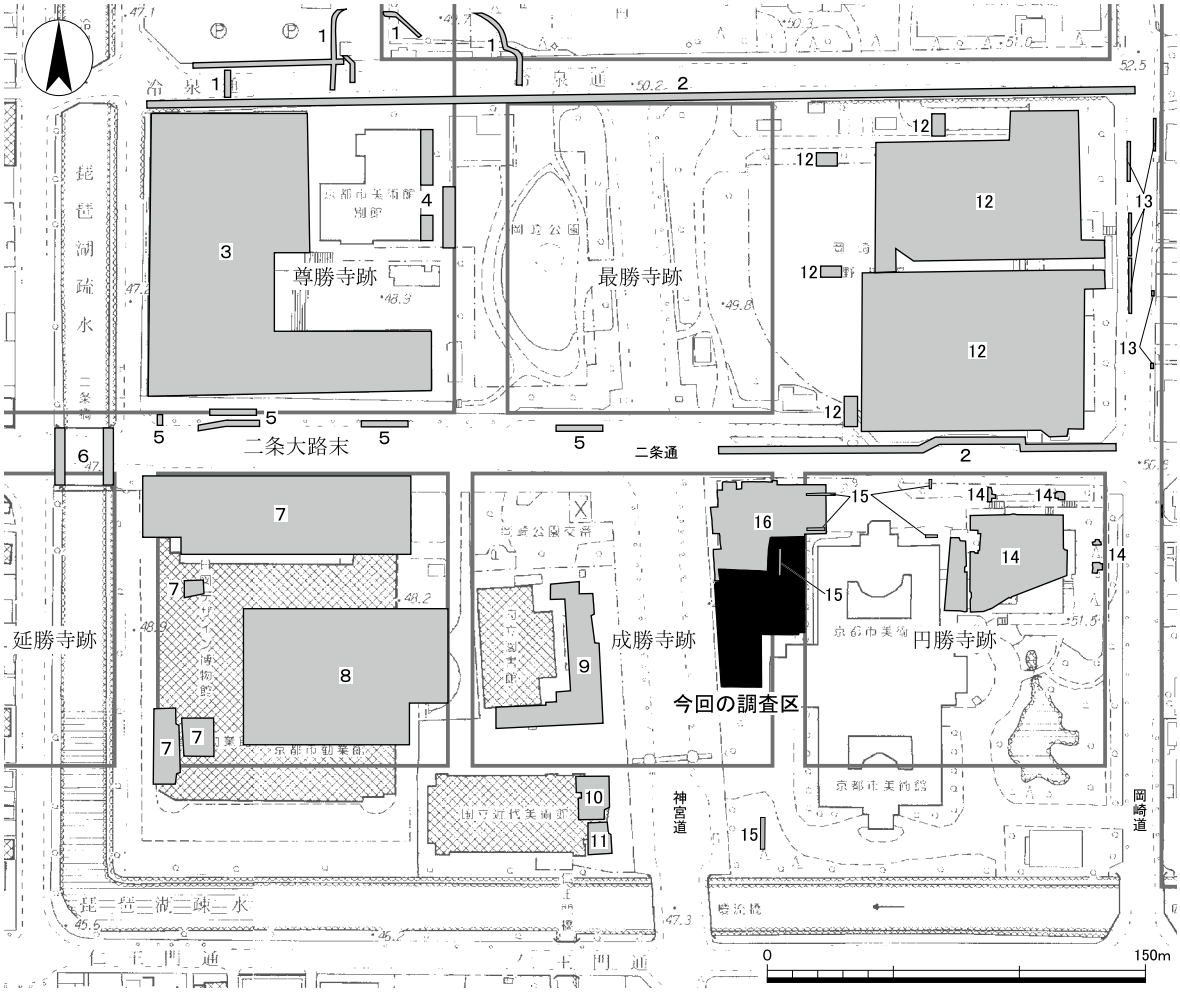


図５　周辺調査位置図（１：3,000）

表１　周辺調査一覧表

No.	遺跡名	調査方法 調査機関	調査 年度	主な遺構	主な遺物	文献 番号
1	尊勝寺跡・ 岡崎遺跡	発掘・立会 研究所	1996	平安後期：南北雨落溝・基壇整地層・掘込地業・瓦溜め・土坑、鎌倉：土坑、江戸：瓦溜め	古墳前期：土器、平安中期：土器、平安後期：土器・金属製品、鎌倉～江戸：土器	1・2
2	尊勝寺跡・ 岡崎遺跡	発掘・立会 研究所	1994～ 1995	古墳：流路、平安後期：東西雨落溝・南北溝・瓦溜め・土坑・基壇・礎石据付穴・築地・路面・整地層、江戸：溝・土坑	弥生前期：石器、古墳前期：土器、平安中期：土器、平安後期：土器・瓦・土製品(土塔)・金属製品、室町以降：土器	3
3	尊勝寺跡・ 岡崎遺跡	発掘 奈文研	1959	平安後期：建物・雨落溝・土坑	奈良以前：石器・土器、平安後期：土器・瓦・土製品(土塔)	4
4	尊勝寺跡・ 岡崎遺跡	試掘 研究所	1988	平安後期：整地層・柱穴、中世：瓦溜め、近世：柱穴・溝	古墳以前：土器、平安：土器・瓦	5
5	尊勝寺跡・ 岡崎遺跡	試掘 研究所	1997	弥生：流路、平安：路面・土坑	弥生後期：土器、平安後期：瓦	6
6	延勝寺跡・ 岡崎遺跡	立会 研究所	1997	弥生～古墳：流路、平安～鎌倉：土坑、近世：土坑	弥生後期～古墳前期：土器、平安後期：瓦、近世：土器	7
7	白河街区跡・ 岡崎遺跡	発掘 研究所	1992	旧石器：平安神宮火山灰層(AT)、弥生後期～古墳前期：方形周溝墓、古墳後期：竪穴建物、平安中期末：井戸・土器溜り・流路、平安後期：井戸・南北堀・溝	弥生～古墳：土器、平安後期～鎌倉：土器・土製品(土塔)・瓦、中世：土器	8
8	白河街区跡・ 岡崎遺跡	発掘 研究所	1992	旧石器：平安神宮火山灰層(AT)、平安後期：井戸・東西溝、中世：東西堀	平安後期～鎌倉：土器・瓦・土製品(土塔)、中世：土器	8
9	成勝寺跡・ 岡崎遺跡	発掘 府埋セ	1997・ 1998	旧石器：平安神宮火山灰層(AT)・大山系火山灰層、弥生後期・古墳後期：沼状地形・竪穴建物、古墳後期：掘立柱建物、平安末～鎌倉：掘立柱建物・井戸・土坑、江戸：土坑	弥生後期：土器、古墳後期：土器・石器、平安末～鎌倉：土器・瓦・石製品・木製品	9
10	白河街区跡・ 岡崎遺跡	発掘 研究所	1982	平安～鎌倉：池状遺構・溝・土坑	平安～鎌倉：土器、室町：土器	10
11	白河街区跡・ 岡崎遺跡	発掘 研究所	1982～ 1983	平安後期：井戸・溝	平安後期：土器・瓦	11
12	白河街区跡・ 岡崎遺跡	試掘・発掘 研究所	1989・ 1991～ 1992	旧石器：平安神宮火山灰層(AT)・港火山灰・横大路火山灰、古墳前期：流路・堰・貯木施設、古墳後期：古墳(周溝)、平安後期：造成土・東西方向地業跡・東西溝・南北溝・土坑	縄文中期～晩期：土器・石器、古墳前期～後期：土器・土製品・木製品、平安前期～後期：土器・瓦・土製品・石製品、鎌倉～室町：土器	12・13
13	白河街区跡・ 岡崎遺跡	発掘 研究所	2005	古墳前期：土坑	古墳前期：土器、平安後期：瓦、江戸：土器	14
14	円勝寺跡・ 岡崎遺跡	発掘 調査団	1970	弥生～古墳：流路、平安～鎌倉：礎石据付穴・掘立柱建物・築地掘形・雨落溝、江戸末以降：堀	弥生後期～古墳：土器・石器、平安後期～鎌倉：土器・瓦、中世以降：土器	15
15	円勝寺跡・ 成勝寺跡・ 岡崎遺跡	試掘 保護課	2013	弥生～古墳：流路、平安後期：東西溝	弥生後期～古墳前期：土器、平安後期：土器、中世以降：土器	16
16	円勝寺跡・ 成勝寺跡・ 岡崎遺跡 （第１期調査）	発掘 研究所	2014	旧石器：平安神宮火山灰層(AT)、弥生後期～古墳後期：流路・土坑・溝、平安後期～鎌倉：柵・井戸・地業・土坑・溝、室町～江戸後期：井戸・溝、江戸末以降：柵・井戸・橋・堀・土坑	縄文中末～後期初：土器、弥生後期～古墳後期：土器・石製品・木製品、平安前期：石製品、平安後期～鎌倉：土器・瓦・土製品(土塔)・木製品、中世以降：土器	17

※ 調査組織の表記は以下の様に略した。
研究所：財団法人・公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所、 奈文研：奈良国立文化財研究所、
府埋セ：財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター、 調査団：円勝寺発掘調査団、
保護課：京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課

となった。その他、12地点の流路では、流路北東部で杭と木材を使用した堰が発見された。河川水位を上げて、導水した遺構と考えられている。堰の北側では木材の集積遺構が確認された。いずれも古墳時代前期の遺構であり、この時期の集落も周辺にあると見込まれる。

古墳時代終末期以降の状況は明らかではなく、奈良時代の遺構や遺物は確認されていない。また、平安時代前期の遺構も確認されていないが、12地点で「小泉」と書かれた墨書土器や16地点で石帯に取り付けた石製帯飾り具が出土している。平安時代中期の遺構は、7地点で井戸や土器溜りが検出されている。

平安時代後期から鎌倉時代前期の遺構や遺物量は格段に増加する。六勝寺や院御所に関わる遺構が多数確認されている一方で、地割などの遺構が確認されない場合もあり、伽藍配置や推定地に不明な点も残る。尊勝寺推定地（1～3地点）では、石組雨落溝、瓦溜め、基壇などの建物に関連した遺構が多く確認され、伽藍配置や寺域の復元が進んでいる。最勝寺推定地（2・12地点）では、東西方向の地業跡や東西溝などの二条大路末北側を区画していたとみられる遺構が確認されたが、最勝寺の伽藍に関する遺構が確認されなかったことから、寺域は法勝寺北西側の二町離れた位置と推定されている。円勝寺推定地では、16地点で二条大路末の側溝とみられる東西溝や地業跡、成勝寺との境に造られた区画溝などが検出された。その他、平安時代後期の井戸や14地点では掘立柱建物などが確認されている。しかし、境内の建物配置を復元できるような遺構は検出できていない。成勝寺推定地では、平安時代後期の井戸13基や東西溝、堀、溝などがある（7・8・10・11・16地点）。平安時代末から鎌倉時代の掘立柱建物4棟、井戸3基なども確認されているが（9地点）、伽藍を復元できる主要な建物遺構は見つかっていない。

中世以降については、目立った遺構は確認されていない。耕作関係の溝や土坑が多く、農耕地としての様相を呈する。

明治時代初頭の加賀藩前田屋敷関係の遺構が14・16地点で確認され、堀や柵で屋敷地北側を区画していたことがわかった。

註

1） 冨井 眞「京都白川の弥生時代前期末の土石流」『京都大学構内遺跡調査研究年報　2000年度』京都大学埋蔵文化財研究センター、2005年

2） 内田好昭「法勝寺跡・岡崎遺跡」『平成元年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1994年

文献（表1　周辺調査一覧表）

1　平方幸雄「尊勝寺跡・最勝寺跡1」『平成8年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1998年

2　平方幸雄「尊勝寺跡・最勝寺跡2」『平成8年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1998年

3　堀内明博「六勝寺跡・岡崎遺跡」『平成7年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化

財研究所、1997年

4　杉山信三ほか「尊勝寺跡発掘調査報告」『奈良国立文化財研究所学報第十冊　平城京跡第一次飛鳥板葺宮跡発掘調査報告』奈良国立文化財研究所、1961年

5　上村和直「尊勝寺跡・岡崎遺跡」『昭和63年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1993年

6　吉崎 伸「六勝寺跡」『平成９年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1999年

7　竜子正彦「岡崎遺跡・延勝寺跡（97KS82）」『京都市内遺跡立会調査概報　平成10年度』京都市文化市民局、1999年

8　網 伸也・会下和宏・桜井みどり「成勝寺跡」『平成４年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1995年

9　有井広幸「成勝寺跡・岡崎遺跡」『京都府遺跡調査概報　第86冊』財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター、1999年

10　菅田 薫・吉川義彦「成勝寺跡」『昭和57年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1984年

11　菅田 薫「成勝寺跡」『昭和58年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1985年

12　上村和直「最勝寺跡・岡崎遺跡」『昭和63年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1993年

13　内田好昭・丸川義広・平方幸雄「最勝寺跡・岡崎遺跡」『平成３年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1995年

14　吉村正親『白河街区跡・岡崎遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2005－9、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2005年

15　円勝寺発掘調査団「円勝寺の発掘調査（上・下）」『佛教芸術』82・84号、毎日新聞社、1970・1972年

16　『京都市内遺跡試掘調査報告　平成25年度』京都市文化市民局、2014年

17　小檜山一良・近藤奈央・伊藤 潔・上村和直・李 銀眞『円勝寺跡・成勝寺跡・白河街区跡・岡崎遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2014－13、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2015年

参考文献

『地図で読む京都・岡崎年代史』京都岡崎魅力づくり推進協議会、2012年

『日本歴史地名大系第二七巻　京都市の地名』平凡社、1979年

『平安京時代史事典』角川書店、1994年

『平安京提要』角川書店、1994年

『六勝寺と白河御所』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1991年

上村和直「白河に関する基礎的検討－調査と研究の動向－」『平安京歴史研究－杉山信三先生米寿記念論集－』杉山信三先生米寿記念論集刊行会、1993年

上村和直「平安京と白河」『条里制・古代都市研究』15号、条里制・古代土地研究会、1999年

福山敏男「白河院と法勝寺の歴史」『法勝寺跡』京都市埋蔵文化財年次報告1974－Ⅱ、京都市文化観光局文化財保護課、1975年

３．遺　　構

（１）基本層序（図６・７、図版５・６）

基本層序は、地表下0.9～1.6ｍまでが近現代盛土、以下、江戸時代の耕作土（図６－１～12層、厚さ0.2～0.5ｍ）、平安時代後期の整地層（同17・18層、厚さ約0.25ｍ）、古墳時代後期から平安時代前期までの包含層（同19～21層、厚さ0.2～0.25ｍ）、弥生時代後期から古墳時代後期の湿地堆積層（同22・23層、厚さ約0.3ｍ）、弥生時代後期以前の自然流路堆積層（同24～32層、厚さ0.4～0.6ｍ）である。なお、中世耕作土は調査区北西（図６－壁１の13～15層）、調査区南西（図版５－壁６の29層）、調査区北東（図版６－壁７の14層）、調査区南東（図版６－壁11の15・16層）に部分的に遺存していた。また、調査区南東では、鎌倉時代前期の造成土を確認した（図版６－壁

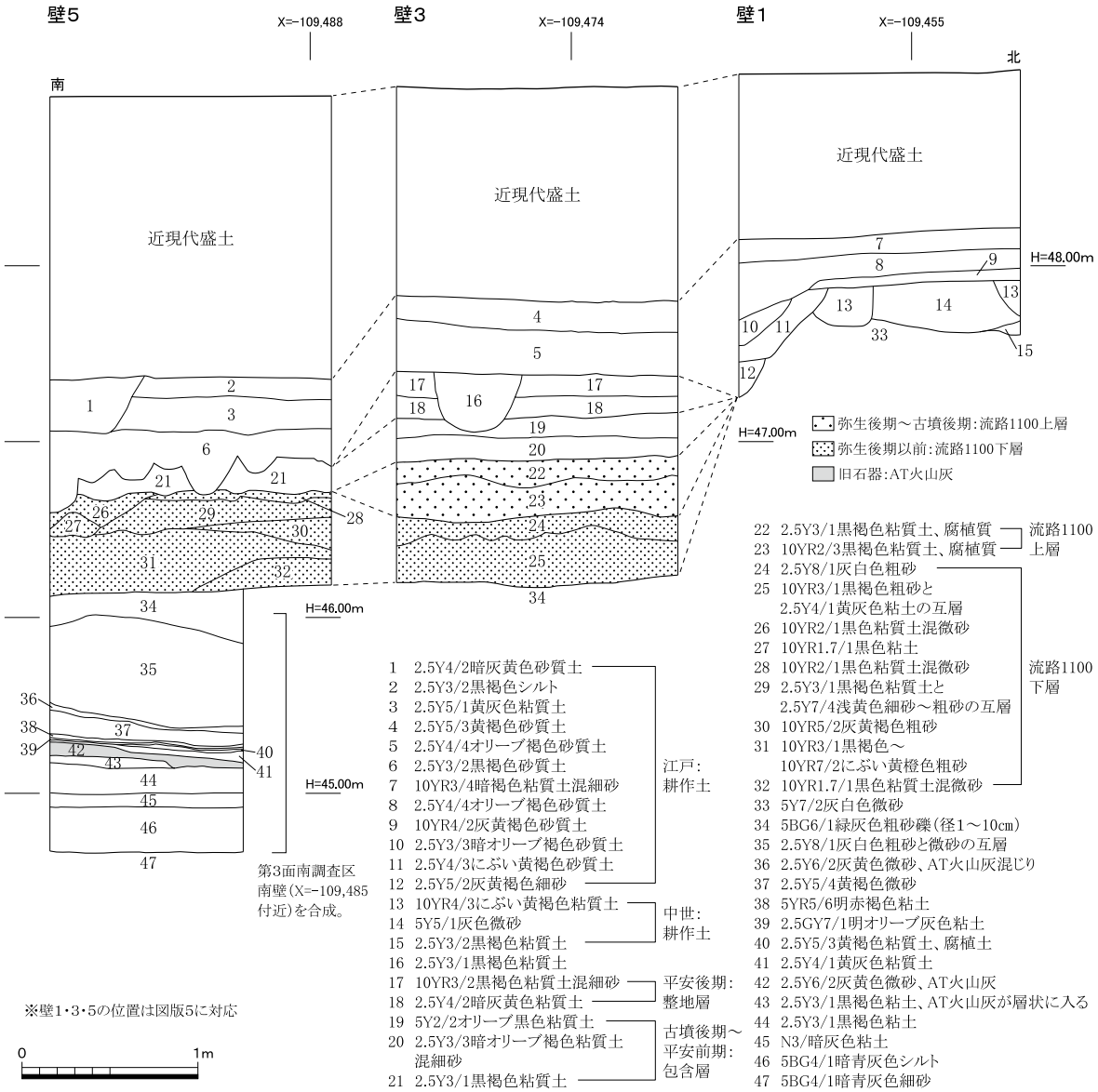


図６　基本層位図（１：40）

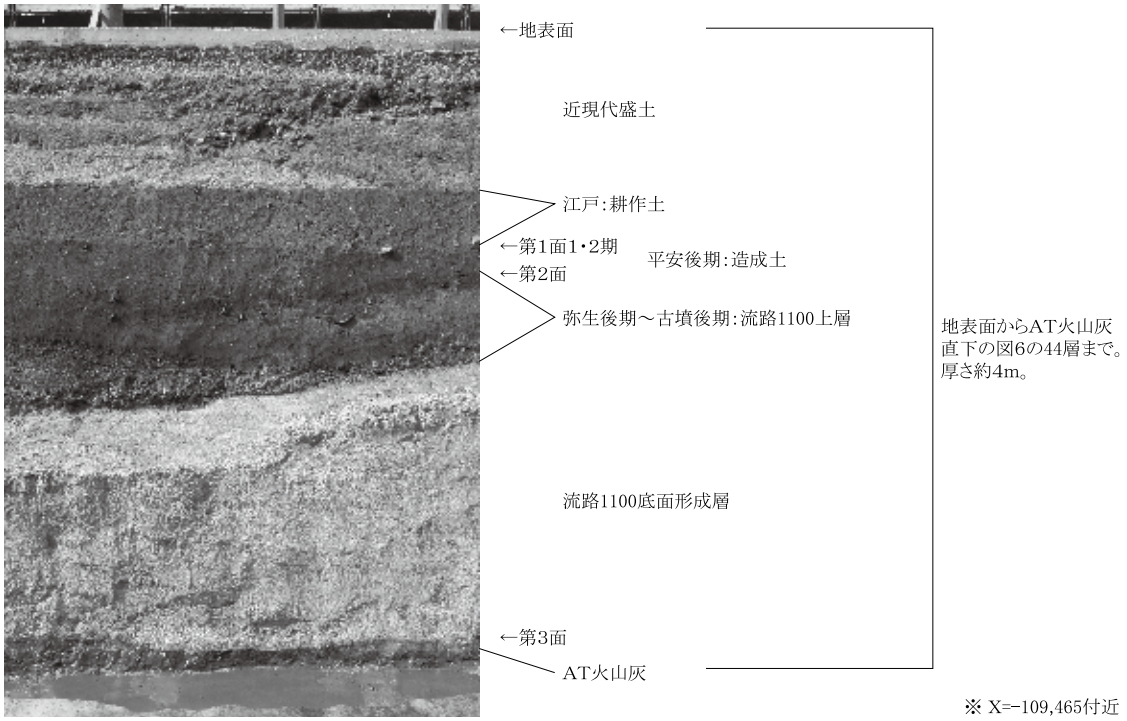


図７　調査区西壁断面（東から）

８・９の17・18層）。

調査は、第１面（図６－５・６・９層直下）を鎌倉時代後期から江戸時代と平安時代後期から鎌倉時代前期に分け、それぞれ１期・２期とし、第２面（同22層上面）を弥生時代後期から古墳時代後期、第３面（同40層上面）を旧石器時代として行った。

調査地の現地形は近現代盛土によって平坦になっているが、自然地形は北東が高く、南西が低くなっており、弥生時代後期以降の旧地形も基本的には同様の傾斜が残っていたとみられる（図版５・６）。この緩傾斜を解消するために、東西方向の段差１・２（雛壇）が造成された（図版４）。時期は、中世の耕作土及び平安時代後期の整地層上面に堆積していた江戸時代の耕作土から、江戸時代以降と考えられる（図６－壁１、図版５－壁４付近）。ただし、平安時代後期造成土と中世包含層の高低差を調べたところ、調査区中央で約0.2ｍ、調査区北東の北端で約0.4ｍあることが判明

表２　遺構概要表

時　　代	遺　　構	備　　考
弥生時代後期 ～古墳時代後期	流路1100、護岸1215	護岸1215は、流路1100東岸で検出
平安時代中期末 ～後期初頭	溝1000	
平安時代後期 ～鎌倉時代前期	建物１～４、柵１～５、柱穴569・700・780、井戸620・830・888・1205・1210、土坑335・516・518・616・721、溝900	
鎌倉時代後期 ～室町時代	柱穴413、井戸1096、石組1089、土坑243・267・396・735・895・896・1024・1095、溝440・840	
江戸時代	井戸150、土坑107・108・300・301、溝51・167	

した。明確な段差は確認できなかったが、円勝寺や成勝寺が造営された時点ですでに平坦地を造るための段差が造られていた可能性も考えられる。また、南北溝に向かって東から西へ緩やかに傾斜している（図版６－壁９～11）平安時代後期造成土の高低差は、壁９と壁10間で0.3ｍを測る。調査区西壁の平安時代後期造成土は標高値47.40ｍ、同東壁の平安時代後期造成土は47.65ｍとその差は0.25ｍである。このように、平安時代後期の造成土上面が削平されているものの、段差が存在していたことがわかった。この地点については、平安時代後期に大規模造成の一環として南北方向の段差が造成されていた可能性が高いといえ、第１期調査の見解と同じである。

（２）遺構の概要（表２）

検出した遺構の時期は、弥生時代から江戸時代に及ぶ。遺構数は約1200基である。弥生時代後期から古墳時代後期の遺構には流路や護岸施設、平安時代中期末から後期の遺構には溝、平安時代後期から鎌倉時代前期の遺構には建物、柵、井戸、土坑、溝など、鎌倉時代後期以降の遺構には井戸、土坑、溝などがある。特に、第１面１期では江戸時代の耕作溝、第１面２期では平安時代後期から鎌倉時代前期の柱穴などを多数検出した。柱穴は調査区全面に展開しており、建物や柵などが立ち並んでいたとみられるが、その大半について建物復元に至っていない。これら平安時代後期以降の遺構は、南北溝を除くと、比較的規模の小さな遺構が主体である。

（３）第３面の遺構（図版１・57）

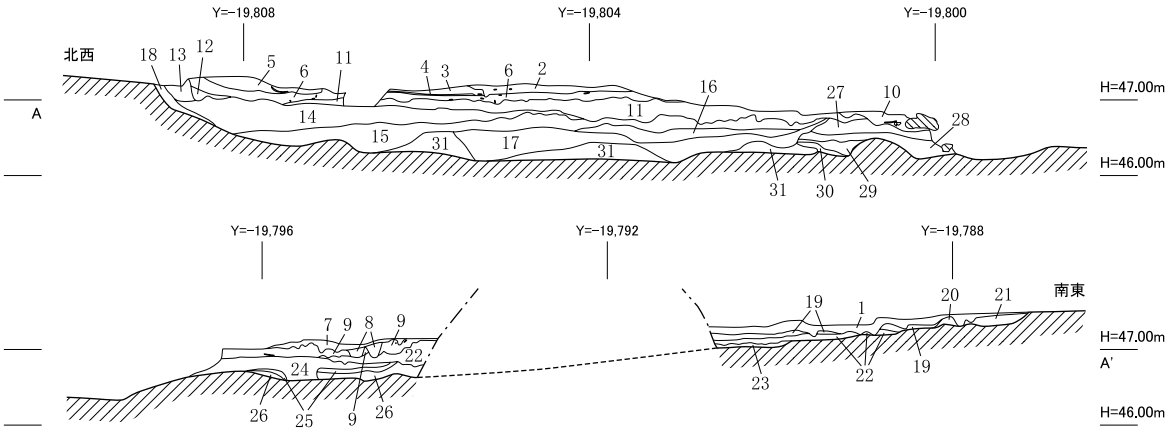
旧石器時代に相当する第３面では、遺構や遺物を発見することができなかった。約３万年前に噴火した姶良丹沢（ＡＴ）火山の降灰層（図６の42層、地表下約3.7ｍ、厚さ約0.08ｍ）を確認し、その上面で植物の塊（図版57－３）及び木の根（図版57－４）を検出した。分析の結果、植物の塊には単子葉植物が多く含まれており、木の根の樹種はヤナギ科ということがわかった。

（４）第２面の遺構（図版２・58・59）

弥生時代後期から古墳時代後期の流路1100を検出した面である。調査区南東及び北西で流路1100東西両岸を検出したが、細砂～粗砂の流路底面では遺構は確認していない。流路1100東岸では、弥生時代後期から古墳時代後期の護岸施設を検出した。

その他、調査区北西の流路1100西岸で、風倒木の痕跡とみられる土坑1220を検出した（図版２、図版５－壁２の57層）。遺物は出土していないため、時期は不明である。

流路1100（図８、図版７・59～61） 弥生時代後期から古墳時代後期の流路1100は、調査区全面で検出した。昨年度に行った第１期調査で検出した湿地460の続きである。幅25～28ｍ、検出長63ｍ、深さ0.8～1.1ｍを測る。西岸の標高は47.10～47.60ｍ、東岸に当たる調査区南東部が47.80ｍと最も高かった。北端の底面レベルは46.70ｍ、中央付近は46.50ｍ、南端の底面レベルは46.10～46.30ｍである。大きく上下２層に分かれ、上層は遺物を包含する腐植質の黒褐色粘質土（図８－１～18層）、下層は遺物を含まない粘質土や粗砂の互層（同19～31層）であった。下層の堆積



※A−A'は図版2に対応

1 10YR3/1黒褐色粘質土 土器少量含
2 10YR4/1褐灰色粘質土 炭・土器少量含
3 10YR3/2黒褐色粘質土 炭・土器少量含
4 N1.5/黒色シルト 炭層
5 10YR3/1黒褐色粘質土混微砂 土器含
6 2.5Y3/1黒褐色粘質土 炭・土器少量含
7 10YR8/6黄橙色粗砂と2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質土の互層 土器含
8 2.5Y3/1黒褐色粘質土混粗砂 2.5Y8/3淡黄色粗砂が層状に少し混じる、土器微量含
9 10YR1.7/1黒色粘質土 土壌化
10 2.5Y3/1黒褐色粘質土混細砂 木片含
11 10YR4/2灰黄褐色砂質土 細砂少量含、炭微量含
12 2.5Y2/1黒色粘質土 細砂少量含
13 2.5Y4/4オリーブ褐色細砂〜粗砂
14 10YR2/2黒褐色砂質土 シルト質、所々に10YR6/4にぶい黄橙色細砂〜粗砂が葉脈状に入る
15 10YR5/4にぶい黄褐色粗砂 炭微量含
16 10YR2/2黒褐色粘質土 シルト質、木片含、腐植土
17 10YR8/1灰白色粗砂 径5〜10cmの礫微量含、10YR2/1黒色粘質土(木片含、腐植土)が層状に混じる
18 2.5Y3/3暗オリーブ褐色細砂礫(径0.5cm) やや粘質

上層

19 10YR4/1褐灰色粘質土 粗砂少量含
20 2.5Y5/2黄褐色粗砂 径2〜5cmの10YR3/1黒褐色粘質土ブロック含
21 5Y4/2灰オリーブ色粘質土 粗砂少量含
22 10YR4/1褐灰色粘土
23 10YR4/1褐灰色粘土混7.5GY7/1明緑灰色細砂〜粘土
24 5Y8/1灰白色粗砂 所々に10YR3/2黒褐色砂質土(腐植土)が葉脈状に入る
25 10YR3/2黒褐色粘質土 腐植土
26 10YR5/1褐灰色粗砂礫(径2〜5cm)
27 10YR4/6褐色粗砂礫(径1〜10cm)
28 10YR5/3にぶい黄褐色粗砂礫(径1〜5cm) 10YR4/2灰黄褐色細砂〜粗砂(腐植土混じり)が層状に少量混じる
29 10YR2/1黒色砂質土 やや粘質、細砂・径2〜3cmの礫含
30 5BG7/1青灰色微砂
31 10YR7/1灰白色微砂と2.5Y7/6明黄褐色粗砂の互層

下層

図８ 流路1100断面図（１：100）

年代については、放射性炭素年代測定法によって、縄文時代中期から晩期の堆積層であることが判明した（付章１参照）。調査区の西壁・南壁断面（図版５）や中央部西壁・中央部南壁断面（図版６）などから、北東から南西に流れていた自然流路が祖形となり、弥生時代前期頃には調査区南半は堆積した土砂で微高地が形成され、流水は調査区中央付近から西に向かって流れを変えたとみられる。その流れも流入した土砂によって水流が停滞し、徐々に湿地化していった。腐植土が堆積した弥生時代後期から古墳時代後期にかけて、流路1100の東・西両岸から投棄されたとみられる完形に近い土器が多数出土した。西岸の遺物は、高低差が0.2ｍ程度の緩やかな傾斜地で、東西約６ｍ、南北約９ｍの範囲に広がった状態で検出した（図版７）。図８では２〜８層で厚さ約0.15ｍ、図版５では36〜38層で厚さ約0.3ｍ内に、特に多くの遺物が包含されていた。古墳時代中期から後期の土師器や須恵器を中心に、弥生時代後期から古墳時代前期の遺物も多く出土した。西岸付近では碧玉製管玉も出土した。明確に層ごとに遺物を取り上げることができなかったが、図８の10〜17層に須恵器は含まれていなかった。

護岸1215（図版８・61） 自然木（残存長350cm、厚さ10cm）と杭（直径4.5〜８cm、残存長50〜75cm、10本）を使用した護岸施設である。この遺構は、直径約５ｍの半円形の窪みに盛土を行い、腐植土である黒褐色粘質土（12・13層）の上面に杭を打って土留め材として自然木を置き、その背面（東側）を細砂〜祖砂礫混じりの粘質土（７〜11層）で埋めて造られていた。この部分は、

北側からの流れによる攻撃部分にあたり、流水によって抉られた部分を補強する目的で護岸造成が行われたと考えられる。なお、この窪みとした部分は、均一な弧を描いていることから、人為的に掘削された可能性がある。現状では、杭の上部が腐植したため、土留めの自然木は土圧で西側に倒れこんでいる。自然木の樹種は大きいものがアカガシ亜属、小さいものがクヌギであった。いずれも明瞭な加工痕跡を確認することができなかった。杭の樹種は南からヒノキ、クリ、コウヤマキ、ヒノキ、コウヤマキ、ヒノキ、サカキ、コナラ、サカキ、サカキである。杭は断面を隅丸方形、先端を削って尖らせたものなど、いずれも加工されていた。主に図版８－１～５層から土師器や須恵器が出土しており、これらの遺物の時期は古墳時代中期から後期である。遺構は、弥生時代後期から古墳時代前期に造られたとみられる。

（５）第１面２期の遺構（図版３・62）

遺構面の時期は、平安時代中期末から鎌倉時代前期に相当する。当該期の遺構は、建物、柵、井戸、土坑などを調査区全面で検出した。

調査区中央付近では区画溝と考えられる南北溝を検出し、その両側の特に調査区北東と同西半中央に建物や土坑がまとまっていた。井戸は調査区西半の南北溝付近で多く検出した。この時期の遺構は、厚さ0.25～0.4ｍを測る平安時代後期の大規模な造成土（図６－17・18層、図版５－30・31層、図版６－25・27・28層）の直上に構築されていた。造成土は、黒褐色粘質土混細砂や暗灰黄色粘質土などで、調査区東半では上層の造成土に黄褐色土が混ざっていた。平安時代中期末から後期の溝は、この造成土を掘り下げた平安時代後期の南北溝西肩口で検出した。

建物や柵に復元できなかった柱穴は多く存在する。建物復元を行った周辺に集中していることから、建て替えや増築を含めた建設作業が頻繁に行われていたと考えられる。大部分の柱穴底には地下式礎石が残っていたが、瓦が平らに敷かれた状態で出土したものも数基（柱穴569・780）あった（図版65－３・４）。礎石や根固め石の代わりとして転用されたとみられる。

１）平安時代中期末から後期初頭の遺構（図版３・62）

この時期の遺構は、南北方向の溝１基のみの検出にとどまった。

溝1000（図版15・63）　調査区中央付近で検出した。南北方向の溝で、検出長18.5ｍ、検出幅1.5ｍ、深さ0.2～0.45ｍを測る。西肩口直下の底面標高値は、北端で47.15ｍ、中央で46.90ｍであり、勾配は1.4度で、緩やかに北から南へ下がる。溝東側は、再掘削された溝900があるため遺存しておらず、西肩付近の検出にとどまった（図版63－１）。埋土はオリーブ褐色粗砂などで、図版15のＡ－Ａ’52層では踏み込まれたような痕跡が認められ（図版63－３）、所々に完形の土師器皿が投棄されていた（図版３の土器溜り１、図版63－２）。著しい流水の痕跡は認められず、堆積土も少ない。存続期間は短期間であったと考えられる。溝埋土上層である図版15のＡ－Ａ’45～47層及びＢ－Ｂ’42・43層は、溝900の掘削以前に整地された平安時代後期造成土に該当する。出土遺物は土師器皿のみであった。時期は平安時代中期末から後期初頭である。

２）平安時代後期から鎌倉時代前期の遺構（図版３・62）

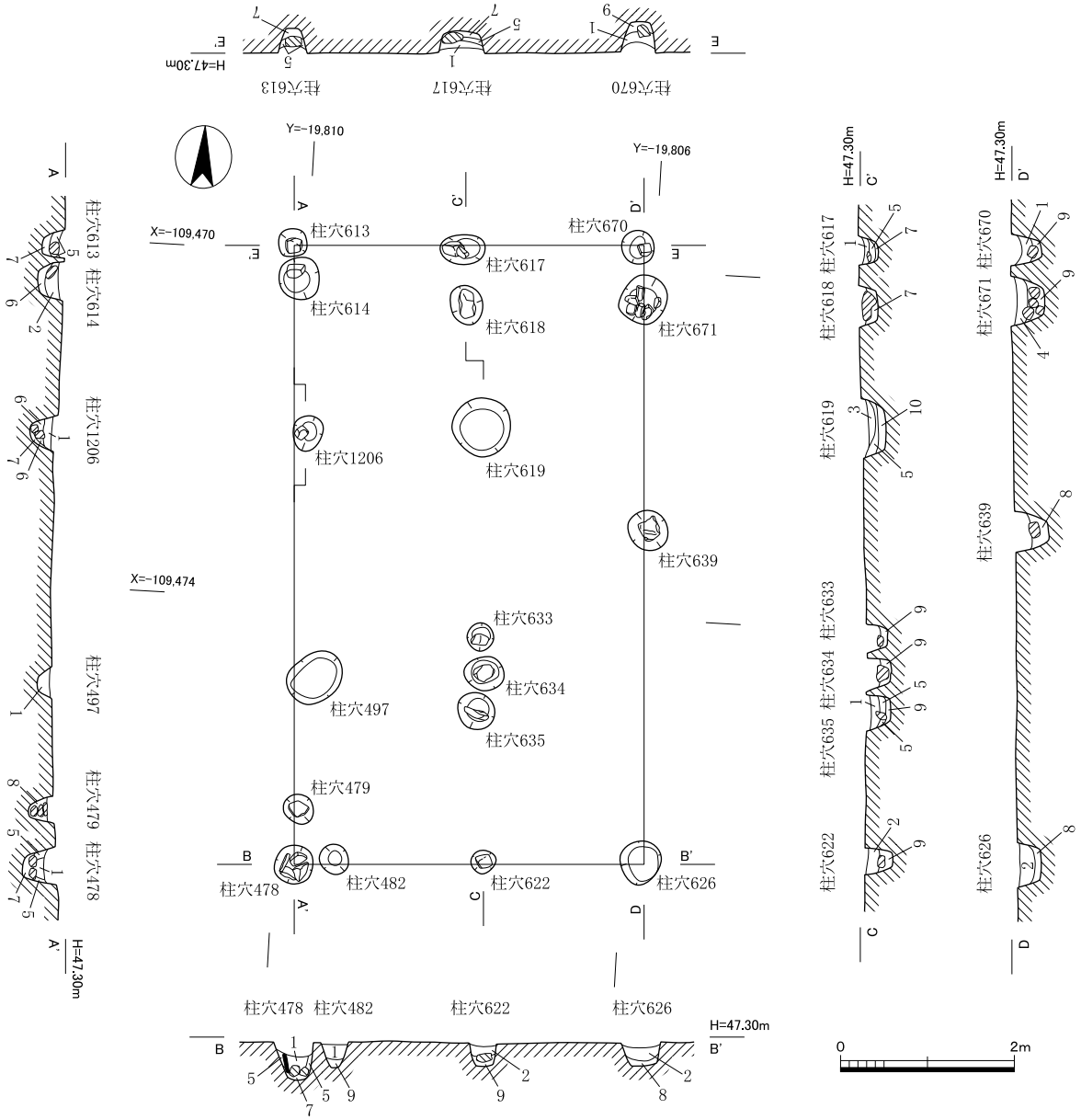
南北方向の区画溝東側で、建物２棟、柵３基、井戸２基を検出した。溝西側では、重複する建物２棟、柵３基、井戸３基がある。その他、土坑、柱穴などが調査区全面に展開していた。各建物・柵の柱穴底面標高値を確認したところ、建物１は平均47.60ｍ、建物２は平均47.50ｍ、柵１は平均47.20ｍ、柵２・３は平均47.10ｍ、建物３・４・柵４は平均47.00ｍ、柵５は平均46.70ｍであった。柱穴底面には、調査区北端と南端（約45ｍ）で約0.9ｍ、調査区東と西（約23ｍ）で約0.2ｍの高低差があることがわかった。

建物１（図版９） 調査区北東で検出した。昨年度の第１期調査区では続きとなる柱穴を確認していないので、南北１間、東西２間の小規模な掘立柱建物とみられる。建物の方位は真北である。柱間は2.3ｍ、1.4ｍを測る。柱穴は直径0.25～0.4ｍ、深さ0.15～0.25ｍで、柱穴329以外は平らな面を上に据えた地下式礎石が遺存していた。埋土は黒褐色粘質土混粗砂などである。土師器皿の細片が出土した。時期は平安時代後期から鎌倉時代前期である。

建物２（図版10） 建物１南で検出した。南北３間、東西２間の南北棟の総柱建物で、建物の南北軸は真北であった。南北の柱間は北から2.5ｍ、2.1ｍ、2.0ｍ、東西の柱間は2.4ｍである。柱穴は直径0.3～0.65ｍ、深さ0.2～0.3ｍ、埋土は黒褐色砂質土や灰褐色粘質土などである。地下式礎石が遺存している柱穴は８基あり、その他は抜き取られた痕跡（埋土１層など）が認められた。柱穴593のように石を積み重ねて礎石としているものや、柱穴708のように根固め石を入れたものもあった。土師器皿片や白磁片、丸・平瓦が出土した。柱穴1218は土坑721を壊して造られていた。時期は鎌倉時代前期とみられる。

建物３（図９・10） 調査区西半中央付近で検出した。南半に建物４が重複する。南北３間、東西２間の南北棟の掘立柱建物と推定している。建物方位は西へ４°振れていた。南北柱間は北から2.0ｍ、3.0ｍ、2.0ｍ、東西柱間は2.0ｍである。東西柱列北端の柱穴（柱穴613・614、柱穴617・618、柱穴670・671）は、２基並びの状態で検出したことから、建て替えまたは添え柱などであった可能性が考えられる。柱間は0.3～0.5ｍである。柱穴は直径0.25～0.7ｍ、深さ0.25～0.4ｍを測る。柱穴には、地下式礎石を据えたり（柱穴622など）、根固め石を詰めたり（柱穴671など、図９）、石を３段積んで地下式礎石としたもの（柱穴479）、上層の石が抜き取られ、下層に石が遺存している柱穴（柱穴617など）などがあった。抜き取り時の埋土は暗褐色砂質土などで、地下式礎石据え付け時の埋土は黒色粘質土や暗オリーブ褐色砂質土などである。出土遺物は土師器皿や瓦質土器鍋・盤、白磁椀、青磁椀などである。北半で土坑616を検出しており、重複関係から建物３の方が新しい。時期は鎌倉時代前期である。

図９　建物３柱穴671根固め石検出状況（北から）



1 10YR3/3暗褐色砂質土
2 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土
3 2.5Y5/3黄褐色粘質土
4 10YR4/1灰褐色粘質土
5 10YR3/2黒褐色粘質土
6 2.5Y4/1黄灰色粘質土 微砂混じり
7 2.5Y2/1黒色粘質土
8 10YR3/3暗褐色粘質土
9 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土
10 7.5Y3/1オリーブ黒色粘質土

図10　建物３実測図（１：80）

建物４（図版９） 建物３南半と２分の１程度重なった状態で検出した。南北３間、東西４間の東西棟の掘立柱建物である。建物軸は西へ3.5～４° 振れる。南北柱間は北から1.3ｍ、1.7ｍ、1.3ｍ、東西柱間は2.5ｍ、2.3ｍ、2.2ｍ、1.6ｍである。柱穴の直径0.2～0.4ｍ、深さ0.2～0.3ｍを測る。地下式礎石を据えるものは７基あり、その他のものは石が抜き取られていた。地下式礎石上層の埋土は黒褐色粘質土など、構築時の埋土は暗オリーブ褐色砂質土などである。柱穴の規模や深さが不均一であることから、建物３の増築や建て替えに伴う遺構であった可能性が高いが、建物３との前後関係は不明である。土師器片や瓦質土器片、丸・平瓦が少量出土した。時期は平安時代後期から鎌倉時代前期とみられる。

柵１（図版11） 調査区南東で検出した東西方向の柱列である。東西7.4ｍ以上になるとみられる。柱間は0.4～2.7ｍと不均一である。柱穴の直径は0.3～0.6ｍ、深さは0.2～0.4ｍを測る。埋土は灰黄褐色粘質土などで、約半分の柱穴に地下式礎石が遺存していた。土師器、輸入陶磁器片、丸・平瓦などが少量出土した。時期は平安時代後期から鎌倉時代前期である。

柵２（図版12） 調査区中央付近で検出した。南北17.6ｍ以上、柱穴９基以上で構築されていたとみられる。方位は真北である。地下式礎石が遺存していた柱穴はほとんどなかった。柱穴の直径は0.3～0.5ｍ、深さは0.2～0.4ｍを測る。柱間は北から0.9ｍ、3.3ｍ、5.0ｍ、2.0ｍ、0.6ｍ、2.0ｍ、1.9ｍ、1.9ｍである。埋土は黒褐色砂質土などである。土師器皿などの細片が少量出土した。時期は平安時代後期から鎌倉時代前期である。

柵３（図版12） 柵２西側で検出した。南北14.4ｍ以上、９基の柱穴が並ぶことを確認した。方位は東へ２°振れていた。柱穴の直径は0.25～0.45ｍ、深さは0.2～0.3ｍを測る。埋土は暗オリーブ粘質土などである。地下式礎石が遺存していた柱穴は２基であった。0.6～0.8ｍの間隔で並ぶ３基単位の柱穴（柱穴255～257、柱穴259・260・263）を、柱列南半で検出した。門などの施設または建て直しの可能性がある。土師器皿片や瓦片が少量出土した。時期は平安時代後期から鎌倉時代前期とみられる。

柵４（図版12） 建物３・４西側で検出した。方位は西へ４°振れ、南北9.8ｍで、５基の柱穴が並ぶ。柱穴の直径は0.3～0.4ｍ、深さ0.25～0.3ｍである。北端の柱穴686を除いて、すべて地下式礎石が遺存していた。北から1.1ｍ、3.0ｍ、2.6ｍ、3.0ｍの間隔である。中央の柱穴504は、下層に重なる柱穴1221の建て替えとみられる。埋土は黒褐色砂質土であった。土師器皿などの小片が出土した。時期は平安時代後期から鎌倉時代前期である。

柵５（図版11） 調査区南西で検出した。いわゆるクランク状を呈しており、南北９ｍ、東西5.2ｍを測る。方位は西へ１°振れていた。各柱間は２間ずつで、北から1.6ｍ、2.3ｍ、西から2.6ｍ、2.6ｍ、北から2.4ｍ、2.6ｍである。柱穴の直径は0.2～0.4ｍ、深さは0.1～0.2ｍである。埋土は黒色粘質土混細砂で、地下式礎石が遺存していた柱穴は３基であった。土師器皿や平瓦の小片が出土した。時期は平安時代後期から鎌倉時代前期である。

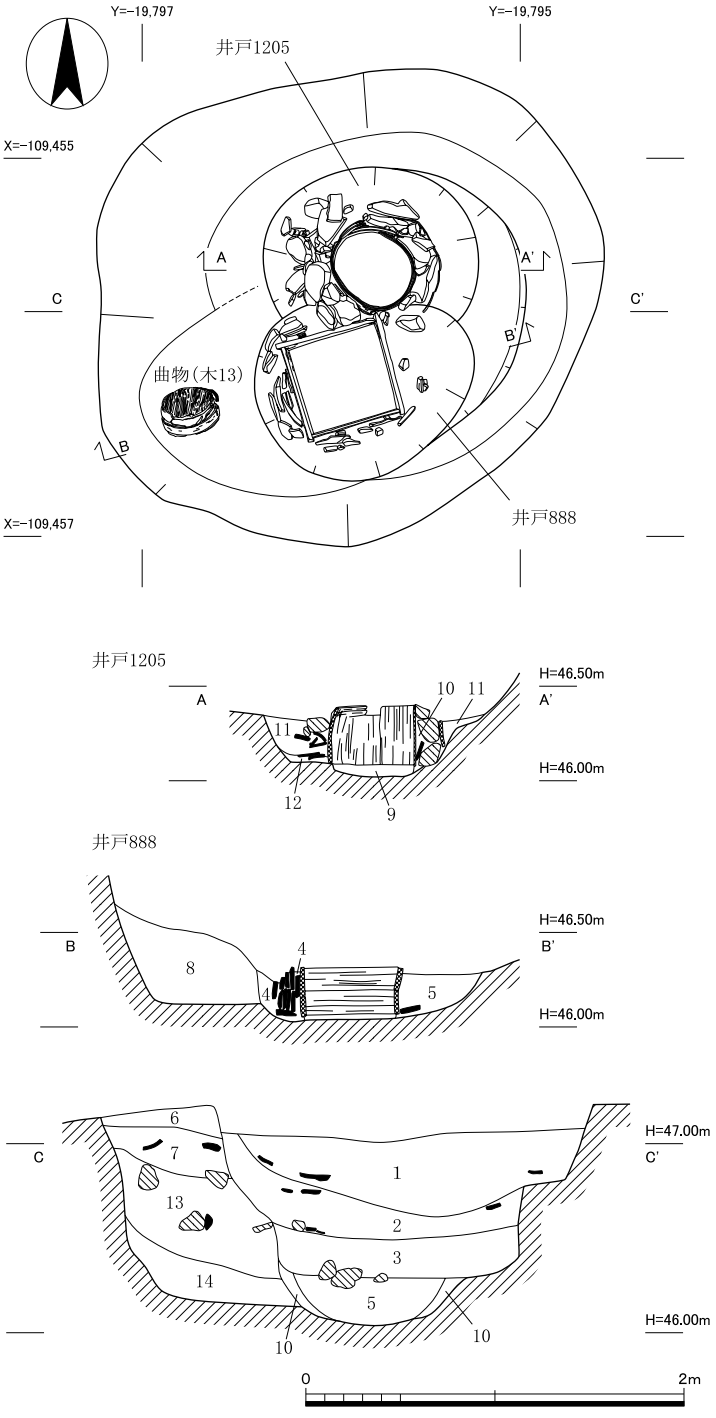
柱穴700 建物２内で検出した。直径0.55ｍ、深さ0.2ｍの柱穴で、中央に一辺約30㎝の地下式礎石を据え付ける。埋土は黒褐色砂質土である。建物２に関係する柱穴の可能性が高い。遺物は土師器、丸瓦などが出土した。時期は平安時代後期から鎌倉時代前期とみられる。

井戸620（図版13） 調査区西半中央付近で検出した。一辺1.2～1.4ｍの隅丸方形の掘形を持つ。内法一辺１ｍ、深さ１ｍを測る。縦板横桟組の井戸であったとみられるが、井戸枠材は抜き取られていた。埋土は大きく２層に分かれ、上層（１～５層）は廃絶後、下層（６・７層）は使用時とみられる。上層は黒褐色粘質土などで、１・４層は特に瓦や礫が大量に投棄されていた。下層は粘質土と粗砂の互層や腐植土の黒色粘質土であり、使用していた際の湧水痕跡とみられる。８～12層は、暗灰黄色砂質土や黒褐色粘質土、粗砂などが混じった井戸構築時の掘形埋土である。５層には、井戸を埋める時に取り残された井戸枠材数点が遺存していた。遺物は土師器、灰釉陶器、輸入

磁器、砥石などの小片、軒丸・軒平瓦、丸・平瓦などが出土した。内面に漆が付着した土師器皿も確認した。時期は平安時代後期である。

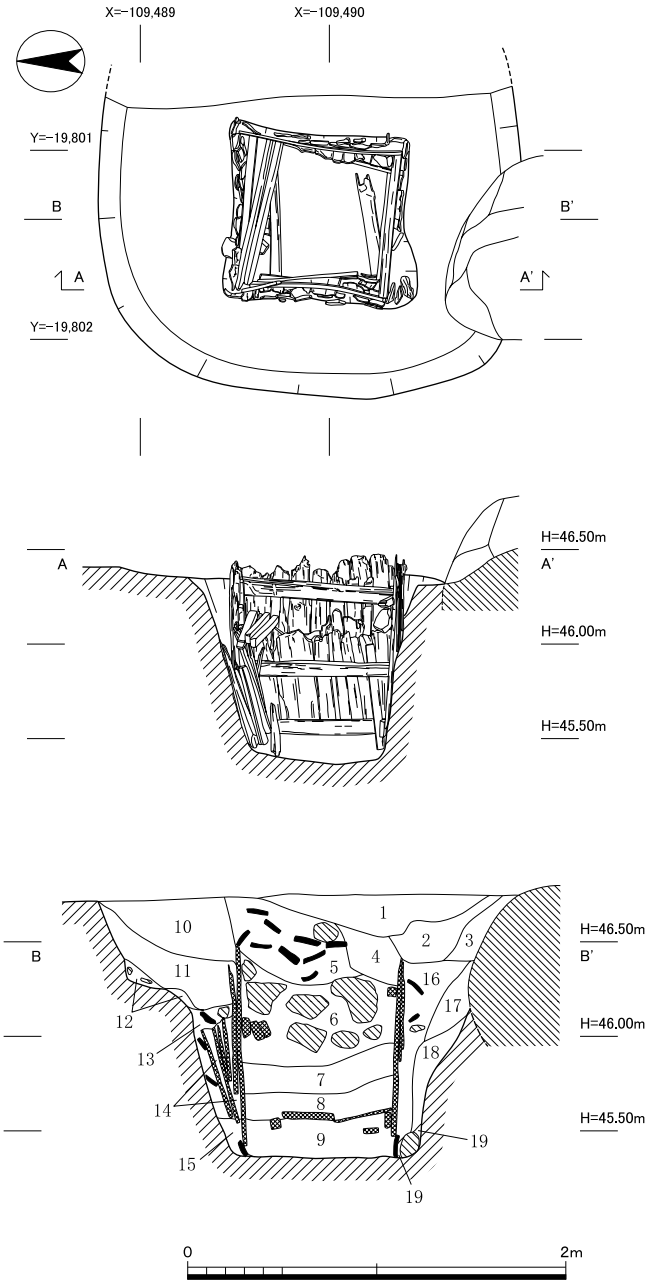
井戸830（図版13・64） 調査区南西の南壁際で検出した。方形縦板横桟組の井戸である。内法一辺0.75ｍ、検出深１ｍを測る。横桟は２段分が遺存し、23～42㎝と短くした縦板を四隅に立てて、縦桟としていた。縦板は5.5～12㎝幅のもの61枚（東西南北に９～18枚、１～３列重ね）を使用していた。底面に直径約49㎝、高さ約23㎝の曲物を据える。掘形は直径2.5ｍの円形を呈し、灰白色粗砂や黒褐色粘質土などで丁寧に埋設されていた。曲物掘形の土は、基盤層の土同様、下層は粗砂礫（17層）、上層は細砂と粘質土の互層（16層）であった。埋土は上層が灰白色粘土や黒色粘質土などで、水平に均された状態で埋められていた。下層の９～14層は腐植土層で、小型の土師器皿と箸や削りカスなどの木片が多量に投棄されていた。土師器皿は重なった状態で出土しており、また木葉やシダなども出土していることから、井戸廃絶後しばらくはごみ穴としての利用があったとみられる。出土した遺物はその他に、白色土器、瓦質土器、輸入磁器、軒平瓦、丸・平瓦が少量である。時期は平安時代後期である。

井戸888（図11、図版65） 調査区中央付近で検出した。井戸1205



1 5Y2/1黒色粘質土 粗砂少量含、径5～6㎝の10GY7/1明緑灰色粘土ブロック少量含
2 2.5Y3/1黒褐色粘質土混粗砂 瓦少量含
3 2.5Y8/1灰白色粗砂礫(径1～2㎝) 瓦含
→ 井戸888上層
4 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質土 粗砂含
5 2.5Y6/1黄灰色粗砂
→ 井戸888枠掘形
6 2.5Y4/1黄灰色粗砂 粘性あり
7 10YR3/1黒褐色粗砂混粘質土 瓦少量含
8 2.5Y5/2暗灰黄色粗砂
→ 井戸888掘形
9 7.5Y3/1オリーブ黒色砂質土 腐植土少量含
→ 井戸1205下層埋土
10 10YR4/2灰黄褐色粘質土混粗砂 径20～30㎝の礫・瓦多量含
11 2.5Y5/2暗灰黄色粗砂礫(径1～5㎝)
12 2.5Y2/1黒色粘質土 粗砂少量含
→ 井戸1205曲物掘形
13 10YR3/1黒褐色粗砂混粘質土混10YR3/1黒褐色粘質土(シルト質) 径15～20㎝の礫少量含
14 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粗砂混粘質土
→ 井戸1205掘形

図11 井戸888・1205実測図（１：40）



1　2.5Y2/1黒色粘質土　粗砂含〔井戸枠抜き取り？〕
2　10YR2/2黒褐色粘質土
　径5～10㎝の10YR5/1褐灰色粘質土混粗砂ブロック含
3　2.5Y3/1黒褐色粘質土
　瓦・径1～2㎝の5B7/1明青灰色微砂ブロック少量含
4　5Y3/1オリーブ黒色粘質土
5　10YR3/1黒褐色粘質土　瓦含
6　2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質土　粗砂・径10～30㎝の礫含
7　10YR1.7/1黒色粘質土　腐植土
8　5Y3/1オリーブ黒色粘質土　腐植土
9　2.5Y2/1黒色粘質土　瓦含、腐植土　　埋土
10　2.5Y4/2暗灰黄色粘質土　粗砂～細砂少量含
11　10YR3/1黒褐色粘質土　粗砂少量含
12　10YR3/1黒褐色粘質土混2.5Y8/1灰白色粗砂　瓦少量含
13　10YR3/3暗褐色粘質土　径5～10㎝の瓦・礫少量含
14　10YR3/1黒褐色粘質土混粗砂
15　10YR3/3暗褐色粘質土
16　10YR4/1灰褐色粘質土　径5～8㎝の瓦・礫少量含
17　5Y2/1黒色粘質土　径2～3㎝の礫少量含
18　2.5Y3/2黒褐色粘質土　粗砂少量含
19　10YR3/1黒褐色粘質土　径10～25㎝の瓦・礫少量含　　掘形

図12　井戸1210実測図（１：40）

を壊して造られた。底面に方形に板を組み合わせた枠が遺存していたが、それより上部の構造は抜き取られていたため不明である。井戸枠の内法は一辺0.46ｍ、深さ0.24ｍを測る。高さ9～16㎝、幅53～58㎝、厚さ1.5～2.5㎝の板の両端を鍵形に加工し、上下２段を平均高24㎝になるように組み合わせ、鉄釘で止めて固定していた。鉄釘は遺存していなかった。井戸枠掘形は1.0～1.2ｍの惰円形である。上層埋土は粗砂を含む黒色粘質土、枠内は暗褐色粘質土であった。枠掘形埋土は暗オリーブ褐色粘質土で、西から南の枠板に沿って平瓦を立て並べていた。井戸枠抜き取り時に投棄されたとみられる曲物（図37－木13）が２層目から出土した（図版65－２）。遺物は土師器皿、輸入陶器盤、瓦質土器羽釜、須恵器鉢が出土した。時期は平安時代後期から鎌倉時代前期である。

井戸1205（図11、図版65）　調査区中央付近で検出した。上部と南半は井戸888によって壊されていた。底面に直径約40㎝、高さ約30㎝の曲物が据えられていた。曲物掘形には10～30㎝の礫や瓦が詰め込まれていた。曲物内埋土はオリーブ黒色砂質土である。遺物は土師器皿片が少量出土した。時期は平安時代後期である。

井戸1210（図12、図版64）　調査区南西の東壁付近で検出した。方形縦板横桟組の井戸である。内法一辺0.8ｍ、検出深1.4ｍを測る。横桟は２～３段分が遺存していたが、縦桟は痕跡を確認できなかったことから、当初から組まれていなかっ

たとみられる。北側上段の横桟近くでは、横桟が２本まとまった状態で出土した。補強として添えられたと考えられる。南及び西の横桟は上下段、東の横桟は上中下段を確認した。縦板は113枚立てられており、大半がスギ、西半で確認した２点のみヒノキであった。掘形は一辺2.2ｍの隅丸方形を呈する。埋土下層は腐植土、上層は大型礫（10～25㎝）や瓦が大量に投棄されていた。遺物は土師器、須恵器、瓦質土器、輸入磁器、軒丸・平瓦、食痕のあるモモの核などが出土した。造られた時期は平安時代後期、使用時期は平安時代後期から鎌倉時代前期、埋没時期は鎌倉時代後期とみられる。

土坑335（図版14・66） 調査区北東で検出した。長軸0.8ｍ、短軸0.5ｍの楕円形を呈する。東西に長軸を持つ。深さ0.15ｍで、最下層に炭層が約0.01ｍ堆積していた。埋土は黒褐色粘質土などである。完形の土師器皿などは、最終埋土に投棄された状態で出土した。土師器、瓦質土器、輸入磁器、平瓦、土製円塔（土塔）などが出土した。時期は平安時代後期から鎌倉時代前期である。

土坑516（図版13・65） 調査区北東で検出した。直径0.4～0.47ｍの円形土坑で、深さ0.15ｍである。埋土は暗灰黄色粘質土や褐灰色砂質土で、完形土師器皿が重なった状態で出土した。土師器皿はいずれも口径14.0～14.6㎝の大型で、それ以外の大きさの器は出土していない。時期は平安時代後期である。

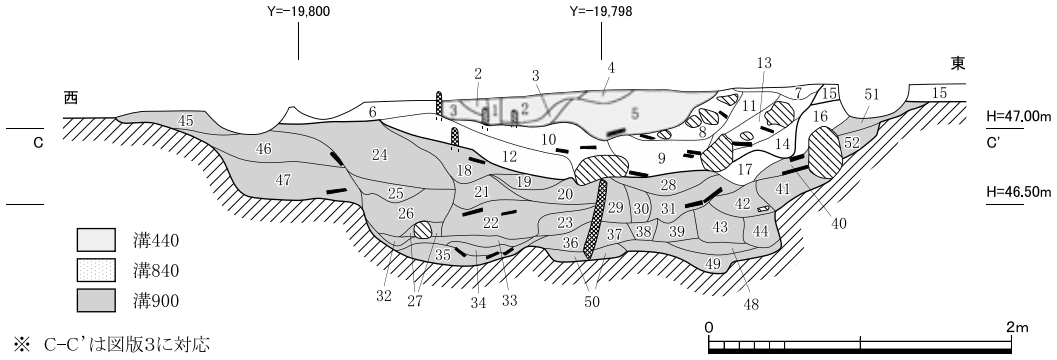
土坑518（図版14・66） 調査区東半中央付近で検出した円形土坑である。直径1.5ｍ、深さ0.2ｍを測る。北３分の１が後世の遺構に壊されていた。上層の中央付近で多量の完形土師器皿がまとまって出土した。埋土は黒褐色粘質土で、炭を少量含む。下層は粗砂混じりの暗オリーブ褐色粘質土などで、土師器、須恵器、瓦質土器、石鍋片、瓦片などが出土した。時期は鎌倉時代前期である。

土坑616（図版14・66） 建物３北端で検出した。一辺1.3ｍの隅丸方形土坑である。深さ0.2ｍで、上層の炭が混じる黒褐色粘質土中に、土師器や瓦質土器、須恵器、輸入磁器、石製品、軒丸瓦、丸・平瓦、一辺10～20㎝の角礫などが包含されていた。廃棄土坑とみられる。柱穴との重複関係から、建物３より古いか、併存していた可能性がある。時期は鎌倉時代前期である。

土坑721（図版14・66） 調査区北東で検出した東西方向に長軸を持つ楕円形土坑である。東西１ｍ、南北0.65ｍ、深さ0.15ｍを測る。暗褐色粘質土に少量の炭と、10㎝前後の礫を含む。建物２を構成する柱穴1218に中央部分を壊されていた。完形に近い土師器皿、瓦質土器、輸入磁器、平瓦が出土した。時期は鎌倉時代前期である。

溝900（図13、図版15・16・67・68） 調査区中央で検出した南北溝である。検出長19ｍ、幅３～５ｍ、深さ約１ｍ、方位は真北である。第１期調査の溝327南の続きに相当する。溝900底面の標高値は、北端で46.30ｍ、中央で46.40ｍ、南端で46.10ｍである。比較するために溝327北端の底面標高値を測ったところ、溝900北端から北へ35ｍで47.30ｍ、同９ｍで46.60ｍ、勾配角度は1.5度となった。溝900は溝327ほどの勾配はなく、起伏はあるが0.6度の勾配角度で基本的に緩やかに南へ下がる。埋土は下層に分厚く堆積していた砂礫層である。北端のＡ－Ａ’断面では、断面形状が逆台形を呈する。溝上面幅は2.9ｍ、溝底面幅は2.3ｍである。溝底面には直径0.2ｍ程度の窪みや、溝壁には抉り込まれた痕跡が確認でき、いずれも流水の強さを示す。壁際付近には、肩部の崩

落土がそのまま堆積したところもあった（図版15のＡ－Ａ’42層）。溝中央付近のＢ－Ｂ’断面では、箱形を呈し、溝幅が4.7ｍと大きく広がる。底面幅は4.0ｍである。東から西へと堆積していく様子が認められることから、流水が東から西寄りへ変化していったことがわかった。南壁のＣ－Ｃ’断面では、東肩部に石組護岸があったことや、西肩部が狭められていく状況が確認できた。溝上面は幅5.3ｍ、底面幅は2.7ｍ、断面形状は逆台形に近い。すべての断面で、部分的に腐植土が入り込み、堆積した砂礫層には多くの瓦片が含まれていることを確認した（図版68－４）。溝中央付近の西肩の一部で杭と枝を使用した護岸（図版16、図版67－１）を検出した。護岸の遺存部分は約2.7ｍである。護岸の構造は、西肩から0.3～0.4ｍ東に杭を打ち、竹や木の枝を杭に絡ませ、また肩口と杭の間に枝などを重ね入れたものであった（図版68－２）。杭は残存長25～50㎝、材質は桜木や竹である。杭は先端加工を行っているものもあったが、皮付き枝の先端を加工せずにそのまま打ち込んだものもあった。杭は溝埋土に当たる砂礫層上面から打ち込まれているため、構築時のものではなく、砂礫が堆積した後の造作であったことがわかる。なお、板材は確認していない。護岸施設の背面にも、流水痕跡を表す細砂層や微砂質の粘質土層があることから、施設存在時点でも背面



※ C–C’は図版3に対応

1 5Y4/1灰色粘質土〔杭または板痕跡〕
2 2.5Y3/1黒褐色粘質土
3 10YR3/1黒褐色粘質土混微砂 径1㎝の礫・土器少量含
4 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土(粘性あり)と 2.5Y8/3淡黄色細砂の互層
5 10YR4/2灰黄褐色粘質土混粗砂(径5～20㎝のブロック) 径2～5㎝の礫・土器少量含
6 10YR3/1黒褐色粘質土 土器・炭少量含
7 10YR3/1黒褐色砂質土
8 10YR4/2灰黄褐色粘質土 径5～20㎝の礫多量含
9 2.5Y5/2暗灰黄色粗砂 瓦含、径2～5㎝の礫少量含
10 2.5Y6/4にぶい黄色粗砂礫(径1～5㎝) 混2.5Y6/1黄灰色砂質土 瓦含
11 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質土
12 2.5Y6/4にぶい黄色粗砂礫(径1～5㎝) 瓦含
13 2.5Y3/1黒褐色粘質土混粗砂
14 10YR4/1褐灰色粘質土混細砂
15 10YR3/2黒褐色粘質土 土器少量含
16 10YR4/2灰黄褐色粘質土 土器少量含
17 5Y3/2オリーブ黒色粘質土混細砂 瓦少量含
18 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土 やや粘質
19 10YR4/1褐灰色砂質土(やや粘質)と 10YR8/3浅黄橙色細砂の互層
20 2.5Y2/1黒色粘質土混微砂 瓦少量含
21 2.5Y5/2暗灰黄色粗砂混砂質土
22 2.5Y5/2暗灰黄色粗砂 瓦多量含、径3～5㎝の礫少量含
23 5Y3/1オリーブ黒色粘質土 微砂少量含
24 2.5Y8/2灰白色粗砂 2.5Y4/1黒褐色黄灰色砂質土が層状に混じる、瓦・径1～5㎝の礫含
25 10YR2/1黒色粘質土混微砂
26 2.5Y3/2黒褐色粘質土 2.5Y8/4淡黄色粗砂が層状に混じる、瓦少量含
27 2.5Y5/2暗灰黄色細砂
28 5Y7/2灰白色粗砂礫(径1～3㎝)
29 2.5Y2/1黒色粘質土 微砂・径1～2㎝の礫少量含
30 2.5Y3/2黒褐色砂質土 やや粘質、瓦多量含
31 5Y7/2灰白色粗砂礫(径10～20㎝) 瓦含
32 10YR2/1黒色粘質土 腐植質、シルト微量含
33 10YR7/4にぶい黄橙色細砂
34 2.5Y2/1黒色粘質土
35 2.5Y4/1黄灰色細砂礫(径3～5㎝)
36 10YR4/2灰黄褐色細砂礫(径2～3㎝)
37 2.5Y8/1灰白色粗砂礫(径1～2㎝) 瓦少量含
38 2.5Y2/1黒色粘質土
39 5Y7/2灰白色粗砂 径1㎝の礫少量含
40 10YR4/2灰黄褐色砂質土 やや粘質、粗砂含、瓦少量含
41 10YR2/2黒色粘質土 やや粘性強
42 10YR2/2黒色粘質土 径10㎝の2.5Y5/2暗灰黄色細砂ブロック含
43 2.5Y2/1黒色粘質土
44 2.5Y3/2黒褐色砂質土 やや粘質、瓦多量含
45 2.5Y3/2黒褐色砂質土 やや粘質、木片・炭少量含
46 10YR3/1黒褐色粘質土 細砂・炭少量含
47 10YR2/1黒色粘質土 土器・瓦・炭少量含
48 2.5Y3/2黒褐色粗砂
49 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粗砂礫(径1～2㎝) 瓦・土器少量含
50 10YR3/1黒褐色砂質土 やや粘質、径3～5㎝の礫・瓦少量含
51 2.5Y3/1黒褐色細砂 やや粘質、土器含
52 10YR3/1黒褐色粘質土混細砂

溝440
室町前期:包含層
溝840
溝840掘形
鎌倉前期:整地層
溝900上層
溝900
溝900
溝900護岸掘形

図13 溝440・840・900断面図（１：50）

が洗い流された時期があったと推測できる。その他の地点では、溝の断面観察から、東西両護岸が最低でも２回ずつ造り直され、その度に溝幅が少しずつ縮小されていたことを確認した。最終段階の溝幅は、Ｃ－Ｃ’断面で約0.9ｍであった。また、東岸の上層では、砂質土や粘質土に細砂～粗砂が混じった堆積層を確認した（Ａ－Ａ’の15～20層、Ｂ－Ｂ’の13～17層、Ｃ－Ｃ’の16・17層）。この堆積層は溝900北端の東岸で検出した、10～30㎝の礫を利用した護岸状の石組み遺構（図版67－２）の埋土に対応するとみられる。溝900が粗砂礫層で埋まり切った最終埋土の上層で、東岸北端のみに護岸施設が造られた。西岸については、遺存していなかった。北半検出の石組み遺構は乱雑に造られており、構築土も締まりのない粘質土であった。幅約１ｍ、長さ約６ｍにわたって検出した。鬼瓦などが出土している（図版68－３）。出土遺物は、土師器、白色土器、須恵器、瓦質土器、輸入磁器、軒丸・軒平瓦、鬼瓦、土塔、風字硯などである。特に、丸・平瓦は多量に出土している。Ｂ－Ｂ’断面の13層から、完形の土師器皿や瓦類などがまとまって出土した。その出土状況は、東岸から投棄された状態を呈していた（図版68－１）。下部の砂礫層中には、径0.2～0.3㎝のベンガラ粒が少量混じっていた。上流または周辺にベンガラを使用する施設があったとみられる。時期は平安時代後期を中心とし、最終的に埋まった時期は、鎌倉時代前期である。

（６）第１面１期の遺構（図版４・69）

鎌倉時代後期から江戸時代の遺構は、柱穴、井戸、溝、土坑などがある。柱穴は地下式礎石を持つものが多いが、建物などには復元できなかった。土坑には、集水や排水用の桝として使用されたとみられる瓦片や礫を敷き詰めたものを数基検出した。

１）鎌倉時代後期から室町時代の遺構（図版４・69）

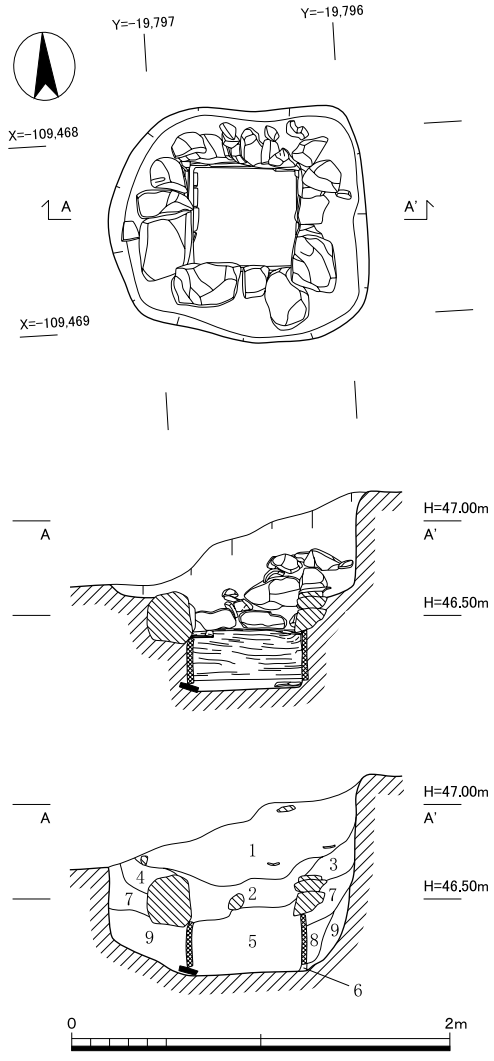
柱穴413　調査区中央の井戸1096東で検出した。直径0.5ｍ、深さ0.3ｍを測る。埋土は黒褐色砂質土である。輸入陶器盤（図29－463）の破片を平らに敷いて、地下式礎石の代用としていた。時期は鎌倉時代後期とみられる。

井戸1096（図14、図版69）　調査区中央の溝840東で検出した。一辺1.4ｍの隅丸方形の掘形を持つ。下段は、枠板を内法60㎝の方形に組み、その上に人頭大の石を２段以上積み上げていた。井戸枠は一辺65～70㎝、高さ23～28㎝、厚さ２～３㎝を測る。木枠は組むための加工を両端に施し、鉄釘で数箇所留める。木枠下部に平瓦を挟んで、高さ調節を行っていた。掘形埋土は礫を少量含む黒褐色細砂など、井戸枠内埋土はオリーブ黒色粗砂などである。土師器皿、瓦質土器椀が出土した。時期は鎌倉時代後期である。

石組1089（図15、図版69）　調査区中央の溝440東肩で検出した。掘形は南北1.1ｍ、東西１ｍ、検出深0.5ｍを測る。一辺25～50㎝の大型礫を東西方向に各２個ずつ並べた石組を約0.3ｍ離れて２列並べ、中央を溝状に組んだ遺構である。石上面の標高値は47.40ｍ、溝底面標高値は47.10ｍであった。溝440に水を流し込む施設とみられる。後世に削平されたとみられる上部構造や東側の延伸については不明である。土師器皿が出土した。時期は室町時代前期とみられる。

土坑243（図版17・70） 調査区北西で検出した。東西両端を後世の溝で壊されていた。直径0.85ｍの不正円形で、深さ0.25ｍである。埋土に径５～20㎝の礫及び瓦片を多量に包含する。埋土は微砂混じりの黒褐色砂質土などである。土師器皿、須恵器鉢、軒平瓦などが出土した。浸透ます等、集排水関係の遺構とみられる。時期は鎌倉時代後期から室町時代前期である。

土坑267（図版17・70）調査区北西南寄りで検出した。西半は後世の土坑で壊されていた。直径0.85ｍの円形土坑で、深さ0.3ｍを測る。長さ20～35㎝の礫を、平らな面を上にして、コの字に据え付ける。東に据えられた砂岩は、ほぼ全面が平滑に加工された石製品（図34－石12）である。この礫を据えた埋土からは瓦片が出土した。２～４層は層状の薄い堆積である。その他、土師器皿が出土した。時期は鎌倉時代後期である。

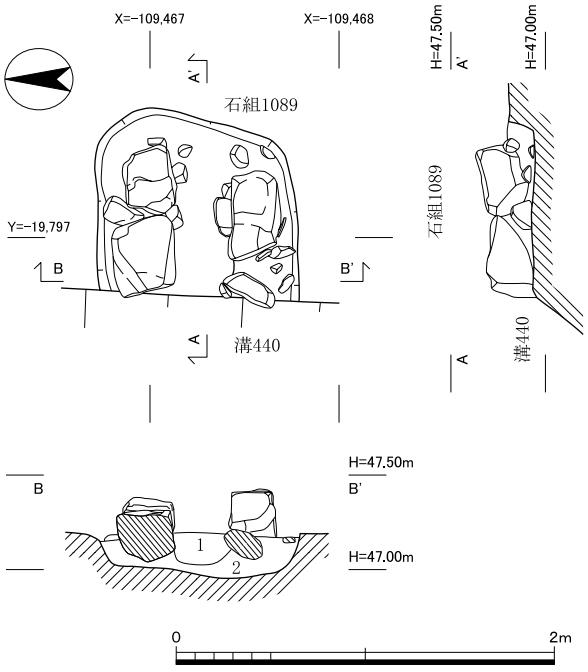


1　2.5Y3/1黒褐色粘質土　粗砂・土器含
2　7.5YR2/3極暗褐色粘質土混細砂
3　2.5Y4/2暗灰黄色粗砂混10YR3/2黒褐色粘質土
　径2～3㎝の礫含
4　5Y3/1オリーブ黒色粗砂混粘質土
5　7.5Y3/1オリーブ黒色粗砂 ┐埋土
6　2.5Y6/1黄灰色粘質土 ┘
7　5Y3/2オリーブ黒色粗砂　径1～2㎝の礫少量含 ┐
8　10YR3/1黒褐色細砂　やや粘性あり、
　径2～5㎝の礫少量含　堀形
9　2.5Y5/1黄灰色粗砂
　径1～2㎝の10YR2/1黒色粘質土ブロック少量含 ┘

図14　井戸1096実測図（１：40）

土坑396（図版17・70） 調査区北東で検出した。南北1.5ｍ、東西0.8ｍ、深さ0.15ｍの楕円形土坑である。５～10㎝の大きさに割った平瓦片や礫が大量に敷き詰められていた。埋土は黒褐色粘質土などである。土坑243同様、集排水関係の遺構とみられる。土師器皿、須恵器鉢などが出土した。時期は鎌倉時代後期以降である。

土坑735（図版17） 調査区北東の西壁際で検出した。直径0.8ｍ、深さ0.3ｍの円形土坑で、断面は逆台形を呈する。第１層には炭や焼土が含まれ、第



1　10YR2/1黒色粘質土混粗砂
　2.5Y4/1黄灰色粘質土が所々に混じる
2　2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質土混粗砂〔掘形〕

図15　石組1089実測図（１：40）

２・３層から瓦質土器鍋などの土器類や瓦片が出土した。埋土は炭混じりの黒褐色粘質土などである。時期は鎌倉時代後期から室町時代前期である。

土坑895（図版18・70） 溝840西側で検出した。東西3.5ｍ、南北1.4ｍの楕円形土坑で、深さ0.2ｍを測る。中央を一段掘り窪めた南壁に板（長さ80㎝、幅16㎝、厚さ２㎝、材質はコウヤマキ）を配置し、東側に丸瓦を立て、土坑底面に石や平瓦などを並べる。中央の土坑は長さ2.5ｍ、幅0.6ｍの隅丸長方形である。最大深0.2ｍで、端から中央に緩やかに窪む。底面標高値は46.88ｍで、溝840の底面標高値46.70ｍより高い。中央土坑の肩に石を並べるが、南側は乱雑、北側は小口を南に揃えて丁寧に並べる。埋土は粗砂を少量含む黒褐色粘質土である。一部が導水路の様な構造を持っていることや、溝840が東近くにあることから、それへの排水施設と考えられる。土師器皿、瓦質土器羽釜、青磁椀、石鍋が出土した。時期は鎌倉時代後期である。

土坑896（図版18） 土坑895の北側に接して検出した。南北1.2ｍ、東西0.5ｍ以上、深さ0.1ｍである。埋土上層は一辺５～15㎝礫や瓦片を多く含む粗砂混じりの黒色粘質土、下層は炭を少量含む黒色粘質土である。土坑895の一部または関連施設とみられる。時期は鎌倉時代後期とみられる。

土坑1024 調査区南西の井戸1210上面で検出した。東西1.5ｍ以上、南北５ｍ、深さ0.2ｍの不正円形土坑である。埋土は暗灰褐色粘質土である。土師器皿、須恵器鉢、瓦質土器鍋、土塔、火付け木、不明木製品などが出土した。時期は鎌倉時代後期である。

土坑1095（図版18） 土坑895と溝840の間で検出した。南北0.8ｍ、東西1.2ｍの楕円形を呈する。深さ0.2ｍで、埋土は灰黄褐色細砂である。中央北寄りの東西方向に一辺15～25㎝の礫が並ぶ。石列は長軸を東西に、面を南に揃える。石の向きなどから、溝840と土坑895の関連施設とみられる。時期は鎌倉時代後期とみられる。

溝840（図13・16、図版15・19・68・70・71） 溝840は溝900が廃絶すると同時に再掘削された溝である。両岸を石積みで護岸したもので、１～３段分の石組が西岸を中心に遺存していた。石組は積み上げた部分と、一石を並べただけの部分があり、掘形内に含まれていた礫が流水に洗われて護岸石の代わりとなっていた部分も確認した。石材の大きさは一辺が10～45㎝である。検出長20ｍ、掘形幅1.0～1.5ｍ、深さ0.5ｍである。溝の内法幅は約0.5ｍである。底面標高値は北端・中央で46.75ｍ、南端で46.70ｍ、勾配角度は0.3度とほぼ平坦である。両岸はわずかに蛇行しているが、方位は平均で西へ５度振れている。断面形状は逆台形を呈し、埋土は灰黄褐色粗砂礫である。掘形埋土はにぶい黄色粗砂礫やオリーブ褐色細砂などで、西側の掘り込みが大きい。西岸の南端５石は、一時期、溝840東岸下層の石組（図16、図版71－２）と共存していたと考えられる。この東岸下層の石組は、一部切石で造られた花崗岩などの西岸石組とは異なり、チャートや砂岩などのいわゆる川原石で造られていた。粘土質の土を使用し、長軸辺25～70㎝の大型礫を１～２段積み上げて堅牢に構築されていた。検出長5.5ｍ、幅0.7ｍ、高さ0.5ｍを測る。13世紀後半の土師器皿（白土器）が石組の際から出土したことから、それ以降に埋められ、その後の東岸には石組は造られず、素掘りとなった。土師器、瓦質土器、焼締陶器、輸入磁器、軒丸・軒平瓦、丸・平瓦、土塔、

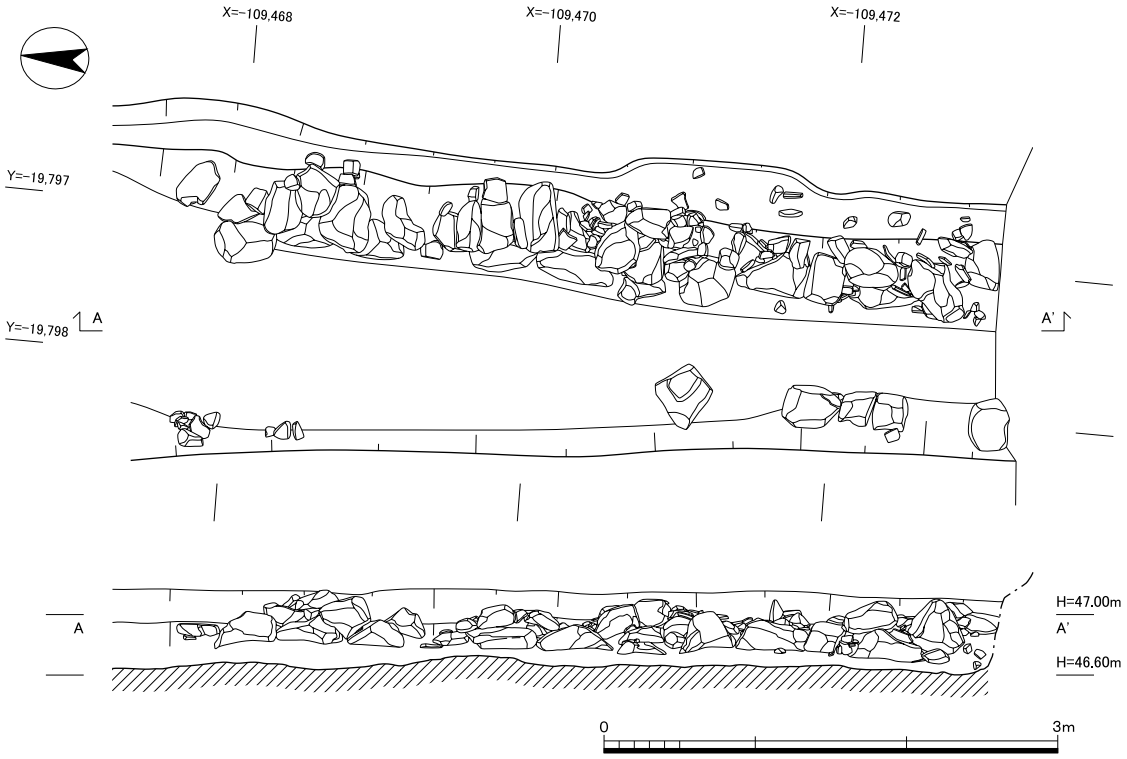


図16　溝840南　東肩下層石積実測図（１：50）

図17　溝440漆塗椀出土状況（南東から）

硯、砥石などが出土した。鎌倉時代後期を中心に使用され、最終埋土上面出土の備前焼擂鉢（図版31－436）の年代から、室町時代前期には埋まっていたとみられる。

溝440（図13・17、図版15・68）　調査区中央で検出した。溝840が埋まった後に掘削された南北方向の溝である。検出長20ｍ、幅0.8～1.0ｍ、深さ0.1～0.2ｍを測る。底面標高値は47.00ｍ前後の平坦である。岸に出入りはあるが、方位は真北である。埋土は灰色粘質土などで、西側に掘形を持つ。図13のＣ－Ｃ’断面で確認したところ、直径５㎝程度の杭を打ち込み、護岸を造っていたがわかった。土留め板を当てていたとみられるが、その痕跡は確認できなかった。土師器皿、瓦質土器羽釜・鍋、輸入磁器、漆塗椀などが出土した。耕作に伴う溝とみられ、時期は室町時代前期から後期に該当する。

２）江戸時代の遺構（図版４・69）

江戸時代の耕作溝は、調査区全面で多数検出した。溝は縦横に掘り込まれており、溝の方向には調査区東半・西半北側・西半南側の大きく３つにまとまりが認められる。このまとまりは、耕作地にするために造成されたとみられる段差（雛壇）に対応しており、調査区西半北側では東西方向に延びた高さ約0.4ｍの段差（段差１）、調査区西半南側では東西方向に延びた高さ約0.3ｍの段差（段差２）が該当する。これを境に溝の方向が変わり、また雛壇北東隅に当たるとみられる部分の溝は直角に曲がる（溝51・167など）。調査区東半の溝は東へ３度、同北西は東へ５度、同南東は西へ１～２度振れる。その他、調査区東と同西で円形土坑を、東西に２基並んだ状態で検出した（土坑107・108と土坑300・301）。併存していたのか、造り替えて使用されていたのかは不明であるが、いずれも肥溜めで、それらが位置を決めて配置されていたことがわかる。

井戸150　調査区北東で検出した井戸150は、内法直径0.7ｍの桶を据え付けた井戸である。掘形の直径は1ｍ、深さは1.5ｍを測る。桶は幅10～15㎝の板を17枚円形に組んだもので、高さ約0.7ｍが遺存していた。井戸枠内埋土は暗灰褐色粘質土、掘形埋土は暗褐色粗砂などである。肥前磁器椀、京・信楽系陶器椀などが出土した。時期は江戸時代後期末である。

土坑107　調査区南西で検出した。直径２ｍの掘形に、直径1.2ｍの結桶を据え付けた肥溜めとみられる。深さは0.3ｍである。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は桶内から真鍮製簪が出土した。時期は江戸時代である。

土坑108　調査区南西で検出した。土坑107西隣に位置し、２基並びで据えられた肥溜めとみられる。掘形の直径は1.8ｍ、深さ0.35ｍ、結桶の直径1.4ｍを測る。埋土は暗灰黄色粘質土で、時期は江戸時代である。

土坑300　調査区北東で検出した。直径2.2ｍの掘形に、直径1.3ｍの結桶を据え付けた肥溜めとみられる。板は残っていなかったが、竹製のタガが１段分遺存していた。深さは0.45ｍを測り、埋土は黒褐色粘質土である。時期は江戸時代である。

土坑301　調査区北東で検出した。土坑300東隣に位置し、２基並びで据えられた肥溜めとみられる。掘形の直径は1.7ｍ、深さ0.5ｍ、結桶の直径1.4ｍを測る。埋土は黒褐色粘質土である。土坑300同様、竹製のタガが１段分遺存していた。時期は江戸時代である。

溝51　調査区南西で検出した耕作溝である。東西方向の段差（２）から南へ0.5ｍに位置する。逆Ｌ字形を呈し、南北検出長14.2ｍ、東西検出長８ｍ、幅0.2～0.5ｍ、深さ0.05～0.20ｍを測る。上面に掘り直された別の溝が重なっていた。南北方向の底面勾配は0.7度で、南が低い。埋土は黒褐色粗砂であった。時期は江戸時代である。

溝167　調査区北西で検出した逆Ｌ字形の耕作溝である。東西方向の段差（１）直下南、南北方向の段差直下西に位置する。南北検出長19ｍ、東西検出長12ｍ、幅0.2～0.5ｍ、深さ0.1～0.2ｍを測る。底面の勾配は0.5度の傾斜を持ち、南へ緩やかに下がる。埋土は粗砂混じりの暗灰褐色砂質土である。南端は土坑108に壊されていた。時期は江戸時代である。

４．遺　　物

（１）遺物の概要（表３）

遺物は整理箱に455箱出土しており、その内16箱が木製品、３箱が石製品や金属製品である。瓦類は約150箱出土しており、その大半は平安時代後期の丸・平瓦であった。遺物の時期は、縄文時代から江戸時代である。平安時代後期から鎌倉時代前期の土器が中心となり、これらの時期のものが出土遺物のほとんどを占めている。次いで、弥生時代後期から古墳時代後期の土器が約30箱と多い。

縄文時代の遺物は、流路1100の弥生時代や古墳時代遺物に混じって出土した。弥生時代から古墳時代の遺物は、土器の他に石製品も出土し、弥生時代の木製品も出土している。奈良時代の遺物は銭貨以外確認できなかったが、平安時代前期とみられる黒色土器の小片がわずかに出土している。平安時代中期とみられる緑釉陶器底部片が後世の遺構から数点出土した。平安時代中期末から後期初頭の遺物は少量ではあるが出土しており、それらは遺構に伴っていた。この時期の瓦類については、後世の遺構から一定量出土しており、周辺の寺院で使用されていたものが、円勝寺または成勝寺の堂宇に再利用されるために運び込まれたものと考えられる。

表３　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
縄文時代～古墳時代	縄文土器、弥生土器・古式土師器、土師器、須恵器、石製品、木製品		縄文土器１点、弥生土器・古式土師器62点、土師器43点、須恵器73点、石製品12点、木製品３点		
奈良時代	銭貨		銭貨１点		
平安時代中期～後期	土師器、緑釉陶器、瓦類、銭貨		土師器13点、瓦類18点、銭貨４点		
平安時代後期～鎌倉時代前期	土師器、白色土器、須恵器、灰釉陶器、山茶椀、瓦質土器、輸入陶磁器、焼締陶器、瓦類、墨書土器、土製品、銭貨、金属製品、石製品、木製品、植物遺存体		土師器155点、白色土器12点、須恵器４点、灰釉陶器１点、山茶椀３点、瓦質土器17点、輸入陶磁器27点、焼締陶器２点、瓦類223点、墨書土器２点、土製品12点、銭貨１点、金属製品１点、石製品２点、木製品28点、植物遺存体		
鎌倉時代後期～室町時代	土師器、白色土器、須恵器、山茶椀、瓦質土器、施釉陶器、輸入陶磁器、焼締陶器、墨書土器、銭貨、石製品、木製品		土師器18点、白色土器１点、須恵器２点、山茶椀１点、瓦質土器12点、施釉陶器１点、輸入陶磁器10点、焼締陶器４点、墨書土器２点、銭貨１点、石製品４点、木製品２点		
江戸時代以降	土師器、国産陶磁器、焼締陶器、金属製品、銭貨		金属製品１点、銭貨１点		
合　計		459箱	780点（65箱）	25箱	369箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Ａランクの遺物を抽出したため、出土時より４箱多くなっている。

平安時代後期から鎌倉時代前期の遺物は、土坑や井戸からまとまって出土した。瓦質土器鍋・釜などの調理道具である煮沸具が目立ち、土師器皿に次いで多く出土している。白色土器の出土点数は全体の１割にも満たないが、器種や器形が豊富で、祭祀などで使用された器物一式をまとめて投棄した可能性が高い。生産具の砥石などは数点の出土に留まる。木製品は箸などの供膳具が井戸などから出土しているが、量的にはそれ程多くはない。瓦類は大量に出土しており、調査区中央に位置する溝900埋土からの出土が最も多く、軒丸・軒平瓦、鬼瓦など種類も多岐にわたる。鎌倉時代後期から室町時代の遺物量は、前時代に比べると減少する。土師器や瓦質土器が多く、それらの器種の割合では前時代を踏襲しているが、祭祀に使用されたとみられる遺物はほとんど含まれていない。瓦類も同様で、13世紀後半のものはわずかである。江戸時代の遺物は、井戸や耕作溝などから少量出土しているが、特徴的な遺物以外は図示しなかった。

以下では、古い時期の土器類から順を追って、遺構別に記述する。土器類以外の遺物については、種類ごとに分けて記述している。なお、墨書土器については、当該期の遺構から出土していなかったので、別項目を立てて土器とは別に扱った。

遺物観察表の遺構表記については、煩雑さを避けるため、以下の様に調整した。平安時代後期の造成土から出土した遺物は「造成土」、鎌倉時代後期以降の溝や耕作土などから出土した遺物は「包含層」と記述している。また、平安時代後期から鎌倉時代前期の遺構から出土した遺物で、個別の遺構番号を記述していないものがある。建物や柵などに復元できなかった単独の柱穴や、小土坑をその対象としている。これらから出土した遺物については、調査区中央で検出した南北溝の東西で、所属寺院が変わる可能性があるため、「調査区北東柱穴群」などと大まかな出土位置を記すこととした。

なお、土師器の年代観については、京都Ⅳ～Ⅷ期という時期区分を使用し、土師器皿の器形分類についても、土師器皿Ac・A・N・Sを準用する[1)]。弥生時代後期から古墳時代初頭の土器分類及び軒丸・軒平瓦の分類については、第１期調査の分類に従い、前回出土していない瓦当文様などについては、新たに追加して記述した。これらについては、各項で詳細を述べる。

（２）土器類

１）縄文時代中期末の土器（図18、図版81、付表１）

１は縄文土器深鉢体部上半の破片である。竹管による３本の押し引き沈線が、わずかに弧を描きながら、横方向に施文されている。沈線間にはＬＲ縄文の充填が認められる。外面沈線の影響で、沈線裏側に当たる内面が盛り上がっている。縄文時代中期末の北白川Ｃ式土器である。流路1100の最上層から出土した。

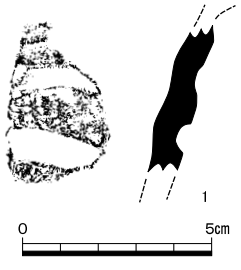


図18　縄文土器実測図（１：２）

２）弥生時代前期から古墳時代後期の土器（付表１）

この時期の遺物は、すべて流路1100から出土した。西岸出土の遺物の時期は、弥生時代前期から古墳時代後期に及ぶ。弥生時代前期とみられる甕の破片なども数点出土しており、西岸から出土した遺物の中心となる時期は、弥生時代後期後葉から古墳時代前期と古墳時代中期から後期である。流路1100の図８－２～６層（図版５－36～38層にほぼ対応）から出土した。東岸出土の遺物の時期は、古墳時代中期から後期が主体で、古墳時代前期の遺物が少量混じる。護岸1215西側に接した腐植土層と砂層の互層（図版８－１～５層）から出土した。

弥生時代から古墳時代の遺物については、流路1100西岸と東岸に分けて掲載した。西岸については、遺物の掲載点数が多いため、観察表には遺構番号のみを記載した。時期は大きく３時期に分けられたことから、弥生時代前期から古墳時代前期、古墳時代前期（須恵器出現まで）、古墳時代中期から後期（須恵器出現以降）にまとめて図示した。

なお、弥生土器及び古式土師器の分類は第１期調査で使用した分類に従う（図19～21）。分類に当てはまらない土器については、新たに器種の項目を増やして、分類図に付加した。形式分類の文章は、再録となる部分が多いが、新たに加筆・修正したことも含めて、以下に記す。

壷（図19）

細頸壷

＜細頸壷Ａ＞細い頸部から口縁部が長く直線的に延び、扁球形の体部をもつもの。

＜細頸壷Ｂ＞細い頸部から口縁部が内湾気味に長くのびるもの。

広口壷

＜広口壷Ａ＞頸部から口縁部が外反して大きく開き、端部を拡張して装飾を施すもの。

＜広口壷Ｂ＞頸部から口縁部が外反して大きく開き、装飾を施さないもの。

＜広口壷Ｃ＞頸部から口縁部が直立して立ち上がり、明瞭な屈曲点をもって大きく開くもの。

＜広口壷Ｄ＞頸部から口縁部が外反して開き、端部を上方に拡張し、受け口状を呈するもの。

＜広口壷Ｅ＞頸部から口縁部が直立して立ち上がり、明瞭な屈曲点を持って口縁部が大きく開くもの。口縁端部を垂下させ、装飾を施す。体部は扁球形を呈し、最大部分に装飾を施す。頸部から肩部にも装飾を施す。

無頸壷

＜無頸壷Ａ＞偏球形の体部を持ち、ごく短く直立する口縁部が付く、もしくは全く口縁部を持たないもの。

短頸壷

＜短頸壷Ａ＞短く直線的に立ち上がる口縁部を持つもの。

＜短頸壷Ｂ＞短く「く」の字状に外反する口縁部を持つもの。

＜短頸壷Ｃ＞短く内湾して立ち上がる口縁部を持つもの。

長頸壷

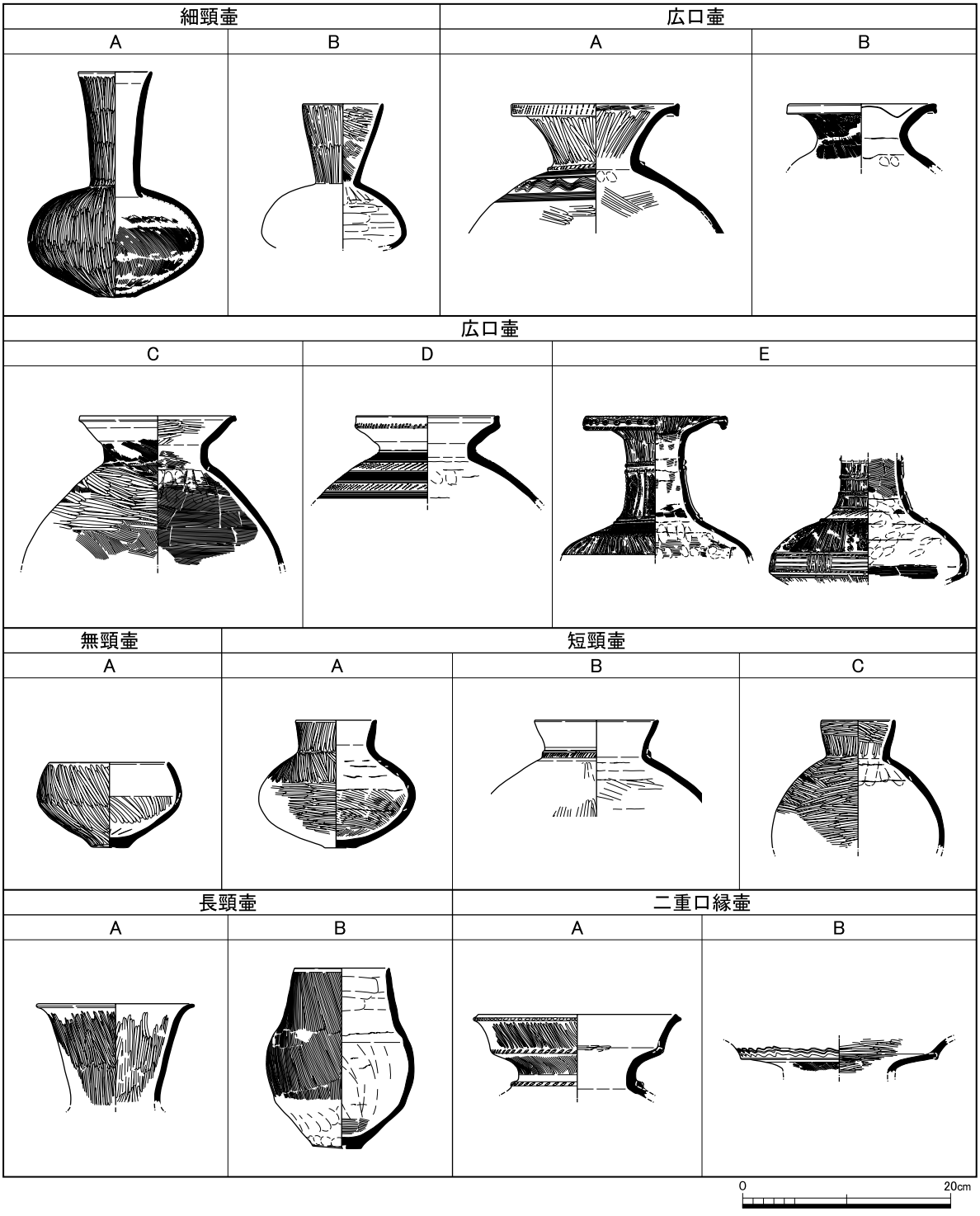


図19　形式分類１（１：６）

＜長頸壷Ａ＞斜め上方に直線的に長く伸びる口縁部を持つもの。

＜長頸壷Ｂ＞内傾して立ち上がる口縁部を持つもの。

二重口縁壷

＜二重口縁壷Ａ＞短く外反する擬口縁部に外反する口縁部が付くもの。装飾を施す。

＜二重口縁壷Ｂ＞直立する頸部から大きく水平に開く擬口縁部に、斜め上方に延びる口縁部が付くもの。装飾を施す。

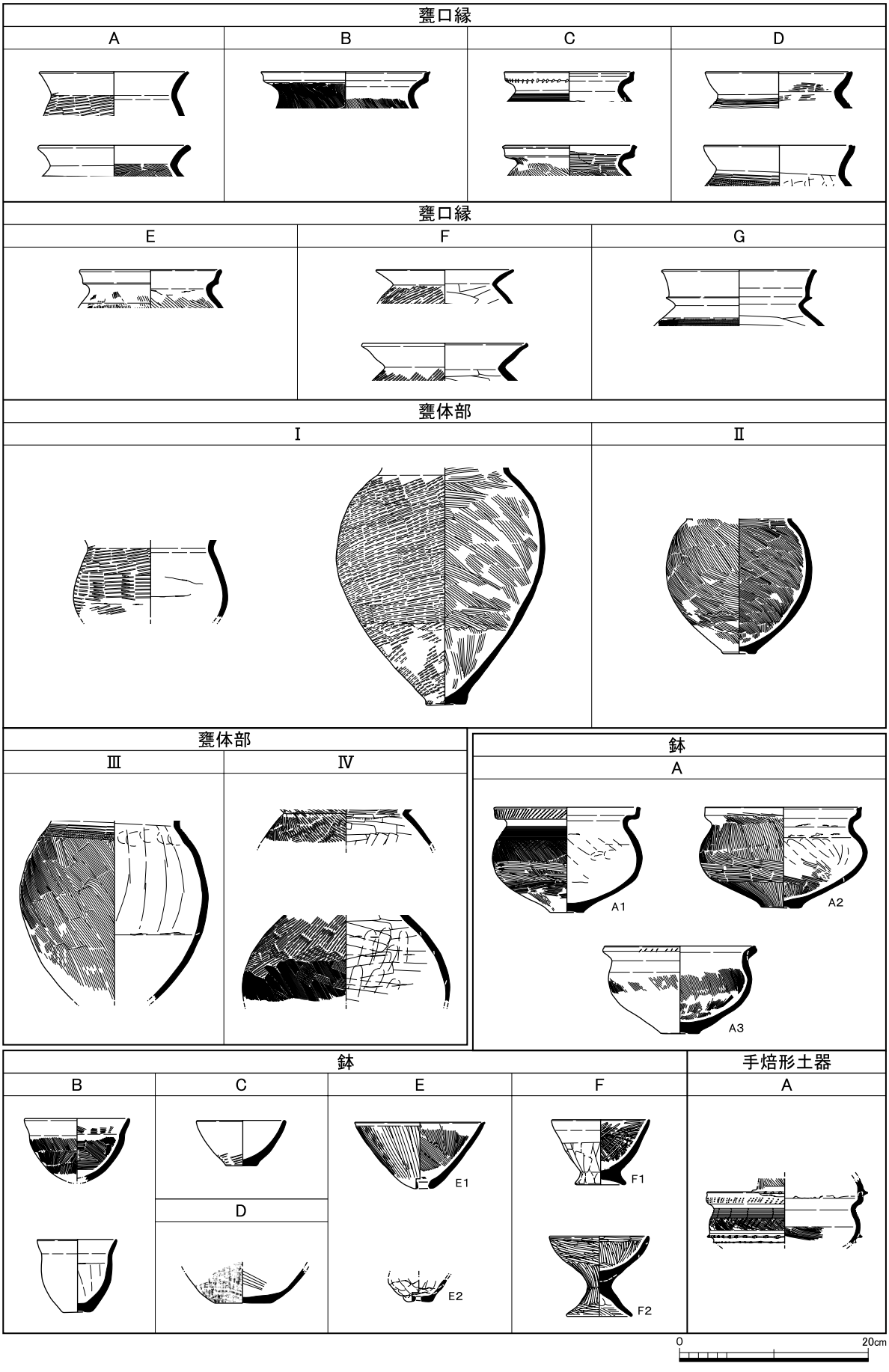

甕口縁
A
B
C
D
甕口縁
E
F
G
甕体部
Ⅰ
Ⅱ
甕体部
Ⅲ
Ⅳ
鉢
A
A1
A2
A3
鉢
B
C
D
E
F
E1
E2
F1
F2
手焙形土器
A
0
20cm

図20　形式分類２（１：６）

甕（図20）

口縁部と体部の形態をそれぞれ別に分類し、その組み合わせで表記する。

口縁部

＜甕Ａ＞「く」の字状に外反するもの。

＜甕Ｂ＞「く」の字状に外反し、端部を上方に拡張し受け口状を呈するもの。

＜甕Ｃ＞強く外反する口縁部から上方に立ち上がり、受け口状を呈するもの。端部には水平な面を持つ。近江系。

＜甕Ｄ＞甕Ｃの退化したもので、外反が弱く、上方への立ち上がりも短いが、端部には水平な面を持つもの。

＜甕Ｅ＞短く外反する口縁部から上方に立ち上がり、受け口状を呈するもの。端部は丸く収める。丹波系。

＜甕Ｆ＞体部から鋭角に外反する「く」の字状口縁を呈するもの。端部は丸く収めるか、短く摘み上げる。庄内式甕。

＜甕Ｇ＞「く」の字状に外反する擬口縁に、斜め上方に延びる二次口縁が付加されるもの。山陰系。

体部

＜甕Ⅰ＞外面を太筋のタタキで仕上げるもの。内面はハケないしはナデで仕上げる。

＜甕Ⅱ＞内外面ともにハケで仕上げるもの。外面にハケで消しきれず、タタキの痕跡が残るものも含む。

＜甕Ⅲ＞外面をハケで仕上げ、内面をケズリ・板ナデ・ナデのいずれかで仕上げるもの。肩部に櫛描き直線文や列点文などの装飾を施すものが多い。

＜甕Ⅳ＞外面は細筋のタタキのちハケ仕上げ、内面はヘラケズリする。庄内式甕。胎土に角閃石を含み、暗褐色系の生駒西麓産のものと、角閃石をあまり含まずににぶい橙色系の河内平野部産のものがある。

鉢（図20）

＜鉢Ａ＞Ａ１　受口状口縁で、口縁部と体部の肩部に装飾を施すもの。

Ａ２　受口状口縁で、装飾を施さないもの。

Ａ３　体部形態はＡ１・Ａ２と同じで、口縁部が受口状をなさないもの。

＜鉢Ｂ＞「く」の字状口縁をもつもの。

＜鉢Ｃ＞体部が「ハ」の字状に開くもの。甕下半部と同じ作り。

＜鉢Ｄ＞型作りで、外面にカゴ目が付くもの。

＜鉢Ｅ＞Ｅ１　底部に焼成前穿孔がなされた有孔鉢。甕下半部と同じ作り。

Ｅ２　手づくねの小型鉢で、底部に焼成前穿孔がなされた有孔鉢。

＜鉢Ｆ＞Ｆ１　短い脚台をもつ台付鉢。

Ｆ２　「ハ」の字状に開く脚台を持つ台付鉢。

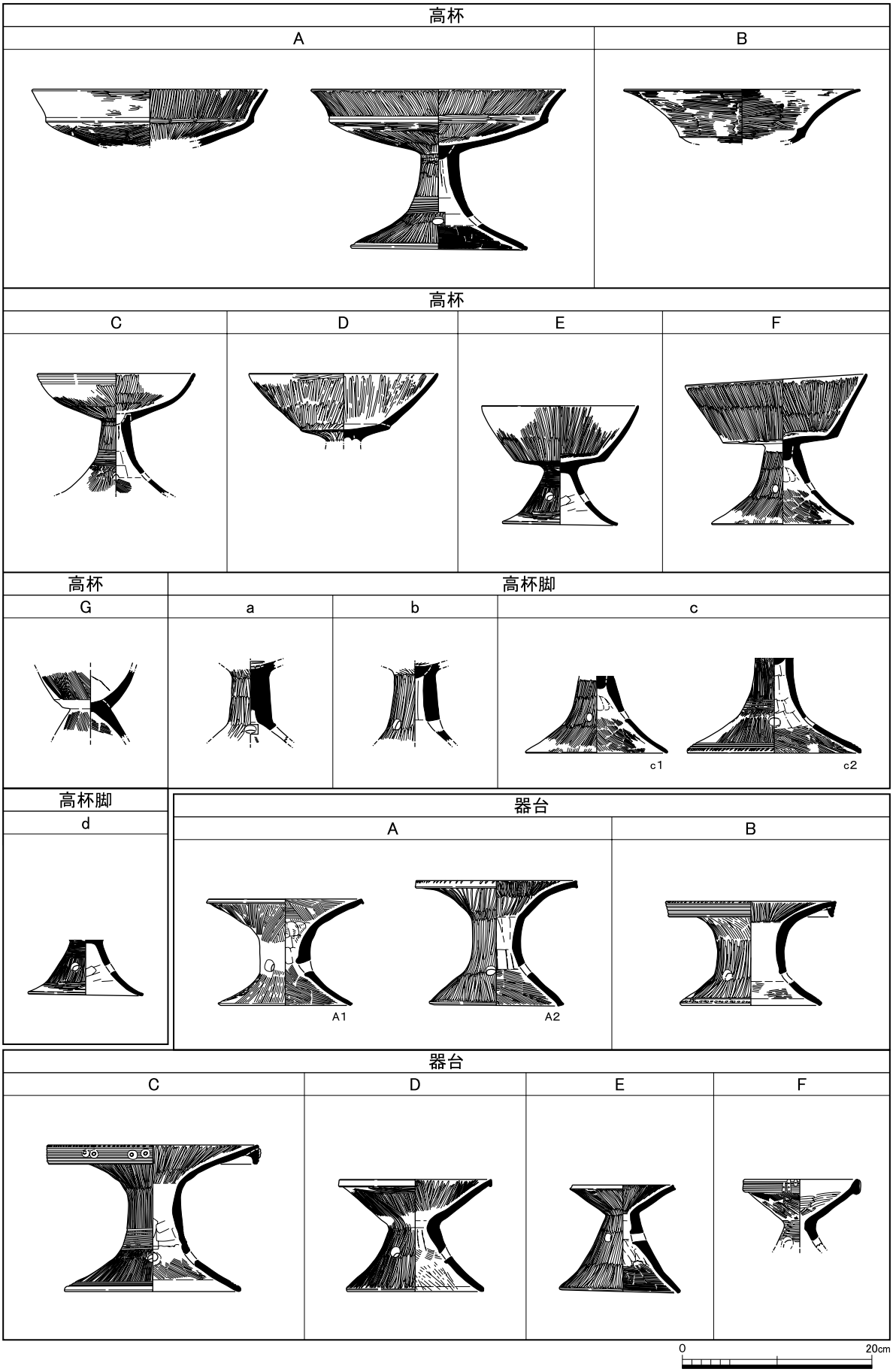


図21　形式分類３（１：６）

手焙形土器（図20）

＜手焙形土器Ａ＞受口状口縁の鉢Ａに覆部が付くもの。

高杯（図21）

杯部と脚部の形態をそれぞれ別に分類し、その組み合わせで表記する。

杯部

＜高杯Ａ＞皿形の杯部で、口縁部が外反するもの。

＜高杯Ｂ＞皿形の杯部で、口縁部が外反して大きく開くもの。

＜高杯Ｃ＞椀形の杯部をもつもの。

＜高杯Ｄ＞鉢状の杯部で、口縁部が大きく開くもの。

＜高杯Ｅ＞鉢状の杯部で、口縁部が内湾気味に立ち上がるもの。

＜高杯Ｆ＞鉢状の杯部で、口縁部が直線的に立ち上がるもの。

＜高杯Ｇ＞ミガキなどを施さない、粗製のもの。

脚部

＜高杯ａ＞中実で、脚裾が明瞭な屈曲点を持って開くもの。

＜高杯ｂ＞中空で、脚裾が明瞭な屈曲点を持って開くもの。

＜高杯ｃ＞ｃ１　中空で、脚柱から脚裾にかけて緩やかに大きく開くもの。

ｃ２　ｃ１と同じ形状で、装飾を施すもの。

＜高杯ｄ＞中空で、「ハ」の字状に開くもの。

器台（図21）

＜器台Ａ＞Ａ１　緩やかに開く脚裾から、筒部が直線的に立ち上がり、口縁部が緩やかに開くもの。

Ａ２　Ａ１の口縁端部に装飾を施すもの。

＜器台Ｂ＞器台Ａの口縁端部を垂下させ、装飾を施すもの。

＜器台Ｃ＞緩やかに開く裾部から筒部が直線的に立ち上がり、明瞭な屈曲点を持って、口縁部が大きく開くもの。口縁端部は垂下させ、装飾を施す。筒部、裾部にも装飾を施す。

＜器台Ｄ＞「ハ」の字状に開く脚部から、明瞭な屈曲点を持って口縁部が大きく開くもの。

＜器台Ｅ＞直線的に長く延びる脚部から、明瞭な屈曲点を持って口縁部が開くもの。

＜器台Ｆ＞直線的に開く脚部から、明瞭な屈曲点を持って口縁部が開き、端部を上方に拡張するもの。

今回出土しなかった形式は、細頸壷Ｂ、広口壷Ｂ、無頸壷Ａ、長頸壷Ｂ、二重口縁壷Ｂ、甕口縁Ｂ・Ｄ～Ｇ、甕体部Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ、鉢Ｃ・Ｄ・Ｅ、手焙形土器である。また、新設したのは、広口壷Ｅである。61以降の土器は布留式土器と考えており、分類基準に合わないため、器形のみ記載した。今回は出土量も少ないため、形式分類は行っていない。

なお、時期区分や器種分類などは、章末の文献を参考に使用した。

流路1100西岸出土弥生土器・古式土師器（図版20～22）　弥生土器・古式土師器には、壷、甕、高杯、器台、鉢、ミニチュア土器がある。弥生時代後期のタタキ甕や古墳時代前期の庄内式土器甕などは確認していない。胎土や文様・器形から、近江系、河内系とみられる土器が数点含まれている。

２は細頸壷Ａである。口縁部外面には５本の浅い擬凹線を施す。頸部下端に６本の少し深目のヘラ描き沈線を施すが、一部はミガキ調整によって消されている。内面は暗文のような螺旋状のミガキを行う。体部との接合部の観察から、頸部は粘土板を３重に巻いて制作している。

３～13は広口壷Ｅである。いずれも口縁部外面に断面三角または方形の粘土を貼り付けた垂下口縁を持つ（３・４・13）とみられる。口縁部内面や外面は目の細かいハケ調整のちミガキ調整、内面は粘土接合痕やシボリ痕などが残るが、後にハケ調整を施す。口縁部は擬凹線や円形浮文、竹管文、櫛先刺突文、頸部から肩部は数条の突帯や棒状浮文、竹管文、線刻文、櫛先列点文など、体部最大部分は突帯や棒状浮文、斜格子文などで装飾を施す。出土した破片の文様の組み合わせから、掲載した土器以外にも数個体存在する。

14～17・23は広口壷Ａである。14は口縁部内面に櫛描波状文、外面に竹管文を押圧した貼付浮文を施す。15は体部から直立して、口縁部が大きく開く。口縁部外面に垂下口縁を貼り付け、口縁端部には３本の擬凹線上に竹管文を押した円形浮文を配置する。口縁部の立ち上がり部分には、突帯を貼り付け、その上と根元を櫛先で刻む。肩部内面にはシボリ痕が明瞭に残る。16は口縁端部片である。竹管文と斜めの線刻文を交互に配置する。17は垂下口縁端部に３本の擬凹線を施し、朱を塗布する。内外面は非常に細かいミガキ調整が行われる。口縁部と体部の境目には、工具の先端による列点が文様のように並んで一周する。23は口縁部内面に突帯が廻る。突帯上部から口縁端部の間に、綾杉や斜線の櫛先刺突文が連続して施されている。

18～21・25は広口壷とみられる肩部片である。21以外の肩部は丸い。櫛描直線文や竹管文、線刻文、刺突列点文、櫛先列点文が施文されている。21肩部は「ハ」の字形を呈する。櫛先刺突文と櫛描直線文を交互に配置する。25は櫛描直線文と爪形文を施す。

22は広口壷Ｃ頸部の破片である。肩部に波状文が施文されている。頸部内面の立ち上がり付近まで、焦げ痕が付着する。24は広口壷Ｃ体部である。球形を呈する体部に、直立する頸部が付く。肩部に櫛描直線文と刺突列点文が施文され、その直下に円形に嘴がついたような文様が朱を使用して描かれている。

26は広口壷ＡまたはＣの肩部片である。細かい目のハケ調整のち丁寧なミガキ調整を行う。刻み目突帯と櫛先刺突文、Ｃ字形の竹管文を施文する。外面下部に文様の一部とみられる線刻や粘土貼付時に行うカキ目のような痕跡が認められる。

27・31・32は短頸壷Ａ、28～30は短頸壷Ｂである。27は口縁端部が内傾し窪む。肩部には、細かい目のハケ調整上に櫛描直線文を施す。31は体部が球形を呈する。口縁端部は丸く収める。外面に煤が付着する。32外面は左上から右下にかけてのハケ調整を密に行う。底部は浅い凹底で、接地面を丁寧になでる。28・29は口縁部外面に擬凹線を４本引き、肩部に刺突列点文を配置する。これ

らは、内面の調整や口径が異なることから別個体として扱った。近江の湖北・湖西で類似した土器が確認されている。30は直線的に内傾する体部に、外反しながら立ち上がる口縁部が付く。口縁端部は上方へ摘み上げる。口縁部内面は幅広く沈線状に窪む。頸部内面から外面にかけて、橙色から赤褐色の顔料（酸化鉄？）を塗布する。33は算盤球形の体部を呈する広口壷ＢまたはＣである。

34は二重口縁壷Ａで、体部は欠損している。口縁端部を外方へ摘み出し、丸く収める。内外面は丁寧なミガキ調整であるが、口縁接合部分は粘土接合痕が明瞭に残る。

35・36は甕Ａである。35外面にヘラ状工具により３本の沈線が施されている。沈線内に朱が遺存していた。胎土は角閃石を多く含む生駒西麓産である。弥生時代前期Ⅰ様式の甕口縁部片とみられる。36は口縁端部に櫛先で刻みを入れる。口縁部内面に焦げ痕がある。弥生時代後期Ⅳ様式の甕とみられる。

37～40は甕Ｃ・Ⅲである。受け口外面に刺突列点文、肩部に櫛描直線文と刺突列点文を施文する。37～39は内傾した口縁端部が窪み、40は端部を丸く収める。38は口縁部外面に２本沈線を引き、朱を塗布する。39の外面口縁端部付近まで煤が付着する。

41・42は鉢Ａ１である。41の体部は下膨れの無花果形を呈し、口縁端部が内傾し窪む。底部は丸味を帯びた小さな平底である。ヘラ描直線文施文後に３本のヘラ描波状文を重ねる。42は口縁部外面と体部上半に粗い刺突列点文、肩部に櫛描直線文を施す。

43～47は壷または甕の底部である。43は深い凹底で丁寧に丸くなでる。44は平底で接地面に工具痕が残る。45・46は製作時に孔を穿った底部である。孔周りはほぼ未調整である。47は丁寧になでて浅い窪み底を作る。

48は椀形の高杯Ｃである。口縁部は外反し、口縁部外面に擬凹線を２本並行に引く。49・50は高杯脚ｃ１である。49は脚部から裾部に向かって大きく開き始める変換点に、径１㎝の円形透かしを３方向から穿つ。50は「ハ」の字に開く脚部に、体部が外屈して直線的に大きく広がる。脚裾端部は外傾し、端部外面を上方に突出させ、その上を細かく刻む。杯底部の粘土充填部分は欠損している

51～53は器台Ｃ、54は器台Ｅである。51～53は緻密なミガキ調整を口縁部内面や外面全体に施す。筒部中央または下半に、ヘラ描直線文や櫛先刺突文、直径約１㎝の円形透かしを配置する。透かしは51・52が３箇所、53が４箇所である。51は垂下口縁外面に擬凹線を引き、３個単位の竹管文を押圧する。中央に位置する竹管文同士の中心間は6.5～7.1㎝間隔である。竹管文が１個だけのところがあり（中央の小丸なし、右にある竹管文との距離は3.7㎝、同左は推定5.2㎝）、つじつま合わせとみられる。口縁部内面には、刺突列点文と３単位の竹管文を6.7～8.1㎝間隔で施す。垂下口縁の竹管文との文様配置はあっておらず、規則性は認められない。52は垂下口縁外面の擬凹線上に、推定８箇所で２個一の円形浮文を貼り付け、竹管文を押す。53は外面の所々に塗布された朱が残る。54は短く低い口縁部が載る。脚部に円形透かしを穿つ。55は器台Ｃの垂下口縁の端部とみられる。内面と周辺に櫛描波状文を施し、口縁端部を刻む。胎土は暗褐色を呈する。

56は鉢Ｂである。直径1.3㎝の平底から内湾しながら立ち上がり、口縁部が短く外傾する。頸部

付近に粘土を伸ばした時の皺が残る。

57は鉢Ｆ１である。台部外面に指頭圧痕が明瞭に残る。底面は中央に粘土を充填して、オサエ調整で窪ませる。

58～60は鉢形を呈するミニチュア土器である。いずれも手づくねで、内面はユビ約一本分の指頭圧痕、外面は粘土皺やひび割れが残る。59・60の口縁端部は平滑に調整されていない。

61は革袋形土器である。奥行4.3㎝、横10.3㎝、器高4.0㎝であることから、ミニチュア土器とみられる。口縁部は欠損する。上面観及び長軸面観は菱形で、両側端が細く窄まる。側面観は巾着形で、平らな底部から外湾しながら立ち上がり、頸部で縊れる。粘土接合部分の両肩部には、粘土端を外面に折り返した部分や粘土皺が未調整のまま残る。内外面ハケ調整である。

35・36以外の土器の時期は、弥生時代後期から古墳時代前期に位置づけられ、弥生時代Ｖ様式から庄内式併行に相当するとみられる。

流路1100西岸出土土師器（図版22～24） 布留式土器の壺、甕、高杯、ミニチュア土器が出土した。77以降の土器は、須恵器と共伴するとみられる土師器である。甕、甑、鉢、土師質鍋、高杯が出土した。

62は直口壺である。無花果形の体部に、直線的に大きく開く口縁部を持つ。口縁外面から肩部にミガキ調整痕が認められる。

63～66は甕である。体部は球状を呈し、口縁部は短く外反する。口縁部内外面はナデやハケ、内面下部はナデやケズリ、外面下部はハケ調整である。63・64は口縁端部を内側へ摘み出し、65は上方へ立ち上がる。66は口縁端部内面が肥厚する。63～65には、内面に焦げ痕、外面に煤が付着している。特に63内面には口縁下部くらいまで煮沸時の飛び跳ねた焦げ痕や、内面最大径付近に横方向の筋が残る。

67～71は高杯である。67・70・71は、「ハ」の字状に広がる脚部に、平らな杯底部から、外反または内湾しながら大きく広がる口縁部が付く。口縁端部は丸く収める67と、外傾させて窪ませる70・71がある。70・71は杯部と口縁部との変換点が、突帯状に張り出す。外面はハケ調整で、口縁端部をなでる。杯部下部から脚部はミガキやナデで面取り調整を行う。67は見込みが著しく剥離し、煤が付着する。71は脚部と裾部の変換点に、約８㎜の円形透かしを３方向に穿つ。68は脚部が「ハ」の字に広がり、外屈した裾部が緩やかに内湾する。内面に横方向のケズリ調整痕や基部付近にシボリ痕が認められる。69の杯部は丸味を帯びながら外反する。口縁部は直線的に外反し、口縁端部を摘み上げる。脚部は基部から「ハ」の字に広がり、裾部で外屈し、裾端部を下方へ摘む。筒状に作った脚部と杯部の接合時に、杯部内面から粘土を充填する。

72～75は小型丸底壺である。肩部付近に最大径が位置する球形の体部に、短い口縁部がやや内湾しながら外方へ立ち上がる。外面はナデやミガキで丁寧に調整されているが、内面はユビ跡や工具痕が残り、体部の器厚が不均一で分厚いものが多い。73の口縁端部内面には、細い沈線が廻る。

76は鉢のミニチュア土器である。内面から粘土を押し出しながら形作るため、粘土皺が外面に多く認められる。口縁端部を少し内側に丸める。

77～90は甕である。体部の形態には、肩部付近に最大径が位置するもの（79など）、楕円形（縦長）を呈するもの（83など）、球形を呈するもの（89など）がある。口縁部はいずれも短く立ち上がる。直線的に外方へ開くもの（79など）、外反するもの（82）、直立するもの（89）などがある。口縁端部は丸く収めるもの（78など）、外傾させ内側を摘み上げるもの（80）、外方へ摘み出すもの（85など）、内湾させるもの（81など）、外面を玉縁状に肥厚させるもの（83）などがある。外面はハケ調整が主体で、煤が付着しているものが多い。

91・92は甑である。底部から緩やかに外傾しながら体部が立ち上がり、口縁端部は内傾してわずかに窪む。体部中程には、先端を上向かせた把手を２箇所に貼り付ける。92は内外面をハケ調整するが、91内面はケズリ調整と横方向のハケ調整を施す。91の底面には、中心に直径約５㎝の孔を開け、その周囲には長さ約5.5㎝、最大幅約2.0㎝の楕円形の孔を十字の位置に配置する。孔の器壁は丁寧に削り取る。把手直下に、幅５㎝程度の５～８㎜の円形窪みが帯状に集中する。使用痕とみられる。

93～95は小型の鉢である。93は平底から体部が内湾しながら立ち上がり、口縁端部は外反する。94・95は体部が内湾しながら外傾し、一旦頸部で縊れ、短い口縁部を上方または外方へ立ち上げる。94外面下部はケズリ調整を施す。

96・97は土師器の甕である。口縁部はいずれも欠損している。外面上部はミガキやナデ、下部はハケ調整を施す。体部上半に直径約1.1㎝の孔を１箇所穿つ。

98は台付鉢または高杯の脚部とみられる。色調は橙色を呈する。外面はシボリ痕にナデ調整を加えるが消し切れなくて、工具の先端があたったような痕跡が残る。貼り付け部分で剥離している。

99・100は椀形高杯である。99の外面下部はハケのち棒状工具によるケズリ調整を行う。口縁部外面のヨコナデにより、端部は外反する。100は丸味を帯びた体部から、口縁部がほぼ直立する。直径約４㎜の心棒痕のある基部から、脚部は「ハ」の字に広がり、脚裾部でさらに大きく広がる。端部はやや内湾気味に丸く収める。

62～76は布留式土器、77・78は布留式土器最終段階から初期須恵器の段階、79・83は初期須恵器に共伴する土師器、80～82・84～88はＴＫ47型式からＭＴ15型式併行、89・90はＭＴ15型式からＴＫ10型式併行、91～100は５世紀と考えられる。

流路1100西岸出土須恵器（図版25・26）　流路1100西岸から出土した須恵器には、杯、杯蓋、無蓋高杯、有蓋高杯、有蓋高杯蓋、壺、甕、甑がある。

101～103は有蓋高杯蓋で、天井部上面中央に摘みを貼り付ける。天井部は平らに近い形状で、中央から櫛先刺突文と沈線、また櫛先刺突文を順に配置する。天井部と口縁部との境には、尖った突帯状の稜が廻る。櫛先刺突文の施文方向は、101・103が内外で変わり、102は変わらない。101・102の摘み中央が突出する。103の摘みは欠損している。ＴＫ216型式と考えられる。

104・105は天井部上面中央に摘みが付く有蓋高杯蓋である。天井部に文様や沈線などは施文されていない。天井部は高く丸味があり、口縁部との境目には101などよりも高さは低いが鋭い稜を持つ。口縁部は直立気味で、口縁端部は内傾して窪む。貼り付けられた摘みは、端部が丸く、中央

の出っ張りはほとんど認められない。104は、天井部外面の３分の２が回転ヘラケズリ調整である。稜から1.5㎝内側に、重ね焼き痕跡とみられる自然釉の有無による円形線が付く。時期はＴＫ23型式である。

106～111は杯蓋である。106・107は天井部が高く丸みがあり、口縁部との境目に稜が廻る。口縁部は106が外方気味に開き、107は直立する。いずれも口縁端部は内傾して窪む。107の天井部外面には自然釉が発生し、また重ね焼きの胎土目痕が２箇所で遺存していた。108・109は、106などよりも天井部が高く丸みを持つ。天井部外面の２分の１程度に、回転ヘラケズリを施す。口縁部はわずかに外方し、口縁端部は内傾して窪む。110・111は天井部が平らで、口縁部との境目は段状の沈線が廻る。口縁部はわずかに内湾し、端部は内傾して段を形成する。内面中央に当て具痕が明瞭に残る。106・107はＴＫ23型式からＴＫ47型式、108・109はＴＫ47型式、110・111はＭＴ15型式に位置付けられる。

112～130は杯身である。112～114は、口縁部が内傾しながら立ち上がる。口縁端部は内傾して浅く窪む。113は口縁端部を丸く収める。受け部は短く上方し、体部との境目に沈線状の窪みを有する。体部は丸味を帯び、底部は平らである。114は受け部近くの４分の３程度まで、体部の回転ヘラケズリが及ぶ。115～117は112などよりも口縁部の立ち上がりが低い。口縁端部は内傾して窪む。受け部は短く平らで、体部は丸い。115底部外面には、ヘラ記号とみられる浅い沈線が引かれ、その上に粘土塊が付着する。118～120は口径12.4～12.7㎝で、一型式前の10㎝台に比べ、口径は広くなるが器高は低い。口縁部は内傾し、端部でやや外反、端部内面が段化する。受け部は上面が平らで、長く上向く。118は底部外面に溶着痕がある。121～127は底部が丸く、やや深手である。口縁部は内傾しながら立ち上がる。121などは口縁端部内面が肥厚する。受け部は短く、上面は丸味を帯びる。128～130は器高が低く、底部が平らになる。口縁部は内傾し、端部を丸く収める。受け部は短く上向く。112～114はＴＫ23型式、115～117はＴＫ47型式、118～120はＭＴ15型式、121～127はＴＫ10型式、128～130はＭＴ85型式に位置付けられる。

131～138は高杯及びその脚部である。131は無蓋高杯で、杯部上半に突線を廻らせる。体部は丸く外傾しながら立ち上がり、口縁部で外反する。口縁端部は外傾して窪む。脚部は基部から外傾し、脚裾部で大きく広がる。変換点に突帯状の尖った稜が廻る。132・133は有蓋高杯である。器高が口径に比して低く、体部が丸く、底部が平らである。口縁部は短く内傾する。受け部は長く、上面は平坦で先端が尖る。脚部は131と同形で、133は３方向に円形透かしが配置されている。134は無蓋高杯で、杯部下半に２本の突線と、櫛描波状文を配置する。脚部に台形の透かしを３方向に入れる。口縁部及び脚部下半は欠損している。131～134は底部の器厚が約８㎜と分厚い。135は有蓋高杯である。底部が平らで、口縁部と端部は内傾して、端部が窪む。受け部は上面が平坦で、端部が尖る。脚部は太く、３方向に三角形の透かしが開けられている。136～138は高杯脚部で、いずれも杯部が欠損している。脚基部から裾部にかけて大きく開く。136の脚裾端部は直立し、外面が段をなして稜が廻る。137は脚裾端部が外傾し窪むが、138は窪まない。136は方形透かし、137・138は円形透かしを３箇所に穿つ。131～133はＴＫ216型式、134はＴＫ23型式、135～138はＴ

Ｋ47型式と考えられる。

139は椀形を呈する。いわゆるコップ形とみられるが、把手は確認できなかった。丸い体部に、直立する口縁部が立ち上がる。口縁端部は内傾し窪む。口縁部と体部の境目に、２本の突線が廻る。底面はケズリ調整である。ＴＫ23型式と考えられる。

140は長頸壷とみられる。丸い底部から体部にかけて内湾しながら立ち上がり、肩部で屈曲し、口縁部を大きく外反させ、口縁端部を上方へ摘み上げる。口縁端部外面は三角形状に突出する。外面下部は格子目タタキ、肩部は格子目タタキのちカキ目調整である。ＴＫ23型式と考えられる。

141～143は甕である。141は口縁部が大きく外反し、中程で上方へ立ち上がる。この変換点外面は突線状になり、上下に櫛描波状文を施す。口縁端部はやや内傾させる。扁平な体部上半に、カキ目と直径１㎝の孔を穿つ。142は141の体部より丸みがなくなり、横長の器形を呈する。口縁部は欠損している。143は丸い底部から内湾して立ち上がり、肩部で内屈し、口縁部が大きく外反する。肩部から体部上半に沈線や櫛先列点文、直径約1.5㎝の穿孔を行う。口縁部上半には櫛描波状文と櫛先列点文を施す。141・142はＴＫ208型式、143はＭＴ15型式に位置付けられる。

144～147は甕である。144～146は肩部から頸部に向かって内湾しながら立ち上がり、短い口縁部が大きく外反する。144・145は口縁部外面に突線が１～２条廻り、その直下に櫛描波状文を施す。146は口縁端部をやや内側に摘み上げる。147は球状の体部に、外反しながら短く立ち上がる口縁部が付く。口縁端部は上方へ摘み上げ、端部外面は少し垂下させる。144・145はＴＫ208型式、146はＴＫ47型式、147はＴＫ23型式と考えられる。

流路1100東岸出土須恵器（図22・23） 杯蓋、杯身、提瓶、壷、甕、有蓋短頸壷が出土した。

148～156は杯蓋である。148・149は天井部が丸みを持つ。口縁部との境目に段状の稜が廻る。口縁部はわずかに外方し、口縁端部は内傾して窪む。148は摘みが欠損している。外面に円形の重ね焼き痕の周辺に、自然釉が発生している。150は天井部が丸く高いが、151は天井部が平らである。口縁部との境目には段状の沈線が廻る。150の口縁部は内湾し、151はわずかに内湾し、端部は内傾して段を形成する。152～154の天井部は低く、わずかに丸みを持つ。口縁部は外反し、口縁端部は強く内傾して浅く窪む。天井部との境目は沈線が廻る。155・156の天井部は低く平らである。口縁部は外傾し、端部を丸く収める。口縁部との境目は、わずかに角を持つ程度である。156は口縁端部内面に段を有する。148・149はＴＫ47型式、150・151はＭＴ15型式、152～154はＴＫ10型式、155・156はＭＴ85型式に位置付けられる。

157～165は杯身である。157～159の口縁端部は内傾して窪む。受け部は短く平らで、体部との境目が沈線状に窪む。体部は丸い。157の受け部には、成形時の工具痕が残る。160の口縁部は内傾し、端部は丸みを帯び、端部内面は浅く窪む。受け部は長く平らである。161・162は底部が平らで、やや深手である。口縁部は内傾しながら立ち上がり、口縁端部を丸く収める。161は受け部上面に胎土が溶着しており、重ね焼きの痕跡とみられる。163～165は器高が低く、底部が丸味を帯びる。口縁部は短く内傾し、端部を丸く収める。受け部は短く上向く。157～159はＴＫ47型式、160はＭＴ15型式、161・162はＴＫ10型式、163～165はＭＴ85型式と考えられる。

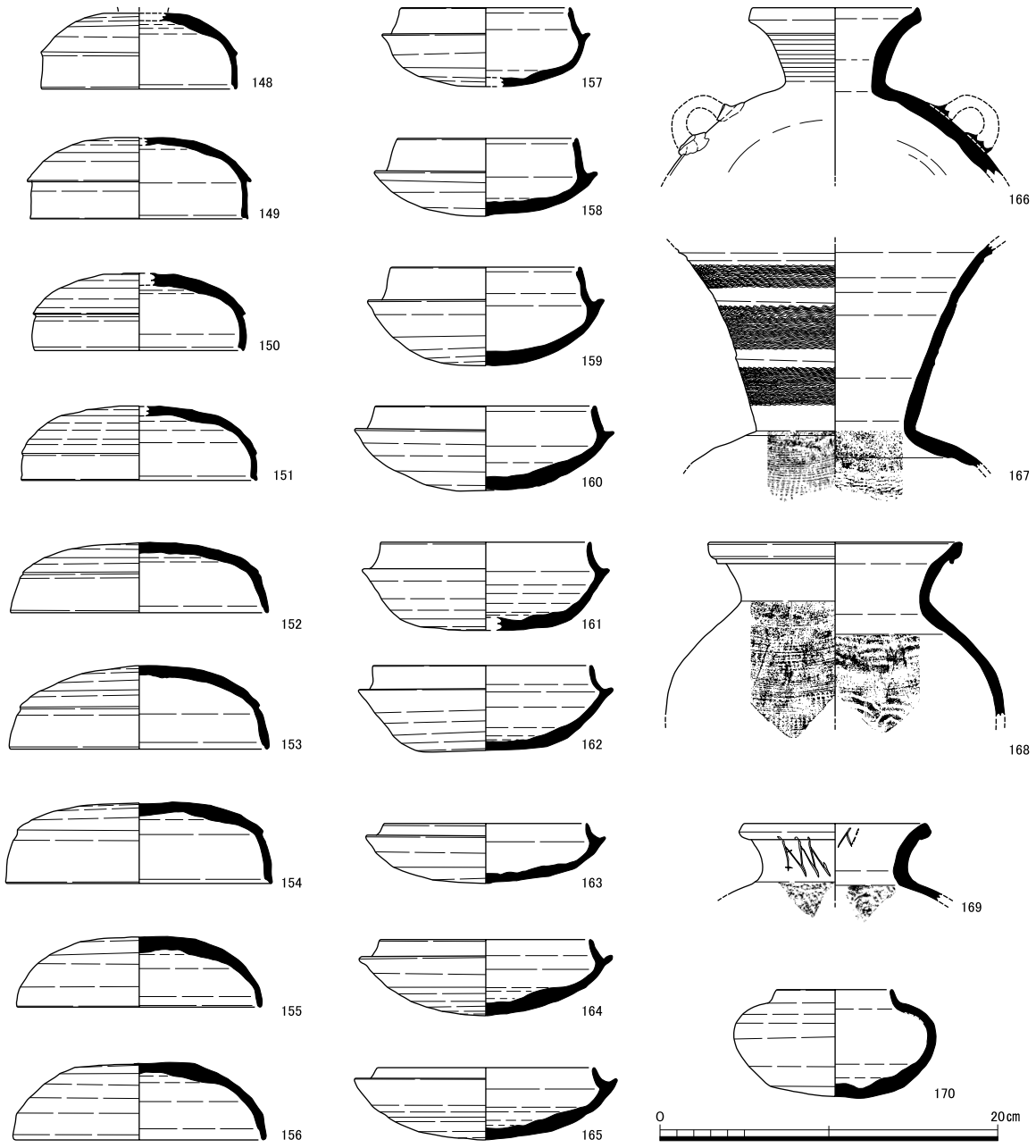


図22　流路1100東岸出土土器実測図１（１：４）

166は提瓶である。体部は縦方向の回転ナデで作る。体部に平らな粘土を補充した痕跡が残る。口縁部外面にカキ目調整、肩部に半環状の把手を貼り付ける。肩部付近の器形は丸味を帯びる。ＭＴ15型式と考えられる。

167は広口壷である。窄まった頸部から口縁部が大きく外反する。口縁部外面は低い突線と櫛描波状文が交互に３段分配置される。ＴＫ208型式と考えられる。

168は口縁部の短い広口壷である。口縁端部外面が玉縁状に肥厚し、その直下に細い垂下突帯が廻る。ＴＫ47型式とみられる。

169は広口壷である。口縁部外面は端部を外方へ丸める。口縁部内外面にジグザグの線刻を施文する。ＴＫ10型式からＭＴ85型式と考えられる。

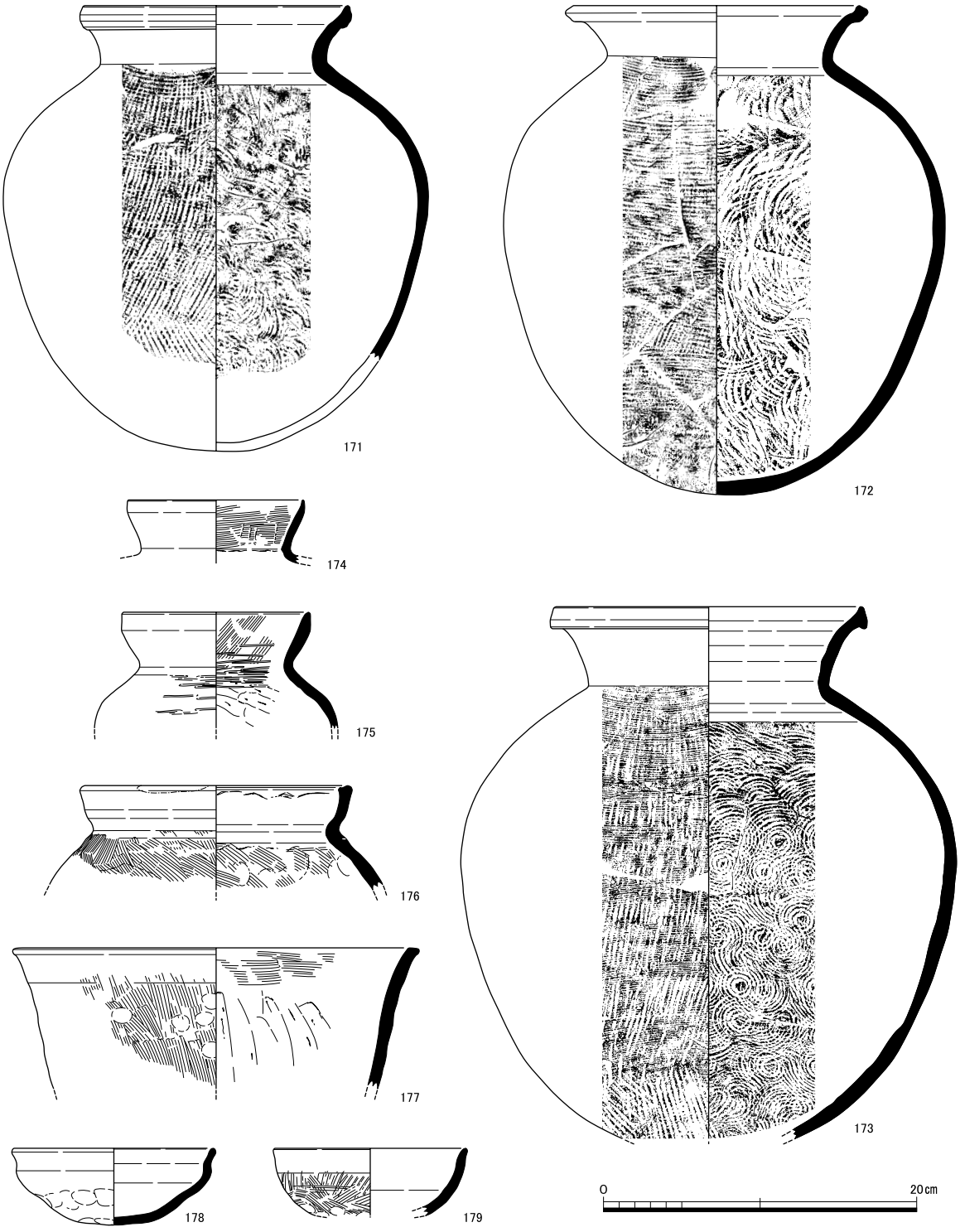


図23　流路1100東岸出土土器実測図２（１：４）

170は有蓋短頸壷である。底部外面をケズリ調整する。口縁部はわずかに内頸し、短く上方へ立ち上がる。頸部周りに重ね焼きの痕跡である粘土の付着と、自然釉が円形になって残る。ＴＫ10型式に位置付けられる。

171～173は甕である。いずれも体部上半に最大径が位置し、短く外反する口縁部が付く。171・173の口縁端部は上方へ摘み上げるが、172は端部が短く外反したのち上方へ開く。ＴＫ10型式と

考えられる。

流路1100東岸出土土師器（図23） 174・175は小型丸底壷である。端部を上方へ摘み上げる。175は174より口縁部外面が肥厚し、内外面に細かいミガキ調整を行う。

176は口縁部内外面を２段のナデ調整し、外面をハケ調整する甕である。内湾した体部から、口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部は内傾して窪む。端部内面を内側へ摘み出す器形を呈する。

177は大きく外反する口縁部を持つ甑である。口縁部内面から端部にかけて焦げ痕が残る。

178は鉢である。口縁部をヨコナデし、外面下部はオサエ調整を行う。磨滅が著しい。

179は椀形高杯の杯部である。外面下部のハケ調整は、縦・横・斜め方向から施す。

174・175は古墳時代初頭の庄内式土器、176・178・179はＴＫ47型式併行、177はＭＴ85型式併行と考えられる。

３）平安時代中期末から後期初頭の遺物（付表２）

溝1000出土土器（図24、図版79） 180～184は口径9.8～10.4㎝の皿Ａである。皿Ａは口縁部を外方に引き出し、口縁端部を上方へ摘み上げる器形である。185～192は皿Ｎで、口径10.0～10.1㎝（185・186）と、口径13.6～16.6㎝（187～192）の２群に分かれる。皿Ｎは口縁部を外反させ、口縁端部を外側に引き出す器形である。185は外面に粘土紐の痕跡が残る。183・186・188・189は胎土に径１㎜以下の橙色粒が少量混じる。187・191は外面にハケメ調整痕、192は内外面にハケメ調整痕が残る。いずれも溝1000の土器溜り１から出土した。土師器皿以外は出土していない。京都Ⅳ期中段階から新段階に相当する。

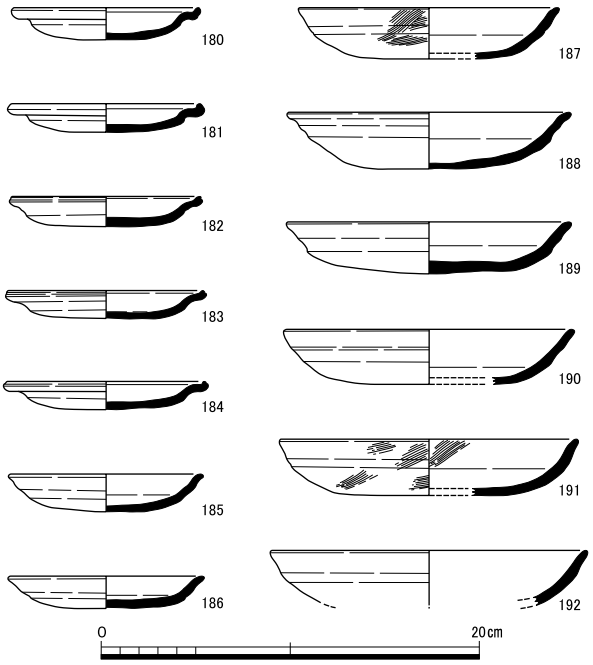


図24　溝1000出土土器実測図（１：４）

４）平安時代後期中葉から鎌倉時代前期の遺物（付表２）

井戸620出土土器（図25、図版79） 193～199は土師器皿である。193～196は小型の皿Ｎで、口径は8.8～9.8㎝を測る。195は内面に漆が付着する。漆は口縁端部付近まで１～３㎜の厚さで付着し、下部に行くほど厚みが増す。一部気泡が認められる。刷毛などで塗られたものではなく、容器として使用されたとみられる。口縁端部に油煙痕が認められ、漆の上に付着することから、後に灯明皿に転用された。197～199は口径14.0～15.7㎝の皿Ｎ大である。器形は、口縁部外面を２段にナデ調整し、口縁端部を上方へ立ち上げる。197・198は内面に油煙が付着する。200は灰釉陶器の片口皿である。口縁端部の１箇所を外方に引き出し、外面からオサエ調整して片口部分を形作

る。底面の最終調整は回転ケズリで、外面下部から一連の工程で行う。内面は施釉されているが、底面には自然釉が発生している。201は山茶椀の小皿である。底面はヘラ切りのち貼り付け高台で、接地面に焼成時に敷いた藁の痕跡が残るが、なで消されていて不明瞭になっている。内面下部が平滑になっており、使用痕とみられる。202は白磁椀である。口縁部が大きく広がり、口縁部外面が玉縁状にわずかに肥厚する。203は白磁椀底部で、内面から外面に透明釉を掛ける。内面下部に沈線が廻る。その他、土師器鉢、須恵器鉢、瓦質土器椀の小片が出土した。時期は京都Ⅴ期中段階から新段階である。

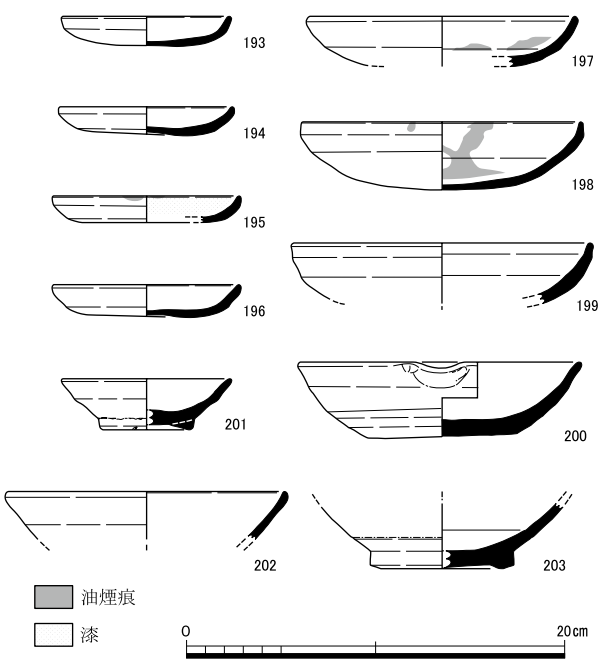


図25　井戸620出土土器実測図（１：４）

溝900出土土器（図26、図版27・28・80）　204・205は土師器皿Acのいわゆるコースター形を呈する。底面は平ら、口縁部は上方に立ち上げ、端部は内側に折り曲げる。皿Nは口径8.3～9.5㎝（206～216）、口径10.0～11.0㎝（217～230）、口径11.5～13.7㎝（231～235）、口径14.2～15.3㎝（236～241）の４群に分かれる。口縁端部の断面形状は三角形になるものが多い。207は内外面が一部薄く剥離しており、使用痕とみられる。208・209は底面に粘土接合痕が明瞭に残る。210は外面の３分の１に偏って煤が付着する。211は底面に径１～２㎜の粘土粒が少量付着する。216・224・228・230は底面中央がわずかに窪む。220の見込みには、一辺７～10㎜角の白色化した部分が３箇所あり、目跡や石灰のような塊が付着する（図26）。香などを焚いた痕跡の可能性が高い。223・225は口縁端部で点状の油煙痕を確認した。224は胎土に空気が含まれていたためか、内面に長さ約１㎝程度の窪みが生じている。５～10㎜の大きな礫を少量含む。240の見込みには、径１～３㎜の点状油煙痕が密集または散在した状態で付着している。燈明皿とみられるが、香炉のような使用も考えられる。外面にも油煙痕や煤が付着する。241の胎土には、直径２～５㎜の白色粘土の粒が少量含まれる。口縁部内外面のヨコナデ痕が筋状に残る。242・243は口径が20㎝を超える大型皿である。242は丁寧なナデ調整で作られており、器厚が最大１㎝と分厚い。243は底面全体が窪む。緩やかに大きく広がる口縁を持つ器形で、口縁端部は平坦に整える。外面は使用のためか、黒褐色化している。244は土師器高台付皿の高台部分である。内面に煤が付着する。外面はナデによる凹凸がある。接地面は成形時のナデ痕

図26　溝900出土白色塊付着土器（220）

と使用痕とみられる磨滅が認められる。245は土師器椀である。外面下部に成形時の粘土皺が残る。内面から口縁端部外面に油煙痕が認められる。吉備系である。246は土師器鉢で、外面に２～３㎝幅の粘土紐接合痕が明瞭に残る。内面は丁寧なナデ調整で、所々に爪痕や工具先端痕などが残る247～254は白色土器である。247は高台付皿で、轆轤成形のち高台を貼り付ける。外面は丁寧になでるが、内面の調整は粗い。内面中央が著しく窪む。内外面黒色化し、外面は焼成時、内面は使用痕で煤によるものとみられる。248～250は轆轤成形で底部を回転糸切りした皿である。250は248・249よりも口縁部が長く、大きく広がる。外面に工具痕や粘土塊が付着しているなど、前者２個体よりも作りが粗雑である。251は轆轤成形皿で、底面回転糸切りである。見込み周辺をめぐるように油煙痕があり、外面のほぼ全面が油煙及び煤が付着する。油煙痕は１～５㎜の点や水滴形である。252は高台が付く底部から屈曲して大きく外反する器形を持つ杯である。253・254は白色土器高杯脚部である。杯部は欠損、中央を指で丸く窪ませる。253は脚部との接合部分に粘土を補充し、段を形成する。脚部外面は時計回りに上から下へと丁寧に13面分の面取りを行う。脚裾部内面の孔周辺には心棒作りで使用された工具痕とみられる円形の沈線が廻る。254の脚部の面取りは、時計回りに上から下へ15面行われている。面取り幅は不揃いで、長さもまちまちである。作りが粗雑なため、脚部の棒を抜いた際にできた粘土バリはそのまま遺存している。255は須恵器鉢である。口縁端部内側を上方へ摘み上げる。外面に縦方向の工具痕が残る。口縁部外面に重ね焼きによる黒色化が認められる。口縁端部から約３㎝までの内面が、使用痕のため著しく磨滅している。256は須恵器壷口縁である。口縁端部の断面形状は三角形を呈する。色調は暗赤褐色である。257・258は尾張型の山茶椀小皿である。257は見込みが平滑で使用痕とみられる。内面には自然釉が発生している。258は回転糸切りの平底で、257の様な高台付と共伴する。259は瓦質土器小椀で、端部がわずかに外反する。接地面は成形台または台から外した時の板状痕が残る。内面は約0.5㎜幅のミガキ調整を行い、見込みに連続長楕円の暗文を施す。260・261は瓦質土器椀である。260には、高さのある断面三角形の高台が貼り付けられている。口縁端部は内湾する。内面は細かいミガキ調整で、見込みに連結輪状の暗文を施す。261の見込みには斜格子暗文、口縁部外面に等間隔のミガキを施す。外面に強いナデによる段が付く。262・263は見込みにジグザク状の暗文を描く。264は瓦質土器の脚付羽釜である。鍔より下部に煤、内面口縁直下に焦げ痕が付着する。端部は平坦で、鍔端部は上方に摘み上げる。265・266は瓦質土器羽釜である。266は口径29.8㎝の大型品である。267は瓦質土器鍋である。268は常滑焼の甕口縁部片である。口縁部が丸味を帯びながら外反する。口縁端部内面に沈線状の段を持つ。口縁部内面に釉薬を塗る。外面は流しかけとみられるが詳細不明である。269は常滑焼とみられる赤褐色を呈する壷である。大きく張る肩部から頸部が窄まり、口縁部が大きく開く。270は玉縁口縁の白磁椀である。271は口縁端部が外方する白磁椀である。内面には沈線とその下に櫛描の文様を配置し、外面には上下方向のジグザク文を描く。272は271の同形で、文様を持たない。273は見込みに断面「レ」字状の沈線と、口縁端部外面に滴水状の縁が付く。高台の外面にケズリ終点の痕跡が残る。274は白磁の有蓋水注口縁部片である。外面に太さの異なる沈線が３本（0.1㎝、中央が0.05㎝）施文される。口縁端部は釉を掻き落とす。口縁部は垂

直に立ち上がり、端部は三角形状に尖る。275は底部が欠損した青磁椀である。緑灰黄色の釉薬を外面下部と高台以外に掛ける。外面は約11本の櫛目を持つ工具で縦方向に施文され、内面は曲線やジグザク文を陰刻する。口縁部内面に２㎜幅の沈線が廻る。同安窯系である。276は白磁皿である。体部から外反する変化点の内面に、沈線が廻る。277は黄褐釉の掛かった白磁皿底部片で、底部から緩やかに内湾しながら立ち上がり、中央付近に沈線が入る。278は北宋で作られたとみられる青白磁椀底部片である。器厚が薄く、器高が高い高台が付く。底部中央のみ釉剥ぎする。接地面は磨滅している。11世紀後半から12世紀前半とみられる。

土師器の時期は京都Ⅴ期中段階からⅥ期古段階で、京都Ⅴ期新段階が中心となる。最上層の埋土から出土した山茶椀は、13世紀前半に属することから、溝が最終的に埋没した時期はこの時期と考えられる。

土坑516出土土器（図版28） 279～284は土師器皿Ｎで、口径14.6～14.4㎝である。279は上面観が楕円形に歪む。280は見込みに１～10㎜の使用痕とみられる黒色斑点が付く。この遺構からは、皿Ｎの大型品のみが出土した。時期は京都Ⅴ期新段階である。

井戸830出土土器（図版29） 285・286は口縁が直立し、口縁端部を上方へ立ち上げる土師器皿Acである。いわゆるコースター形を呈する。皿Ｎは口径8.8～9.8㎝（287～295）、口径10.0～11.1㎝（296～306）、口径13.7～15.7㎝（307～316）の３群に分かれる。この遺構から出土した皿Ｎには、油煙や煤が付着したもの、器面が黒色化したものが多い。油煙痕には形状に種類が認められた。293は見込みにしみ状、296は外面に筋状のものである。黒色化するものは、全面（298）、３分の２（304）、半分（301）などがある。油煙や煤が付着していることから、黒色化は焼成時のものではなく、使用時に器面の色調が変化した可能性がある。288は成形時の歪みのため、上面観が楕円形を呈する。295・316の胎土は白色を呈する。314は見込みが緩やかに窪む。見込み中央の器厚も分厚く、そのためか底部が凸底状を呈する。313の底部には、幅7.9㎝の成形台の痕跡が残る。317・318は白色土器の高台付皿である。318は口縁端部を外反させながら、外側へ引き出す。319は瓦質土器皿で、内面に細かいミガキ調整が施されている。口縁端部内面に段状の沈線がある。320は白磁椀である。内湾しながら立ち上がり、短い口縁端部が外反する。321は白磁皿底部片である。高台を丁寧に削り出す。接地面が磨滅している。その他の遺物には、須恵器鉢、瓦質土器盤の破片が少量出土した。時期は京都Ⅴ期新段階である。

土坑335出土土器（図版29） 322～330は土師器皿Ｎで、口径8.4～8.8㎝の小型である。323は底面から口縁部外面にかけて半周する、粘土接合痕が認められる。331は大和型の瓦質土器椀である。口縁端部内面に段化した沈線が一周する。内面は細かいミガキ調整が密に行われている。332は瓦質土器皿である。短い口縁端部を外方に引き出し、口縁端部内面を平坦に整える。底部には粘土接合痕が残る。見込みには、棒状工具によるジグザグ状の暗文が施されている。内面の口縁立ち上がり部分に、工具が器面に当たって付いた点状文様が認められる。333は口縁端部外面が玉縁になる白磁椀である。334は青磁椀の口縁部片で、内面に陰刻花文を施す。龍泉窯系である。その他、瓦質土器鍋とみられる小片が少量出土した。京都Ⅵ期古段階に相当する。

土坑518出土土器（図版29） 335はいわゆるコースター形の土師器皿Acである。白色を呈する。336～343は口径8.2～9.2㎝、344は口径10.4㎝の土師器皿Nである。345～351は口径12.2～13.9㎝の皿Nである。348は見込み周辺のオサエ痕や斜め右上がりのヨコナデ痕が明瞭に残る。その他に、須恵器鉢、瓦質土器椀、石鍋片がわずかに出土した。時期は京都Ⅵ期古段階から中段階である。

土坑616出土土器（図版30・79） 352は土師器皿Acのいわゆるコースター形を呈する。色調は白色を呈し、底面中央がわずかに盛り上がって窪む。口縁端部は直立する部分と、内面に巻き込む部分とがある。皿Nは口径8.2～9.4㎝（353～361）、口径12.0～12.9㎝（363～373）の２群に分かれる。354・361は口縁端部内面から外面にかけて油煙痕が付着する。357・368は底面に板状工具痕が認められる。361は口縁外面のヨコナデが強く、大きく外反する。362は土師器皿Ｓである。口縁部が肥厚し、深手の器高３㎝を測る。363は口縁内外面のナデが強いため、器壁に凹凸が生じる。366は全体的に歪んでおり、そのためか器高が1.9㎝と低くなっている。口縁端部全周に油煙痕が認められ、内面は部分的に筋状になっている。比熱のためか、内面に薄い剥離痕が多い。370は底面に煤が付着している。

374は須恵器鉢で、口縁端部には一部を外側へ引き出して作られた片口が付く。口縁外面に自然釉が発生し、色調が黒色化を呈する。375は瓦質土器小椀である。断面三角形の低い高台を貼り付ける。口縁部内面には粗いミガキ調整を行い、見込みに楕円様の不定形な暗文が施されている。口縁端部内面に段化した沈線を引く。376・377は瓦質土器鍋である。内湾する体部に、外屈したのち上方へ立ち上がる口縁部が付く。外面に煤、内面下部に焦げ痕が付着している。376は口縁端部が平らであるが、377は口縁端部が窪み、端部外面が突出する。378は白色土器高杯脚部である。心棒作りで、棒を抜いた際の粘土塊が下部の孔周辺に残る。脚部外面は、幅５～６㎜の縦方向のケズリで、19面の面取りを行う。379は白色土器高台付皿の高台部分である。接地面は回転糸切りで、その他は回転ナデである。見込み中央と高台中央に三角錐状の窪みがある。皿部は欠損している。380は白磁椀である。口縁端部外面が玉縁状に肥厚する。381は白磁皿底部片である。平底から緩やかに立ち上がる器形とみられる。高台はわずかに内側を削り取って形作るが、浅い凹底状である。接地面から外面下部の透明釉を掻き落とす。見込みに流麗な陰刻花文が描かれている。器壁が２㎜程度と非常に薄い。定窯系白磁とみられる。382は鏑蓮弁を外面に陽刻した青磁椀口縁部片である。花弁中央の稜線を際立たせる。383は龍泉窯系の青磁椀である。見込みに花文、口縁部立ち上がり部分の内面に草花文を陰刻する。内外面に釉を施す。接地面にも釉がかかるが、掻き落としていない。接地面は使用のため磨滅し、平坦になっている。その他の土器は、土師器台付皿、瓦質土器盤、白磁壷、石鍋が出土している。時期は京都Ⅵ期中段階から新段階に相当する。381の定窯系白磁椀のみ、京都Ⅳ期に相当することから、伝世品または後世のこの遺構に破片が混入したとみられる。

土坑721出土土器（図版30） 384～388は口径8.6～9.0㎝の土師器皿Nである。389・390は口径14.1㎝の皿Nの大型品である。391は白磁皿である。釉調は黄褐色を呈する。底部から大きく広

がり、口縁部が外反する。口縁部の変化点内面には沈線が回る。口縁端部はさらに短く外反する。その他に、土師器鉢、瓦質土器椀の小片がある。時期は京都Ⅵ期新段階である。

井戸1210出土土器（図版30） 392は土師器皿Acである。いわゆるコースター形であるが、底面から口縁部にかけて緩やかに立ち上がり、口縁部が内屈する。393～398は口径8.0～8.7㎝の土師器皿Nである。393・397は白色を呈する。397は口縁端部内外面に油煙が付着する。399は土師器皿Sである。口径11.9㎝、器高3.1㎝を測る。400～403は皿Nで、口径は12.2～13.4㎝である。大きく開く口縁部に、口縁端部が短く上方へ立ち上がる。404は須恵器鉢である。使用痕は認められない。405は上向く鍔を貼り付けた瓦質土器羽釜である。器形は球形を呈する。鍔下面から外面下部には煤が付着する。口縁部を除く内面には、焦げ痕跡が明瞭に残る。406は瓦質土器鍋である。口縁部が外側へ屈曲し、端部を上方へ立ち上げる。外面全面に煤が付着する。407・408は白磁椀である。407は口縁端部が丸く収まる。同外面は玉縁状に肥厚する。釉に気泡が目立つ。408は口縁端部外面がわずかに肥厚する。この部分に溶着痕が残る。口縁内面に沈線状の段が廻る。時期は京都Ⅵ期新段階で、井戸の使用が収束した頃の遺物を掲載した。

5）鎌倉時代後期以降の遺物（付表2）

土坑735出土土器（図27） 409は土師器皿N小である。器形が歪む。口縁端部内外面に油煙が付着する。410は土師器皿Ｓｈで、口径7.9㎝である。口縁外面がわずかに肥厚し、底部が少し窪む。411は皿N大で、全体的に歪む。白色から橙色を呈し、色むらがある。412は橙色を呈する皿Nの大である。口縁端部を上方へ摘み上げる。413は瓦質土器鍋である。緩やかに湾曲する丸底から、体部はほぼ直立し、口縁部は外屈し、端部を上方へ引き上げる。内面は丁寧な横方向のハケメ、外面は横方向のナデ、底部はケズリ調整である。見込みに焦げ痕、口縁部外面から外面下部にかけて煤が付着する。時期は京都Ⅶ期中段階から新段階である。

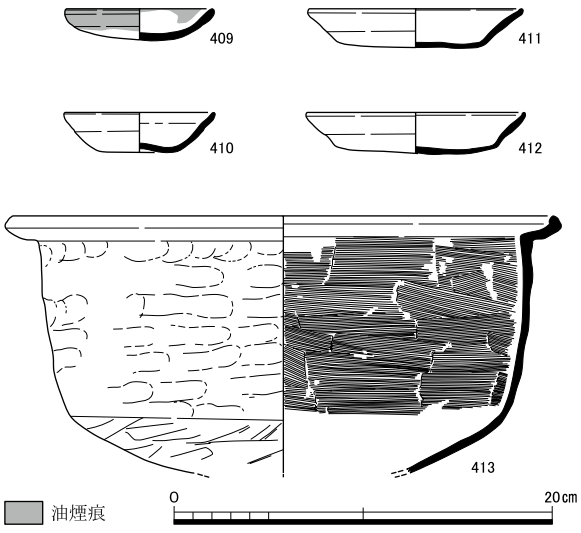


図27　土坑735出土土器実測図（１：４）

溝840出土土器（図版31） 414・415はコースター形の土師器皿Acである。口径4.4㎝と小型化したもので、白色を呈する。口縁部がわずかに直立する。416は口径7.5㎝の皿N小である。全体的に器厚が一定していない。口縁端部はナデ調整されているが、凹凸が著しい。器面は空気抜けて剥離が生じていた。見込み周辺を強くなで、底部中央を窪ませるが内面には影響していない。にぶい橙色を呈する。417は口径7.6㎝の皿Ｓ小である。口縁端部を強くなでる。418・419は皿Nの大である。口径10.9㎝と口径11.3㎝を測る。420・421は皿Ｓである。前者は口径11.9㎝、後者は13.8㎝

である。422は白色土器の台付皿である。皿部は回転ナデで成形され、底面を回転糸切りする。高台は高さ約1.3㎝の粘土紐を丁寧に貼り付ける。接合部を強くなでるため、内面の皿部との接点が大きく窪む。423は白色土器の器形を呈する土師器高台付皿である。回転ナデで大きく開く皿を作って、底部を静止糸切りする。内外面は強いナデ調整のため、緩やかな段状となる。見込みは特に中央の直径２㎝が窪んでおり、器厚も薄くなっている。外面下部から底部にかけて、ケズリ調整した後、高台を貼り付ける。外面は部分的に油煙が付着し、内面は全面に油煙が付着する。424・425は土師器鉢である。器形は丸みを帯びた体部下半から、大きく開きながら口縁部が立ち上がる。424は口縁端部を外方へ摘み出し、丸く収める。底部は欠損している。外面は約2.5㎝幅の粘土紐を接合した痕跡が明瞭に残る。外面下部は板状工具によるナデであるが、一部ケズリ状になっている部分もある。425は底部に脚を３つに貼り付ける。内外面を丁寧になでるが、外面に幅2.5～３㎝の粘土紐接合痕が残る。見込みと底面に板状工具によるナデ痕が認められる。見込みから内面中央部にかけて油煙痕が帯状に付着する。426は須恵器の鉢である。口縁部外面に断面三角形の縁が一周する。427は山茶椀の鉢である。口縁端部をなでて、外反させる。内面が平滑になっており、使用痕とみられる。428は瓦質土器椀で、内面はナデのち暗文に近いミガキを施す。429は大きく開く瓦質土器椀である。内面に粗いミガキを施す。430は輪花形の瓦質土器椀である。外面をなでたのち、口縁外面を抑えて窪ませ、花弁を表す。内面を磨く。431はミニチュア土器の羽釜である。丸みを帯びた体部が口縁部で内湾する。口縁端部内面には段差が付く。貼り付けられた鍔の端部は、上方へ摘み上がる。432は瓦質土器羽釜である。体部は丸く内湾する。鍔はほぼ平坦、口縁端部も平坦でわずかに窪む。鍔下面まで煤が付着、内面は下部に焦げ痕が認められる。口縁端部内面に粘土接合痕が残る。433は体部がまっすぐに立ち上がる器形を呈する瓦質土器羽釜である。口縁端部内面に強いナデによる窪みがある。外面下部に煤が付着する。434・435は瓦質土器鍋である。434は緩やかに外傾しながら、立ち上がる。底部と体部の境目に接合痕が沈線状に残る。435は体部が直立する。いずれも頸部で、外方に屈曲し、口縁端部が短く立ち上がる。端面は外傾し、わずかに窪む。口縁部外面直下まで煤が付着する。436は備前焼の擂鉢である。口縁端部を内側へ摘み出す。端面は平坦。内面に４本の櫛先で擦り目を下から上に向かってつける。内面に自然釉が発生している。437は焼締陶器鉢である。口縁部をわずかに外反させる。端部は丸い。内面下部は使用のため、磨滅し、平滑になっている。外面の口縁端部には文様のようにユビ跡をつけた部分や、下部に沈線文のようなものが認められるが、遺存部分が少なく、詳細不明である。438は白磁椀である。緩やかに立ち上がり、口縁部が外反する。外面の屈曲部には沈線状の段が付く。口縁部直下に浅い沈線が回る。口縁部内面に釉溜りと、胎土内の空気がはぜた際の剥離痕が認められ、外面は細かい貫入が入る。439は白磁皿の底部片である。見込みに「レ」字状の沈線が廻る。底面は釉を剥ぐ。440・441は鎬蓮弁の青磁椀である。いずれも龍泉窯系とみられる。440は周辺を彫り下げて花弁を表す。花弁幅は狭く、先端が尖る。暗緑色の釉調である。441は花弁周りを沈線状に彫り下げる。花弁幅が広く、中央に稜を持ち、先端部が緩やかに尖る。黄緑褐色の釉である。442は青磁の鉢である。口縁端部が内外に引き出されており、断面が「Ｔ」字に近い形を呈する。端面は平らで、２箇所に

貝目が残る。灰白色の釉薬を塗布する。443は焼締陶器壷の肩部である。体部最大径が11㎝程度の小壷で、頸部が短く立ち上がる。肩部に２本の沈線が回り、３本目は途中で途切れる。外面に自然釉が発生している。輸入陶器とみられる。444は滑石製の石鍋口縁部片である。外面は横方向の成形時の細かいケズリ痕が認められ、鍔上面にも同様の痕跡が残る。それら以外は平滑であるが、鍔端面は細かい擦痕が多い。外面には煤が厚く付着する。内面から口縁端部は、使用痕とみられる擦痕が細かい成形痕と混在している。その他の土器類には、瓦質土器火鉢、焼締陶器甕、輸入陶器緑釉盤などがあり、いずれも小破片である。時期は京都Ⅶ期中段階から新段階とみられる。436は14世紀後半に該当し、溝840を埋め立てた最終埋土の砂礫層から出土した。溝は室町時代前期頃には埋められていたとみられる。

溝440出土土器（図28）　445～447は土師器皿である。445・446は皿Ｎ、447は皿Ｓである。446は口縁端部内面から口縁外面にかけて、油煙痕が広く付着する。448は須恵器鉢である。口縁端部を上方へ摘み上げ、端部外面を外方へ引き出す。内面下部が平滑に磨滅している。449は瓦質土器鍋で、外面に煤が付着する。口縁部を外屈させ、内湾させながら外方へ立ち上げ、端部を上方へ摘み上げる。口縁部外面に粘土接合痕と、指頭圧痕が明瞭に残る。450は瓦質土器羽釜の口縁部である。内湾させながら立ち上げ、口縁端部を内側へ巻き込みながら、摘み出す。口縁部端面は平坦で

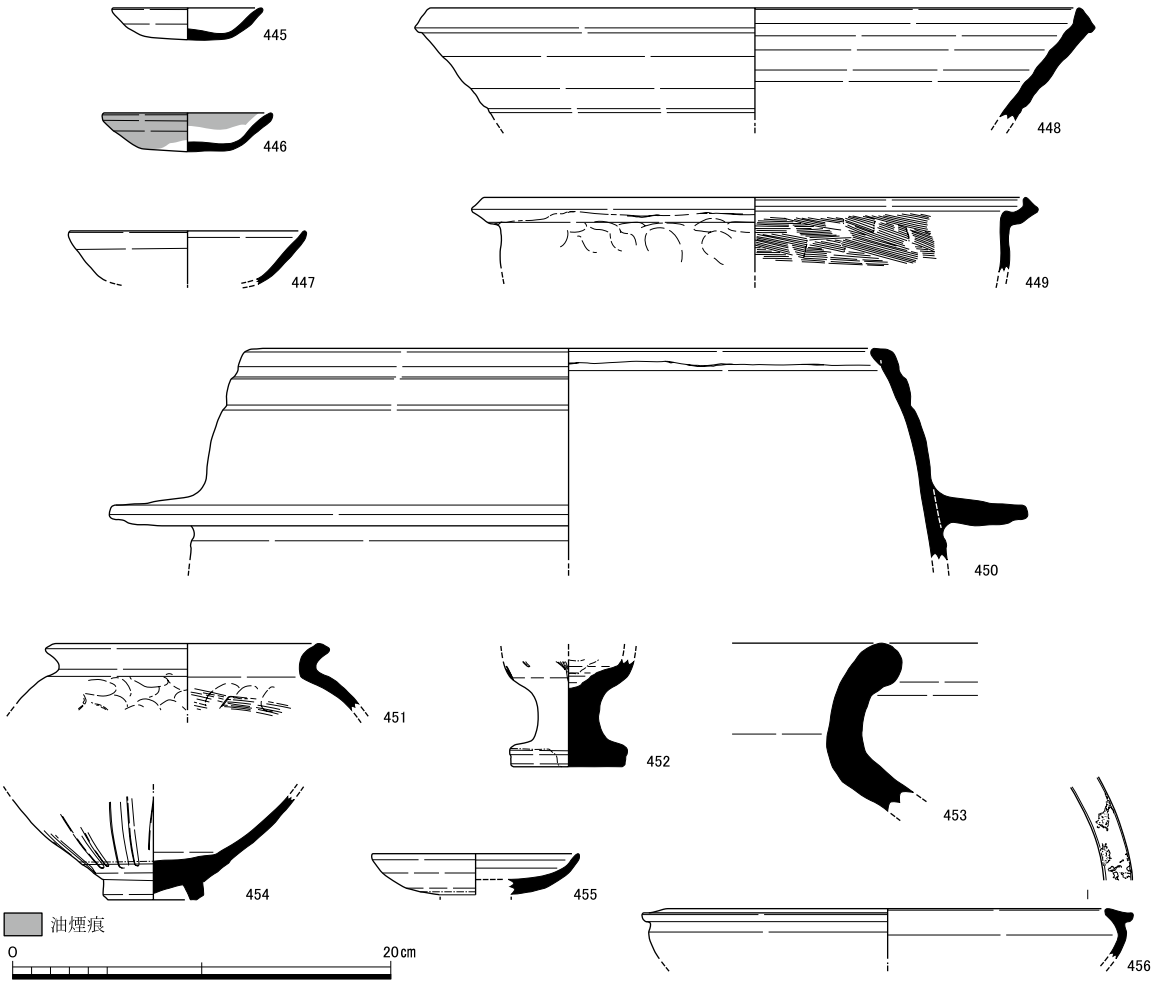


図28　溝440出土土器実測図（１：４）

ある。鍔部の貼り付け時のナデが、鍔下部の付け根に明瞭に残る。鍔上面は平坦、端部は丸く、下部端部近くは沈線状に窪みが一周する。鍔下部以下に煤が付着している。内面中程より下に直径２～10㎜の不正円形な剥離痕が多く認められる。451は瓦質土器壷である。丸く張る胴部に、短く外反する口縁部が付く。内面はナデやハケ調整、体部外面はオサエ調整である。452は古瀬戸の花瓶台部分である。底面は回転糸切り、回転ナデで作られている。体部外面に同心円状の陰刻が認められることから、植物文様が描かれていたと考えられる。外面に鉄釉を流しかけ、内面にも一部垂れる。453は備前焼の甕口縁部である。自然釉が口縁部内面と外面肩部に発生する。外反する口縁部外面を玉縁状に丸く成形する。454は黄褐色の釉薬がかかる青磁椀である。見込み周辺に沈線が廻る。外面には２本で１単位の沈線が間隔をあけて配置される。沈線は幅３～４㎜と約６㎜幅のものが組み合わされて施文されている。高台は回転ケズリで、接地面は磨滅している。455は湾曲しながら立ち上がる白磁皿である。高台部分は欠損している。口縁端部内面に、幅６㎜の凹線が廻る。胎土が付着する。外面は気泡のため、釉薬面に小さな穴が多く開いている。456は輸入陶器鉢である。肩部で内屈し、口縁端部を外方へ摘み出す器形を呈する。端部はわずかに上方に向く。口縁部の平らな面に貝目がまだら状に付着する。内外面に鉄釉薬を塗る。時期は京都Ⅶ期新段階からⅧ期古段階に相当する。

６）輸入陶磁器（図29、図版81、付表２）

ここでは、後世の遺構に混入していた土器の中でも特徴のある輸入陶磁器（458～462）を図示した。457と463の土器については、当該期の遺構から出土しているが、輸入陶磁器であることから、ここにまとめて掲載した。

457は白磁椀の口縁部片である。器形は大きく外反する。器厚は２㎜と薄く、口縁端部は尖る。内面には、陽刻された蓮弁の上部に、一筆描きの雷文を彫る。蓮弁は先端が丸く収まるものと尖る

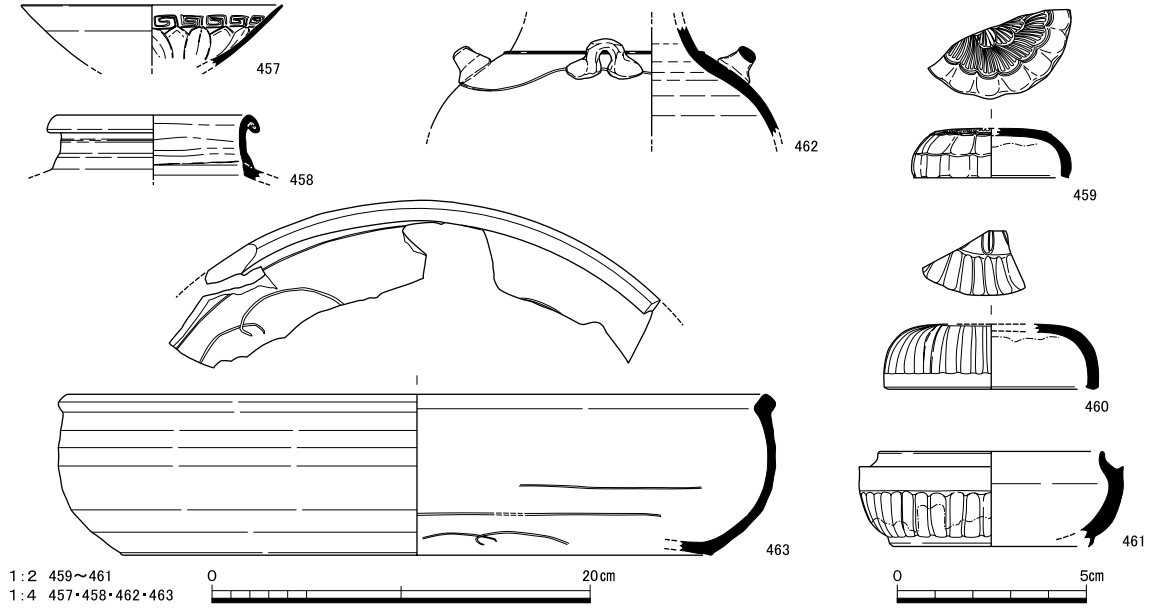


図29　輸入陶磁器実測図（１：２、１：４）

ものとが、交互また前後に配置されている。緑灰色を帯びた釉薬をかける。458は白磁四耳壷の口縁部である。回転ナデ調整であるが、頸部内面はヘラ状工具でケズリ調整しているとみられる。口縁端部は外側に粘土を２回折り込んで調整する。459は青白磁合子蓋である。成形型に胎土を押し付けて、花形を取り、最後に調整を兼ねて文様を彫り直す。中央は一重３弁以上、その周辺を三重７弁以上の花弁が廻る。内面上部に透明釉、外面に青白色の釉薬を全面に掛ける。口縁端部に割れが生じていることから、釉薬が付着し、焼成後の蓋外しの際に一部割って外したとみられる。460は青白磁合子蓋で外面上部を型作り、外面下部は陽刻して花弁を表現する。口縁端部の釉薬は掻き落とす。461は青白磁合子身である。口縁端部は内傾させ、端部を上方へ摘み上げる。口縁部外面の受け部分は溝状に窪ませる。外面は釉薬を流し掛けている。462は輸入陶器四耳壷の肩部片である。丸く張った体部から、頸が窄まる。肩部に突帯が廻る。肩部に緩やかな波状沈線を施したのち、耳を貼り付ける。内外面に黄褐色の釉を掛ける。463は輸入陶器盤である。緩やかに窪む底部から、内湾しながら体部が立ち上がり、口縁部は短く外反する。見込みに連続円形文や沈線を線描きする。白化粧をしたのち、濃い緑色の釉薬をかける。底面には焼きむらが認められる。華南産である。457・461は土坑895、458は溝840、459・462は平安時代後期造成土、460は柱穴700、463は柱穴413から出土した。458は11世紀後半から12世紀後半、459～462は12世紀前半、457・463は13世紀後半とみられる。

７）墨書土器（図30、図版81、付表２）

墨書土器は４点出土した。文字が書かれたものは１点、習書が１点、絵が１点、墨痕のあるものが１点である。

464は土師器皿Ｎである。内外面はナデ調整、外面下部はオサエである。外面に顔とみられる表現が認められ、髪の毛、眉、目、耳が土器の中心から口縁端部までの範囲に描かれている。髪の毛や眉は一筆書きである。目は２本線の緩やかな弓形の中央に、丸い点で瞳を描く。耳は数本の線で、その外形や内耳などを表現する。半分以上が欠損しているため、全体の絵柄は不明であるが、土師器外面を顔に見立てて描いたとみられる。内面に墨痕は認められない。溝840の西側掘形から出土した。時期は京都Ⅴ期新段階～Ⅵ期古段階に相当する。鳥羽離宮跡第124次調査でも、外面に人面が墨書で描かれたほぼ同時期及び同法量の皿Ｎが出土している[3)]。絵の構成や筆のタッチは大きく異なり、鳥羽離宮跡出土のものが稚拙である。何らかの祭祀に使用されたと考えられる。

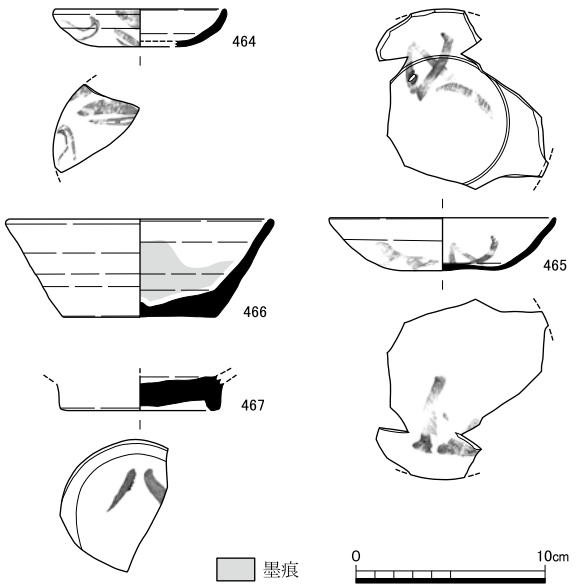


図30　墨書土器実測図（１：４）

465は土師器皿Ｓである。内外面に墨痕が認められる。特に内面は、筆先を慣らしたような「〆」字形の筆運びが認められることから、習書時に筆先を整えるために使用されたとみられる。外面の墨痕は、規則性などが見受けられないことから、偶然に付いたものとみられる。包含層とした中世耕作土から出土した。時期は京都Ⅷ期古段階である。

466は山茶椀の椀で、尾張産とみられる。回転糸切り痕を残す底部から、直線的に大きく広がる口縁部を持つ。口縁端部内面に、浅い沈線が一周する。内外面は回転ナデによる調整である。内面の底面から中程にかけて、墨痕が認められる。その付着のしかたから、磨った墨を入れる器として使用されたとみられる。内面以外で墨痕は認められない。石組1089から出土した。時期は鎌倉時代後期から室町時代前期である。

467は白磁椀の高台部分である。内外面及び接地面に釉が塗られている。接地面は磨滅が著しい。文字は、高台内側の中央上寄りに、「八」と書かれている。溝840の西側掘形から出土した。時期は平安時代後期である。

（３）瓦類

今回の調査では、遺物整理箱約150箱分の瓦類が出土した。瓦の種類は、軒瓦・鬼瓦・丸瓦・平瓦と刻印やヘラ記号を施した丸瓦・平瓦などである。軒瓦の内訳は、軒丸瓦が224点、軒平瓦が176点、総数400点である。鬼瓦の出土点数は11点、刻印押捺の丸瓦１点・平瓦３点、ヘラ記号施文の丸瓦６点・平瓦３点である。

なお、個々の軒瓦の詳細については、遺物観察表（付表３～５）に掲載した。観察表の記載は、第１期調査報告と異なる部分もあるが、今回の観察表中で改訂した。

１）軒瓦について（図版32～54・82～87、付表３・４）

ⅰ．軒瓦の出土遺構

軒丸瓦・軒平瓦の遺構別の出土数は、表４の通りである。

第１面２期遺構面の溝900から、軒丸瓦89点・軒平瓦69点が出土した。第１面１期遺構面の溝840から軒丸瓦25点・軒平瓦29点、その上層に当たる溝440から軒丸瓦17点・軒平瓦13点が出土した。これらの南北溝から出土した軒瓦が全体に占める割合は約６割で、今回の調査での大半の瓦が南北溝から出土した。

溝以外の遺構では、井戸1210が軒丸瓦12点・軒平瓦７点、井戸620が軒丸瓦４点・軒平瓦５点、他の遺構は５点以下と少ない。その他、包含層で軒丸瓦31点・軒平瓦27点が出土した。

ⅱ．瓦当文様の分類

軒丸瓦（図版32～42・82～85、付表３） 軒丸瓦は、瓦当文様によって分類すると112種175点、小片または文様が不明瞭なため型式が認定できないものが49点ある。

瓦当文様は、蓮華文と宝相華文・巴文に大別できる。

蓮華文は86種152点出土し、その内複弁蓮華文48種91点、単弁蓮華文38種57点、蓮華文４点に

分類できる。さらに、中房・蓮弁・間弁の形状、及び外区の有無などによって細分できる。

宝相華文は２種２点出土し、蓮弁形状によって二つに分類できる。

巴文は24種66点出土し、巴文の巻き込み方向によって右巻き巴文と、左巻き巴文に分けられ、さらに巴文の単位数、頭部・尾部の接続方法、及び外区の有無などによって分類できる。さらに笵の違いによって細分できる。

種類ごとの点数は、瓦20が９点、瓦74・89・96が５点、瓦52・92が４点で、他は１種３点以下と少ない。型式としては、播磨産複弁蓮華文瓦52～65が23点、山城産複弁蓮華文瓦16～20が17点、山城産巴文瓦88～107が36点とやや多い。

軒平瓦（図版43～54・85～87、付表４） 軒平瓦は、瓦当文様によって分類すると114種161点、小片または文様が不明瞭なため型式が認定できないものが15点ある。

瓦当文様は、唐草文・宝相華文・半裁花文・剣頭文・連巴文・雁行文・幾何学文・文字文に分類できる。

表４　軒瓦遺構別出土数量表

検出面	遺構	11世紀中葉	11世紀後葉		11世紀後葉～12世紀		12世紀代		13世紀代		時期不明	計
		軒平瓦	軒丸瓦	軒平瓦	軒丸瓦	軒平瓦	軒丸瓦	軒平瓦	軒丸瓦	軒平瓦	軒平瓦	
第1面2期	造成土		2		1		17	13			1	34
	溝900	1	3	3	4		82	65				158
	井戸620		1				3	5				9
	井戸830							1				1
	井戸888						3					3
	井戸1205							1				1
	井戸1210		2			3	10	4				19
	土坑616						1					1
	柵2						1					1
	柵3		1									1
	北東柱穴群		1	1			6	1				9
	南西柱穴群						1					1
	北西柱穴群						2					2
	北東土坑						1					1
	南東土坑					1						1
第1面1期	溝440		1	2			15	10	1		1	30
	溝840	1	2				23	21		3	4	54
	井戸1096						1					1
	土坑243							1				1
	土坑895							1				1
包含層			1	1	1		27	23	2	1	2	58
攪乱			1	1	1		6	4				13
計		2	15	8	7	4	199	150	3	4	8	400

表５　軒瓦分類別出土数量表

時 期	種 類	文 様	山 城	播 磨	丹 波	大 和	讃 岐	備 前	産地不明	計	
11世紀中葉	軒平瓦	内行唐草文	2							2	2
11世紀後葉	軒丸瓦	複弁蓮華文		7		5			1	13	15
		単弁蓮華文		1		1				2	
	軒平瓦	外行唐草文		3	1	1		2		7	8
		梵字文				1				1	
11世紀後葉～12世紀	軒丸瓦	複弁蓮華文		1	2				2	5	7
		単弁蓮華文							2	2	
	軒平瓦	外行唐草文		4						4	4
12世紀代	軒丸瓦	複弁蓮華文	21	49	2				1	73	199
		単弁蓮華文	30	14	3				5	52	
		蓮華文	2	2						4	
		宝相華文	2							2	
		珠文帯巴文	23	2						25	
		巴文	39							39	
		文様不明	3						1	4	
	軒平瓦	外行唐草文	26	54	12					92	150
		内行唐草文	6							6	
		偏行唐草文	8	2	3					13	
		唐草文		5						5	
		宝相華文		10						10	
		半裁花文	1				1			2	
		雁巴文	1							1	
		連巴文	2	1						3	
		剣巴文	3							3	
		剣頭文	14							14	
		斜格子文	1							1	
13世紀代	軒丸瓦	単弁蓮華文							1	1	3
		珠文帯巴文	1						1	2	
	軒平瓦	外行唐草文							2	2	4
		内行唐草文							1	1	
		宝相華文							1	1	
時期不明	軒平瓦	外行唐草文							4	4	8
		唐草文							2	2	
		宝相華文							1	1	
		斜格子文							1	1	
計			185	155	23	8	1	2	26	400	

唐草文は91種138点出土し、外行唐草文・内行唐草文・偏行唐草文などに分類できる。さらに、中心文の形・有無、唐草の形状、及び外区の有無・形状などによって細分できる。

宝相華文は５種12点出土し、華文の形状によって細分できる。半裁花文は２種２点出土し、花文の形状によって二つに分類できる。

剣頭文は６種14点出土し、連巴文は３種３点出土した。いずれも陽刻のものと陰刻のものに分かれ、形状によって細分できる。剣頭文・巴文と雁行文や蓮華文を組み合わせたものも４点出土した。斜格子文は２種２点出土した。文字文は梵字を配したもので１種１点出土した。

種類ごとの点数は、瓦205が７点、瓦128が６点、瓦133が５点、瓦125・173が各４点とやや多いが、他は１種３点以下と少ない。型式としては、播磨産外行唐草文瓦152～161が19点、山城産外行唐草文瓦125・128が10点、山城産外行唐草文瓦131～134が13点、山城産剣頭文系瓦213～221が10点とやや多い。

ⅲ．軒瓦の時期

軒瓦の時期は、瓦当文様や成形手法、及び同笵・同文瓦の出土した遺跡の年代などから判断できる。時期は、平安時代後期前葉（11世紀後葉）、平安時代後期中葉から後葉（12世紀代）と、鎌倉時代（13世紀代）に分けられるが、時期が不明なものも少なくない。

平安時代中期後葉（11世紀中葉）　平安時代中期（11世紀代）と推定した軒平瓦２点が溝900・溝840から出土した。同文瓦は、高陽院池ＳＧ１－Ａや法勝寺などで確認した。軒丸瓦は確認していない。

平安時代後期前葉（11世紀後葉～12世紀）　平安時代後期前葉（11世紀後葉）と推定した軒瓦は、軒丸瓦15点、軒平瓦８点が出土した。また11世紀後葉～12世紀のものは軒丸瓦７点、軒平瓦４点が出土した。これらは、井戸1210・井戸620・溝900・溝440・溝840などから出土した。同文瓦は、法勝寺金堂・園池・円勝寺1970年調査・平安宮真言院・最勝寺推定地などで確認した。

平安時代後期中葉から後葉（12世紀代）　平安時代後期中葉から後葉（12世紀代）と推定した軒瓦は、軒丸瓦199点、軒平瓦150点出土した。溝840や溝900などから多量に出土した。

当該期の軒瓦は、尊勝寺・鳥羽殿金剛心院・御室法金剛院・醍醐栢杜堂・法住寺殿などの出土瓦と比較し、時期を12世紀前葉・中葉・後葉に特定できるものもあるが、現段階では詳細な時期区分はできない。

鎌倉時代前葉（13世紀代）　鎌倉時代（13世紀代）と推定した軒瓦は、軒丸瓦３点、軒平瓦４点出土した。出土遺構は、溝440・溝840・包含層から出土した。同文瓦は、東福寺・円勝寺・常盤仲ノ町・醍醐寺大智院などで確認した。

ⅳ．軒瓦の産地

軒瓦の産地は、瓦当文様や成形手法、及び同笵・同文瓦の出土した各生産地・遺跡などから判断できる。産地は、山城・播磨・丹波・大和・讃岐・備中などが推定できるが、産地が不明なものも少なくない。

次にこれを時期別に見る。

平安時代中期後葉（11世紀中葉） 軒平瓦は山城産で、瓦113は河上窯、瓦114は栗栖野窯産である。

平安時代後期前葉（11世紀後葉～12世紀） 軒丸瓦は、播磨産６種９点、丹波産２種２点、大和産３種６点と推定でき、産地不明が５種５点出土した。軒平瓦は、播磨産７種７点、丹波産１種１点、大和産２種２点、備前産１種２点と推定できる。いずれも山城産のものは確認できない。

播磨産の軒瓦は、神出堂ノ前窯・播磨二ッ屋遺跡などで同文瓦を確認した。大和産の軒瓦は、興福寺・薬師寺・法隆寺などで同文瓦を確認した。備中産の軒瓦は、備中国分寺などで同文瓦を確認した。

平安時代後期中葉から後葉（12世紀代） 軒丸瓦は、山城産52種120点、播磨産36種67点、丹波産４種５点と推定でき、産地不明７点である。軒平瓦は、山城産38種62点、播磨産42種72点、丹波産10種15点、讃岐産１種１点と推定できる。

山城産の軒瓦は、栗栖野窯・南庄田窯などで同文瓦・同笵瓦を確認した。播磨産の軒瓦は、神出窯・林崎三本松窯、三木久留美窯などで同文瓦を確認した。

鎌倉時代前葉（13世紀代） 軒丸瓦は、山城産１種１点と推定でき、産地不明２種２点である。軒平瓦は、４種４点出土したが、いずれも産地は不明である。

ｖ．軒瓦の分析

平安時代中期後葉（11世紀中葉） 平安時代中期（11世紀代）と推定した軒平瓦が２点出土した。これに組み合うと推定した軒丸瓦は確認していない。瓦の産地は山城で、他の産地は見られない。

当該期の軒瓦は、白河地域内の法勝寺域とその隣接地で確認し、円勝寺1970年調査で瓦114の同笵瓦が２点出土した〔円勝団1972〕[2)]。これと同時期の瓦は、法勝寺回廊下層などで出土し、法勝寺造営前の藤原氏別業の建物所用瓦と推定した〔上村ほか1987〕。

平安時代後期前葉（11世紀後葉～12世紀） 平安時代後期前葉と推定した軒瓦は34点出土し、全出土軒瓦の約0.9割を占める。瓦の産地は、播磨・大和産瓦が主体をなし、丹波産瓦などが少量見られ、1970年調査の状況と同様である。特に、播磨産軒丸瓦１～３と、軒平瓦115・116のグループは、法勝寺金堂地域でまとまる。

当該期の軒瓦は、白河地域内の法勝寺域内及び隣接地で確認した。同笵・同文瓦は、円勝寺、法勝寺金堂・園池、最勝寺推定地、円勝寺域などで出土した。このことから、これらの瓦は法勝寺創建時の所用瓦が、隣接地に投棄された結果と推定される〔上原1987〕。

当該期の軒瓦は、調査地東側の円勝寺1970年調査では軒丸瓦202点・軒平瓦140点中約１割を占める〔円勝団1972〕。第１期調査〔小檜山ほか2015〕では軒丸瓦363点・軒平瓦278点中、軒丸瓦19点・軒平瓦10点で約0.5割を占める。今回調査の出土比率は1970年調査の状況に相当する。

平安時代後期中葉から後葉（12世紀代） 平安時代後期中葉から後葉（12世紀代）と推定した軒瓦は349点出土し、全体の９割を占める。軒瓦の産地は、山城産と播磨産が大半を占め、他の丹波・讃岐は少ない。山城産と播磨産の比率は、軒丸瓦では108：62と山城産がかなり多いが、軒平瓦では67：72と播磨産が少し多い。

播磨産複弁蓮華文瓦52～65と播磨産外行唐草文瓦152～181、山城産複弁蓮華文瓦16～20と山城産外行唐草文瓦125・128、山城産巴文軒丸瓦88～107、山城産外行唐草文瓦131～134、山城産剣頭文系軒平瓦などのグループが比較的まとまる。

鎌倉時代前葉（13世紀代） 鎌倉時代（13世紀代）と推定した軒瓦は７点出土した。

当該期の軒瓦は、白河地域内では法勝寺・尊勝寺域などで出土し、他の地域では少ない。軒瓦は、文献史料と考え合わせ、当地域で使用されたもの、または法勝寺所用瓦が隣接地に投棄されたと推定できる。

２）刻印瓦について（図31、図版54・55、付表５）

刻印瓦は４点出土した。出土遺構は、井戸888・溝440が各１点、溝840が２点である。

瓦228・229は、「東大寺」の刻印を平瓦凹面狭端部中央に押捺した文字瓦である。当該文字瓦は、白河地域内では法勝寺域・法勝寺北方〔近藤奈など2005〕で確認した。印の文字書体・大きさから、備前万富窯出土「東大寺」文字瓦と同文で、同笵の可能性が高いことが確認できた〔岡山県1980〕。当文字瓦は、栄西による法勝寺再建に伴う所用瓦と推定できる。栄西による再建は、『元亨釈書』栄西の頌に「洛東法勝寺九層大塔災、(中略)、修造予周二州充其費、(後略)」とあり、承元二年（1208）から健保元年（1213）に実施したことがわかる〔『明月記』〕。

「万天堂」の刻印を押捺した瓦230は、成形手法や印の文字書体・大きさが同様のことから、「東大寺」瓦と同一産地と推定できる。

瓦231は、「上」の刻印を丸瓦狭端面に押捺した丸瓦である。時期・産地不明である。

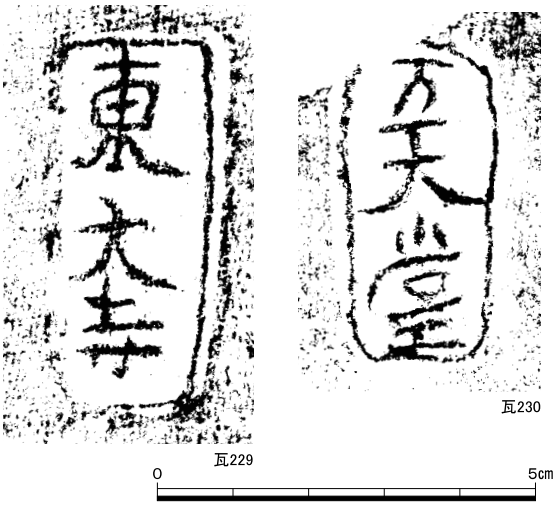


図31　刻印拓影（１：１）

３）ヘラ記号瓦について（図版55、付表５）

ヘラ記号瓦は、丸瓦３点、平瓦１点出土した。軒瓦の中にもヘラ記号を施した瓦が多数認められる。時期は、平安時代後期（12世紀代）と推定でき、播磨産のものが多い。播磨産丸瓦234・235と平瓦233は記号が類似する。

４）鬼瓦について（図版56、付表５）

鬼瓦は11点出土した。出土遺構は、溝900が６点、溝840が２点などである。文様は、いずれも鬼面文で、６点は笵型を使用して成形する。産地は、播磨産９点と推定でき、瓦236は神出窯、瓦239は林崎三本松窯で同文瓦を確認した。また、瓦239は鳥羽金剛心院で同文瓦を確認した。時期は、いずれも平安時代後期（12世紀代）と推定でき、瓦239は12世紀代中葉と推定できる。

（４）土製品（図32、図版81・89、付表６）

土製円塔（土塔）は全部で14点出土し、釉が塗られたものはその内13点である。釉薬は大きく暗緑色と黄緑色の２色に分けられる。円塔部直径が７㎝を超える巨大なものや３㎝前後の小型のものはなく、４～６㎝の中型の範囲に入るものが出土した。鍔幅は0.5～0.7㎝とほぼ同じであるが、円塔の高さが2.2～2.5㎝と2.8～3.1㎝の２種類にまとまった。欠損や摩耗が著しい土塔４点は掲載しなかったが、円塔の高さはいずれも後者の高い方であった。その他、円盤状土製品１点と硯１点が出土した。

土１～10は土製円塔である。すべて型成形で、表面に緑釉が塗られており、裏面の一部にも付着しているものが数点（土１など）ある。土１に皺は認められないが、円塔部分と鍔の接合部分に布目が残る。円塔頂部に米粒くらいの窪みが付く。裏面中央に粘土を充填した痕跡が残る。土２は非常に濃い緑色を呈する釉薬が塗られている。皺は認められないが、鍔部分に布目圧痕が残る。鍔は一部が欠損している。土３は側面に縦方向の布皺が付く。鍔裏面付近に指頭圧痕が残る。鍔部分は一部を除いて、欠損している。土４は円塔と鍔に皺が片側に寄って付く。鍔を取り付ける際の指頭圧痕が、円塔と鍔の境目に連続して付く。裏面にも指跡が残る。鍔の一部が欠損している。土５は鍔がすべて欠損している。側面や頂部に皺が認められ、裏面に爪跡とみられる圧痕が残る。土６は円塔の一部に布目圧痕が認められる。鍔の大半は欠損している。土７は側面に多くの縦皺が付く。皺は浅いものが大半であるが、中には0.1㎝程度の深いものも認められる。鍔はすべて欠損している。土８は頂部から側面にかけての長目の縦皺が残る。鍔は一部が残る。土９は鍔部及び頂部の一部が欠損している。裏面の所々に釉薬が付着する。土10は縦皺が側面に残る。鍔はすべて欠損している。土３・９は平安時代後期の造成土（溝900より西側）、土１・２・４・５は溝900、土７は土坑335、土10は土坑1024、土６・８は調査区北西の江戸時代耕作土から出土した。

土11は円盤状土製品である。瓦質土器盤の底部片を打ち欠いて、円形に加工したものである。表

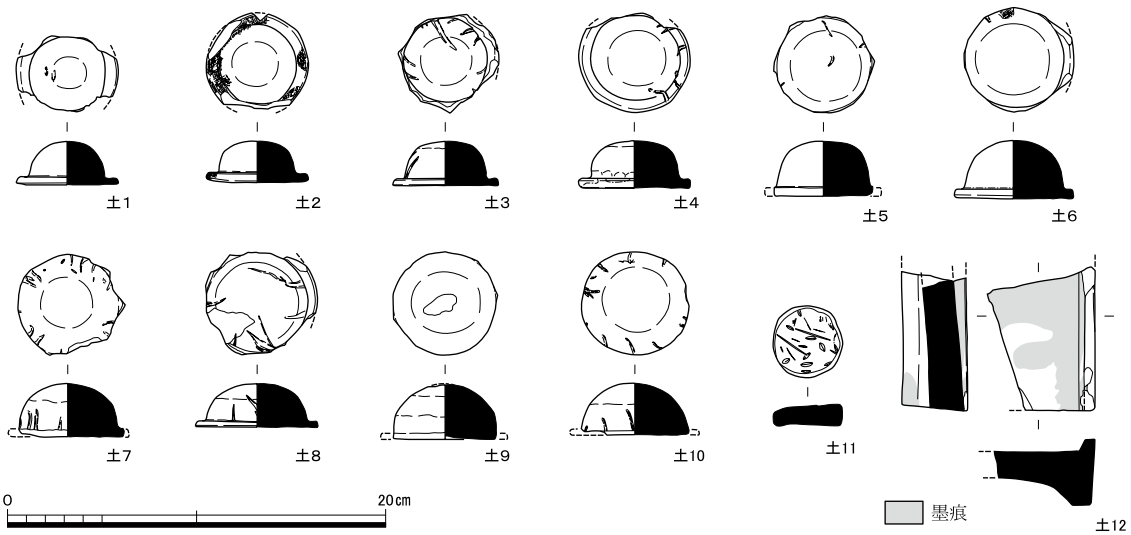


図32　土製品実測図（１：４）

面に稲藁の圧痕が認められ、裏面はナデ調整である。包含層から出土した。時期は平安時代後期から鎌倉時代前期である。

土12は風字硯の硯面片である。全面を丁寧なケズリ調整で加工する。硯面から硯池、脚部裏面に墨痕が認められる。溝900から出土した。時期は平安時代後期である。

（５）金属製品（図33、図版89、付表７）

銭貨８点、飾り金具１点、簪１点が出土した。その他に、鉄釘とみられる断面四角形のものも数点出土しているが、腐食が著しく、形が不明瞭なため掲載していない。

金１～８は銭貨である。金１は「開元通寶」である。「元」の「二」の字の間隔が狭く、左端に跳ねがない。唐の621年に鋳造された。溝440から出土した。金２は篆書の「皇宋通寶」である。両面磨滅が著しく、「通」下部に孔へと至る割れが認められる。北宋の1038年に鋳造された。土坑616中央付近から出土した。金３は「元豊通寶」である。裏面が著しく磨滅している。文字は行書で、北宋の1078年に鋳造された。調査区北西の平安時代後期造成土から出土した。金４は「元豊通寶」である。裏面が少し磨滅している。文字は篆書で、北宋の1078年鋳造である。調査区北西の平安時代後期造成土から出土した。金５は「元符通寶」である。両面の磨滅が著しく、輪の周囲が削り取られている。文字は篆書で、北宋1098年に鋳造された。孔が中央からずれていることから、模鋳銭とみられる。調査区北西の江戸時代耕作土から出土した。金６は折二銭の「紹興元寶」である。両面の磨滅が著しく、約３分の１が欠損している。輪の周囲を削る。文字は真書で、南宋の1131年に鋳造された。土坑616から出土した。金７は「洪武通寶」で、小平銭と呼ばれる一文銭である。背の右側に「一銭」の文字を配置する。両面の磨滅が著しい。明の1368年に鋳造された。調査区南西の江戸時代耕作土から出土した。金８は「寛永通寶」である。錆の付着と両面の磨滅が著しく、文字の詳細な形状は不明である。寛永13年（1636）から幕末にかけて鋳造された。調査区北西の江戸時代土坑から出土した。

金９は飾り金具である。一部が欠損し、折れ曲がっていた。縦3.3㎝、横4.3㎝以上を測る横長の菱形を呈する。中央に径0.4～0.5㎝、上下左右に径0.3～0.4㎝の孔を表から裏面に向かって開ける。上下左右の孔中央側は、一部が片口のような飛び出し部分が認められる。外形端部は花弁形に丸く加

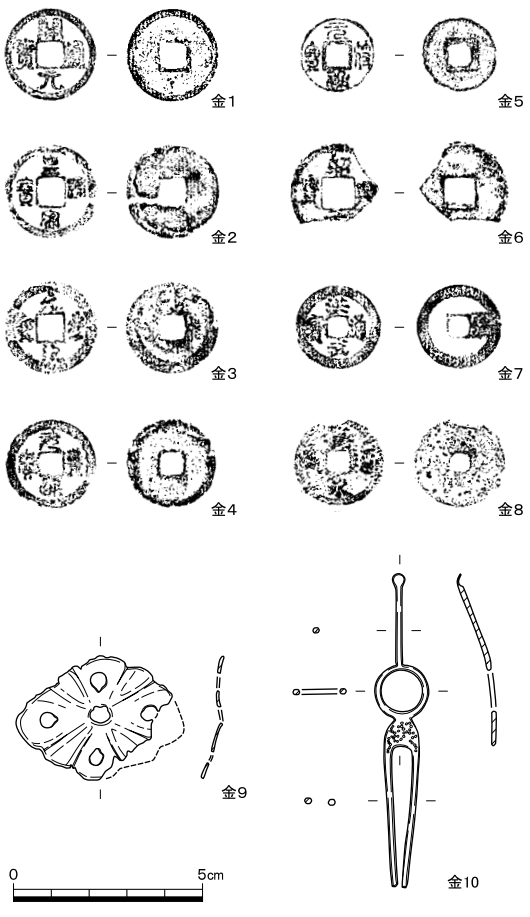


図33　金属製品拓影及び実測図（１：２）

工されている。上下左右の孔間に、各２本ずつの刻線が施され、その間を窪ませる。逆に孔周辺を盛り上がらせて高低差を付けることで、花形を強調する作りとなっている。表面に鍍金が施されている。金銅製とみられる。調査区北西の江戸時代耕作土から出土した。時期は平安時代後期とみられる。

金10は真鍮製の簪である。髪に差すＵ字形の部分に、円環及び棒状の先端に耳かきの付いたものである。Ｕ字形の曲がり部分に魚子文様が描かれており、小花を表したものとみられる。先端部分が大きく変形している。江戸時代の土坑107結桶内から出土した。

（６）石製品（図34・35、図版89、付表８）

縄文時代から鎌倉時代の石製品が17点出土した。種類は材料から生産具、製品などの多岐にわたっている。当該期の遺構からではなく、後世の遺構から出土している遺物が多い。

石１は安山岩（サヌカイト）の原石である。裏面や側面に自然面が残る。表面に大きな剥離が認められ、側面近くに細かい剥離痕が集中する。全体的に風化しており、特に左側面に近い稜線の風化が著しい。調査区北西で検出した柱穴の地下式礎石として使用されていたが、縄文時代に原石として運び込まれたものが転用されたと考えられる。

石２は青色チャートの剥片である。背面は自然面、腹面は上部打点からの剥離面である。打点近くにバルブが形成されている。側面の所々に押圧剥離とみられる細かい剥離が認められる。流路1100上層から出土した。縄文時代とみられる。

石３は滑石製の紡錘車である。直径約3.9㎝の円形で、断面は角の取れた台形を呈する。中央に約0.5㎝の２方向からあけられた穿孔がある。表面の中央部分は平坦に加工され、裏面はすり鉢形に削り取られている。裏面周縁は平らであるが、磨滅が著しく、使用によるものと考えられる。部分的に欠損している。平安時代後期造成土から出土した。古墳時代である。

石４は粘板岩製の石鍬とみられる。全面を丁寧に研磨する。縦方向の擦痕が加工痕、斜め方向の擦痕が使用痕とみられる。側面は丸く加工され、平行な擦痕と斜め方向の使用痕が認められる。溝840掘形から出土した。弥生時代とみられる。

石５は碧玉製の管玉である。直径0.4㎝、長さ1.2㎝以上、孔直径0.15㎝である。孔は２方向から穿孔されていた。全面を丁寧に研磨しているため、加工痕は認められない。擦痕も確認できなかった。多量の土器とともに、流路1100上層から出土した。弥生時代から古墳時代である。

石６は紅簾片岩製の石棒である。荒割した際の剥離痕が全面に認められる。側面と先端に押圧剥離痕が残る。上部は折損しているが、使用時かどうかは不明である。流路1100から出土した。弥生時代前期とみられる。

石７～10は磨石や敲石である。石７は花崗岩製の磨石で、直径約10㎝の円形、断面は隅丸長方形を呈する。表裏面は滑らかに磨かれており、平坦である。側面が部分的に窪んでいることから、敲石としての利用があった可能性がある。石８は砂岩製である。平面は楕円形、断面は円形を呈する。上下部以外は平滑に加工されている。上下部は凹凸のある敲打痕が約３㎝幅で認められ、磨石

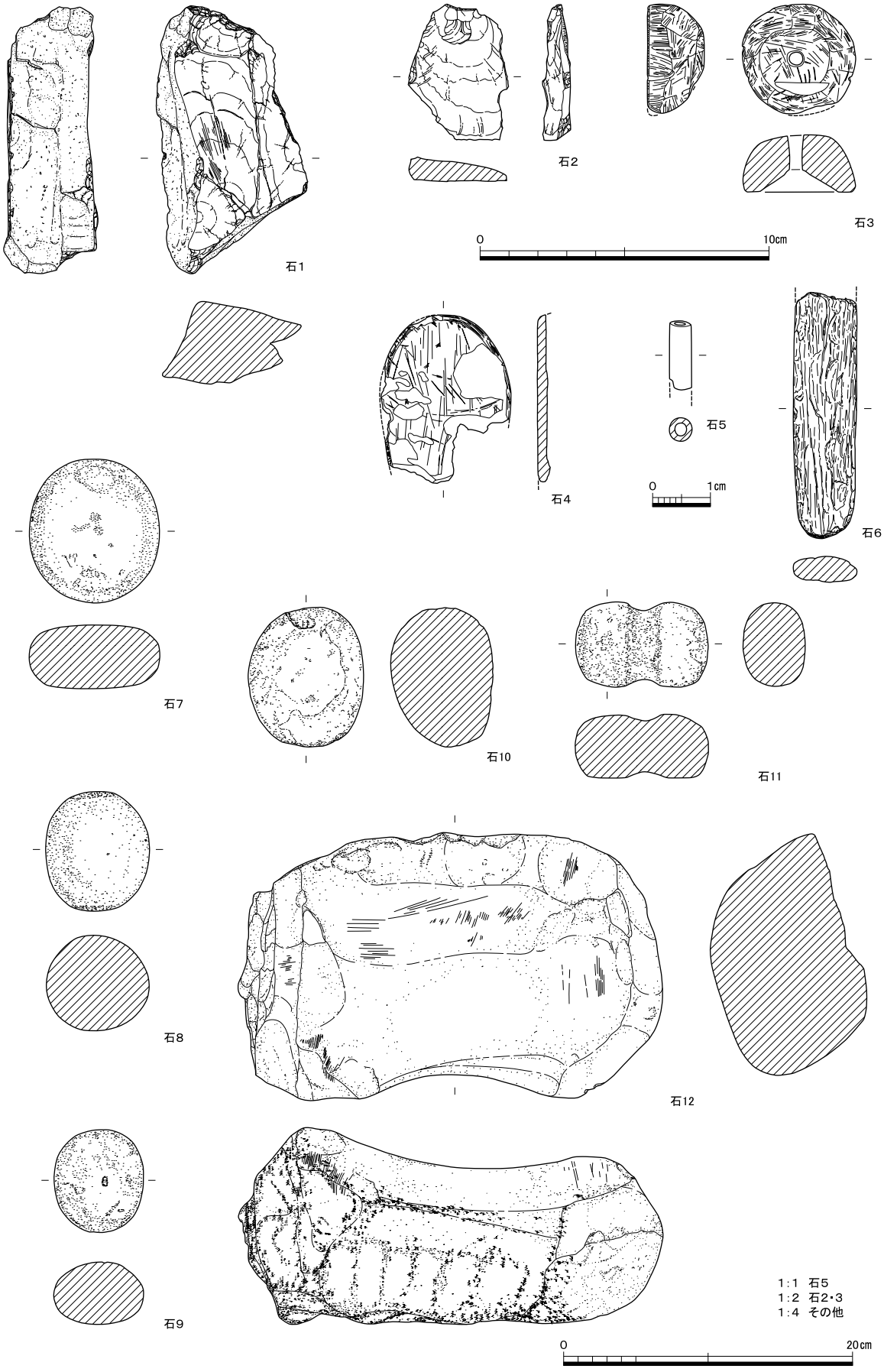


図34　石製品実測図１（１：１、１：２、１：４）

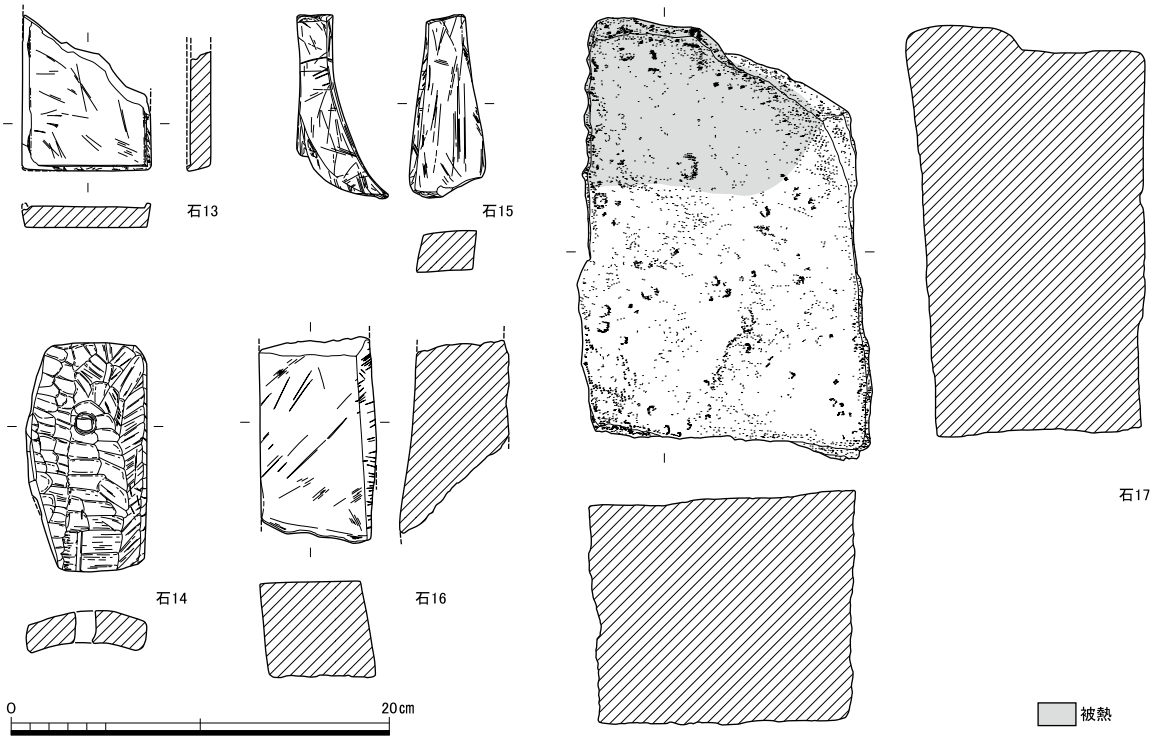


図35　石製品実測図２（１：４）

及び敲石として使用されていた。石９は玄武岩とみられる石材で作られた磨石である。全面を丁寧に磨く。明確な使用痕は認められない。石10は全体を平滑に磨く。上部は欠損部分が多く不明であるが、下部は敲打に使用した痕跡が認められる。約３分の１に焼けた痕跡が残る。砂岩製の敲石である。石７は調査区北西の包含層、石８～10は流路1100上層などから出土した。縄文時代から弥生時代とみられる。

石11は中央部分を窪ませたハンマー形の敲石とみられる。平面が隅丸長方形の中央部分約1.5㎝幅を帯状に一周くぼませる。左右両端の側面は使用のため、凹凸に窪むがその他は平滑に磨かれている。石材は閃緑岩とみられる。平安時代後期造成土から出土した。時期は弥生時代とみられる。

石12は土坑267に据え付けられていた不明石製品である。平面形態は隅丸方形で、長辺の片側中央が窪む。長辺の断面形態では、中央部分が緩やかに窪み、右側面は丸く、左側面は約３㎝斜めに下がって欠損している。側面及び裏面の欠損部分以外はすべて平滑に研磨されており、所々に細かい擦痕が認められる。表面や側面の研磨には不明瞭な稜線がいたるところに認められ、面取りが行われているように見える。結果として、枕の様な形態を呈する。砂岩製で、弥生時代から古墳時代に作られた石製品を、後世に転用したとみられる。

石13は粘板岩製の硯である。硯池側は欠損し、周縁も大半が欠損している。硯面に加工時や使用痕とみられる細かい擦痕が認められる。硯面と側面に墨痕が残る。溝840西掘形から出土した。時期は鎌倉時代前期とみられる。

石14は温石である。滑石製の口径22.0㎝の石鍋口縁部を長方形に切り出し、鍔部分を削り取って、上部側に孔を開けている。穿孔は２方向から行われている。鍔部分は丁寧に削り取られている

ため、平滑である。側面の切り出し部分の加工は特には行われていないため、凹凸が生じている。江戸時代の耕作土から出土した。鎌倉時代とみられる。

石15・16は砥石である。石15は堆積岩、石16は白色の凝灰岩とみられる。欠損部分以外で使用の認められるところでは、刃物でついた細かい擦痕が多く認められる。石15は調査区北西の包含層、石16は建物４を構成する柱穴627から出土した。石15は鎌倉時代から室町時代、石16が平安時代後期から鎌倉時代とみられる。

石17は閃緑岩製の台石である。表面は平滑に研磨され、裏面及び上側面についても磨かれている。上部が被熱しており、煤が付着している。両側面と下部は割ったときの状態で、特に加工された痕跡は認められなかった。上部側面に出っ張りが残り、全体的な形状から墓石などからの転用が考えられる。包含層から出土した。時期は室町時代である。

（７）木製品（図36～38、図版90、表６、付表９）

弥生時代後期・平安時代後期から室町時代の木製品が、井戸や溝などから出土した。箸などの製品は少量であり、杭や井戸枠材が多い。平安時代後期の井戸830・1210、平安時代後期から鎌倉時代前期の井戸888、鎌倉時代後期の井戸1096は、井戸枠材が良好な状態で遺存していた。井戸830・1210の縦板には、特徴的な加工痕が認められたことから、分類を行い、代表的なものの図を掲載した。その他、井戸枠材で加工痕の認められないものや加工痕の少ない杭については、樹種を特定し、法量を測定するなど、傾向がわかるような記録保存に努めた（表６）。なお、井戸830の横桟や縦桟の点数が文章と合わないのは、腐食が著しく、取り上げられなかった木製品もあったためである。

その他、井戸830の井戸枠内から、箸などとともに木材加工時にできたケズリカスが多く出土した。ケズリカスの樹種はスギである。

木１は梯子である。上部側面が緩やかに弧を描いていることから、梯子の上部２段分とみられ、上部先端及び下部は欠損している。最大幅23.3㎝、残存長65.6㎝、踏み段部分の厚さ9.2～10.4㎝、踏み段以外の厚さ2.9～3.6㎝を測る。踏み段の高さは34.5㎝である。外皮を取り除いた直径27.0㎝程度の丸太を約半分に縦割した木材を使用する。外面から垂直に工具の刃を入れて踏み段を作り、踏み段の間は丸みを帯びた緩やかな傾斜をつける。表裏面に工具痕が残る。左縁辺の下端から約26.0㎝に、表から側面へ斜めに抜ける直径0.25㎝の穿孔が認められる。また、裏面下部の端から0.4～1.2㎝の位置に、直径0.3㎝、深さ0.7～１㎝の孔が各４個長軸方向に並ぶ。いずれも、面に対して垂直である。その間隔は、左側で下端から8.3・11.8・10.1・10.1㎝、右側で下端から6.2・12.1・12.7・10.8㎝である。裏面にはその他に同じ法量の孔が３箇所あることを確認した。用途は不明であり、転用材であるならば、その後に孔が開けられた可能性もある。流路1100の粗砂層（図８第17層に相当）から出土した。時期は弥生時代後期とみられる。

木２・３は杭である。いずれも芯持ち材ではなく、断面が方形になるように成形してから、面取りを行う。先端は三角錐に加工する。杭頭は腐植し、長さは不明である。一辺5.4～8.1㎝で、削り

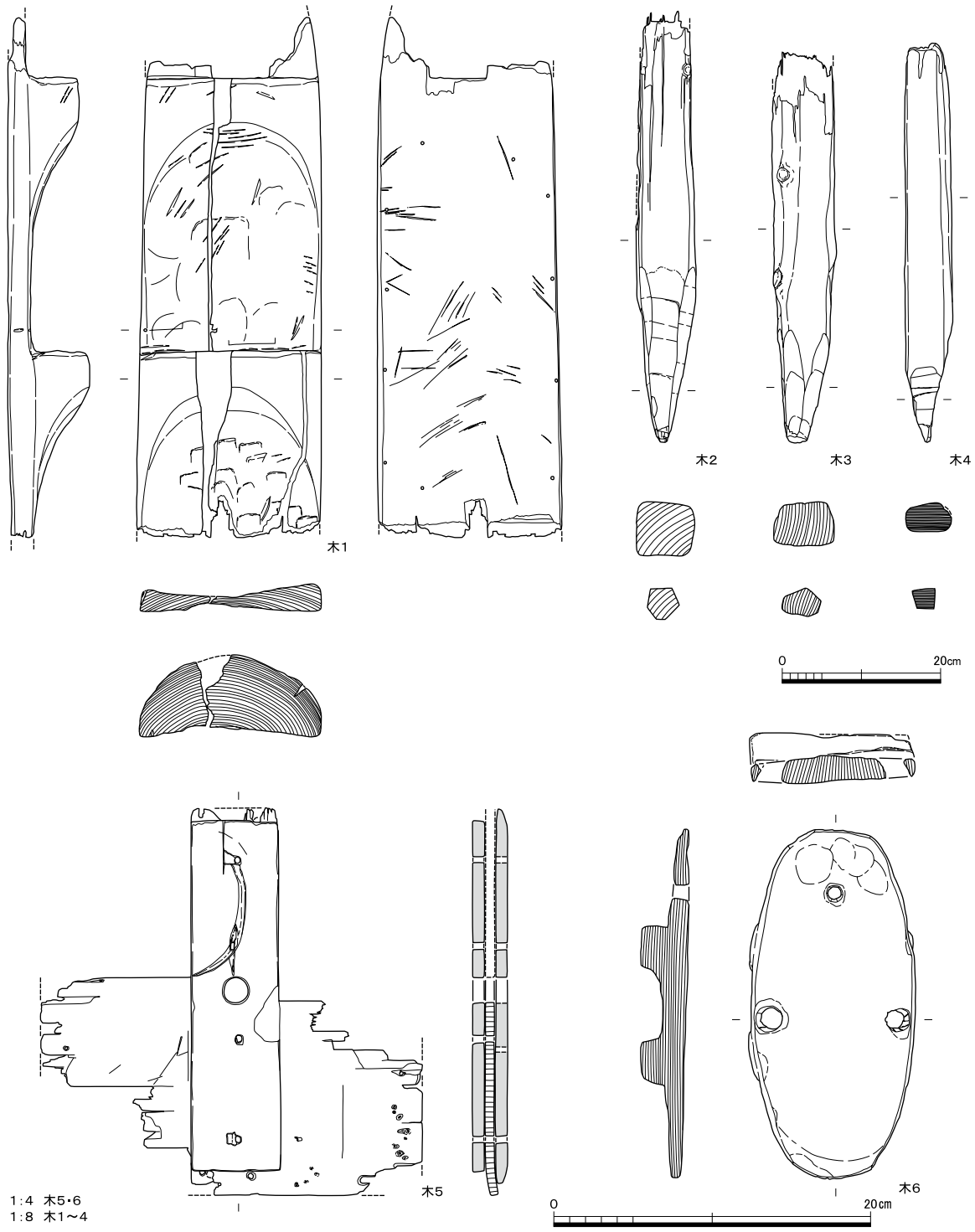


図36　木製品実測図１（１：４、１：８）

加工部分の長さ9.0～22.0㎝を測る。木３の先端は、打ち込み時に潰れた痕跡が認められる。流路1100東肩に造られていた護岸1215に使用されていた杭で、弥生時代後期から古墳時代後期の時期に相当する。

木４は杭である。断面は隅丸長方形を呈する。先端の四面を加工し、三角に尖らせる。残存長55.4㎝、幅6.1㎝、削りの長さ9.4～15.2㎝である。溝900の最下層砂礫層（図版15のＡ－Ａ’、第39層）から出土した。建物部材が転用されたとみられる。時期は平安時代後期である。

木５は、長方形の板２枚及び方形とみられる板１枚を重ねた木製品である。縦24.5㎝、横24.1㎝、厚さ2.2㎝である。方形とみられる板材は半分が欠損しているが、他の材に残る圧痕から大きさが判別できた。この方形板材を長方形の板材が挟む。中央に直径1.6㎝の孔があり、それぞれの板を貫通する釘穴が直線状に並ぶ。釘穴の位置を観察した結果、方形板材の端から１㎝程度内側を釘で留めており、また別の板材が存在していた可能性が認められた。中間の方形板材にはＵ字形の釘が遺存していた。また、一番上の長方形板材表面には、幅0.4㎝の線状で、半円形の圧痕が認められる。小刀のような刃物痕も所々に認められた。何らかの部材であるとみられるが、用途など不明である土坑1024から出土した。時期は平安時代後期から鎌倉時代前期である。

木６は下駄である。平面楕円形を呈し、裏面に高さ約1.8㎝の歯が平行に２本彫り出されている。紐を通す孔が３箇所に開けられている。鼻緒の直径0.8㎝、側面の孔の直径1.5～1.8㎝である。側面の穴は外側から内側に斜め方向である。鼻緒付近には、指の圧痕とみられる長さ２㎝前後の浅い窪みが認められた。長さ22.0㎝、幅10.5㎝を測る。平安時代後期の造成土から出土した。

木７・８は漆塗椀である。高台が付く木地に、黒漆を塗り、その上に朱漆で文様を描く。木７は口径16.9㎝、高さ5.2㎝以上、木地の厚み0.45㎝である。内外面に描かれた文様は草花とみられ、細い線と塗りで表現されている。溝440から出土し、時期は室町時代である。木８は内面口縁端部にのみ、文様が描かれている。遺存部分が少なく、絵柄の特定ができない。口径16.7㎝、高さ5.1㎝以上、木地の厚み0.5㎝である。溝900から出土した。時期は平安時代後期である。

木９～11は曲物の底板である。いずれの表面にも、小刀のような薄い刃で付けられた細い線状の傷が多く残る。木９は直径14.8㎝、厚さ0.5㎝、木10は直径29.7㎝以上、厚さ0.9㎝、木11は直径約18.5㎝、厚さ0.35㎝である。木９・10の側面には木釘の痕跡が数箇所認められたが、木11には確認できなかった。木９は井戸830の最下層及び土坑1024、木10は溝440、木11は井戸1210から出土した。時期は木９・11が平安時代後期、木10は室町時代である。

木12は折敷底板である。中央部分が欠損しているが、一辺20.0㎝くらいの隅切り方形を呈する。四隅を一辺3.5～4.0㎝の三角形状に切り落とす。表面に幅1.5～2.0㎝の加工痕が残る。厚さ0.7㎝を測る。平安時代後期の造成土から出土した。

木13は曲物である。1.3㎝厚の底板に、厚さ0.5㎝の板を沿わせて、木釘で留めていた。木釘は３箇所確認した。重ねた部分を0.7㎝幅の桜皮で波縫いにして留める。丸く曲げた板の外側には、上下２段に幅0.5㎝の板を巻き付け、桜皮で留める。井戸888上層から出土した。時期は鎌倉時代前期である。

木14～16は箸である。木14は火付け木に転用されており、先端に焦げ跡が残る。木15の先端が少し欠損しているが、四（木14、13.6㎝）・六（木15、19.75㎝）・八（木16、24.4㎝）寸の長さに相当する。すべて丁寧に面取りしている。木14・15は井戸830、木16は溝900から出土した。いずれも平安時代後期である。

木17は加工途中の棒状木製品である。上部を丸く加工し、下部は平らに切断する。先端から１㎝くらいの部分に直交する切込みを入れ、そのさらに１㎝下から切込みに向かって木を削り取って

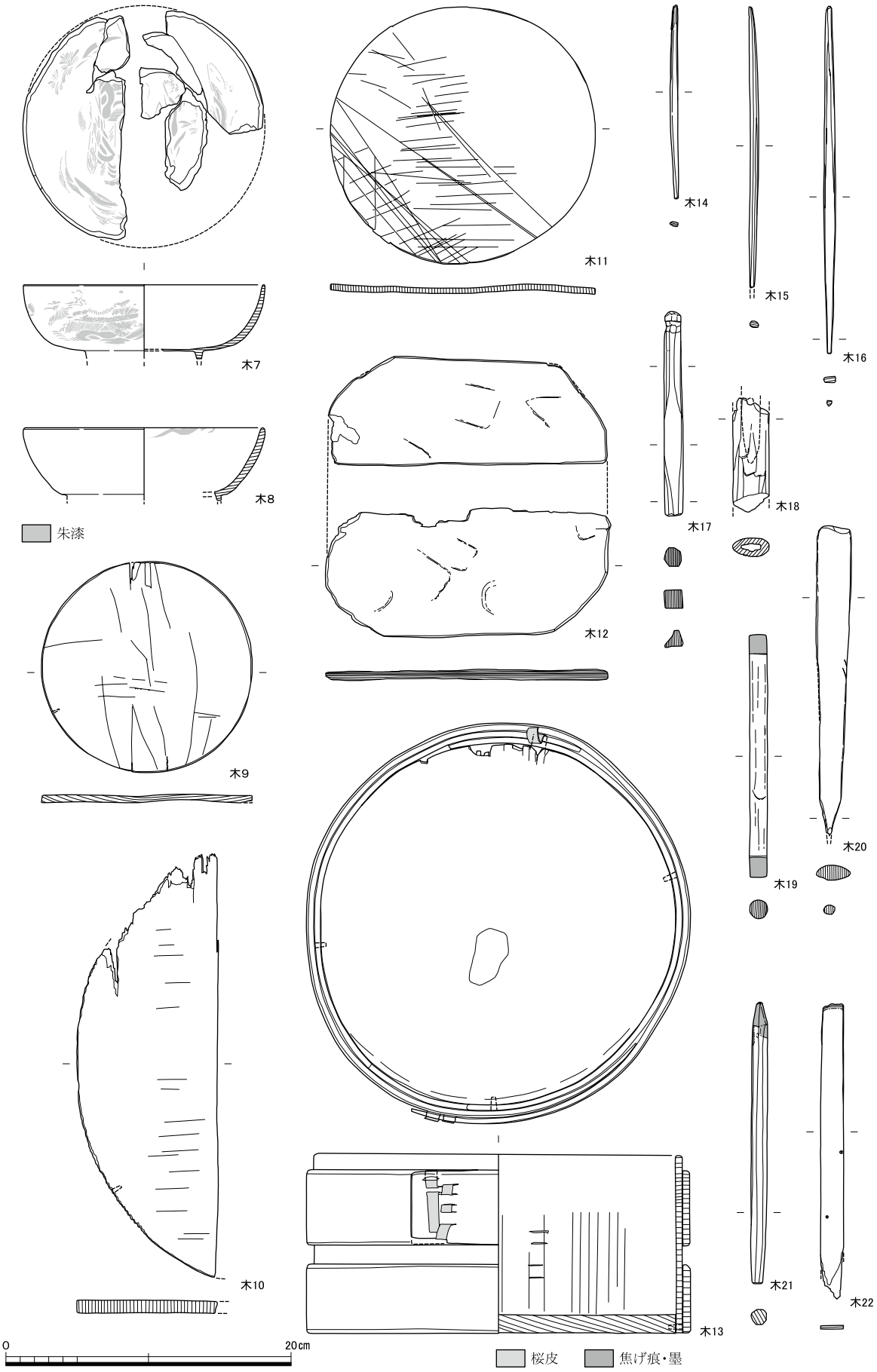


図37　木製品実測図２（１：４）

段差をつける。先端から中央付近まで多面形に面取りし、上から３分の２までは断面方形、下部は三角形に近い台形状の断面になるように加工されていた。人形または題箋とみられる。土坑1024から出土した。時期は平安時代後期から鎌倉時代前期である。

木18は小刀の柄である。柄頭と合口部分は欠損している。合口側から、平面は扁平な楕円形で、断面は滴水形を呈する茎を収めるための孔が穿たれている。それに直交させて、目釘のところに直径0.5㎝の孔が開く。この孔には鉄分が付着していた。外面には0.8～1.0㎝幅の加工痕が認められる。残存長8.0㎝、幅2.6㎝、厚さ1.3㎝、孔の幅1.4㎝、孔の高さ0.4～0.5㎝を測る。井戸1210から出土した。平安時代後期である。

木19は軸である。直径1.3㎝に丁寧に面取りが行われている。両端は平らに切断し、切断面と端から1.4㎝までを墨で黒く塗る。墨を塗る際の目印にしたとみられる細線が、両端から1.4～1.5㎝の位置に付く。長さ17.1㎝を測る。井戸1210から出土した。平安時代後期である。

木20は下部を杭状に細く加工した木製品である。上部は幅2.5㎝、下部から6.0㎝上で幅1.6㎝、先端は直径0.8㎝の円形断面である。上部断面はアーモンド形に面取りされている。文字は確認できなかったが、題箋とみられる。平安時代後期造成土から出土した。

木21・22は火付け木である。いずれも先端部が黒く焼け焦げている。木21は火付け木用に加工された材とみられ、多面形に側面が加工されていた。幅1.2㎝、長さ19.8㎝を測る。木22は幅1.6㎝、厚さ0.25㎝、0.1㎝の孔が２箇所に認められる。形状から折敷などの側板が転用されたとみられる。木21は平安時代後期から鎌倉時代前期の土坑1024、木22は平安時代後期の溝900から出土した。

木23は井戸枠に使用されていた曲物の側板部分である。幅22.3㎝、厚さ0.2～0.6㎝の板を幅1.2㎝の桜皮で綴じ、その外側に幅9.2㎝、厚さ0.3㎝の板を上下二段に巻き付け、桜皮で綴じる。上部の口縁外面にのみ、幅3.0㎝、厚さ0.3㎝の板を巻き付け桜皮で綴じる。木釘は口縁直下の数箇所に差し込まれており、すべて外側から内側に貫通していた。平安時代後期の井戸830から出土した。

木24～27は縦板横桟枠井戸の縦板である。上部はすべて腐植していた。板同士の接合が認められることから、井戸を造る際に丸太で運ばれてきた木材を均等に割いて板状に加工したと考えられる。縦板79点中、釘穴などの何らかの加工痕のあったものは13点である。樹種はスギであった。井戸底面側に加工された部分が揃えて据えられており、その加工痕には３パターンが認められた。１．枘穴（木24・25、その他４点）、２．刳り込み（木26、その他３点）、３．刳り込み２箇所（木27）である。１の枘穴は、下部から7.3～9.8㎝、4.5～7.0㎝に開けられている。枘穴の形にも、正方形や長方形、菱形などがある。表面に四角く切込みを入れて、斜めに削り落す。下部片側の角は隅切りし、下面端部は部分的に加工する。２の刳り込みは、下から9.1～15.5㎝の片側側面を切り取ったもので、切り取られた側面側の下部を隅切りする。３の刳り込みが２箇所入るものは、側面は２と同じ加工が行われている。もう１箇所は、表面を横断する形で台形状に切り込み、材を削り取る。木24～26は幅9.1～9.9㎝、厚み1.3～1.8㎝、木27は厚みが3.2㎝と他のより分厚くなっている。木26は井戸830西側、木24・25・27は井戸830北側を中心に出土した。時期は平安時代後期である。

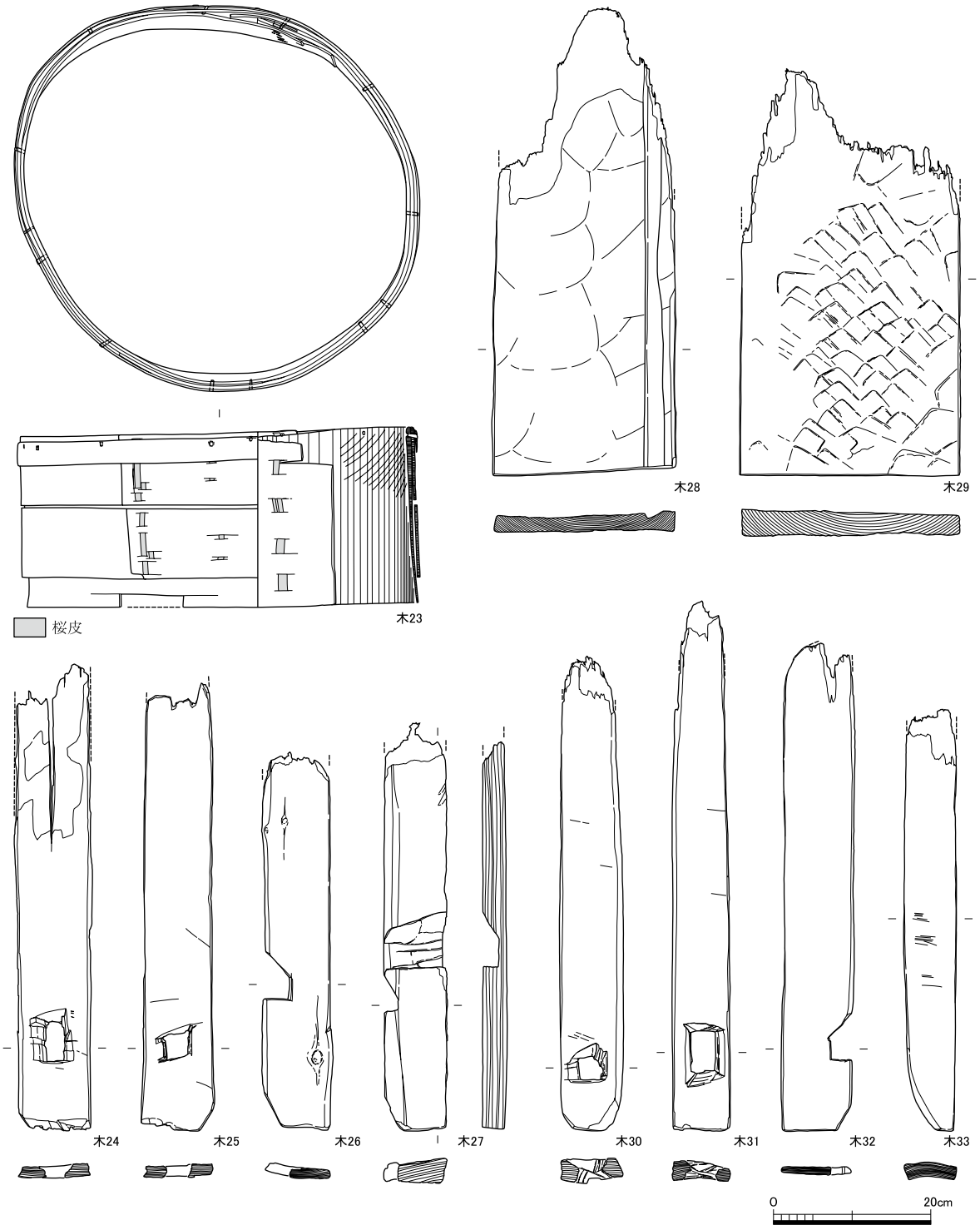


図38　木製品実測図３（１：８）

木28～33は井戸1210から出土した縦板横桟枠井戸の縦板である。上部は一部を除き、腐植している。縦板119点中、何らかの加工痕や釘穴のあるもの36点（枘穴９点、刳り込み７点、その他20点）である。樹種は２点のみヒノキ、それ以外はスギである。木28・29は厚さ2.6～3.4㎝、表裏面が平滑で、表面は手斧とみられる工具による調整痕が認められる。木28は幅10㎝程度の工具痕で、右端から1.5㎝の位置に、幅2.8㎝、深さ0.7㎝の側面に平行した断面レ字形の溝が彫り込まれてい

表６　主要遺構出土樹種同定一覧表

遺構名	時期	種類	数量	樹種	備考
流路1100	弥生時代後期～古墳時代後期	梯子	1	コウヤマキ	
護岸1215	古墳時代	杭	11	ヒノキ(3)、クリ(1)、サカキ(2)、コナラ(1)、コウヤマキ(2)	
		自然木	2	アカガシ亜属(大)、クヌギ(小)	
井戸620	平安時代後期	井戸枠材	11	スギ	縦板(7)、縦桟？(4)
井戸830	平安時代後期	井戸枠材	88	スギ	縦板(79)、横桟(6)、縦桟(2)、曲物枠板(1)
		箸	18	ヒノキ、スギ、コウヤマキ	2点は火付け木に転用(ヒノキ)
		ケズリカス	18	ヒノキ、スギ	手斧片・切割痕のあるもの含む
井戸1210	平安時代後期	井戸枠材	130	ヒノキ(西半出土の縦板2枚のみ)、スギ(その他)	縦板(119)、横桟(9)、添え木(2、横桟の転用)
		曲物底板	1	コウヤマキ	
		小刀柄	1	カキノキ	
		軸	1	カヤ	
井戸1205	平安時代後期	井戸枠材	1	ヒノキ	曲物枠板
溝900	平安時代後期	箸	7	ヒノキ、スギ	
		杭	7	アカガシ亜属、二葉マツ、サクラ属、マダケ、スギ	西岸および下部砂礫層中(造り直し護岸のものか？)から出土
		漆器椀	1	ヒノキ	
		火付け木	1	スギ	
造成土	平安時代後期	下駄	1	ヒノキ	
		折敷底板	1	スギ	
		題箋	1	コウヤマキ	
井戸888	平安時代後期～鎌倉時代前期	井戸枠材	8	ヒノキ(西板)、スギ(東板・南板・北板)	東西南北各上下2枚で構成、両端を鉤形に加工、数箇所鉄釘で留める
		曲物	1	スギ	
井戸1096	鎌倉時代後期	井戸枠材	4	ヒノキ(東板・南板)、コウヤマキ(西板・北板)	両端を鉤形に加工、数箇所鉄釘で留める
土坑895	鎌倉時代後期	板	1	ヒノキ	排水施設の側板か？
土坑1024	鎌倉時代後期	不明	1	スギ	
		曲物底板	1	スギ	
		人形または題箋	1	スギ	
		火付け木	1	スギ	
溝840	鎌倉時代後期～室町時代初頭	杭	1	コウヤマキ	
溝440	室町時代	漆器椀	1	ブナ	
		曲物底板	1	スギ	

た。木29は工具の幅約3.5cmが左上から右下に向かって細かく付く。木30・31は木24等と同じで、下部近くに枘穴を持つ。木30は一辺5.2cmの孔で、下部先端を丸く加工する。木31は縦8.7cm、横5.0cmの枘穴で、下部をまっすぐ切断する。木32は側面に刳り込みのあるタイプで、下部片側を隅切りする。隅切り部分の対角線上の上部角を半円状に加工していた。木33は下部片側を半円状に丸く加工する。いずれも丸太を割いたままで、表面加工は行っていない。木33は外表面に近い部分である。木30～32は井戸枠西側、木33は同北側から出土した。時期は平安時代後期である。

（８）植物遺存体（表７）

井戸830の埋土（図版13－７・８層）からシダ類の枝または茎、二葉マツの枝、溝900下部砂礫層からヤナギ科やケンポナシとみられる植物遺体、ホオノキ、ヒノキ、モミ、二葉マツが出土した。

また、流路1100出土の須恵器杯や壷内の土を洗ったところ、タラノキ（種子１点）、ザクロソウ（種子１点）、オモダカ（種子１点）、カヤツリグサ（果実１点）が出土した。湿地のアシやイネの根の周囲に形成される高師小僧（褐鉄鉱、９点）も検出した。流路1100埋土からは、イチイガシ（果実２点）、エゴノキ科（核４点）が出土した。立木または流木とみられる自然木は、流路1100の数箇所で確認している（図版２）。調査区北西ではイヌガヤ、アカガシ亜属やネズコとみられる木、調査区南東ではクヌギであった。

第３面の南調査区で検出した腐植土の塊（図版１－植物塊１・２、図版57－３）を採集し、水洗選別を行ったところ、様々な種類の植物遺体を検出した。特に、湿地や山野であったことを示す草本のスゲ属やオトギリソウ属が多い（表７）。

その他、モモの核が井戸620（２点）、井戸1205（２点）、井戸1210（１点）、建物３を構成する柱穴634（１点）、溝900（５点）、土坑896（２点）、溝840（８点）、溝440（１点）から出土した。その内、食痕が認められるモモの核は４点（井戸1210・溝840・溝440は各１点、井戸1205は２点）含まれる。溝900最下層からは、オニグルミが１点出土している。

表７　第３面土壌サンプル種実等一覧表

	和名	部位	科名	生育場所	植物塊1	植物塊2	植物塊2周辺
					1000㎖	200㎖	150㎖
木本	キイチゴ属	核	バラ	山野・道端	－	1	－
	タラノキ	種子	ウコギ	山野	1	1	－
草本	ミズ属	種子	イラクサ	山野の湿った所	5	－	－
	ヤナギタデ	果実	タデ	水辺・湿地	16	7	－
	オトギリソウ属	種子	オトギリソウ	湿地	－	86	1
	ネコノメソウ属	種子	ユキノシタ	陰湿地	－	1	－
	キジムシロ属	果実	バラ	野原・河原	4	1	3
	トウダイグサ属	種子	トウダイグサ	道端・山地・湿地	3	－	－
	スミレ属	種子	スミレ	道端・山野	2	1	－
	シロネ属	果実	シソ	水辺	－	－	1
	スズメノヤリ属	種子	イグサ	山野・原野	－	4	10
	ホシクサ科	種子	ホシクサ	水辺・田	－	－	3
	イネ科	穎	イネ	道端・野原	－	－	7
	カヤツリグサ科(三稜形)	果実	カヤツリグサ	湿地・山野	32	20	20
	カヤツリグサ科(扁平形)	果実	カヤツリグサ	湿地・山野	－	－	17
	カヤツリグサ属(三稜形)	果実	カヤツリグサ	水田・湿地・道端	2	2	－
	スゲ属	果実	カヤツリグサ	－	－	102	109
昆虫		頭・上翅・胸腹・脚	－	－	2	－	2

註

1） 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第３号　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1996年。なお、「平安京Ⅰ～Ⅴ期」「京都Ⅵ～XIV期」を「京都Ⅰ～XIV期」で統一した。

750頃			840頃			930頃			1010頃			1080～90頃			1180頃			1270頃			1360頃			1440頃			1500頃			1580～90頃			1660頃			1740年代頃			1820年代頃		
Ⅰ			Ⅱ			Ⅲ			Ⅳ			Ⅴ			Ⅵ			Ⅶ			Ⅷ			Ⅸ			Ⅹ			XI			XII			XIII			XIV		
古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新

2） 「（３）瓦類」中の参考・引用文献は、「付表３～５　瓦観察表　備考欄の参考文献」（123・124頁）と対応する。

3） 磯部 勝・鈴木久男「第124次調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概報　昭和62年度』京都市文化観光局、1988年

参考文献

『須恵器集成図録　第１巻－近畿編－』雄山閣出版、1995年

『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ、1966年

『年代のものさし－陶邑の須恵器－』大阪府立近つ飛鳥博物館、2006年

『弥生土器の様式と編年　近畿編Ⅱ』木耳社、1990年

吹田直子「山城地域」『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター、2006年

高野陽子「弥生時代後期～古墳時代の土器様相」『佐山遺跡』京都府遺跡調査報告書 第33集、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター、2003年

中久保辰夫「古墳時代後半期における土器研究の現状」『土器編年研究の現在と各時代の特質－須恵器生産の成立から終焉まで－』考古学研究会関西例会200回記念シンポジウム 発表要旨集、考古学研究会関西例会、2016年

中村 浩『和泉陶邑窯　出土須恵器の型式編年』芙蓉書房出版、2001年

上原真人「瀬戸内海を渡ってきた瓦」『大阪湾をめぐる文化の流れ－もの・ひと・みち－』帝塚山考古学研究所、1987年

５．ま と め

今回の調査は、平安時代後期に造営された円勝寺と成勝寺推定地で、昨年度の第１期調査の南側にあたる。各時期の遺構は、第１期調査区で検出した遺構と基本的には同じものである。主に弥生時代から江戸時代の遺構を検出し、縄文時代から江戸時代にわたる遺物が出土した。断続的ではあるが、土地利用の変遷が明らかとなった。

以下では、各時期の遺構のあり方について第１期調査と合わせて述べ、新たに判明した事柄や問題点を簡単にまとめておく。第１・２期の遺構番号が混在していることから、「２－井戸830」というように頭に調査次数番号を付す。

（１）第３面〔旧石器時代〕

第１期調査では部分的な断割による調査に留まったことから、今回は面的に広げて、旧石器時代の遺構や遺物の確認、動物などの足跡の検出に努めた。旧石器時代の生活痕跡を確認することはできなかったが、ＡＴ火山灰上面で根や植物の塊とみられるものを検出した。この植物遺体を分析した結果、最終氷期後期の特徴を有する。マツ科針葉樹を中心として落葉広葉樹を伴う植生が形成されていたと推定される。ＡＴ火山灰直下の層でも同様の植生が認められている。なお、上層の落葉広葉樹の花粉が下層よりも減少していることから、ＡＴ火山灰降灰後に乾燥と寒冷化が促進されて、落葉広葉樹が衰退していったと花粉分析から推測された。その他、草本類も確認されており、山野の開けた部分に湿地が広がっていたとみられる。

（２）第２面〔弥生時代後期から古墳時代後期〕（図39）

弥生時代後期から古墳時代後期の２－流路1100は、第１期調査の１－湿地460の続きである。北東から南西方向の自然流路が湿地化したものである。流れの方向と出土遺物の傾向から図５－９・12・14・15地点（以下、図番号は略す）で確認されている流路と繋がっており、連続した大きな流路であったと考えられる。自然科学分析結果によると、縄文時代中期から晩期にかけて、河川の影響を強く受ける場所であり、浸食と堆積を繰り返しながら扇状地が発達した地域であったと考えられる。縄文時代晩期初頭には流路の流れが減衰し、弥生時代にかけて後背湿地のような湿潤な土地環境へと変化した。弥生時代後期から古墳時代後期の湿地化は、この延長とみられる。温帯性針葉樹や落葉広葉樹が繁茂する多様な植生が広がっており、草本類が生育する開けた場所が増加し、そのような場所に集落が形成されたとみられる。

今回は住居跡や環濠など、集落を直接的に示す遺構を調査区内では確認できなかった。調査地西側では、弥生時代後期から古墳時代後期の竪穴建物や掘立柱建物、方形周溝墓などの集落が確認されている。西側の集落については、南端が９地点、西端が７地点、東端は12・16地点と考えられている。１－溝459は集落の端を限る人工的な溝と考えられるが、続きが９地点では確認されていないことから、９地点検出の弥生時代後期の竪穴建物群とどのような関係にあるのかが不明であ

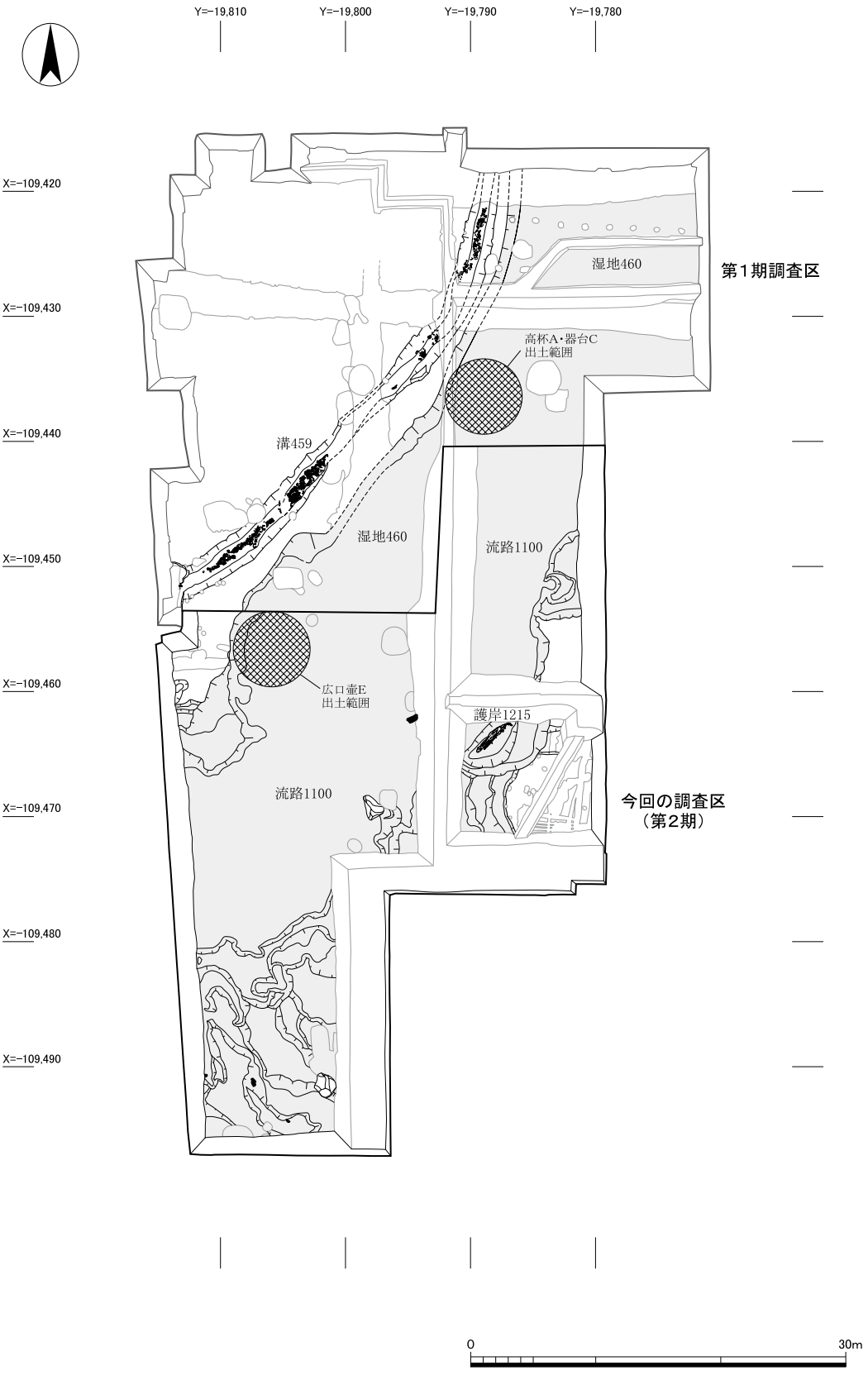


図39　遺構変遷図１〔弥生時代後期から古墳時代後期〕（１：500）

る。一方、自然流路として集落の東辺を限るのが２－流路1100である。その西岸に、弥生時代後期から古墳時代後期にかけて、土器や石器が投棄されていた。１－湿地460やその上流にあたる12・14地点の流路でも同じ時期の土器が出土し、周辺で古墳が確認されている。さらに上流域にあたる岡崎天王町でも古墳の周壕とみられる溝を検出しており、流路から出土した遺物は上流の遺構群からのものが流れ着いたとも考えられる。しかし、今回出土したものは完形に近い土器が多く、磨滅していないことから、その大半は近接した西側から投棄されたものと考えることができる。

土器の時期は、弥生時代後期から古墳時代後期に及び、第１期調査で出土した土器群のように、時期的にもまとまりが認められなかったが、弥生時代後期の広口壺Ｅとした一群は、１－湿地460から出土した器台Ｃ・高杯Ａと同様に加飾が施されており、何らかの関係があると考えられる。図39に図示したように、出土地点は約25ｍ離れていることから、地点ごとに異なる器種を使用した、水辺の祭祀が行われていたと考えられる。今後、出土状況のさらなる検討から、祭祀内容を考える必要があろう。また、須恵器はＴＫ216型式からＭＴ85型式のものが連続して出土し、杯蓋や杯身、その他の器形に完形品やそれに近いものが多い。特に131～133の須恵器高杯は、脚部の作りが同じ形を呈し、組み合う蓋101～103も近接地で出土しており、同時に投棄されたものと考えられる。ともに祭祀に利用されたものと考えられる。こうした状況から、古墳時代においても、集落の東側を限る流路で水辺の祭祀が行われていたと考えられる。２－流路1100西岸一帯は、弥生時代後期から古墳時代後期に連綿と続く祭祀場であったといえよう。

調査区南東で２－護岸1215を検出したことにより、弥生時代後期頃に東岸の一部を埋め立てて、護岸が造られていたことがわかった。護岸1215は、流路1100東岸の大きく抉れた部分に盛土を行って、長さ約３ｍの自然木と杭で土留めした遺構である。流路内に造られた遺構として、調査区北側の12地点では、古墳時代前期（庄内式併行期）とみられる堰や木材集積場が確認されており、集落が周辺に存在するとみられる。今回の調査以前に、流路1100より東側一帯では住居など集落に関係する遺構は確認されていないが、水場が流路東岸にあることから、東側にも集落が展開していた可能性を指摘できよう。また、西側とは異なる時期の集落が広がっていた可能性も考えられる。

（３）第１面２期〔平安時代中期末から鎌倉時代前期〕（図40）

１）平安時代中期末から後期初頭

この時期の遺構は、南北方向の２－溝1000がある。出土遺物の時期は、11世紀後半であり、法勝寺が造営された時期に相当する。溝1000は西肩口部分のみの検出であり、深さなど不明な点が多く、埋め戻されてから２－溝900が新たに再掘された。周辺の調査事例によると、前時代の流路跡に窪地が残り（９地点）、滞水していたとみられることから、溝は排水を目的に掘削された可能性がある。法勝寺造営とともに、周辺の街区も一緒に区画整理された可能性を示す資料と成り得る。

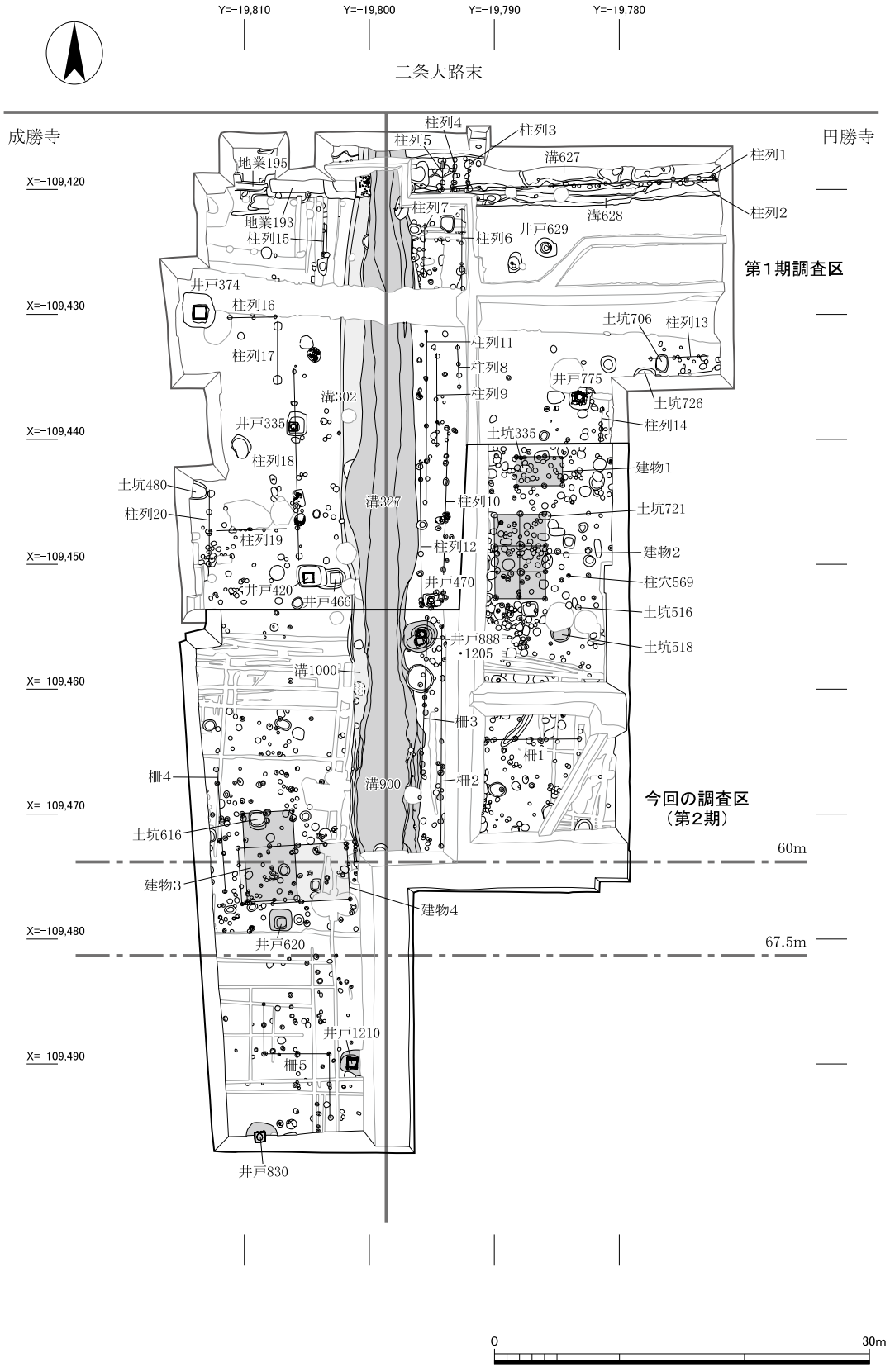


図40　遺構変遷図２〔平安時代中期末から鎌倉時代前期〕（１：500）

２）平安時代後期から鎌倉時代前期

この時期の始まりは、12世紀前半台に行われたと考えられる大規模な造成工事である。残存厚約0.3ｍの造成土は、調査区北半ほぼ全域で確認しており、この造成土は第１期調査でも北東地区の広い範囲で検出されている。円勝寺と成勝寺に関連するとみられる遺構は、この造成土面から成立している。今回の調査では、明らかな南北方向の段差は確認できていないが、第１期調査では、１－溝327東側は雛壇状に一段高く造られており、柱列（柵）が幾つも建て替えられていることが判明している。

第１期調査で検出した１－溝327の南延長である２－溝900を検出した。溝900は、東側の円勝寺と西側の成勝寺を区画していたと考えられる最大幅約５ｍの南北溝である。溝900の護岸に数回の変遷があることを確認し、平安時代後期から鎌倉時代前期にかけて修復されながら長期間存続していたことが明らかとなった。

また、溝900に面した東・西の敷地では、小規模な建物や柵・井戸・土坑などの遺構を多数検出した。出土した瓦質土器鍋釜などには、煤や焦げ痕が良好に残るものが認められ、土師器皿には油煙痕の遺存しているものも多く、生活に密着した遺物である。第１期調査では、東西・南北方向の柵（柱列）が区画溝周辺で特に多く確認されているが、建物復元には至らなかった。今回の調査では、１～２間や２～３間という小規模ではあるが、建物１～４が南北溝両側に建てられていた。復元した建物周辺に多数の柱穴群が集中していたことから、増築や建て替え、同じ規模の別棟の可能性があり、小規模な建物が立ち並んでいた景観が想定される。これに伴う井戸も確認されている。井戸は東側に５基（１－井戸629・470・775、２－井戸888・1205）、西側に７基（１－井戸374・335・420・466、２－井戸620・830・1210）ある。井戸は、南北区画溝付近に集中している。この中で最も古い１－井戸374・470や２－井戸620については、寺院造営時に造られていたとみられる。柵は５基あり、いずれも寺域中心部から建物や井戸を隔てるように造られていた。寺院の伽藍建物に関係する遺構を確認することはできなかったが、これら小規模建物群は寺院を維持・管理する人々の居住に関係する遺構群とみられ、寺域縁辺部にこうした人々が生活していた「雑舎」が配置されたと考えることができよう。

一方、円勝寺の寺域北東部に当たる14地点では、平安時代後期の南北・東西５間の礎石立建物１棟が確認されている。伽藍に関係する主要建物とは考えられていないが、小規模な堂宇の可能性もあり、今後検討が必要な建物である。この建物やその周辺と、第１・２期調査の遺構の在り方は大きく異なる。同じ縁辺部でも、様々な使い分けがなされていたとみられる。今後、門などの出入り口に関わる遺構の検出によって、その理由が明らかになることが望まれる。

これらの遺構群から出土した土器を検討したところ、12世紀第４四半期から13世紀前半にかけての遺構が多いことがわかった。円勝寺・成勝寺が造営された時期より、時期が下がることとなる。このことから、寺院造営当初より「雑舎」が造られていたわけではなく、順次人員を配置し、常駐する仕組みに転換していったと見て取れる。

今回、寺域を平安京の条坊区画と同じ一町（約120ｍ）四方と考えた場合、南北の中央である60

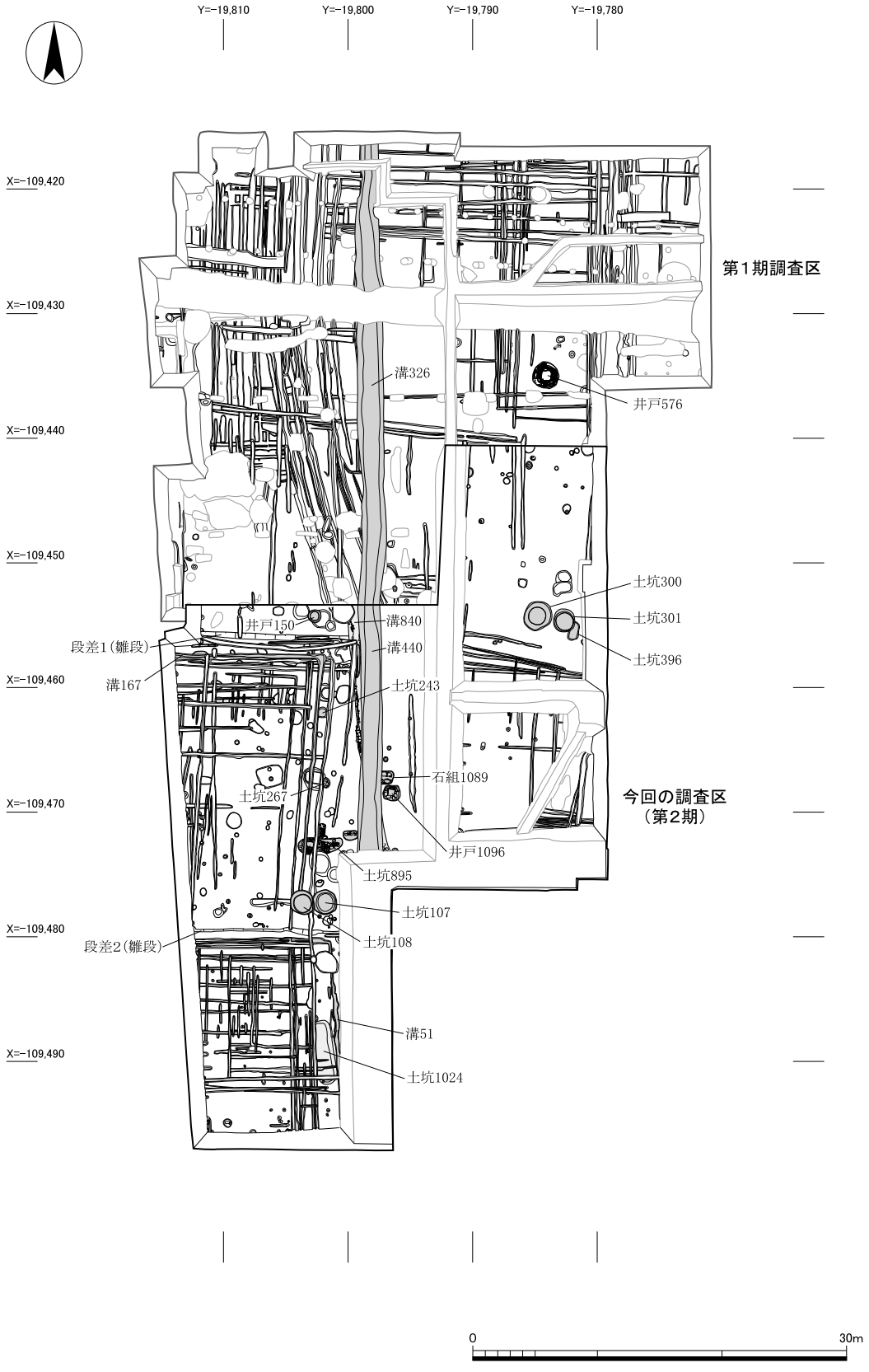


図41　遺構変遷図３〔鎌倉時代後期から江戸時代〕（１：500）

m付近が、今回の調査区の中程に位置する。図40には、二条大路末の南端、円勝寺と成勝寺の区画に実線を、二条大路末の南端から60ｍのところに一点破線を入れ、遺構が何らかの規制を受けているかを検討した。その結果、今回の調査区内では、特に規制を受けているような状況は確認できなかった。遺構の検出状況は、一町の中央付近でも変化はなく一様であり、２－溝900に橋が掛けられていたような痕跡も認められなかった。第１期調査では、14地点で確認された南北溝との距離から、東西が一町＝120ｍではなく、135ｍの可能性が指摘されている。これを南北に適用して一町の中央にあたる67.5ｍを図示して検討した。60ｍ付近と同様に変化はなく、近くに井戸などが造られていることから、橋が存在していたとしても、正式な構造物として造られていなかったと考えられる。

（４）第１面１期〔鎌倉時代後期から江戸時代〕（図41）

１）鎌倉時代後期から室町時代

第１期調査では溝326、井戸576、第２期調査では溝840、井戸1096、石組1089、土坑などがある。２－溝840は１－溝326の続きにあたるとみられる。２－溝840は石組護岸を施し、この溝への排水遺構とみられる２－土坑895が造られた。溝周辺部には地下式礎石が残る柱穴が点在し、井戸や土坑が造られている。集排水遺構とみられる２－土坑243・396などが点在する。こうした状況から、寺院として存続していたのか、農耕地に転換しているかは明らかにできなかった。

室町時代には、南北方向の２－溝440が掘り直され、東側に排水施設とみられる２－石組1089が設置された。しかし、溝440も溝840の後身として掘り直されているが、短期間に廃絶している。このころには、完全に耕作地化または土地が放置されたとみられる。

２）江戸時代以降

第１・２期調査ともに、多くの耕作溝を検出した。一部に中世の耕作溝が混ざっている可能性もあるが、その大半は江戸時代のものである。第２期調査では、段差１・２の南側などで溝の方向が転換していたことがわかっており、耕作地にする際に、雛壇造成を行ったと考えられる。段差の縁辺部では、肥溜めとみられる土坑が２基並びで造られた。調査区全面の縦横に耕作溝があり、農業産地として、盛んに耕作が行われていたことがわかる。

明治初頭の加賀藩前田屋敷の遺構は、今回の調査では確認できていない。南へ下がるほど近現代の盛土が厚く堆積していることから、近代以降に削平されたとみられる。

（５）出土遺物について

特筆すべきものとして、弥生時代後期とした梯子がある。上部２段分が遺存しており、先端部分を丸く加工している。裏面の両側縁近くに、８～10㎝間隔で、直径約３㎜、深さ約１㎝の孔が開けられていた。中央付近にも数箇所同じような孔が認められる。梯子本来の使用時のものなのか、祭祀用具など特殊なものへの転用後のものなのかは不明である。同じ時期の土器類に特殊な土器があり、また、第１期調査でも腰掛が出土していることから、この時期の集落と祭祀を考える上での

検討素材として重要である。

流路1100から出土した広口壺Ｅは、分類では広口壺の範疇に入れた。器形からは、広口長頸壺とも呼べるもので、系譜や作り方などを考える中で名称が変更される可能性も高い。形式も含めて今後検討が必要である。各個体の文様の組み合わせには同じものが存在していないことから、この器形をした土器が10個体以上、流路1100西岸に投棄されていたと考えられる。このような装飾性の高い土器は、実用的なものとは見なし難い。また、使用による磨滅なども確認していない。出自など不明な点が多く、類例の出土を待って検討したい。

平安時代後期から鎌倉時代前期の遺物では、輸入磁器に定窯系白磁皿や青白磁合子などの優品が含まれていた。いずれも伝世品とみられ、寺院の器物として施入されたとみられる。輸入陶磁器の出土量自体は、平安京内での出土量のように多いわけではないが、金銅製飾り金具や仏具関連の遺物などが少量ながらも出土しており、寺院の存在を窺わせる内容となっている。

最後に、調査区周辺の土地利用について、簡単にまとめる。岡崎地域では、縄文時代中期頃から生活が営まれ、弥生時代後期から古墳時代後期にかけて集落が形成された。この時期の集落東端には、湿地化した自然流路があり、水際で土器などを用いた祭祀を行い、境界として意識をしていたとみられる。法勝寺が造営されるまでの間、目立った土地利用はない。平安時代中期末に、法勝寺または白河街区に関連して、排水用とみられる南北溝が掘削された。もともと流路であったことから、地盤改良が必要となり、分厚く造成土が盛土された。このとき、築地などの基礎には礫が敷き詰められ、版築が行われた。また、自然地形の傾斜を解消するために、場所によっては雛壇状の段差を造り、平坦地を確保したとみられる。平安時代後期になると、円勝寺と成勝寺が相次いで造られ、境界として南北方向の区画溝が掘削された。その周辺に「雑舎」が造られていた。中世以降、寺院は廃絶し、その後耕作地に転換した。

註

1） 内田好昭「法勝寺跡・岡崎遺跡」『平成元年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1994年

参考文献

『下植野南遺跡』京都府遺跡調査報告第25冊、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター、1999年

『植物園北遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2012－24、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2013年

『長岡京右京二条四坊一・八・九町跡、上里遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2003－3、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2003年

『平安京右京六条四坊八町跡・西京極遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006－14、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2006年

『水垂遺跡　長岡京左京六・七条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第17冊、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1998年

付章１　自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査では、古墳時代以前の調査区周辺の古環境や土地利用状況に関する情報を得ることを目的として、放射性炭素年代測定、花粉分析、植物珪酸体分析を実施する。

（１）調査地点

今回の調査区は、白川により形成された扇状地に位置する。分析調査は、調査区西壁中央部及び第３面北調査区で実施する。調査地点の堆積層は21層に区分される。ここでは便宜的に上位より１層～21層と呼ぶ（図42）。各層の層相を以下に記載する。

１層：大～細礫、腐植質泥質砂～砂質泥の偽礫からなる客土と粗粒砂～細礫からなる砂礫などの層状盛土からなる。出土遺物等から近現代の盛土と推定されている。

２・３層：灰色を呈する中礫・細礫が混じる、砂質泥～砂質泥の偽礫・微小ブロックからなる。偽礫は中・下部で大きく、上部は泥がちである。いずれの層位も著しく撹拌されている。出土遺物から近世の耕作土と推定される。

４層：暗灰色を呈する、細礫、中礫がわずかに混じる腐植質砂質泥からなる。人為的に撹拌されており、下位の５層との層界は凹凸をなす。遺物も比較的多く出土し、遺構も検出されている。下位の５層を母材とする土壌生成が進行した層準で、平安時代後期の人為的撹拌層と推定される。

５層：灰色泥～泥質砂の偽礫・微小ブロックからなる客土である。出土遺物から平安時代後期の整地層とされる。

６・７層：灰色を呈する砂質泥～泥質砂、及びその偽礫からなり、遺物が混じる。出土遺物の配向は不規則で鉛直方向を示すものも含まれる。出土遺物の時代性は古墳時代後期～平安時代前期である。人為的営力で形成された客土と推定される。

８層：上部が灰色泥、中下部が腐植質砂質泥及びその偽礫からなる。中下部は層相から人為的に撹拌された堆積物とみられる。上部は、この撹拌層を覆う泥層で、調査地点の水位が何らかの原因で上昇したことを示唆する。出土遺物から古墳時代後期以降と推定される。

９層：灰～暗灰色を呈する、粗粒～中粒砂薄層を挟在する、上方細粒化する泥質砂～砂質泥からなる。最上部は８層形成期の土壌生成作用の影響が及んでいる。弥生時代後期～古墳時代後期の遺物が出土している。

10層：灰～暗褐色を呈する、細粒砂～中粒砂の薄層を挟在する、木材片が混じる有機質泥質砂からなる。下部は葉理構造が確認されるが、上部は擾乱されており、堆積構造が乱れている。

11層：上方細粒化するトラフ型斜交葉理をなす砂礫からなる。12層～14層上部までの堆積物を侵食する浅い流路充填堆積物である。

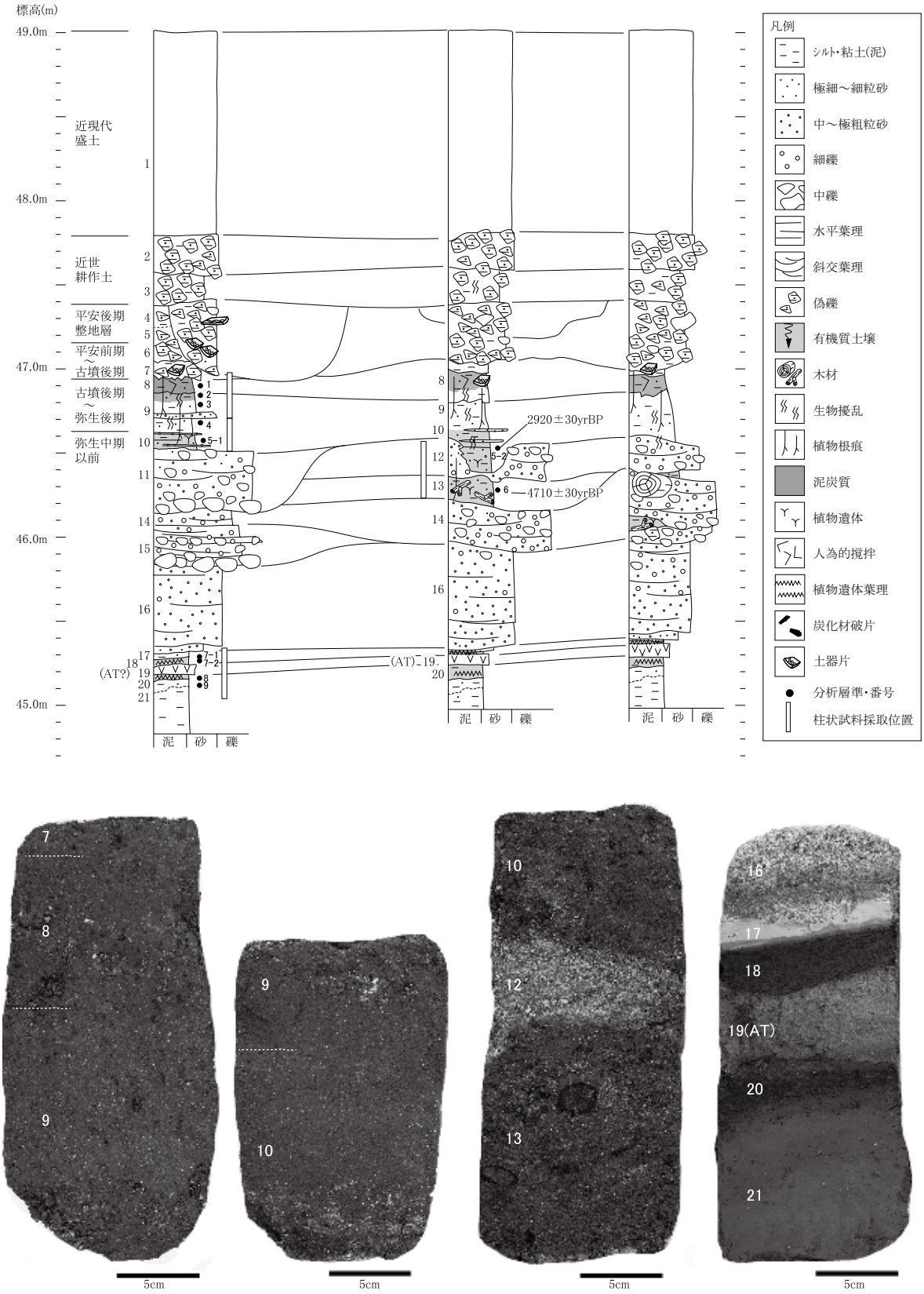


図42　調査地点の層序及び分析層準

12層：灰色を呈する、低角度のトラフ型斜交葉理が発達する砂礫～粗粒砂からなる。流路充填堆積物と推定される。

13層：木材片・植物遺体が混じる黒褐色有機質砂質泥からなる。葉理構造が確認されるが、上部は擾乱により不明瞭となっている。流路の流れが減衰した時期に形成された堆積物とみられる。

14層：上方細粒化するトラフ型斜交葉理をなす砂礫からなる。丸太状の木材が混じる。流路充填堆積物とみられる。

15層：トラフ型斜交葉理が発達する、上方細粒化する砂礫からなる。流路充填堆積物とみられる。

16層：葉理構造が確認される細礫混じり粗粒砂から極粗粒砂からなる。逆級化成層の積層のようにもみえる。生物擾乱の影響が及んでおり、葉理が不連続となっている。

17層：灰白色を呈する、水平葉理をなす細粒極細粒砂～シルトからなる。

18層：暗褐色を呈する、植物遺体葉理を挟在する有機質細粒砂質泥からなる。生物擾乱により初生の構造が乱れている。また発掘調査時には樹木根が確認されている。

19層：黄灰色を呈する細粒砂からなる。バブル型火山ガラスからなり、層位的にみて姶良Ｔｎ火山灰に対比される可能性が高い。なお、本層上部はＡＴの再堆積物とみられる。

20層：黒褐～暗灰色を呈する、植物遺体葉理を挟在する砂混じり有機質泥から泥質砂からなる。上部は有機物含量が減少する。

21層：灰～暗灰色を呈する極粗粒砂混じり極細粒砂泥からなり、上部は土壌生成が進行している。

（２）分析試料

各分析試料は、調査区西壁断面より採取した不撹乱柱状試料より抽出した。試料１～４・５-１・５-２・６・７-１・７-２・８・９の計11点である。花粉分析は全試料、植物珪酸体は試料番号１・２・４、年代測定は、試料５-２層準と試料６層準の木材片について実施する。

（３）分析方法

１）放射性炭素年代測定

植物遺体は、メス・ピンセットなどにより、根や土壌など後代の付着物を、物理的に除去する。塩酸（HCl）により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム（NaOH）により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（ＡＡＡ処理）。これらの試料を燃焼させて二酸化炭素を発生させる。発生した二酸化炭素を真空ラインで精製する。その後鉄を触媒として還元し、グラファイトを得る。得られたグラファイトをカソードにプレスしてターゲットを作成する。タンデム加速器のイオン源に装着し、^{14}Cの計数、^{13}Cの濃度（$^{13}C/^{12}C$）、^{14}Cの濃度（$^{14}C/^{12}C$）の測定を行う。測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-Ⅱ）とバックグラウンド試料の測定も行う。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（yrBP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。

暦年較正に用いるソフトウエアはCALIB var.7.1である。また、このソフトウエアで用いられる較正曲線の最新のものは2013年に発表されたものである（Reimer et ai.,2013）。なお、年代測定値は、国際的な取り決めにより、測定誤差の大きさによって値を丸めるが（Stuiver and Polach 1977）、将来的な較正曲線ならびにソフトウエアの更新に伴う再計算ができるようにするため、丸めない値（１年単位）を記す。暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い（14Cの半減期5730 ± 40年）を較正することによって、暦年代に近づける手法である。

２）花粉分析

花粉分析は、試料約10gを秤量し、水酸化カリウムによる腐植酸の除去、0.25㎜の篩による篩別、重液（臭化亜鉛，比重2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸９：濃硫酸１の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下で、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本はじめ、Erdman（1952,1957）、Faegri and Iversen（1989）などの花粉形態に関する文献や、島倉（1973）、中村（1980）、藤木・小澤（2007）、三好ほか（2011）等の邦産植物の花粉写真集などを参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表、及び花粉化石群集の層位分布図として表示する。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

３）植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）及び葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤（2010）の分類を参考に同定し、計数する。分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量を正確に計量し、乾土１ｇあたりの植物珪酸体含量（同定した数を乾土１ｇあたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量密度の一覧表と層位分布図として示す。その際、100個/ｇ未満は「<100」で表示する。各分類群の含量は10の位で丸める（100単位にする）。また、各分類群の植物珪酸体含量層位的変化を図示する。

（4）結果

1）放射性炭素年代測定

結果を表８、図43に示す。補正年代値は12層木材は2,920±30yrBP、14層の木材は4,710±30yrBPを示す。測定誤差2σの暦年代は、12層の木材が3160～2970 cal BP、14層の木材が5580～5320 cal BPを示す。

谷口（2001）による考古編年と14C年代値の比較検討結果を参考にすると、12層の木材が縄文時代晩期初頭、14層の木材が縄文時代中期前葉以降に形成されたことが推定される。

以上の年代値及び上述の層相、出土遺物の時代性に基づくと、調査区の堆積環境は次のように変

表８　放射性炭素年代測定結果

試料名	種別	分析方法	測定年代 yrBP	δ ^{13}C (‰)	補正年代 yrBP (暦年較正用)	暦年較正年代					Code No.
							年代値		相対比	中央値	
10層下部 試料5-2	木材	AAA	2970±30	−27.97±0.59	2920±30 (2919±27)	σ	cal BC 1190 − cal BC 1178	cal BP 3139 − 3127	0.098	cal BP 3062	IAAA-153703
							cal BC 1160 − cal BC 1144	cal BP 3109 − 3093	0.132		
							cal BC 1130 − cal BC 1052	cal BP 3079 − 3001	0.769		
						2σ	cal BC 1209 − cal BC 1024	cal BP 3158 − 2973	1.000		
13層 試料6	木材	AAA	4780±30	−29.33±0.41	4710±30 (4705±29)	σ	cal BC 3622 − cal BC 3605	cal BP 5571 − 5554	0.154	cal BP 5402	IAAA-153704
							cal BC 3523 − cal BC 3499	cal BP 5472 − 5448	0.244		
							cal BC 3434 − cal BC 3378	cal BP 5383 − 5327	0.602		
						2σ	cal BC 3630 − cal BC 3580	cal BP 5579 − 5529	0.203		
							cal BC 3533 − cal BC 3491	cal BP 5482 − 5440	0.225		
							cal BC 3469 − cal BC 3373	cal BP 5418 − 5322	0.572		

1)計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1を使用。
2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
3)付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。
4)AAAは、酸、アルカリ、酸処理、AaAは、アルカリの濃度を薄くした処理を示す。
5)計算には表に示した丸める前の値を使用している。
6)1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
7)統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である
8)相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。
9)中央値は、確率分布図の面積が二分される値を年代値に換算したもの。

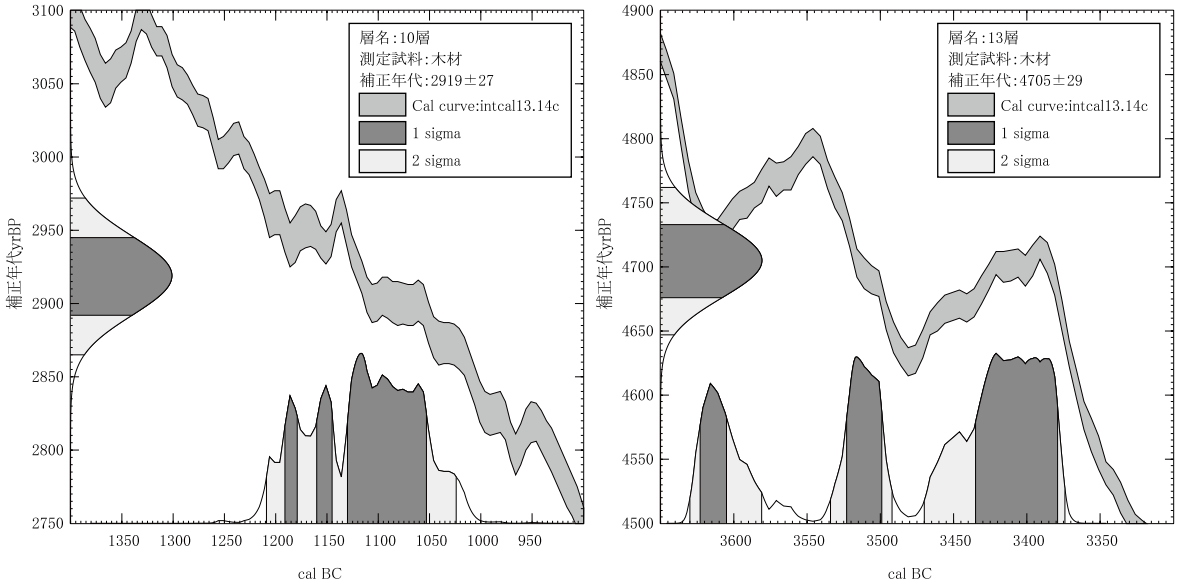


図43　暦年較正結果

化したことが推定される。調査区の深堀トレンチ（第３面北調査区）で確認された19層の火山灰は、約3万年前（Smithほか,2013）に南九州の姶良カルデラから噴出した姶良Tn火山灰（AT）と推定される。AT降灰期は湿地のような堆積場であったとみられる。その後、調査区には河川堆積物が厚く堆積するになる。この河川堆積物は侵食と堆積を繰り返している。特に河川堆積物上部の15層～14層は倒木され運搬堆積したとみられる木材を含んでおり、13層の年代値から、縄文時代中期前葉以前に形成されたこと、本時期に土砂流出が増大していることが推定される。その後も侵食・堆積を繰り返しており、縄文時代晩期初頭以降、弥生時代にかけて、河川の影響が弱まり、後背湿地のような堆積環境に変化していったと推定される。

２）花粉分析

結果を表９、図44に示す。花粉化石は、最下位の21層（試料９）を除いて豊富に産出する。保存状態は全体的にやや悪い～悪い程度であるが、18層（試料７－１・７－２）は普通である。

21層（試料９）は、検出個体数が少ないが、木本花粉ではモミ属、ツガ属、マツ属、コナラ属コナラ亜属などが、草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属、キク亜科などが確認される。

20層・18層（試料８～７－１）は、木本花粉ではツガ属、マツ属（単維管束亜属を含む）が多産し、モミ属、トウヒ属、クマシデ属－アサダ属、カバノキ属、ハンノキ属、コナラ亜属などを伴う。試料８からは、消滅種のハリゲヤキ属も確認される。草本花粉では、カヤツリグサ科が最も多く産出し、イネ科、ワレモコウ属、セリ科、ヨモギ属、キク亜科などを伴う。

13層（試料６）では、木本花粉が優占し、その中ではアカガシ亜属が優占する。

10～９層下部（試料６～４）でも木本花粉が優占し、アカガシ亜属が多産するが、針葉樹のスギ属、落葉広葉樹のコナラ亜属が漸増する。

９層上部～８層（試料３～１）をみると、木本花粉ではスギ属が多産し、モミ属、ツガ属、マツ属（複維管束亜属）、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、クリ属、シイ属、ニレ属－ケヤキ属等を伴う。８層（試料１）からは、栽培種の可能性があるカキノキ属も確認される。草本花粉は上位に向かって増加する。中でもイネ科の増加が顕著で、その中には栽培種のイネ属に形態が類似した個体（以下、イネ属型とする）も確認される。その他ではカヤツリグサ科、アブラナ科、セリ科、ヨモギ属等を伴う。また、わずかではあるが、ホシクサ属、ミズアオイ属などの水生植物も確認される。

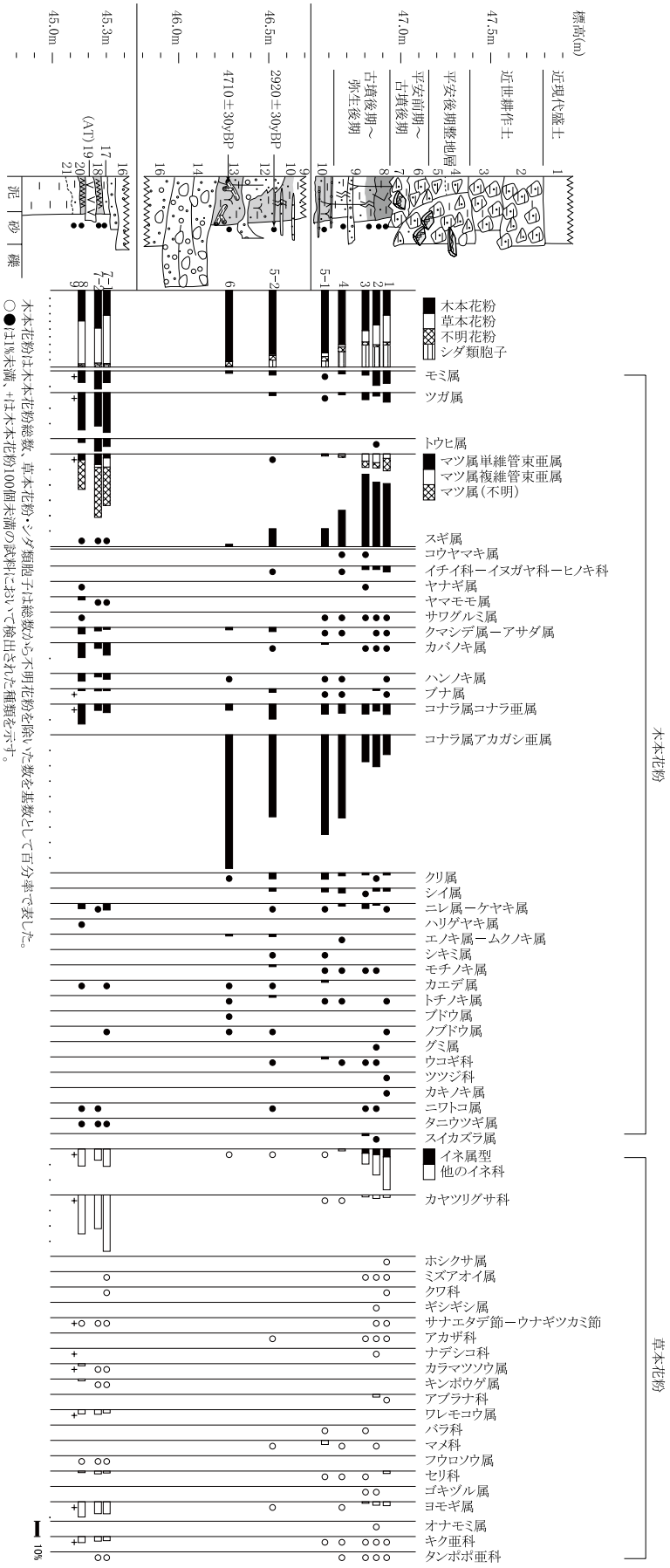
３）植物珪酸体分析

結果を表10、図45に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。植物珪酸体含量密度は、20,000～30,000個/gの範囲にある。

栽培植物のイネ属は、８層（試料１）・９層最上部（試料２）から産出する。その含量密度は、８層上部（試料１）の短細胞珪酸体で500個/g程度、機動細胞珪酸体で700個/g程度、９層上部（試料２）の短細胞珪酸体で600個/g程度、機動細胞珪酸体で約1,400個/gであり、試料２でやや多い。また各試料から、穎珪酸体も検出される。

表9　花粉分析結果

種　類	上段：層名　下段：試料番号										
	8層	9層上部	9層中部	9層下部	10層上部	10層下部	13層	18層上部	18層下部	20層	21層
	1	2	3	4	5-1	5-2	6	7-1	7-2	8	9
木本花粉											
モミ属	17	25	6	7	1	7	4	18	26	18	2
ツガ属	13	6	10	5	1	5	−	61	48	58	6
トウヒ属	−	1	−	−	−	−	−	12	18	6	−
マツ属単維管束亜属	−	−	−	−	−	−	−	6	15	8	2
マツ属複維管束亜属	6	15	10	4	2	−	−	14	4	1	−
マツ属（不明）	17	9	9	4	2	3	−	59	72	46	4
コウヤマキ属	−	−	1	1	−	−	−	−	−	−	−
スギ属	86	111	102	84	34	30	4	1	1	1	−
イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科	8	6	5	2	−	1	−	−	−	−	−
ヤナギ属	−	−	1	−	−	−	−	−	−	1	−
ヤマモモ属	−	−	−	−	−	−	−	2	2	5	−
サワグルミ属	1	1	1	1	1	−	−	−	−	2	−
クマシデ属ーアサダ属	1	1	−	1	1	7	4	3	5	10	−
カバノキ属	2	2	1	−	3	2	−	19	8	23	−
ハンノキ属	1	−	−	1	1	−	1	9	5	12	−
ブナ属	2	3	−	2	1	6	−	3	3	3	1
コナラ属コナラ亜属	14	12	14	21	19	25	10	13	9	31	2
コナラ属アカガシ亜属	27	55	38	192	188	137	218	−	−	−	−
クリ属	3	2	3	7	12	10	2	−	−	−	−
シイ属	4	5	2	11	7	5	−	−	−	−	−
ニレ属ーケヤキ属	2	3	7	6	2	2	−	10	2	8	−
ハリゲヤキ属	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−
エノキ属ームクノキ属	−	−	−	1	−	4	3	−	−	−	−
ヤドリギ属	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−
シキミ属	−	−	−	−	1	1	−	−	−	−	−
カラスザンショウ属	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−
アカメガシワ属	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−
シラキ属	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ウルシ属	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−
モチノキ属	−	2	1	1	2	3	−	−	−	−	−
カエデ属	−	−	−	−	4	1	1	2	−	1	−
トチノキ属	1	−	−	1	1	3	1	−	−	−	−
ブドウ属	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−
ノブドウ属	1	−	−	−	−	1	1	1	−	−	−
グミ属	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ウコギ科	−	1	1	1	4	1	−	−	−	−	−
ツツジ科	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
カキノキ属	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
エゴノキ属	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−
ニワトコ属	−	1	1	−	−	1	−	−	1	1	−
タニウツギ属	−	−	−	−	−	−	−	2	1	2	−
スイカズラ属	−	1	3	−	−	−	−	−	−	−	−
草本花粉											
イネ属型	32	21	11	−	−	−	−	−	−	−	−
他のイネ科	134	76	28	6	1	1	1	81	32	65	6
カヤツリグサ科	10	13	5	3	3	−	−	262	96	148	2
ホシクサ属	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ミズアオイ属	1	3	1	−	−	−	−	2	−	−	−
クワ科	3	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−
ギシギシ属	−	2	−	−	−	−	−	−	−	−	−
サナエタデ節ーウナギツカミ節	5	2	−	−	−	−	−	1	2	2	1
アカザ科	2	2	1	−	−	1	−	−	−	−	−
ナデシコ科	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	1
カラマツソウ属	−	−	−	−	−	−	−	2	2	8	1
キンポウゲ属	−	−	−	−	−	−	−	1	1	7	−
アブラナ科	3	10	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ワレモコウ属	−	−	−	−	−	−	−	15	13	16	1
バラ科	−	−	1	−	1	−	−	−	−	−	−
マメ科	−	2	−	1	9	2	−	−	−	−	−
フウロソウ属	−	−	−	−	−	−	−	4	2	1	−
ツリフネソウ属	3	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
アカバナ属ーミズユキノシタ属	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−
セリ科	10	−	3	1	1	−	−	9	8	6	−
オミナエシ属	−	−	2	−	−	−	−	−	−	−	−
ゴキヅル属	−	1	1	−	−	−	−	−	−	−	−
ツルニンジン属	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−
ヨモギ属	16	13	4	2	−	1	−	56	34	58	4
オナモミ属	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−
キク亜科	4	1	1	2	2	−	−	19	13	23	6
タンポポ亜科	3	3	2	1	−	−	−	2	1	−	−
不明花粉											
不明花粉	24	15	16	30	21	18	16	11	11	14	8
シダ類胞子											
ヒカゲノカズラ属	1	1	1	2	−	−	−	−	−	−	−
ゼンマイ属	1	2	1	2	2	−	−	−	−	−	−
他のシダ類胞子	185	153	117	97	26	28	4	23	13	12	41
合　計											
木本花粉	209	264	216	354	289	256	250	235	220	238	17
草本花粉	227	152	61	16	17	5	1	455	204	334	22
不明花粉	24	15	16	30	21	18	16	11	11	14	8
シダ類胞子	187	156	119	101	28	28	4	23	13	12	41
合計(不明を除く)	623	572	396	471	334	289	255	713	437	584	80



木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数を基数として百分率で表した。
○●は1%未満、+は木本花粉100個未満の試料において検出された種類を示す。

図44　花粉化石群集の層位分布

表10　植物珪酸体含量

分類群	上段:層名　下段:試料番号 8層 1	9層上部 2	9層下部 4
イネ科葉部短細胞珪酸体			
イネ属	500	600	−
クマザサ属	200	1,100	800
メダケ属ネザサ節	300	1,000	300
タケ亜科	5,100	7,500	8,500
ヨシ属	<100	<100	100
コブナグサ属	100	200	−
ススキ属	100	300	−
イチゴツナギ亜科	400	400	200
不明	3,700	5,300	3,300
イネ科葉身機動細胞珪酸体			
イネ属	700	1,400	−
クマザサ属	300	1,000	1,000
メダケ属ネザサ節	300	1,000	800
タケ亜科	4,500	5,400	7,900
ヨシ属	<100	<100	200
ススキ属	<100	200	−
不明	3,400	5,900	6,200
合計			
イネ科葉部短細胞珪酸体	10,500	16,700	13,200
イネ科葉身機動細胞珪酸体	9,300	15,100	16,100
植物珪酸体含量	19,800	31,800	29,300
珪化組織片			
イネ属頴珪酸体	*	*	−
イネ科起源(その他)			
棒状珪酸体	**	**	**
長細胞起源	**	**	*
毛細胞起源	*	*	*
草本起源			
カヤツリグサ科	*	*	−

数値は10の位で丸めている含量密度(個/g)で示す。<100は100個/g未満、−は未検出、*は含有、**は多く 含有を示す。

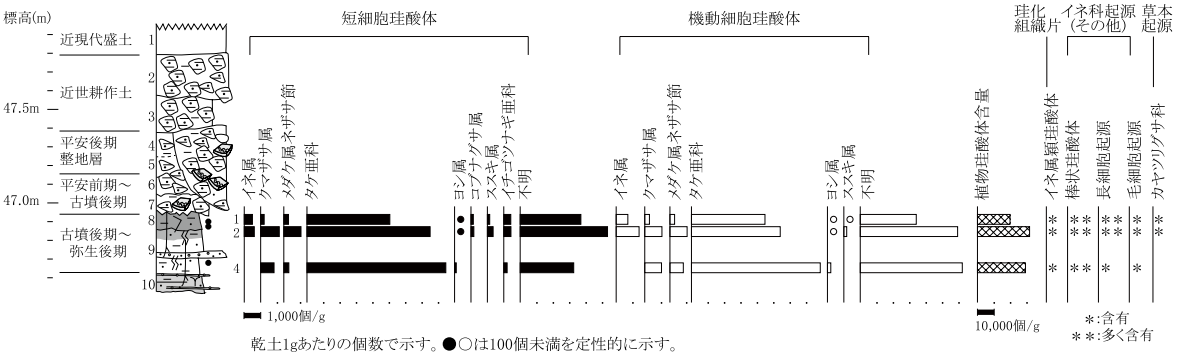


図45　植物珪酸体含量密度の層位分布

この他にクマザサ属やメダケ属を含むタケ亜科、ヨシ属、コブナグサ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科などが認められる。いずれもタケ亜科の産出が目立つ。またイネ科起源の棒状珪酸体、長細胞起源、毛細胞起源、草本起源としてカヤツリグサ科も見られる。

試料４では、イネ属が産出しない。クマザサ属やメダケ属を含むタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属やイチゴツナギ亜科などが認められる。またイネ科起源の棒状珪酸体、長細胞起源、毛細胞起源も見られる。

（５）考察

調査区の深堀トレンチ（第３面北調査区）で確認された19層の火山灰は、約３万年前（Smithほか,2013）に南九州の姶良カルデラから噴出した姶良Tn火山灰（AT）と推定される。19層直上・直下の有機質泥層20層・18層（試料８・７−１・７−２）で確認された花粉化石群集をみると、種類構成は、木本類ではツガ属、単維管束亜属などのマツ属を中心に、モミ属、トウヒ属などの針葉樹を主体とし、その他、クマシデ属−アサダ属、カバノキ属、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属などの落葉広葉樹を伴う。層位的にはAT直上の18層で針葉樹のトウヒ属・マツ属が増加し、落葉広葉樹のコナラ亜属が減少傾向を示す。当該層準は最終氷期後期に相当する可能性が高く、調査地周辺の調査事例によると、この時期はモミ属、ツガ属、トウヒ属、マツ属などのマツ科針葉樹と、コナラ亜属、カバノキ属、ハンノキ属などの落葉広葉樹による森林が形成されていたとされている（高原,1998）。今回の分析結果も既往の調査成果と同調的であり、最終氷期後期の植生を反映しているとみられる。当時の調査区背後の山地など安定した場所にはマツ科針葉樹から植生が成立しており、河川沿いなど洪水などで障害を受けやすい場所を中心に再生が容易な広葉樹が生育していたと思われる。また、AT降灰後には乾燥・寒冷化が進行し、落葉広葉樹は衰退傾向にあったことが推定される。一方、局地的な植生を反映しているとみられる草本類では、イネ科、カヤツリグサ科、ワレモコウ属、セリ科、ヨモギ属、キク亜科など、開けた明るい場所に生育する種群が多く認められる。これらの種類は堆積域である湿地やその周辺に分布していたと推測される。

調査区は、その後、縄文時代晩期までは河川の影響をつよく受ける場所に変化する。縄文時代中期初頭の流路の流れが減衰した時期に形成された有機質泥の13層（試料６）では、暖温帯性常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林）の主要構成要素であるコナラ属アカガシ亜属が優占している。

近畿地方の木本花粉の検出状況を既存の調査事例からみると、カシ類など常緑広葉樹の花粉化石は、約9500年前（暦年較正をしない場合は約8000年前）から検出し始め、約7000年前（暦年較正をしない場合は約6000年前）に常緑広葉樹花粉と落葉広葉樹花粉の割合が逆転する。その後、約3,000～2,000年前にスギ、ヒノキ、コウヤマキ、モミ、ツガなどの針葉樹もしくは、コナラ亜属などの落葉広葉樹が再び増加する（古谷,1979；前田,1984；那須,1989；松江・七山,2001；高原,1998）。巨椋池の花粉分析結果をみても、今回の測定結果と同じ約5000年前（暦年較正をしない場合は約4500年前）には、アカガシ亜属が卓越する花粉化石群集が得られている（岡田,1997）。このことから、縄文時代前期～中期にかけて、盆地周辺の山地から扇状地にかけて常緑広葉樹林が拡がっていたことが推定される。このような常緑広葉樹林の分布拡大の背景には、後背地における扇状地の発達などが関係している可能性があり、今後地形発達過程を踏まえた評価が必要である。

縄文時代中期以降、縄文時代晩期初頭にかけても調査区は侵食と堆積を繰り返す流路の侵入をみるが、縄文時代晩期以降、弥生時代にかけて、その影響が弱まり、後背湿地のような堆積環境に変化する。縄文時代晩期初頭の流路の流れが減衰した時期に形成された10層（試料５−１・５−２）の有機質泥層の花粉化石群集は、依然としてコナラ属アカガシ亜属が多産するものの、温帯性針葉

樹のスギ属、落葉広葉樹のクリ属・コナラ亜属が増加している。このことは縄文時代中期から晩期にかけて、周辺植生が変化していることを示している。同様の傾向は河内平野や京都盆地の花粉分析結果でも普遍的に認められることから、広域的な環境変化に起因する植生変化と推定される。常緑広葉樹の減少傾向と温帯針葉樹もしくは落葉広葉樹の増加は、気候が悪化したこと、とりわけ多雨化したことを意味しているとされる（那須,1989）。

今回の調査区の北方の白川扇状地に位置する北白川追分町遺跡では、縄文時代晩期後半頃の植物化石群集が確認されている。花粉化石群集では多産するアカガシ亜属以外にコナラ亜属などの落葉広葉樹、スギ、ヒノキ科型の花粉が比較的多く認められている（佐々木・高原,2012）。大型植物化石では、カヤ、オニグルミ、トチノキなどが認められており（那須,2012）、木材遺体では、アカガシ亜属、コナラ節、フジ属、オニグルミ、クリ、エノキ、ヒノキなど多様な樹種が確認されている（杉山ほか,2012）。これらの植物化石群集から、縄文時代晩期頃の白川扇状地には常緑広葉樹だけでなく、温帯性針葉樹、落葉広葉樹など多様な樹種からなる植生が存在したことが推定されている。今回の調査区における花粉分析結果も、概ね同調的で、同様な植生の存在を示唆する。

弥生時代後期～古墳時代後期に形成された９層～８層（試料３～１）では、スギ属が多産し、アカガシ亜属の割合は減少する。また、モミ属、ツガ属、マツ属、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科などの温帯性針葉樹もやや多くなる。草本花粉をみると、縄文時代晩期以前は草本類がわずかにしか認められないが、弥生時代後期～古墳時代の層準では草本類の割合が増加し、特にイネ科の増加が顕著である。多産するイネ科花粉には、栽培種のイネ属型も含まれており、植物珪酸体分析結果をみても、９層下部には含まれない栽培種のイネ属珪酸体が、９層最上部・８層（試料２・１）に含まれる。これらのことを踏まえると、弥生時代後期～古墳時代後期は周辺でイネ科を主体とする草本類が生育する開けた場所が増加したと推測され、稲作地が拡大した可能性が指摘される。このような常緑広葉樹の減少と針葉樹もしくは落葉広葉樹の増加、草地の拡大と栽培植物の出現といった植生変化は人間活動に起因する変化である可能性が高い。なお、植物珪酸体で産出するクマザサ属やメダケ属を含むタケ亜科、ヨシ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科なども周辺植生を構成する要素であったとみられる。タケ亜科には、開けて乾いた場所に生育する種類が多く、当時も高燥な開けた場所に生育していたとみられる。ただし、タケ亜科の植物珪酸体は他のイネ科と比較して風化に強く、また生産量の多い点がこれまでの研究から指摘されており（近藤,1982；杉山・藤原,1986）、他の種類よりも残留しやすいことが知られている。そのため、実際の周辺植生においては、タケ亜科の割合はそれほど多くなかったとみられる。

引用文献

Erdtman G.,1952,Pollen morphology and plant taxonomy: Angiosperms（An introduction to palynology. I）.Almqvist&Wiksells,539p.

Erdtman G.,1957, Pollen and Spore Morphology/Plant Taxonomy: Gymnospermae, Pteriodophyta, Bryophyta（Illustrations）（An Introduction to Palynology. II）,147p.

Feagri K. and Iversen Johs.,1989,Textbook of Pollen Analysis.The Blackburn Press,328p.

藤木利之・小澤智生,2007,琉球列島産植物花粉図鑑.アクアコーラル企画,155p.

古谷正和,1979,大阪周辺地域におけるウルム氷期以降の森林植生変遷.第四紀研究,18,121-141.

近藤錬三,1982,Plant opal分析による黒色腐植層の成因究明に関する研究.昭和56年度科学研究費（一般研究C）研究成果報告書,32p.

近藤錬三,2010,プラント・オパール図譜.北海道大学出版会,387p.

前田保夫,1984,花粉分析学的研究よりみた近畿地方の洪積（更新）世後期以降の植生変遷.宮脇　昭（編著）,日本植生誌　近畿,至文堂,87-99.

松江　実千代・七山　太,2001,神戸市和田岬沖コアよりみた完新世中～後期における植生変遷,日本花粉学会第42回大会講演要旨,　14.

三好教夫・藤木利之・木村裕子,2011,日本産花粉図鑑.北海道大学出版会,824p.

中村　純,1980,日本産花粉の標徴　Ⅰ　Ⅱ（図版）.大阪市立自然史博物館収蔵資料目録　第12,13集,91p.

那須浩郎,2012,京都大学北部構内BH31区の発掘調査 大型植物遺体分析 「京都大学構内遺跡調査報告研究年報2009年度」,京都大学文化財総合研究センター,209-224

那須孝悌,1989,活動の舞台：概論.永井昌文・那須孝悌・金　関恕・佐原　真（編著）,弥生文化の研究1　弥生人とその環境,雄山閣出版,119-130.

岡田俊子,1997,京都府南部巨椋池堆積物の花粉化石組成にみられる人為的影響-アカガシ亜属の減少とイネ属の増加.第四紀研究, 36 ,207-213.

Reimer PJ, Bard E, Bayliss A, Beck JW, Blackwell PG, Bronk Ramsey C, Buck CE, Cheng H, Edwards RL, Friedrich M, Grootes PM, Guilderson TP, Haflidason H, Hajdas I, Hatté C, Heaton TJ, Hoffmann DL, Hogg AG, Hughen KA, Kaiser KF, Kromer B, Manning SW, Niu M, Reimer RW, Richards DA, Scott EM, Southon JR, Staff RA, Turney CSM, van der Plicht J. ,2013,IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0–50,000 years cal BP. Radiocarbon ,55,1869–1887.

佐々木尚子・高原光,2012,京都大学北部構内BH31区の発掘調査　花粉分析.「京都大学構内遺跡調査報告研究年報 2009年度」,京都大学文化財総合研究センター,225 － 235

島倉巳三郎,1973,日本植物の花粉形態.大阪市立自然科学博物館収蔵目録　第5集,60p.

Stuiver Minze and Polach A Henry,1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon , 19, 355-363.

杉山真二・藤原宏志,1986,機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－.考古学と自然科学,19,69-84.

杉山淳司・金井いずみ・伊東隆夫,2012,京都大学北部構内BH31区の発掘調査 樹種同定 「京都大学構内遺跡調査報告研究年報 2009年度」 ,京都大学文化財総合研究センター　,173-191

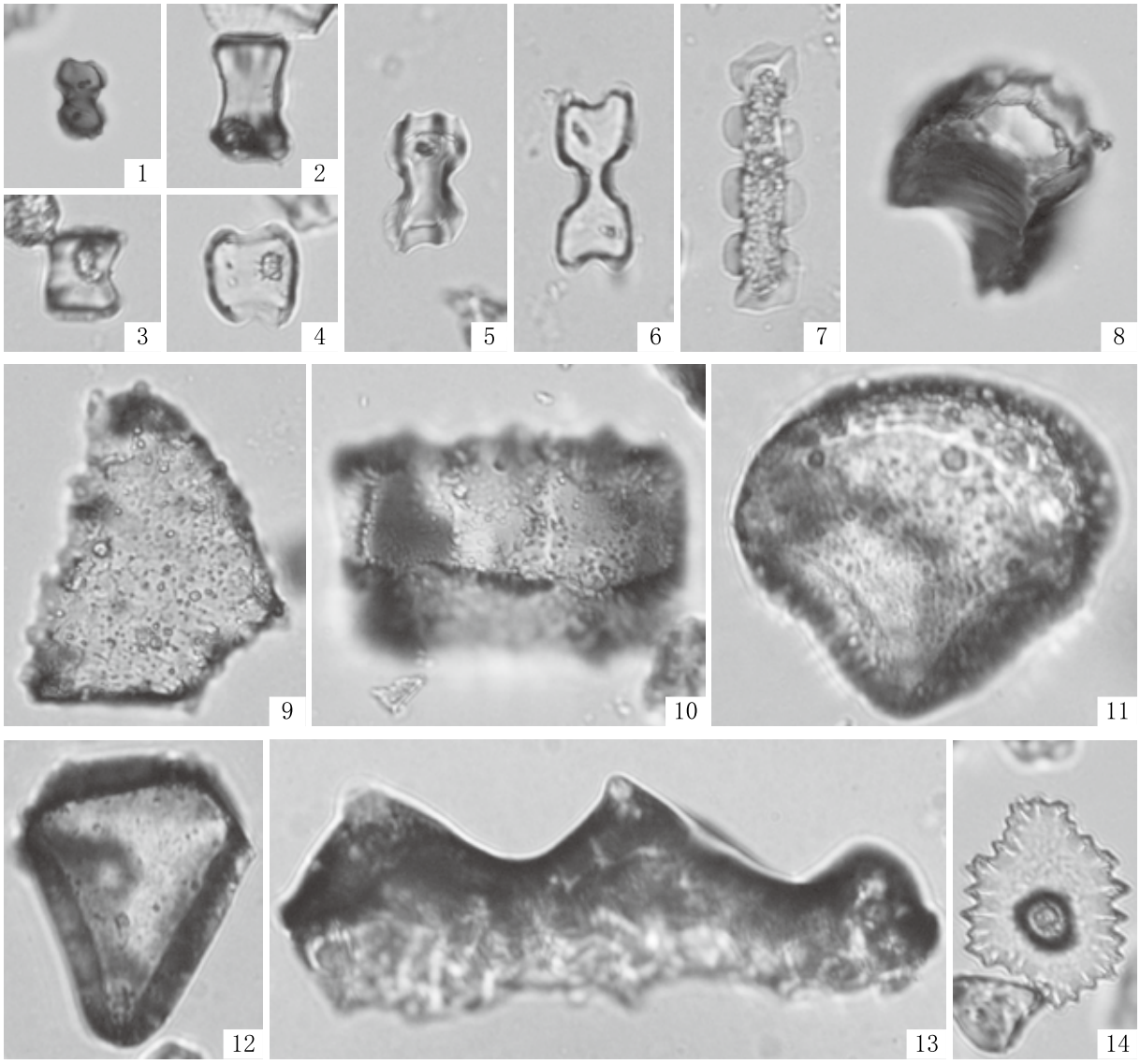
Smith V. C, R. A. Staff, S. P.E. Blockley, C. B. Ramsey, T. Nakagawa, D. F. Mark, K. Takemura, T. Danhara, and Suigetsu (2006) Project Members 2013 Identification and correlation of visible tephras in the Lake Suigetsu SG06 sedimentary archive, Japan: chronostratigraphic markers for synchronizing of east Asian/west Pacific palaeoclimatic records across the last 150 ka. Quaternary Science Reviews 67: 121-137

高原　光,1998,近畿地方の植生史,安田喜憲・三好教夫（編著）,図説　日本列島植生史,朝倉書店,114-137.

谷口康浩,2001,縄文時代遺跡の年代.『季刊考古学』, 77 ,17-21

1．モミ属(1地点;2)
2．ツガ属(1地点;7-1)
3．スギ属(1地点;2)
4．マツ属(1地点;2)
5．コナラ属コナラ亜属(1地点;2)
6．カバノキ属(1地点;7-1)
7．コナラ属アカガシ亜属(1地点;2)
8．ハリゲヤキ属(1地点;8)
9．イネ科(1地点;2)
10．ワレモコウ属(1地点;7-1)
11．イネ科(イネ属型)(1地点;2)
12．カヤツリグサ科(1地点;7-1)
13．ヨモギ属(1地点;7-1)
14．キク亜科(1地点;7-1)

図46　花粉化石



1．イネ属短細胞珪酸体(1地点;1)
2．クマザサ属短細胞珪酸体(1地点;1)
3．メダケ属短細胞珪酸体(1地点;1)
4．ヨシ属短細胞珪酸体(1地点;1)
5．コブナグサ属短細胞珪酸体(1地点;1)
6．ススキ属短細胞珪酸体(1地点;1)
7．イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(1地点;1)
8．イネ属機動細胞珪酸体(1地点;1)
9．クマザサ属機動細胞珪酸体(1地点;1)
10．メダケ属機動細胞珪酸体(1地点;1)
11．ヨシ属機動細胞珪酸体(1地点;2)
12．ススキ属機動細胞珪酸体(1地点;2)
13．イネ属穎珪酸体(1地点;2)
14．カヤツリグサ科葉部珪酸体(1地点;2)

図47　植物珪酸体

付表１　縄文時代から古墳時代土器類観察表

No	器種	器形	遺構名	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	残存率	色調	胎土	調整、その他
1	縄文土器	深鉢	流路1100	—	(3.9)	—	破片（体部）	内：10YR7/4にぶい黄橙色、外：7.5YR6/4にぶい橙色	やや密：φ2㎜以下の長石・石英・チャート・雲母少量含	内面：ナデ、外面：竹管による押し引き沈線、LR縄文
2	弥生土器	細頸壷A	流路1100	5.9	(12.0)	—	4/5（口縁～頸部）	10YR7/4にぶい黄橙色	密：φ3㎜以下の長石・石英・チャート・雲母少量含	内面：ナデのちミガキ、口縁端部外面：擬凹線、頸部外面：沈線、外面：ミガキ
3	弥生土器	広口壷E	流路1100	18.0	(13.6)	—	3/5	10YR7/2にぶい黄橙色	密：φ3㎜以下の長石・チャート・雲母少量含	口縁内面：ハケのちミガキ、口縁外面：擬凹線・円形浮文、内面：ハケ、内面下部：ハケのち板ナデ、内面下端：絞り痕・ハケ、外面上部：ハケのちミガキ、外面下部：貼付突帯・棒状浮文・線刻文
4	弥生土器	広口壷E	流路1100	17.7	(18.3)	—	2/5	7.5YR7/3にぶい橙色	密：φ3㎜以下の長石・チャート・雲母少量含	内面：ハケのちミガキ・ハケのちナデ、頸部内面：粘土接合痕、外面：ハケのちミガキ、頸部外面：貼付突帯・竹管文・沈線・棒状浮文、体部外面：櫛描直線文・刺突列点文・櫛先刺突文、口縁端部外面：擬凹線・円形浮文
5	弥生土器	広口壷E	流路1100	—	(15.9)	—	1/5（頸部～体部）	7.5YR7/4にぶい橙色	密：φ3.5㎜以下の長石・石英・チャート・雲母少量含	頸部内面：ハケ、体部内面：ハケのちオサエ・ナデ、体部内面下部：ハケ、頸部外面：ミガキ・貼付突帯、体部外面：ハケのちミガキ・貼付突帯・刺突列点文・竹管文・沈線・棒状浮文・擬凹線
6	弥生土器	広口壷E	流路1100	—	(8.2)	—	1/12	10YR7/2にぶい黄橙色	密：φ3㎜以下の長石・石英・チャート・雲母少量含	内面：ナデ・ハケ・指頭圧痕・粘土接合痕、外面：ハケのちミガキ・櫛先列点文・竹管文・貼付突帯・沈線・棒状浮文・擬凹線
7	弥生土器	広口壷E	流路1100	—	(3.6)	—	1/20（体部）	10YR8/2灰白色	密：φ3㎜以下の長石・石英・チャート・雲母少量含	内面：ナデ、外面：ナデ・ミガキ・斜格子線刻文・棒状浮文・貼付突帯
8	弥生土器	広口壷E	流路1100	—	(4.4)	—	1/15（頸部）	7.5YR6/4にぶい橙色	密：φ1.5㎜以下の長石・石英・チャート・雲母少量含	頸部内面：ハケ・ナデ、頸部外面：貼付突帯・斜格子線刻文・櫛描直線文・櫛先刺突文・棒状浮文
9	弥生土器	広口壷E	流路1100	—	(3.9)	—	1/15（頸部）	7.5YR6/3にぶい褐色	密：φ7㎜の礫・φ1.5㎜以下の長石・石英・チャート・雲母少量含	頸部内面：ナデ・オサエ、内面：ハケのちオサエ・粘土接合痕、外面：ミガキ・ハケ・貼付突帯・棒状浮文・櫛描直線文・刺突列点文・櫛先羽状刺突文
10	弥生土器	広口壷E	流路1100	—	(8.3)	—	2/5（頸部）	10YR8/3浅黄橙色	密：φ2.5㎜以下の長石・石英・チャート・雲母少量含	内面：オサエのちナデ、外面：ミガキ・貼付突帯・棒状浮文・刺突列点文
11	弥生土器	広口壷E	流路1100	—	(7.0)	—	1/6（頸部）	10YR7/2にぶい黄橙色	密：φ1㎜以下の長石・石英・チャート・雲母少量含	内面：ハケ・ナデ・粘土紐痕、外面：ハケ・ミガキ・貼付突帯・棒状浮文・竹管文・線刻文
12	弥生土器	広口壷E	流路1100	—	(4.3)	—	1/20（体部）	7.5YR7/6橙色	密：φ1.5㎜以下の長石・石英・チャート・雲母少量含	内面：オサエのちナデ、外面：ミガキ・ハケ・貼付突帯・棒状浮文・竹管文・線刻文
13	弥生土器	広口壷E	流路1100	—	(1.3)	—	破片（口縁）	10YR8/3浅黄橙色	密：φ1㎜以下の長石・石英・チャート・雲母少量含	内面：ハケのちミガキ、口縁端部：擬凹線・円 形浮文・刻み
14	弥生土器	広口壷A	流路1100	17.4	(2.6)	—	1/2	10YR7/2にぶい黄橙色	やや密：φ2㎜以下の長石・石英・チャート含	内外面：ナデ、口縁内面：波状文、口縁端部：円形浮文
15	弥生土器	広口壷A	流路1100	17.6	(8.4)	—	3/5（口縁～頸部）	10YR7/4にぶい黄橙色	密：φ1.5㎜以下の長石・石英・チャート・雲母少量含	内外面：ハケのちミガキ、頸部内面下部：絞り痕・ナデ・ハケ、頸部外面上部：ナデ、頸部外面下部：ヨコナデ、頸部下端：貼付突帯、口縁端部：擬凹線・円形浮文・竹管文・刻み
16	弥生土器	広口壷A	流路1100	—	(1.4)	—	破片（口縁）	10YR8/4浅黄橙色	やや密：φ1㎜以下の長石・石英・チャート・雲母少量含	内外面：ナデ、口縁端部：竹管文・線刻文
17	古式土師器	広口壷A	流路1100	32.2	(13.5)	—	3/5（口縁）	10YR4/3にぶい黄褐色	やや粗：φ7㎜以下の長石・石英・チャート少量含、角閃石多量含、生駒西麓産	内面：ハケのちミガキ、頸部内面：ナデ・オサエ、外面：ミガキ・ナデ、頸部外面：ハケ、口縁端部：擬凹線・朱塗り
18	弥生土器	広口壷	流路1100	—	(4.5)	—	破片（肩部）	2.5Y6/2灰黄色	密：φ5㎜以下の長石・石英・チャート・雲母少量含	内面：ナデ、外面：ハケ・櫛描直線文・竹管文・線刻文
19	弥生土器	広口壷	流路1100	—	(2.4)	—	1/8（肩部）	10YR8/2灰白色	密：φ1㎜以下の長石・石英・チャート少量含	内面：ナデ、外面：櫛描直線文・刺突列点文・竹管文・線刻文・櫛先刺突文

No	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	色調	胎土	調整、その他
20	弥生土器	広口壷	流路1100	—	(5.1)	—	1/10(体部)	10YR7/4にぶい黄橙色	密:φ1.5㎜以下の長石・石英・チャート・雲母少量含	内面:ハケのちナデ・オサエ、外面:ハケのちナデ・ハケのちミガキ、外面上部:櫛描直線文・刺突列点文・櫛先刺突文
21	弥生土器	広口壷	流路1100	—	(3.0)	—	1/20(体部)	内:10YR2/1黒色、外:2.5Y7/3浅黄色	密:φ1.5㎜以下の長石・石英・チャート・雲母少量含	内面:オサエ・ナデ、外面:櫛描直線文・櫛先刺突文
22	弥生土器	広口壷C	流路1100	—	(4.0)	—	1/6(頸部)	10YR6/4にぶい黄橙色	密:φ3㎜以下の長石・石英・チャート少量含	頸部内面:ハケのちナデ・ナデ、内面:オサエ、内面下部:焦げ痕、頸部外面:ナデ、外面:ナデのち波状文
23	古式土師器	広口壷A	流路1100	—	(4.7)	—	1/6(頸部)	10YR8/3浅黄橙色	やや密:φ2㎜以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒少量含	内面:ナデ・オサエのちナデ、外面:ハケ・ナデ、口縁内面:突起・ナデのち綾杉状櫛先刺突文
24	古式土師器	広口壷C	流路1100	—	(21.6)	—	1/6(頸部)	10YR8/2灰白色	密:φ1㎜以下の長石・石英・チャート・雲母少量含	頸部内面:ミガキ、内面:オサエ・ナデ・絞り痕・粘土接合痕、頸部外面:剥離、外面:櫛描直線文・刺突列点文・朱文様
25	古式土師器	広口壷	流路1100	—	(4.3)	—	破片	10YR8/2灰白色	やや密:φ1㎜以下の長石・石英・チャート・雲母少量含	内面:ナデ、外面:ミガキか・櫛描直線文・半裁竹管文
26	古式土師器	広口壷AまたはC	流路1100	—	(5.0)	—	1/12(肩部)	内:2.5Y8/2灰白色、外:7.5YR7/4にぶい橙色	密:φ2㎜以下の長石・石英・チャート少量含	内面:オサエ・ハケのちオサエ・絞り痕、外面:ハケのちミガキ・貼付突帯・櫛先刺突文・半裁竹管文、外面下部:ハケ・沈線文
27	弥生土器	短頸壷A	流路1100	10.7	(4.6)	—	1/8	10YR8/2灰白色	密:φ2㎜以下の長石・石英・チャート少量含	口縁内外面:ヨコナデ、内面下部:オサエ、外面:ハケ・櫛描直線文
28	弥生土器	短頸壷B	流路1100	10.7	(3.7)	—	1/6	10YR7/3にぶい黄橙色	やや密:φ3㎜以下の長石・石英・チャート・雲母少量含	口縁内面:ミガキ、内面下部:ナデ、外面:ナデ・擬凹線・刺突列点文
29	弥生土器	短頸壷B	流路1100	9.6	(3.7)	—	1/6	10YR7/2にぶい黄橙色	やや密:φ2㎜以下の長石・石英・チャート少量含	内外面:ナデ・擬凹線・刺突列点文
30	古式土師器	短頸壷B	流路1100	7.4	(4.7)	—	3/5	5YR5/6明赤褐色	密:φ5㎜以下の長石・チャート・雲母少量含	口縁内面:ミガキ、内面下部:ナデ・ハケのちナデ、外面:ミガキ
31	弥生土器	短頸壷A	流路1100	12.4	(18.3)	—	2/5	2.5Y7/3浅黄色	やや密:φ5.5㎜以下の長石・石英・チャート少量含	口縁内外面:ヨコナデ、内面:ケズリ・粘土接合痕、外面:工具によるナデ・煤付着
32	弥生土器	短頸壷A	流路1100	7.7	12.0	3.1	9/10	10YR6/4にぶい黄橙色	密:φ3.5㎜以下の長石・石英・チャート・雲母少量含	内面:ハケ・工具ナデ、外面:ハケ、外面下部:オサエのちナデ、底面:ナデ
33	弥生土器	短頸壷BまたはC	流路1100	—	(4.3)	—	1/8	10YR6/2灰黄褐色	やや密:φ2㎜以下の長石・石英・チャート・雲母少量含	内面:ナデ・ハケのちナデ、外面:ナデ・ハケ
34	古式土師器	二重口縁壷A	流路1100	15.4	(6.8)	—	9/10	2.5Y6/2灰黄色	密:φ3.5㎜以下の長石・石英・チャート・雲母少量含	内外面:ミガキ、口縁端部・内面下部:ナデ
35	弥生土器	甕A	流路1100	—	(3.6)	—	破片(口縁)	10YR5/3にぶい黄褐色	やや密:φ3㎜以下の長石・石英・チャート・雲母少量含、生駒西麓産	内外面:ヨコナデ、外面:ヘラ描沈線・朱塗布
36	弥生土器	甕A	流路1100	24.5	(4.0)	—	1/8	7.5YR7/3にぶい橙色	密:φ3㎜以下の長石・石英・チャート・雲母少量含	内外面:工具によるヨコナデ、内面:焦げ痕付着、口縁端部:櫛先による刻み
37	弥生土器	甕C-Ⅲ	流路1100	12.8	(3.0)	—	1/6	10YR7/2にぶい黄橙色	やや密:φ3㎜以下の長石・チャート・雲母少量含	口縁内外面:ヨコナデ、頸部外面:オサエ、口縁外面:刺突列点文、外面:櫛描直線文
38	弥生土器	甕C-Ⅲ	流路1100	13.8	(4.4)	—	1/4	10YR7/3にぶい黄橙色	密:φ6㎜以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒少量含	口縁内外面:ヨコナデ、内面:オサエ・ナデ、口縁外面:擬凹線・刺突列点文、外面:櫛描直線文
39	弥生土器	甕C-Ⅲ	流路1100	12.9	(9.2)	—	1/6	10YR7/3にぶい黄橙色	やや密:φ3㎜以下の長石・チャート・赤色粒少量含	口縁内外面:ヨコナデ、内面:ハケのちナデ、外面:ハケ・刺突列点文・櫛描直線文・煤付着
40	弥生土器	甕C-Ⅲ	流路1100	15.6	(5.7)	—	1/4(口縁)1/8(体部)	7.5YR7/4にぶい橙色	やや密:φ2.5㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒少量含	口縁内外面:ヨコナデ、内面:ハケ・ナデ、外面:ハケ・刺突列点文・櫛描直線文

No	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	色調	胎土	調整、その他
41	弥生土器	鉢A1	流路1100	19.9	(9.6)	—	2/5	10YR6/4にぶい黄橙色	密:φ2㎜以下の長石・石英・チャート・雲母少量含	内面:ナデ・ケズリのちオサエ、内面下部:ケズリのちナデ・ハケ、外面:ナデ・ハケ・櫛描直線文・波状文・煤付着
42	弥生土器	鉢A1	流路1100	13.7	(5.4)	—	1/6	10YR8/3浅黄橙色	密:φ3㎜以下の長石・石英・チャート・雲母少量含	口縁内外面:ヨコナデ、内面:ハケのちナデ・ナデ、外面:ハケのちナデ・ハケ・刺突列点文・櫛描直線文
43	弥生土器	壷	流路1100	—	(3.3)	4.0	1/1(底部)	10YR6/2灰黄褐色	密:φ2㎜以下の長石・石英・チャート少量含	内面:ミガキ、外面:ハケのちミガキ、底面:ナデ
44	古式土師器	甕	流路1100	—	(3.5)	6.1	1/1(底部)	2.5Y7/3浅黄色	やや密:φ1.5㎜以下の長石・石英・チャート・雲母含	内面:ハケ、外面:ハケ・オサエ、底面:ナデ・工具痕
45	古式土師器	甕(有孔)	流路1100	—	(2.9)	4.8	1/1(底部)	2.5Y8/3淡黄色	やや粗:φ3.5㎜以下の長石・石英・チャート・雲母含	内面:ハケ・オサエ、外面:オサエのちナデ、底面:ナデ、底面中央に穿孔
46	古式土師器	甕(有孔)	流路1100	—	(4.7)	4.4	1/1(底部)	7.5YR6/4にぶい橙色	密:φ1.5㎜以下の長石・石英・チャート・雲母少量含	内面:ハケ・オサエ、外面:ハケのちナデ、外面下部:オサエ・ナデ、底面:ナデ、底面中央に外から内へ穿孔
47	弥生土器	甕	流路1100	—	(2.8)	2.8	1/1(底部)	10YR6/3にぶい黄橙色	密:φ3㎜以下の長石・石英・チャート・雲母含	内面:ハケ、外面:工具によるナデ、底面:ナデ
48	古式土師器	高杯C	流路1100	—	(3.0)	—	破片(口縁)	5YR7/6橙色	密:φ0.5㎜以下の長石・チャート・雲母・赤色粒少量含	口縁内外面:ヨコナデ、内面:ミガキ？、外面:ミガキ・凹線
49	古式土師器	高杯脚c1	流路1100	—	(7.2)	12.7	9/10	10YR7/2にぶい黄橙色	密:φ4㎜以下の長石・石英・チャート少量含	脚部内面:ハケ、脚部外面:ハケのちミガキ、接地面:ナデ、脚部:透かし(3箇所)
50	古式土師器	高杯脚c1	流路1100	—	8.2	12.2	1/3	10YR7/4にぶい黄橙色	密:φ3㎜以下の長石・石英・チャート・雲母少量含	内面上部:ハケ、脚部内面上部:ナデ、脚部内面:ハケのちナデ・粘土絞り痕、脚部内面下部:ハケのちヨコナデ、外面上部・脚部外面:ハケのちミガキ、接地面:ナデ・刻み
51	弥生土器	器台C	流路1100	20.2	(10.8)	—	3/5	7.5YR7/4にぶい橙色	密:φ8㎜以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒少量含	内面上部・外面:ミガキ、内面:ハケ、内面下部:板ナデのちナデ、口縁内面:刺突列点文・竹管文、口縁外面:竹管文・擬凹線、脚部外面:透かし・ヘラ描直線文
52	弥生土器	器台C	流路1100	21.4	(11.8)	—	4/5	10YR6/4にぶい黄橙色	密:φ3.5㎜以下の長石・石英・チャート・雲母少量含	内面上部・外面上部:ハケのちミガキ、内面下部:ケズリ、外面下部:ミガキ、頸部外面下部:ヘラ描直線文・刺突列点文、口縁端部:円形浮文・竹管文・擬凹線、脚部:透かし
53	弥生土器	器台C	流路1100	—	(12.7)	17.4	1/3	10YR7/3にぶい黄橙色	やや粗:φ4㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒少量含	内面上部:ナデ、内面:ケズリ、内面下部:ハケ、外面:ハケのちミガキ、接地面:ナデ、外面下部:ヘラ描直線文・刺突列点文・穿孔、脚裾部:刻み・ヘラ描直線文・朱残存
54	古式土師器	器台E	流路1100	9.7	(6.7)	—	3/5	10YR8/3浅黄橙色	密:φ3㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒少量含	外面:ミガキ、脚部内面上部:ナデ、脚部内面:ケズリ・粘土接合痕、上部外面・脚部外面:ミガキ、口縁外面下部:ナデ、脚部:透かし(3箇所)
55	弥生土器	器台C？	流路1100	—	(2.4)	—	破片(口縁)	7.5YR6/4にぶい橙色	密:φ1.5㎜以下の長石・石英・チャート・雲母少量含	内外面:ナデ、内面・周縁に櫛描波状文
56	弥生土器	鉢B	流路1100	9.9	6.1	1.4	1/2	7.5YR6/4にぶい橙色	密:φ2㎜以下の長石・石英・チャート少量含	内外面:ナデ、内面下部:工具ナデ・ナデ、外面下部:ハケ、底面:ナデ
57	弥生土器	鉢F1	流路1100	—	(7.6)	6.7	3/5(底部)	10YR6/3にぶい黄橙色	やや粗:φ3㎜以下の長石・石英・チャート・雲母多量含	内面:ナデ・ミガキ？、外面下部～底面:オサエ、底面:粘土接合痕・オサエ
58	弥生土器	ミニチュア土器	流路1100	2.3	1.8	—	1/1	10YR4/1褐灰色	やや密:φ5㎜以下の長石・石英・赤色粒少量含	内外面:ナデ
59	弥生土器	ミニチュア土器	流路1100	3.3	2.5	—	1/1	10YR5/3にぶい黄褐色	やや密:φ3.5㎜以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒少量含	内外面:オサエ・ナデ
60	弥生土器	ミニチュア土器	流路1100	3.0	3.1	—	1/1	7.5YR4/3褐色	やや密:φ2㎜以下の長石・石英・チャート・雲母少量含	内外面:オサエ・ナデ

No	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	色調	胎土	調整、その他
61	弥生土器	革袋形土器	流路1100	―	(4.0)	3.3	4/5	7.5YR6/4橙色～10YR6/4にぶい橙色、一部黒色	密:φ1㎜以下の長石・石英・チャート・雲母微量含	ミニチュア土器、内外面:ハケ、肩部外面:粘土接合痕・底面:工具ナデ
62	土師器	直口壷	流路1100	10.9	15.8	―	3/5	10YR7/4にぶい黄橙色	密:φ2㎜以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒少量含	内外面:ヨコナデのちミガキ、内面下部:ナデ・ケズリ・ケズリのちナデ・粘土接合痕、外面下部:ハケのちナデ
63	土師器	甕	流路1100	14.1	(12.2)	―	2/5	10YR6/4にぶい黄橙色	密:φ6.5㎜以下の長石・石英・チャート・雲母少量含	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ・ケズリ・焦げ痕、外面下部:ハケ、外面部分的に煤付着
64	土師器	甕	流路1100	19.8	(19.7)	―	2/5	10YR6/3にぶい黄橙色	密:φ4㎜以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒少量含	口縁内面上部～口縁外面:ヨコナデ、口縁内面下部:ハケのちナデ、内面:オサエ・ナデ・ケズリ・焦げ痕、外面:ハケ・煤付着
65	土師器	甕	流路1100	16.7	(16.8)	―	1/5	10YR7/3にぶい黄橙色	密:φ8.5㎜のチャート、φ5㎜以下の長石・石英・雲母少量含	口縁内外面:ヨコナデ、内面:ナデ・板ナデ・指頭圧痕、外面:ハケのちナデ・煤付着
66	土師器	甕	流路1100	15.5	(6.0)	―	1/5	10YR8/3浅黄橙色	密:φ2㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒少量含	口縁内外面:ヨコナデ、内面:ナデ・ケズリ、外面:ハケ
67	土師器	高杯	流路1100	16.8	(11.9)	―	2/5	10YR7/3にぶい黄橙色	やや粗:φ5㎜以下の長石・石英・チャート含	口縁内外面:ヨコナデ、内面:ハケ、内面下部:ナデ・煤付着、外面:ハケ、外面下部:ミガキ、脚部外面:面取りのちミガキ、脚部内面:ケズリ
68	土師器	高杯脚	流路1100	―	(6.8)	9.7	3/4	7.5YR7/3にぶい橙色	密:φ2㎜以下の長石・石英・チャート少量含	脚部内面:ナデ・ケズリ・絞り痕、脚部外面:ミガキ？・ナデ
69	土師器	高杯	流路1100	13.3	10.3	9.9	1/3	5YR7/6橙色	密:φ5㎜以下の長石・石英・チャート少量含	口縁内外面:ヨコナデ、内面:ハケのちナデ、内面下部:ナデ、外面:ハケのちナデ・ナデ、脚部外面:ナデ、脚部内面:ケズリ・ナデ・ハケ・絞り痕
70	土師器	高杯	流路1100	22.5	16.0	12.7	2/5	5YR6/6橙色	密:φ7㎜以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒少量含	内面～口縁外面:ハケのちヨコナデ、外面:ハケ、脚部外面:ハケ・ナデ、脚部内面:ナデ・ケズリ
71	土師器	高杯	流路1100	24.6	17.7	14.2	4/5	7.5YR6/6橙色	密:φ3.5㎜以下の長石・石英・チャート・雲母少量含	口縁:ヨコナデ、内面:板ナデのちヨコナデ、内面下部:ナデ、外面:ハケ、脚部外面:ミガキ・ケズリ、脚部内面:ケズリ・ハケのちナデ、脚部:透かし(3箇所)
72	土師器	小型丸底壷	流路1100	11.3	(6.9)	―	1/8(口縁)	7.5YR6/4にぶい橙色	やや密:φ2.5㎜以下の長石・チャート・雲母・赤色粒含	内面:オサエ・ナデ・ハケ、口縁外面:ヨコナデ、外面:ナデ・ミガキ
73	土師器	小型丸底壷	流路1100	8.8	(7.7)	―	1/5	10YR6/4にぶい黄橙色	密:φ3㎜以下の長石・石英・チャート・雲母少量含	口縁内外面:ヨコナデ、内面:ケズリ、外面:ハケ
74	土師器	小型丸底壷	流路1100	7.0	7.2	―	9/10	2.5Y6/3にぶい黄色	密:φ6㎜以下の長石・チャート・雲母・赤色粒少量含	口縁内外面:ヨコナデ、内面:ナデ、外面:ナデ・ハケ
75	土師器	小型丸底壷	流路1100	―	(6.7)	―	4/5	2.5Y7/3浅黄色	密:φ1.5㎜以下の長石・チャート・雲母少量含	口縁内面:ハケ、内面:オサエ、外面:オサエ・ナデ、底面:ナデ
76	土師器	ミニチュア土器	流路1100	3.4	3.0	―	9/10	10YR7/2にぶい黄橙色	密:φ5㎜以下の長石・石英少量含	内面:オサエ・粘土接合痕、外面:ナデ
77	土師器	甕	流路1100	10.7	(7.1)	―	1/4(口縁)	5YR5/6明赤褐色	やや密:φ2.5㎜以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒含	口縁内面:ハケのちナデ、内面:オサエ・ナデ、口縁外面:ヨコナデ、外面:ナデ・ハケ・煤付着
78	土師器	甕	流路1100	12.5	16.5	―	4/6	5YR5/6明赤褐色	密:φ5㎜以下の長石・石英・チャート少量含	口縁内面:ハケ、内面:ケズリ、口縁外面:ヨコナデ、外面:ハケ・煤付着
79	土師器	甕	流路1100	13.6	(17.5)	―	2/5	5YR4/6赤褐色	密:φ4.5㎜以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒含	口縁内外面:ナデ、内面:ハケ、外面:ハケ・煤付着
80	土師器	甕	流路1100	15.3	(14.0)	―	1/7(口縁～体部)	10YR6/3にぶい黄橙色	密:φ5㎜以下の長石・石英・チャート少量含	口縁内面:ハケのちナデ、内面上部:ナデ・板ナデ、内面:ケズリ、口縁外面:ヨコナデ、外面:ハケ・煤付着
81	土師器	甕	流路1100	16.6	(12.8)	―	1/5(口縁～体部)	7.5YR7/4にぶい橙色	やや粗:φ4.5㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒多量含	口縁内外面:ヨコナデ、口縁内面:ハケのちヨコナデ、内面:オサエのちナデ・ケズリ、外面:ハケ

No	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	色調	胎土	調整、その他
82	土師器	甕	流路1100	18.9	(6.5)	—	1/3	10YR8/3浅黄橙色	やや密:φ2㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒含	口縁内外面:ヨコナデ、内面:ケズリ、外面:ハケ
83	土師器	甕	流路1100	17.4	32.5	—	4/5	5YR5/6明赤褐色	密:φ9㎜以下のチャート、φ6㎜以下の長石・石英・雲母・赤色粒少量含	口縁内外面:ヨコナデ、内面:粘土接合痕、外面上部:ケズリ、外面:ケズリのちナデ・ミガキ、外面下部:オサエ
84	土師器	甕	流路1100	17.6	(6.7)	—	1/4	7.5YR5/3にぶい褐色	やや粗:φ2㎜以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒少量含	口縁内外面:ヨコナデ、内面:ケズリ、外面上部:板ナデ、外面:ハケ
85	土師器	甕	流路1100	19.8	(10.6)	—	1/2(口縁)	10YR7/3にぶい黄橙色	密:φ1㎜以下の長石・石英・チャート・雲母少量含	口縁内外面:ヨコナデ、口縁外面下部:オサエ、内面:ハケのちナデ・粘土紐痕、外面:ハケ・煤付着
86	土師器	甕	流路1100	18.7	(7.3)	—	1/5(口縁)	7.5YR6/4にぶい橙色	やや粗:φ1.5㎜以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒多量含	口縁内外面:ヨコナデ、内面:ハケ、外面:ハケのちナデ
87	土師器	甕	流路1100	16.8	25.7	—	1/2	10YR7/3にぶい黄橙色	密:φ5㎜以下の長石・石英・チャート含	口縁内外面:ヨコナデ、内面:ナデ・板ナデ・粘土接合痕・焦げ痕、外面:ハケ・煤付着
88	土師器	甕	流路1100	11.1	(13.9)	—	1/4	10YR7/3にぶい黄橙色	やや粗:φ2㎜以下の長石・石英・チャート含	口縁内外面:ヨコナデ、口縁外面下部:ハケのちヨコナデ、内面上部:工具ナデ、内面:ケズリ、外面:ハケ
89	土師器	甕	流路1100	12.0	(17.7)	—	1/3	7.5YR7/4にぶい橙色	密:φ4㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒少量含	口縁内外面:ヨコナデ、口縁内面下部:ハケ、内面:オサエ・粘土接合痕・工具痕、外面:ハケ
90	土師器	甕	流路1100	11.8	(8.6)	—	1/6	10YR7/3にぶい黄橙色	密:φ3㎜以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒少量含	口縁内外面:ヨコナデ、内面:工具によるナデ、外面:ナデ・ハケ・煤付着
91	土師器	甑	流路1100	25.6	27.3	—	1/3	10YR7/3にぶい黄橙色	やや密:φ3㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒含	口縁内外面:ヨコナデ、内面:ハケ・ケズリ、内面下部:ハケのちナデ、外面:ハケ、把手:ハケのちナデ、底面:孔(中心1箇所、周囲4箇所)
92	土師器	甑	流路1100	23.8	(22.0)	—	1/4(口縁～体部)	10YR7/4にぶい黄橙色	密:φ4㎜以下の長石・石英・赤色粒少量含	口縁外面:ヨコナデ、内外面:ハケ、把手:オサエ・ハケのちナデ
93	土師器	鉢	流路1100	10.1	7.5	4.0	9/10	7.5YR6/6橙色	密:φ5㎜以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒少量含	口縁内外面:ヨコナデ、内面:ハケ、内面下部:ナデ、外面:ハケのちナデ、底面:工具痕
94	土師器	鉢	流路1100	11.4	6.1	—	4/5	2.5Y7/3浅黄色	密:φ2.5㎜以下の長石・チャート・雲母・赤色粒少量含	口縁内外面:ヨコナデ、内面:ナデ、外面:ナデ、外面下部:ケズリ
95	土師器	鉢	流路1100	14.5	(4.9)	—	1/10(口縁)	10YR7/4にぶい黄橙色	やや粗:φ2㎜以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒少量含	内面～口縁外面:ヨコナデ、外面下部:磨滅著しい
96	土師器	瓶	流路1100	—	(7.0)	—	3/5	2.5Y7/3浅黄色	密:φ1㎜以下の長石・チャート・雲母少量含	内面上部:オサエ、内面:ナデ、内面下部:ハケ、外面上部:ヨコナデ・ミガキ、外面:ハケ、底面:ナデ、体部中央:穿孔
97	土師器	瓶	流路1100	—	(6.9)	—	9/10	10YR7/3にぶい黄橙色	密:φ4㎜以下の長石・石英・チャート・雲母少量含	内面上部:ケズリ、内面:ケズリのちナデ、内面下部:ナデ、外面上部:ナデ、外面:ハケ、底面:ナデ、体部中央:穿孔
98	土師器	台付鉢？	流路1100	—	(3.2)	8.4	9/10(台部)	5YR6/6橙色	密:φ3㎜以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒含	内面:ヨコナデ・絞り痕、脚部外面:ヨコナデ
99	土師器	椀形高杯	流路1100	11.8	(3.8)	—	1/5	2.5Y7/3浅黄色	密:φ2㎜以下の長石・石英・チャート・雲母少量含	内面～口縁外面:ヨコナデ、外面:ハケのちケズリ
100	土師器	椀形高杯	流路1100	13.8	(5.5)	—	3/5	10YR7/4にぶい黄橙色	密:φ1㎜以下の長石・チャート・雲母・赤色粒少量含	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、脚部内面:ケズリのちナデ・オサエ、脚部外面:ナデ、外面下部:オサエ
101	須恵器	高杯蓋	流路1100	14.9	5.1	—	1/1	N5/0灰色	密:φ2㎜以下の長石・チャート少量含	内外面:回転ナデ、外面:自然釉、天井部:摘み・櫛先刺突文・沈線
102	須恵器	高杯蓋	流路1100	15.2	4.8	—	1/1	N5/0灰色	密:φ1.5㎜以下の長石・チャート少量含	内外面:回転ナデ、天井部:摘み・櫛先刺突文・沈線
103	須恵器	高杯蓋	流路1100	15.7	(3.1)	—	1/3	N5/0灰色	密:φ2㎜以下の長石・石英少量含	内外面:回転ナデ、天井部:櫛先刺突文・沈線・摘み欠損

No	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	色調	胎土	調整、その他
104	須恵器	高杯蓋	流路1100	11.4	5.5	—	1/1	N4/0灰色	密:φ3㎜以下の長石・石英少量含	外面上部:回転ヘラケズリ、内外面:回転ナデ、天井部:摘み
105	須恵器	高杯蓋	流路1100	11.7	5.6	—	ほぼ1/1	N5/0灰色	密:φ2㎜以下の長石・石英少量含	外面上部:回転ヘラケズリ、内外面:回転ナデ・自然釉、天井部:摘み
106	須恵器	杯蓋	流路1100	12.1	4.6	—	9/10	N5/0灰色	密:φ2㎜以下の長石・石英少量含	外面上部:回転ヘラケズリ、内外面:回転ナデ
107	須恵器	杯蓋	流路1100	11.8	4.5	—	1/3	N5/0灰色	密:φ2㎜以下の長石・石英少量含	外面上部:回転ヘラケズリ、内外面:回転ナデ、外面に胎土が所々に付着
108	須恵器	杯蓋	流路1100	11.7	4.6	—	ほぼ1/1	N6/0灰色	密:φ3.5㎜以下の長石・チャート少量含	外面上部:回転ヘラケズリ、外面:自然釉、内外面:回転ナデ、内面上部:当て具痕のちナデ
109	須恵器	杯蓋	流路1100	13.0	5.2	—	1/1	N5/0灰色	密:φ4㎜以下の長石・チャート少量含	外面上部:回転ヘラケズリ、外面:自然釉、内外面:回転ナデ
110	須恵器	杯蓋	流路1100	13.7	4.4	—	9/10	N5/0灰色	密:φ3㎜以下の長石・石英少量含	外面上部:回転ヘラケズリ、内外面:回転ナデ
111	須恵器	杯蓋	流路1100	14.2	4.2	—	3/5	N6/0灰色	密:φ1㎜以下の長石・チャート少量含	外面上部:回転ヘラケズリ、外面:自然釉、内外面:回転ナデ、内面上部:当て具痕のちナデ
112	須恵器	杯身	流路1100	9.5	2.3	—	1/1	N5/0灰色	密:φ5㎜以下の長石・チャート少量含	内外面:回転ナデ、内面下部:当て具痕のちナデ、外面下部:回転ヘラケズリ
113	須恵器	杯身	流路1100	9.8	4.5	—	1/2	N5/0灰色	密:φ3㎜以下の長石・石英・チャート少量含	内外面:回転ナデ、内面下部:ナデ、外面下部:回転ヘラケズリ、外面:自然釉
114	須恵器	杯身	流路1100	11.5	5.3	—	1/2	N5/0灰色	密:φ1.5㎜以下の長石・チャート少量含	内外面:回転ナデ、内面下部:回転ナデのちオサエ、外面下部:回転ヘラケズリ
115	須恵器	杯身	流路1100	10.8	5.0	—	9/10	N6/0灰色	密:φ2㎜以下の長石・石英少量含	内外面:回転ナデ、内面下部:ナデ、外面下部:回転ヘラケズリ、底面:ヘラ記号・粘土塊付着
116	須恵器	杯身	流路1100	10.2	5.2	—	ほぼ1/1	N5/0灰色	やや粗:φ1.5㎜以下の長石・石英・チャート少量含	内外面:回転ナデ、外面下部:回転ヘラケズリ
117	須恵器	杯身	流路1100	10.6	4.8	—	9/10	N5/0灰色	密:φ5㎜以下の長石・石英・チャート少量含	内外面:回転ナデ、内面下部:ナデ、外面下部:回転ヘラケズリ・自然釉
118	須恵器	杯身	流路1100	12.4	(5.1)	—	3/4	N6/0灰色	密:φ4㎜以下の長石・石英・チャート少量含	内外面:回転ナデ、内面下部:回転ナデのちナデ、外面下部:回転ヘラケズリ・粘土付着、外面:自然釉
119	須恵器	杯身	流路1100	12.5	4.8	—	9/10	N6/0灰色	密:φ1㎜以下の長石・石英・チャート少量含	内外面:回転ナデ、外面下部:回転ヘラケズリ、外面:自然釉
120	須恵器	杯身	流路1100	12.7	4.6	—	2/5	N6/0灰色	密:φ4.5㎜以下の長石・チャート少量含	内外面:回転ナデ、内面下部:回転ナデのちオサエ、外面下部:回転ヘラケズリ
121	須恵器	杯身	流路1100	10.0	4.4	—	9/10	N5/0灰色	密:φ2㎜以下の長石・チャート少量含	内外面:回転ナデ、内面下部:ナデ、外面下部:回転ヘラケズリ、外面:自然釉
122	須恵器	杯身	流路1100	10.2	5.0	—	1/3	2.5Y7/1灰白色	やや密:φ3㎜以下の長石・石英・チャート少量含	内外面:回転ナデ、外面下部:回転ヘラケズリ
123	須恵器	杯身	流路1100	10.7	5.5	—	2/5	N6/0灰色	密:φ1㎜以下の長石・石英・チャート・雲母少量含	内外面:回転ナデ、外面下部:回転ヘラケズリ
124	須恵器	杯身	流路1100	11.0	4.4	—	1/2	N6/0灰色	やや密:φ2㎜以下の長石・石英少量含	内外面:回転ナデ、内面下部:回転ナデのちオサエ、外面下部:回転ヘラケズリ
125	須恵器	杯身	流路1100	10.8	4.6	—	2/5	5Y6/1灰色	やや粗:φ1.5㎜以下の長石・石英・チャート少量含	内外面:回転ナデ、外面下部:回転ヘラケズリ
126	須恵器	杯身	流路1100	11.5	4.5	—	1/2	N5/0灰色	やや粗:φ4㎜以下の長石・石英・チャート少量含	内外面:回転ナデ、外面下部:回転ヘラケズリ

No	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	色調	胎土	調整、その他
127	須恵器	杯身	流路1100	12.5	4.9	―	1/2	2.5Y7/1灰白色～2.5Y4/1黄灰色	密:φ2㎜以下の長石・石英・チャート少量含	内外面:回転ナデ、内面下部:回転ナデのちナデ、外面下部:回転ヘラケズリ
128	須恵器	杯身	流路1100	13.8	4.5	―	1/2	N6/0灰色	密:φ1㎜以下の長石・石英少量含	内外面:回転ナデ、内面下部:当て具痕、外面下部:回転ヘラケズリ
129	須恵器	杯身	流路1100	12.1	3.7	―	ほぼ1/1	N5/0灰色	密:φ3.5㎜以下の長石・チャート少量含	内外面:回転ナデ、内面下部:当て具痕のちナデ、外面下部:回転ヘラケズリ
130	須恵器	杯身	流路1100	12.7	4.1	―	ほぼ1/1	N5/0灰色	密:φ4㎜以下の長石・石英・チャート少量含	内外面:回転ナデ、内面下部:回転ナデのちナデ・当て具痕、外面下部:回転ヘラケズリ、外面:自然釉
131	須恵器	無蓋高杯	流路1100	16.7	(12.1)	10.9	3/5	N5/0灰色	密:φ1㎜以下の長石少量含	内外面:回転ナデ、杯部外面:突帯、脚部内面:ケズリ・ナデ、脚部:突帯
132	須恵器	有蓋高杯	流路1100	11.4	10.5	11.0	4/5	N4/0灰色	密:φ1㎜以下の長石・チャート少量含	杯身内外面:回転ナデ、杯身内面下部:回転ナデのちナデ、杯身外面下部:回転ヘラケズリのちナデ、脚部内外面:回転ナデ、脚部内面上部:ケズリ、外面:自然釉
133	須恵器	有蓋高杯	流路1100	12.2	11.3	11.1	ほぼ1/1	N4/0灰色	密:φ2㎜以下の長石・チャート少量含	杯身内外面:回転ナデ、杯身内面下部:回転ナデのちナデ、杯身外面下部:回転ヘラケズリのちナデ、脚部内外面:回転ナデ、脚部:突帯・円形透かし(3箇所)、外面:自然釉
134	須恵器	無蓋高杯	流路1100	―	(6.6)	―	2/5	N4/0灰色	密:φ3㎜以下の長石・石英少量含	杯身内外面:回転ナデ、杯身内面下部:ナデ、杯身外面下部:回転ヘラケズリ、脚部内外面:回転ナデ、脚部:台形透かし(3箇所)、外面:櫛描波状文
135	須恵器	有蓋高杯	流路1100	10.1	(7.3)	―	2/5	N4/0灰色	密:φ1㎜以下の長石・チャート少量含	杯身内外面:回転ナデ、杯身内面:使用痕、杯身外面下部:回転ヘラケズリのちナデ、脚部外面:回転ナデ、脚部:三角形透かし(3箇所？)
136	須恵器	高杯脚	流路1100	―	(4.9)	7.8	1/1	N6/0灰色	密:φ1㎜以下の長石・チャート少量含	杯身内面下部:当て具痕のち回転ナデ、杯身内面:使用痕、杯身外面下部:回転ヘラケズリ、脚部内外面:回転ナデ、脚部:方形透かし(3箇所)、外面:自然釉
137	須恵器	高杯脚	流路1100	―	(5.7)	8.3	1/1	N5/0灰色	密:φ3㎜以下の長石・チャート少量含	杯身内面下部:当て具痕のち回転ナデ、脚部内外面:回転ナデ、脚部外面:自然釉、脚部:円形透かし(3箇所)
138	須恵器	高杯脚	流路1100	―	(5.6)	8.7	1/1	N6/0灰色	密:φ3.5㎜以下の長石・石英・チャート少量含	杯身内面下部:当て具痕のち回転ナデ、脚部外面:回転ナデ、脚部内面上部:ナデ、脚部:円形透かし(3箇所)
139	須恵器	椀(コップ形)	流路1100	9.0	(6.2)	―	1/8	N5/0灰色	密:φ2㎜以下の長石・チャート少量含	内外面:回転ナデ、内面:自然釉、外面下部:ヘラケズリ
140	須恵器	壷	流路1100	14.5	17.2	―	3/5	N6/0灰色	密:φ2㎜以下の長石少量含	内面～口縁外面:回転ナデ、口縁内外面:自然釉、内面下部:ナデ・当て具痕？、外面:格子目タタキ・カキ目
141	須恵器	瓶	流路1100	8.6	10.6	―	ほぼ1/1	N4/0灰色～7.5YR5/1褐灰色	密:φ1㎜以下の長石・チャート少量含	内外面:回転ナデ、内面下部:板ナデ・当て具痕のちナデ、外面:カキ目・穿孔、外面下部:ケズリのちナデ
142	須恵器	瓶	流路1100	―	(8.6)	―	3/5	N5/0灰色	密:φ2㎜以下の長石少量含	内外面:回転ナデ、内面下部:ナデ、外面下部:ヘラケズリのちナデ、内面下部・外面上部:自然釉、外面:穿孔
143	須恵器	瓶	流路1100	―	(12.6)	―	4/5	N5/0灰色	密:φ1㎜以下の長石・チャート少量含	内面:回転ナデ・自然釉、外面上部:回転ナデ、外面下部:オサエのちナデ・穿孔・櫛先刺突文・沈線・自然釉、外面上部:波状文・櫛先刺突文
144	須恵器	甕	流路1100	16.8	(11.1)	―	1/8	N6/0灰色	密:φ2㎜以下の長石・石英少量含	口縁内外面:回転ナデ、口縁外面下部:櫛描波状文・稜、内面上部:ナデ、内面:回転ナデ、外面:タタキのちナデ
145	須恵器	甕	流路1100	9.8	(8.9)	―	2/5(口縁)	N4/0灰色	密:φ3㎜以下の長石・チャート少量含	口縁内外面:回転ナデ・自然釉、口縁外面下部:櫛描波状文、内面上部:ナデ、内面:当て具痕のちナデ、外面:タタキのちナデ
146	須恵器	甕	流路1100	18.4	(14.4)	―	2/5(口縁～体部)	2.5Y7/2灰黄色	密:φ2㎜以下の長石・チャート少量含	口縁内外面:回転ナデ、内面:同心円当て具痕、外面:格子目タタキ
147	須恵器	甕	流路1100	17.8	(31.4)	―	1/5(口縁～体部)	N5/0灰色	密:φ7㎜以下の長石・チャート少量含	口縁内外面:自然釉、口縁上部～口縁内面:回転ナデ、内面:当て具痕、口縁外面:タタキのちナデ、外面:カキ目のちタタキ

No	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	色調	胎土	調整、その他
148	須恵器	杯蓋	流路1100東岸	11.5	4.5	—	1/8(口縁)	2.5Y5/1黄灰色	密:φ1㎜以下の長石・石英・チャート少量含	外面上部:回転ヘラケズリ・摘み剥離痕、外面:自然釉、内外面:回転ナデ
149	須恵器	杯蓋	流路1100東岸	12.8	(4.8)	—	2/5	N5/0灰色	やや密:φ2㎜以下の長石・チャート少量含	外面上部:回転ナデ、外面:回転ヘラケズリ・自然釉、内外面:回転ナデ
150	須恵器	杯蓋	流路1100東岸	12.3	4.6	—	2/5	N5/0灰色	密:φ2㎜以下の長石・石英・赤色粒少量含	外面上部:回転ヘラケズリ、内外面:回転ナデ
151	須恵器	杯蓋	流路1100東岸	13.8	4.4	—	1/5	10Y5/1灰色	密:φ2㎜以下の長石・石英・チャート少量含	外面上部:回転ヘラケズリ、外面:自然釉、内外面:回転ナデ
152	須恵器	杯蓋	流路1100東岸	15.2	4.2	—	ほぼ1/1	N4/0灰色	やや密:φ4㎜以下の長石・石英・チャート少量含	外面上部:回転ヘラケズリ、内外面:回転ナデ
153	須恵器	杯蓋	流路1100東岸	15.2	5.0	—	3/5	N5/0灰色	やや粗:φ7㎜以下の長石・チャート少量含	外面上部:回転ヘラケズリ、外面:自然釉、内外面:回転ナデ、内面上部:同心円当て具痕
154	須恵器	杯蓋	流路1100東岸	15.7	4.8	—	4/5	5Y5/1灰色～5Y4/1灰色	やや密:φ3㎜以下の長石・石英・チャート少量含	外面上部:回転ヘラケズリ、内外面:回転ナデ、内面上部:同心円当て具痕のちナデ
155	須恵器	杯蓋	流路1100東岸	—	4.2	14.4	2/3	N6/0灰色	やや密:φ2㎜以下長石・石英少量含	外面上部:回転ヘラケズリ、内外面:回転ナデ
156	須恵器	杯蓋	流路1100東岸	—	4.6	14.7	1/2	5Y8/1灰白色	密:φ3㎜以下の長石・チャート・雲母少量含	外面上部:回転ヘラケズリ、内外面:回転ナデ
157	須恵器	杯身	流路1100東岸	10.0	4.7	—	3/5	N5/0灰色～N4/0灰色	密:φ5㎜以下の長石・石英・チャート少量含	内外面:回転ナデ、外面下部:回転ヘラケズリ、外面:自然釉
158	須恵器	杯身	流路1100東岸	10.5	4.6	—	2/3	N6/0灰色	密:φ3㎜以下の長石・石英・チャート少量含	内外面:回転ナデ、外面下部:回転ヘラケズリ
159	須恵器	杯身	流路1100東岸	11.1	5.9	—	4/5	10Y5/1灰色	密:φ1.5㎜以下の長石・石英・チャート少量含	内外面:回転ナデ、外面下部:回転ヘラケズリ、内面下部:当て具痕
160	須恵器	杯身	流路1100東岸	13.0	5.5	—	ほぼ1/1	N6/0灰色	密:φ4㎜下の長石・石英・チャート少量含	内外面:回転ナデ、内面下部:同心円当て具痕のち回転ナデ、外面下部:回転ヘラケズリ、外面:自然釉
161	須恵器	杯身	流路1100東岸	12.4	(5.2)	—	2/5	N4/0灰色	密:φ2㎜以下の長石・石英・チャート・雲母少量含	内外面:回転ナデ、外面下部:回転ヘラケズリ、鍔上部:重ね焼き痕
162	須恵器	杯身	流路1100東岸	13.3	5.2	—	1/2	N5/0灰色	やや粗:φ4㎜以下の長石・石英・チャート少量含	内外面:回転ナデ、外面下部:回転ヘラケズリ
163	須恵器	杯身	流路1100東岸	12.0	3.6	—	1/2	10Y5/1灰色	密:φ1㎜以下の長石・石英・チャート少量含	内外面:回転ナデ、外面下部:回転ヘラケズリ、外面:自然釉
164	須恵器	杯身	流路1100東岸	12.5	4.5	—	4/5	5RP5/1紫灰色	粗:φ7㎜以下の長石・石英・チャート少量含	内外面:回転ナデ、外面下部:回転ヘラケズリ
165	須恵器	杯身	流路1100東岸	12.7	4.3	—	1/4	N6/0灰色	密:φ4㎜以下の長石・チャート少量含	内外面:回転ナデ、内面下部:同心円当て具痕・回転ナデ、外面下部:回転ヘラケズリ、外面:自然釉
166	須恵器	提瓶	流路1100東岸	9.8	(10.0)	—	1/4(口縁)	N7/1灰白色	密:φ4㎜以下の長石少量含	口縁外面:カキ目、口縁内面:回転ナデ、口縁内外面:自然釉、内外面:回転ナデ
167	須恵器	広口壷	流路1100東岸	—	(13.3)	—	3/5	N5/0灰色	密:φ3㎜以下の長石少量含	口縁内外面:回転ナデ、口縁外面:櫛描波状文、内面:当て具痕、外面:タタキのちカキ目
168	須恵器	壷	流路1100東岸	14.8	(10.2)	—	1/2(口縁)	2.5Y7/2灰黄色	密:φ2㎜以下の長石・石英・チャート少量含	口縁内外面:回転ナデ、内面:同心円当て具痕・ナデ、外面上部:回転ナデ・カキ目、外面:タタキのちカキ目
169	須恵器	壷	流路1100東岸	10.7	(4.6)	—	1/3(口縁)	N6/0灰色	密:φ2㎜以下の長石少量含	口縁内外面:回転ナデ・線刻あり、内面:同心円当て具痕、外面:タタキのちカキ目
170	須恵器	有蓋短頸壷	流路1100東岸	6.8	6.5	—	ほぼ1/1	N5/0灰色	密:φ2㎜以下の長石少量含	内外面:回転ナデ、外面:自然釉、外面下部:ヘラ切りのちナデ、肩部:重ね焼き痕

No	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	色調	胎土	調整、その他
171	須恵器	甕	流路1100東岸	16.8	(22.6)	―	3/5	N6/0灰色	密:φ2㎜以下の長石・チャート少量含	口縁内外面:回転ナデ、内面:同心円当て具痕・ナデ、外面:タタキ
172	須恵器	甕	流路1100東岸	18.2	31.3	―	4/5	内:5YR6/4にぶい橙色、外:N4/0灰色	密:φ3㎜以下の長石・チャート・赤色粒少量含	口縁内外面:回転ナデ、内面上部:同心円当て具痕のちナデ、外面:タタキのちカキ目、底面:タタキ
173	須恵器	甕	流路1100東岸	19.4	(34.0)	―	4/5	N5/0灰色	密:φ3.5㎜以下の長石・石英・チャート・雲母少量含	口縁内外面:回転ナデ、内面:同心円当て具痕、外面:タタキのちカキ目
174	古式土師器	小型丸底壷	流路1100東岸	11.2	(4.1)	―	1/4	2.5Y7/2灰黄色	密:φ2㎜以下の長石・石英・チャート少量含	口縁内面:ハケ・ナデ、外面:ヨコナデ
175	古式土師器	小型丸底壷	流路1100東岸	11.8	(7.4)	―	1/6	10YR7/2にぶい黄橙色	密:φ1.5㎜以下の長石・石英・チャート少量含	口縁内面:ハケのちミガキ、外面:ヨコナデ、外面下部:ミガキ、内面下部:ケズリ
176	土師器	甕	流路1100東岸	16.8	(6.7)	―	1/8	7.5YR7/4にぶい橙色	密:φ3㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒少量含	口縁内面:ハケのちヨコナデ、内外面下部:ハケ、外面:ヨコナデ
177	土師器	甑	流路1100東岸	25.6	(9.0)	―	1/8	10YR8/3浅黄橙色	密:φ2㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒少量含	口縁内面～端部:焦げ痕、内外面:ヨコナデ、内面下部:ケズリのちナデ、外面下部:ハケ
178	土師器	鉢	流路1100東岸	12.7	4.9	―	1/8	10YR8/4浅黄橙色	やや密:φ2㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒少量含	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
179	土師器	椀形高杯	流路1100東岸	12.2	(4.3)	―	1/4	7.5YR7/3にぶい橙色	密:φ3㎜以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒少量含	内外面:ヨコナデ、外面下部:ハケ

付表２　平安時代から室町時代土器類観察表

No	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎土	調整、その他
180	土師器	皿A	溝1000	9.8	1.7	—	2.5Y7/2灰黄色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
181	土師器	皿A	溝1000	9.9	1.5	—	2.5Y7/2灰黄色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
182	土師器	皿A	溝1000	9.9	1.6	—	10YR8/3浅黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
183	土師器	皿A	溝1000	10.2	1.5	—	2.5Y8/3淡黄色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
184	土師器	皿A	溝1000	10.4	1.5	—	10YR8/3浅黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
185	土師器	皿N	溝1000	10.0	2.0	—	10YR8/2灰白色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、外面に粘土紐痕
186	土師器	皿N	溝1000	10.1	1.7	—	2.5Y7/2灰黄色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
187	土師器	皿N	溝1000	13.6	2.7	—	10YR8/3浅黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、外面にハケメ痕残る
188	土師器	皿N	溝1000	14.8	3.0	—	10YR7/3にぶい黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
189	土師器	皿N	溝1000	14.9	2.8	—	7.5YR7/4にぶい橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
190	土師器	皿N	溝1000	15.0	2.9	—	10YR8/3浅黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、外面下部:オサエ
191	土師器	皿N	溝1000	15.7	3.0	—	7.5YR8/4浅黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、外面にハケメ痕残る
192	土師器	皿N	溝1000	16.6	(2.9)	—	10YR8/3浅黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、外面下部:オサエ、内外面にハケメ痕残る
193	土師器	皿N	井戸620	8.8	1.6	—	5Y7/2灰白色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
194	土師器	皿N	井戸620	9.1	1.5	—	5Y7/2灰白色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
195	土師器	皿N	井戸620	9.8	1.4	—	漆:10YR3/2黒褐色、胎土:10YR8/3浅黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、外面下部:オサエ、口縁に油煙付着、内面に漆付着
196	土師器	皿N	井戸620	9.8	1.8	—	5Y7/2灰白色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
197	土師器	皿N	井戸620	14.0	2.6	—	2.5Y7/2灰黄色	やや密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、内面下部に油煙付着
198	土師器	皿N	井戸620	14.7	3.6	—	2.5Y6/2灰黄色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、内面に油煙付着
199	土師器	皿N	井戸620	15.7	(3.2)	—	2.5Y8/3淡黄色	密	内外面:ヨコナデ、外面下部:オサエ
200	灰釉陶器	片口皿	井戸620	13.7	4.2	8.0	2.5Y6/1黄灰色	密	内外面:回転ナデ、外面下部～底面に回転ケズリ、内面:施釉、底面に自然釉
201	山茶椀	小皿	井戸620	8.8	2.7	4.6	5Y7/1灰白色	密	内外面:回転ナデ、底面:ヘラ切りのち貼り付け高台、口縁内面に自然釉、内面下部に使用痕、接地面に藁痕
202	白磁	椀	井戸620	(14.6)	(2.5)	—	釉:5Y6/2灰オリーブ色、胎土:5Y7/1灰白色	密	内外面:回転ナデ・施釉
203	白磁	椀	井戸620	—	(3.4)	7.6	釉:5Y7/2灰白色、胎土:N8/0灰白色	密	内外面上部:回転ナデ、内外面:透明釉、外面下部～底面:回転ケズリ・削り出し高台
204	土師器	皿Ac	溝900	7.1	1.3	—	5Y6/1灰色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
205	土師器	皿Ac	溝900	8.0	1.1	—	7.5YR8/2灰白色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
206	土師器	皿N	溝900	8.3	1.6	—	2.5Y7/2灰黄色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
207	土師器	皿N	溝900	8.6	1.6	—	10YR6/4にぶい黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
208	土師器	皿N	溝900	8.8	1.9	—	10YR7/3にぶい黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、内面下部にハケメ痕残る、底面に粘土接合痕
209	土師器	皿N	溝900	8.9	1.9	—	5YR7/6橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、底面に粘土接合痕
210	土師器	皿N	溝900	8.9	1.5	—	2.5Y7/2灰黄色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、外面に煤付着
211	土師器	皿N	溝900	9.0	1.6	—	7.5YR7/4にぶい橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ

No	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎土	調整、その他
212	土師器	皿N	溝900	9.2	1.8	—	7.5YR7/6橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
213	土師器	皿N	溝900	9.2	1.6	—	2.5Y8/3淡黄色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
214	土師器	皿N	溝900	9.3	1.5	—	2.5Y7/2灰黄色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
215	土師器	皿N	溝900	9.5	1.7	—	2.5Y7/2灰黄色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
216	土師器	皿N	溝900	9.5	1.8	—	10YR7/4にぶい黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
217	土師器	皿N	溝900	10.0	1.7	—	2.5Y7/2灰黄色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
218	土師器	皿N	溝900	10.2	1.8	—	2.5Y7/2灰黄色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
219	土師器	皿N	溝900	10.3	1.9	—	2.5Y6/2灰黄色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
220	土師器	皿N	溝900	10.4	1.9	—	2.5Y7/3浅黄色	やや密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ・白色塊付着、外面下部:オサエ、口縁に油煙付着
221	土師器	皿N	溝900	10.5	1.8	—	2.5Y7/2灰黄色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、口縁に油煙付着
222	土師器	皿N	溝900	10.5	1.7	—	10YR7/3にぶい黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
223	土師器	皿N	溝900	10.6	1.9	—	2.5Y6/2灰黄色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、口縁に油煙付着
224	土師器	皿N	溝900	10.6	2.2	—	10YR8/3浅黄橙色	やや密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
225	土師器	皿N	溝900	10.7	1.9	—	2.5Y7/2灰黄色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、口縁に油煙付着
226	土師器	皿N	溝900	10.7	1.8	—	10YR7/3にぶい黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、全体的に油煙付着
227	土師器	皿N	溝900	10.8	1.9	—	10YR7/3にぶい黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
228	土師器	皿N	溝900	10.9	1.9	—	2.5Y4/1黄灰色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、口縁～内面に油煙付着
229	土師器	皿N	溝900	11.0	1.7	—	2.5Y7/2灰黄色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
230	土師器	皿N	溝900	11.0	1.8	—	10YR7/4にぶい黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、口縁に油煙付着
231	土師器	皿N	溝900	11.5	2.2	—	10YR7/3にぶい黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、口縁に油煙付着
232	土師器	皿N	溝900	13.6	2.3	—	10YR6/4にぶい黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
233	土師器	皿N	溝900	13.6	2.4	—	10YR7/4にぶい黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
234	土師器	皿N	溝900	13.6	2.3	—	10YR7/3にぶい黄橙色	やや密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、底面に成形台痕残る
235	土師器	皿N	溝900	13.7	3.0	—	10YR7/4にぶい黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
236	土師器	皿N	溝900	14.2	3.5	—	10YR7/4にぶい黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
237	土師器	皿N	溝900	14.4	3.0	—	10YR7/3にぶい黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
238	土師器	皿N	溝900	14.6	2.5	—	10YR7/4にぶい黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
239	土師器	皿N	溝900	14.8	2.4	—	2.5Y7/3浅黄色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、口縁に油煙付着
240	土師器	皿N	溝900	15.2	2.8	—	10YR7/2にぶい黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、内面下部・外面に油煙付着
241	土師器	皿N	溝900	15.3	2.5	—	10YR7/4にぶい黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
242	土師器	皿	溝900	(21.0)	(3.6)	—	10YR7/2にぶい黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:ナデ
243	土師器	皿	溝900	(24.2)	(3.0)	—	10YR6/2灰黄褐色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエのちナデ
244	土師器	高台付皿	溝900	—	(4.5)	(12.9)	10YR8/2灰白色	密	内外面:ナデ

No	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎土	調整、その他
245	土師器(吉備系)	椀	溝900	14.7	4.7	5.6	10YR8/2灰白色	密	内面:板状工具によるナデ、内面下部・外面:ナデ、底面:ナデ・貼り付け高台、見込みに油煙付着
246	土師器	鉢	溝900	27.5	(7.8)	—	7.5YR7/3にぶい橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面:工具によるナデ、内面下部:板ナデ・爪痕？ 外面に粘土接合痕
247	白色土器	高台付皿	溝900	13.4	(2.8)	—	内外面:2.5Y2/1黒色、胎土:2.5Y8/1灰白色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、底面:静止糸切りのちナデ・貼り付け高台
248	白色土器	皿	溝900	8.0	1.7	—	2.5Y8/2灰白色	密	内外面:回転ナデ、底面:回転糸切り
249	白色土器	皿	溝900	8.2	(1.9)	—	2.5Y8/2灰白色	密	内外面:回転ナデ、底面:回転糸切り
250	白色土器	皿	溝900	9.1	2.0	—	2.5Y8/2灰白色	密	内外面:回転ナデ、底面:回転糸切り
251	白色土器	皿	溝900	13.3	3.2	5.2	10YR8/2灰白色	密	内外面:回転ナデ、底面:糸切り
252	白色土器	杯	溝900	(17.7)	(3.5)	—	10YR8/2灰白色	密	内外面:回転ナデ
253	白色土器	高杯	溝900	—	(17.6)	—	2.5Y8/1灰白色	密	内外面:ナデ、脚:ケズリ・心棒作り、内面中央:オサエ
254	白色土器	高杯	溝900	—	(18.1)	—	10YR8/2灰白色	密	内外面:ナデ、脚:ケズリ・心棒作り、内面中央:オサエ
255	須恵器	鉢	溝900	29.0	(7.8)	—	N7/0灰白色	密	内外面:回転ナデ、外面に工具痕、内面下部は表面磨滅著しい
256	須恵器	壷	溝900	9.4	(3.4)	—	7.5YR5/1褐灰色	密	内外面:回転ナデ
257	山茶椀	小皿	溝900	7.4	3.6	1.8	N7/0灰白色	密	内外面:回転ナデ、内面:自然釉、底面:糸切り・貼り付け高台、見込みに使用痕
258	山茶椀	小皿	溝900	8.2	4.0	2.5	5Y7/1灰白色	密	内外面:回転ナデ、口縁:自然釉、底面:回転糸切り、見込みに使用痕
259	瓦質土器	小椀	溝900	7.85	2.8	3.4	内外面:N5/0灰色、胎土:N8/0灰白色	密	内面:ミガキ、見込み:暗文、外面:ヨコナデのちミガキ、外面下部:オサエのちナデ、底面:ナデ・貼り付け高台
260	瓦質土器	椀	溝900	14.7	5.6	6.7	内外面:N4/0灰色、胎土:N8/0灰白色	密	内外面:ミガキ、見込み:暗文、外面下部:オサエ、底面:ナデ・貼り付け高台
261	瓦質土器	椀	溝900	13.8	(3.9)	—	内外面:N8/0灰白色、胎土:N4/0灰色	密	内外面:ヨコナデのちミガキ、見込み:暗文、外面下部:オサエ
262	瓦質土器	皿	溝900	8.1	1.5	—	内外面:N5/0灰色、胎土:N8/0灰白色	密	内外面:ヨコナデ、内面:ジグザグ状の暗文、外面下部:オサエ
263	瓦質土器	皿	溝900	8.0	1.3	—	内外面:N3/0暗灰色、胎土:2.5Y8/1灰白色	密	内外面:ヨコナデ、見込み:ジグザグ状の暗文、外面下部:オサエ
264	瓦質土器	脚付羽釜	溝900	22.0	(8.4)	—	内外面:N3/0暗灰色、胎土:N8/0灰白色	密	口縁:ヨコナデ、内面:オサエ・ハケメ、外面:オサエ、鍔:ナデ、外面に煤付着
265	瓦質土器	羽釜	溝900	18.0	(8.0)	—	内外面:N4/0灰色、胎土:2.5Y8/1灰白色	密	口縁:ヨコナデ、内面:オサエ・ナデ、外面:オサエ、鍔:ナデ、外面に煤付着
266	瓦質土器	羽釜	溝900	29.8	(10.2)	—	内外面:N5/0灰色、胎土:N8/0灰白色	密	口縁:ヨコナデ、内面:ハケメのちヨコナデ、内面下部:ナデ、外面:オサエのちナデ、鍔:ナデ
267	瓦質土器	鍋	溝900	22.1	(5.6)	—	内外面:2.5Y8/1灰白色～N3/0暗灰色、胎土:2.5Y8/1灰白色	密	口縁:ヨコナデ、内面:板ナデ、外面:オサエ、外面に煤付着
268	焼締陶器(常滑)	甕	溝900	—	(5.1)	—	2.5Y7/2灰黄色	密	内外面:回転ナデ・自然釉、内面に接合痕残る
269	焼締陶器(常滑？)	壷	溝900	15.0	(7.9)	—	2.5YR4/2灰赤色	密	内外面:回転ナデ・自然釉、内面下部:ナデ
270	白磁	椀	溝900	(15.6)	(2.0)	—	釉:5Y7/2灰白色、胎土:N8/0灰白色	密	内外面:回転ナデ・透明釉
271	白磁	椀	溝900	15.8	(4.3)	—	釉:淡緑灰色、胎土:N8/0灰白色	密	内外面:回転ナデ・透明釉・陰刻文
272	白磁	椀	溝900	16.8	(5.2)	—	釉:7.5Y7/1灰白色、胎土:N8/0灰白色	密	内外面:回転ナデ・透明釉、外面下部:回転ケズリ
273	白磁	椀	溝900	16.0	6.7	6.4	釉:5Y7/3浅黄色、胎土:2.5Y8/2灰白色	密	内外面:回転ナデ・透明釉、外面下部:回転ケズリ、底面:削り出し高台
274	白磁	有蓋水注	溝900	6.0	(3.5)	—	釉:5Y7/2灰白色、胎土:N8/0灰白色	密	内外面:回転ナデ・透明釉、口縁端部:釉剥ぎ、外面:沈線(3本)
275	青磁(同安窯系)	椀	溝900	16.4	(6.3)	—	釉:5Y7/3浅黄色、胎土:10YR7/4にぶい黄橙色	密	内外面:回転ナデ・黄緑褐釉、内面:陰刻文・沈線、外面下部:回転ケズリ、外面:施文的なハケメ

No	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎土	調整、その他
276	白磁	Ⅲ	溝900	10.6	(2.3)	—	釉:5Y7/2灰白色、胎土:5Y8/1灰白色	密	内外面:回転ナデ・施釉、外面下部:回転ケズリ
277	白磁	Ⅲ	溝900	—	(2.1)	(3.2)	釉:2.5Y7/4浅黄色、胎土:2.5Y8/2灰白色	密	内外面:回転ナデ・黄褐釉、外面下部～底面:回転ケズリ
278	青白磁	椀	溝900	—	(3.0)	5.3	釉:7.5GY8/1明緑灰色、胎土:N8/0灰白色	密	全面に施釉、内外面:回転ナデ・施釉、底部外面:釉剥ぎ
279	土師器	ⅢN	土坑516	13.8	2.6	—	2.5Y8/2灰白色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
280	土師器	ⅢN	土坑516	14.0	3.1	—	5YR8/3淡橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
281	土師器	ⅢN	土坑516	14.2	2.4	—	7.5YR8/2灰白色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
282	土師器	ⅢN	土坑516	14.2	2.9	—	10YR8/1灰白色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
283	土師器	ⅢN	土坑516	14.4	(3.2)	—	7.5YR8/1灰白色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
284	土師器	ⅢN	土坑516	14.6	3.4	—	10YR8/2灰白色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
285	土師器	ⅢAc	井戸830	8.5	1.2	—	10YR6/3にぶい黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、口縁外面に粘土接合痕
286	土師器	ⅢAc	井戸830	9.1	1.3	—	10YR6/4にぶい黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
287	土師器	ⅢN	井戸830	8.8	1.7	—	10YR7/3にぶい黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
288	土師器	ⅢN	井戸830	8.9	1.7	—	10YR5/4にぶい黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
289	土師器	ⅢN	井戸830	9.0	1.6	—	10YR7/2にぶい黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
290	土師器	ⅢN	井戸830	9.0	1.6	—	2.5Y6/2灰黄色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
291	土師器	ⅢN	井戸830	9.1	1.6	—	2.5Y7/3浅黄色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、外面に粘土接合痕
292	土師器	ⅢN	井戸830	9.1	1.7	—	10YR6/4にぶい黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
293	土師器	ⅢN	井戸830	9.1	1.6	—	2.5Y7/2灰黄色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、内外面に油煙付着
294	土師器	ⅢN	井戸830	9.4	1.8	—	10YR7/3にぶい黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、内外面に油煙付着
295	土師器	ⅢN	井戸830	9.8	1.8	—	2.5Y8/2灰白色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、内面に油煙付着、底面に粘土接合痕
296	土師器	ⅢN	井戸830	10.0	1.6	—	7.5YR7/4にぶい橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、内外面に油煙付着
297	土師器	ⅢN	井戸830	10.7	2.1	—	2.5Y7/3浅黄色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、内外面に油煙・煤付着、底面に成形台痕残る
298	土師器	ⅢN	井戸830	10.7	2.1	—	2.5Y7/4浅黄色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、内面に油煙付着
299	土師器	ⅢN	井戸830	10.8	2.0	—	10YR7/4にぶい黄橙色、N3/0暗灰色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、口縁外面に油煙付着
300	土師器	ⅢN	井戸830	10.9	2.1	—	2.5Y7/3浅黄色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、口縁外面に油煙付着
301	土師器	ⅢN	井戸830	10.9	2.0	—	10YR6/3にぶい黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、内外面に油煙付着、底面に粘土接合痕
302	土師器	ⅢN	井戸830	10.9	2.0	—	2.5Y7/3浅黄色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、内外面に油煙付着
303	土師器	ⅢN	井戸830	11.0	2.0	—	2.5Y5/2暗灰黄色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、全面に油煙・煤付着
304	土師器	ⅢN	井戸830	11.0	2.1	—	10YR7/4にぶい黄橙色、N3/0暗灰色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、内外面に油煙付着
305	土師器	ⅢN	井戸830	11.0	2.2	—	2.5Y7/2灰黄色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、内外面に油煙付着
306	土師器	ⅢN	井戸830	11.1	2.1	—	2.5Y6/3にぶい橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、内外面に油煙付着
307	土師器	ⅢN	井戸830	13.7	3.1	—	2.5Y7/2灰黄色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
308	土師器	ⅢN	井戸830	13.7	2.8	—	7.5YR7/3にぶい橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ

No	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎土	調整、その他
309	土師器	皿N	井戸830	13.8	2.6	—	10YR7/4にぶい黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
310	土師器	皿N	井戸830	14.0	2.9	—	2.5Y7/2灰黄色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
311	土師器	皿N	井戸830	14.2	2.6	—	2.5Y7/2灰黄色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
312	土師器	皿N	井戸830	14.2	3.5	—	10YR7/2にぶい黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
313	土師器	皿N	井戸830	14.4	3.4	—	2.5Y7/3浅黄色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、底面に成形台痕(幅7.9cm)残る
314	土師器	皿N	井戸830	14.5	3.4	—	7.5YR7/4にぶい橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
315	土師器	皿N	井戸830	14.6	2.7	—	2.5Y7/2灰黄色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
316	土師器	皿N	井戸830	15.7	2.8	—	2.5Y8/2灰白色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、底面に成形台痕残る
317	白色土器	高台付皿	井戸830	13.9	(3.2)	—	2.5Y8/1灰白色	密	内外面:回転ナデ
318	白色土器	高台付皿	井戸830	14.4	(2.6)	—	2.5Y8/2灰白色	密	内外面:回転ナデ
319	瓦質土器	皿	井戸830	(9.8)	2.1	—	N3/0暗灰色	密	口縁外面:ヨコナデ、内面:ミガキ、外面下部:オサエ
320	白磁	椀	井戸830	—	(2.0)	—	釉:5Y6/2灰オリーブ色、胎土:N7/0灰白色	密	内外面:回転ナデ・透明釉
321	白磁	皿	井戸830	—	(1.5)	3.7	釉:7.5Y7/1灰白色、胎土:N8/0灰白色	密	内外面:回転ナデ・黄釉、底部:回転ケズリ
322	土師器	皿N	土坑335	8.4	1.6	—	10YR7/4にぶい黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
323	土師器	皿N	土坑335	8.7	1.6	—	7.5YR7/4にぶい橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
324	土師器	皿N	土坑335	8.7	1.6	—	10YR7/3にぶい黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
325	土師器	皿N	土坑335	8.7	1.7	—	7.5YR7/4にぶい橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
326	土師器	皿N	土坑335	8.8	1.5	—	7.5YR7/4にぶい橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
327	土師器	皿N	土坑335	8.8	1.4	—	10YR7/3にぶい黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
328	土師器	皿N	土坑335	8.8	1.5	—	10YR7/3にぶい黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
329	土師器	皿N	土坑335	8.8	1.6	—	7.5YR7/4にぶい橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
330	土師器	皿N	土坑335	8.8	1.6	—	10YR7/4にぶい黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
331	瓦質土器(大和型)	椀	土坑335	15.5	(4.6)	—	N4/0灰色	密	内面:ヘラミガキ、内面下部:ナデ、口縁外面:ヨコナデ、外面～外面下部:オサエ、口縁端部内面に段を付ける
332	瓦質土器	皿	土坑335	7.9	1.2	—	N4/0灰色	密	内外面:ヨコナデ、外面下部:オサエ、見込み:ジグザグ状の暗文
333	白磁	椀	土坑335	—	(2.2)	—	釉:5Y7/2灰白色、胎土:2.5Y7/2灰黄色	密	内外面:回転ナデ・透明釉
334	青磁	椀	土坑335	—	(3.9)	—	釉:5GY6/1オリーブ灰色、胎土:2.5Y7/1灰白色	密	内外面:回転ナデ・施釉、内面下部:陰刻文
335	土師器	皿Ac	土坑518	7.0	1.4	—	5Y8/1灰白色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
336	土師器	皿N	土坑518	8.2	1.7	—	2.5Y8/3淡黄色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
337	土師器	皿N	土坑518	8.2	1.5	—	10YR8/2灰白色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
338	土師器	皿N	土坑518	8.3	1.5	—	2.5Y8/2灰白色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
339	土師器	皿N	土坑518	8.4	1.5	—	5Y8/1灰白色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
340	土師器	皿N	土坑518	8.6	1.7	—	10YR8/3浅黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
341	土師器	皿N	土坑518	8.8	1.5	—	10YR8/2灰白色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ

No	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎土	調整、その他
342	土師器	皿N	土坑518	9.0	1.5	—	2.5Y8/2灰白色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
343	土師器	皿N	土坑518	9.2	1.6	—	2.5Y8/3淡黄色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
344	土師器	皿N	土坑518	10.4	1.6	—	7.5YR8/2灰白色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
345	土師器	皿N	土坑518	12.2	2.4	—	2.5Y8/2灰白色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
346	土師器	皿N	土坑518	(12.8)	2.4	—	7.5YR8/2灰白色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
347	土師器	皿N	土坑518	(13.0)	2.5	—	2.5Y7/3浅黄色	やや密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
348	土師器	皿N	土坑518	13.2	2.3	—	7.5YR8/2灰白色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
349	土師器	皿N	土坑518	13.4	2.8	—	2.5Y8/2灰白色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、内面に板状工具痕、底面に板状工具痕が少し残る
350	土師器	皿N	土坑518	13.4	2.7	—	2.5Y8/2灰白色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
351	土師器	皿N	土坑518	13.9	2.9	—	10YR8/2灰白色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
352	土師器	皿Ac	土坑616	6.6	1.2	—	7.5Y8/1灰白色	やや密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
353	土師器	皿N	土坑616	8.2	1.1	—	5Y8/2灰白色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
354	土師器	皿N	土坑616	8.25	1.4	—	10YR8/2灰白色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、口縁に油煙付着
355	土師器	皿N	土坑616	8.3	1.6	—	5Y7/1灰白色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
356	土師器	皿N	土坑616	8.4	1.5	—	10YR8/1灰白色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
357	土師器	皿N	土坑616	8.5	1.4	—	5Y8/2灰白色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
358	土師器	皿N	土坑616	8.5	1.0	—	2.5Y8/2灰白色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
359	土師器	皿N	土坑616	8.7	1.5	—	7.5Y7/1灰白色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
360	土師器	皿N	土坑616	8.8	1.6	—	2.5TY8/1灰白色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
361	土師器	皿N	土坑616	9.4	2.0	—	10YR7/2にぶい黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、口縁に油煙付着
362	土師器	皿S	土坑616	10.8	3.0	—	10YR8/1灰白色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:板状工具によるナデ、外面下部:オサエ
363	土師器	皿N	土坑616	12.0	2.1	—	2.5Y8/2灰白色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
364	土師器	皿N	土坑616	12.0	2.5	—	2.5Y7/2灰黄色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
365	土師器	皿N	土坑616	12.0	2.4	—	10YR7/3にぶい黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
366	土師器	皿N	土坑616	12.2	1.9	—	2.5Y8/2灰白色	やや密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、口縁に油煙付着
367	土師器	皿N	土坑616	12.2	2.4	—	10YR8/3浅黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
368	土師器	皿N	土坑616	12.2	2.6	—	7.5Y8/1灰白色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、底面にヘラ起こし痕残る
369	土師器	皿N	土坑616	12.2	2.6	—	5Y7/2灰白色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
370	土師器	皿N	土坑616	12.6	2.4	—	10YR8/2灰白色、7.5YR8/4浅黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
371	土師器	皿N	土坑616	12.6	2.1	—	2.5Y8/1灰白色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
372	土師器	皿N	土坑616	12.6	2.2	—	5Y8/2灰白色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
373	土師器	皿N	土坑616	12.9	2.2	—	5Y8/1灰白色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
374	須恵器	片口鉢	土坑616	(29.8)	(3.9)	—	N5/0灰色、口縁外面:N2/0黒色	密	内外面:回転ナデ

No	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎土	調整、その他
375	瓦質土器	小椀	土坑616	7.4	2.3	3.4	内:N8/0灰白色、外:N5/0灰色	密	内面:ナデ・暗文、外面:ヨコナデ、外面下部～底面:オサエ、底面:貼り付け高台
376	瓦質土器	鍋	土坑616	(26.7)	(10.5)	—	内:N8/0灰白色、外:N4/0灰色	密	口縁:ヨコナデ、内面:板状工具によるナデ、外面:オサエ・煤付着
377	瓦質土器	鍋	土坑616	(28.0)	(11.4)	—	内:5Y7/1灰白色、外:N3/0暗灰色	密	口縁:ヨコナデ、内面:板状工具によるナデ、外面:オサエ、内面下部に焦げ跡、外面に煤付着
378	白色土器	高杯脚部	土坑616	—	(6.5)	—	2.5Y8/1灰白色	密	脚:ケズリ、脚中心:心棒作り
379	白色土器	高台付皿	土坑616	5.2	(2.4)	—	7.5YR8/1灰白色	密	内外面:回転ナデ、接地面:回転糸切り、上端中央・下端中央を工具により削り取り
380	白磁	椀	土坑616	(15.8)	(3.8)	—	釉:7.5Y7/2灰白色、胎土:7.5Y7/1灰白色	密	内外面:回転ナデ・透明釉、外面下部:回転ケズリ
381	白磁(定窯系)	皿	土坑616	8.2	(1.2)	—	釉:7.5Y8/1灰白色、胎土:10Y8/1灰白色	密	内面:回転ナデ・透明釉、見込み:陰刻花文、外面下部:釉剥ぎ、底面:透明釉・回転ケズリ
382	青磁	椀	土坑616	(16.2)	(3.5)	—	釉:5GY6/1オリーブ灰色、胎土:N7/0灰白色	密	内面:回転ナデ・緑色釉、外面:鎬蓮弁文・緑色釉
383	青磁	椀	土坑616	—	(2.6)	6.0	釉:5GY7/1明オリーブ灰色、胎土:N8/0灰白色	密	内面下部:陰刻文・緑色釉、外面下部～底面:緑色釉・削り出し高台、接地面に使用痕
384	土師器	皿N	土坑721	8.6	1.4	—	10YR7/3にぶい黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
385	土師器	皿N	土坑721	8.7	1.7	—	10YR8/4浅黄橙色	やや密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
386	土師器	皿N	土坑721	8.8	1.4	—	10YR8/3浅黄橙色	やや密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
387	土師器	皿N	土坑721	8.9	1.3	—	10YR8/3浅黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、内面下部に粘土接合痕
388	土師器	皿N	土坑721	9.0	1.8	—	10YR8/4浅黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
389	土師器	皿N	土坑721	14.1	2.4	—	10YR7/3にぶい黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
390	土師器	皿N	土坑721	14.1	2.6	—	7.5YR8/4浅黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
391	白磁	皿	土坑721	11.0	2.5	3.6	釉:5Y6/3オリーブ黄色、胎土:2.5Y6/1黄灰色	密	内外面:回転ナデ・黄褐色釉、外面下部:回転ナデ・回転ケズリ、底面:ヘラ切り
392	土師器	皿Ac	井戸1210	7.3	1.3	—	2.5Y6/2灰黄色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
393	土師器	皿N	井戸1210	8.0	1.3	—	2.5Y8/3淡黄色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
394	土師器	皿N	井戸1210	8.0	1.5	—	10YR7/4にぶい黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
395	土師器	皿N	井戸1210	8.6	1.3	—	2.5Y7/2灰黄色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
396	土師器	皿N	井戸1210	8.7	1.2	—	10YR8/3浅黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
397	土師器	皿N	井戸1210	8.7	1.5	—	2.5Y8/2灰白色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、内外面に油煙付着
398	土師器	皿N	井戸1210	8.8	1.3	—	2.5Y6/2灰黄色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
399	土師器	皿N	井戸1210	11.9	3.1	—	2.5Y8/2灰白色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
400	土師器	皿N	井戸1210	(12.2)	1.8	—	10YR7/3にぶい黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
401	土師器	皿N	井戸1210	12.4	2.5	—	7.5YR7/4にぶい橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
402	土師器	皿N	井戸1210	(12.5)	2.2	—	10YR7/3にぶい黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
403	土師器	皿N	井戸1210	(13.4)	2.4	—	2.5Y7/2灰黄色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
404	須恵器	鉢	井戸1210	(28.9)	(5.8)	—	N5/0灰色	密	内外面:回転ナデ
405	瓦質土器	羽釜	井戸1210	16.8	(7.1)	—	N4/0灰色	密	口縁外面:ヨコナデ、内面:ハケメ、外面:オサエ、鍔は貼り付け、鍔～外面下部に煤付着
406	瓦質土器	鍋	井戸1210	29.1	(11.1)	—	N4/0灰色	密	口縁:ヨコナデ、内面:ハケメ、内面下部:ナデ、外面:オサエ、口縁外面～外面下部に煤付着
407	白磁	椀	井戸1210	(15.4)	(4.7)	—	釉:5Y7/2灰白色、胎土:5Y7/1灰白色	密	内外面:回転ナデ・透明釉、外面下部:回転ケズリ、内面下部に沈線

No	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎土	調整、その他
408	白磁	椀	井戸1210	(16.5)	(4.0)	—	釉:5Y6/2灰オリーブ色、胎土:5Y6/1灰色	密	内外面:回転ナデ・施釉、口縁外面に溶着痕
409	土師器	皿N	土坑735	7.7	1.7	—	10YR7/2にぶい黄橙色	やや粗	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、口縁に油煙付着
410	土師器	皿S	土坑735	7.9	2.1	—	2.5Y8/2灰白色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
411	土師器	皿N	土坑735	11.2	2.1	—	7.5YR7/4にぶい橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
412	土師器	皿N	土坑735	11.5	2.2	—	5YR6/6橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
413	瓦質土器	鍋	土坑735	28.6	(13.6)	—	N3/0暗灰色	密	口縁～外面:ヨコナデ、内面:ハケメ、内面下部:ナデ、外面下部:ケズリ、外面に煤付着
414	土師器	皿Ac	溝840	4.4	0.9	—	10YR8/3浅黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、外面下部:オサエ
415	土師器	皿Ac	溝840	4.4	1.1	—	2.5Y8/2灰白色	密	内外面:ヨコナデ、外面下部:オサエ
416	土師器	皿N	溝840	7.5	1.5	—	7.5YR7/4にぶい橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
417	土師器	皿S	溝840	7.6	2.1	—	2.5Y8/3淡黄色	密	内外面:ヨコナデ、外面下部:オサエ
418	土師器	皿N	溝840	10.9	(2.1)	—	2.5Y7/3浅黄色	密	内外面:ヨコナデ、外面下部:オサエ
419	土師器	皿N	溝840	11.3	2.2	—	10YR6/4にぶい黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、外面下部:オサエ
420	土師器	皿S	溝840	11.9	(2.3)	—	2.5Y8/2灰白色	密	内外面:ヨコナデ、外面下部:オサエ
421	土師器	皿S	溝840	13.8	(2.7)	—	7.5YR7/4にぶい橙色	密	内外面:ヨコナデ、外面下部:オサエ
422	白色土器	高台付皿	溝840	9.0	2.4	6.2	10YR7/3にぶい黄橙色	密	内外面:回転ナデ、底面:回転糸切り・貼り付け高台
423	土師器	高台付皿	溝840	24.6	5.0	15.0	10YR7/2にぶい黄橙色	密	内外面:回転ナデ、底面:静止糸切り・回転ケズリ・貼り付け高台、内面中央に油煙付着
424	土師器	鉢	溝840	20.7	(9.1)	—	10YR7/3にぶい黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:板ナデのちナデ、外面下部:板ナデのちナデ
425	土師器	脚付鉢	溝840	25.6	(10.4)	—	10YR7/2にぶい黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:板ナデ、外面下部:オサエ、底面に貼り付け三脚
426	須恵器	鉢	溝840	(29.2)	(3.2)	—	N6/0灰色	密	内外面:回転ナデ、口縁:自然釉、外面に接合痕
427	山茶碗	鉢	溝840	22.4	(6.6)	—	2.5Y6/1黄灰色	密	内外面:回転ナデ、外面下部:回転ケズリ、内面に使用痕
428	瓦質土器	椀	溝840	10.8	(4.1)	—	N3/0暗灰色	密	内外面:ヨコナデ、内面:ミガキ、外面下部:オサエ
429	瓦質土器	椀	溝840	13.7	(2.6)	—	N3/0暗灰色	密	内外面:ヨコナデ、内面:ミガキ、外面下部:オサエ
430	瓦質土器	椀	溝840	10.8	(2.9)	—	N4/0灰色	密	内外面:ヨコナデ・ミガキ、外面下部:オサエ
431	瓦質土器	羽釜	溝840	5.6	(3.25)	—	2.5Y8/3淡黄色	密	ミニチュア土器、内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、鍔は貼り付け
432	瓦質土器	羽釜	溝840	19.6	(6.9)	—	N4/0灰色	密	口縁:ヨコナデ、内面:ハケメ、内面下部:ナデ、外面:オサエ、鍔:ナデ、鍔～外面下部に煤付着
433	瓦質土器	羽釜	溝840	19.0	(6.2)	—	N4/0灰色	密	口縁:ヨコナデ、内面:ハケメ、外面:オサエ、鍔:ナデ、鍔～外面下部に煤付着
434	瓦質土器	鍋	溝840	27.5	(11.7)	—	5Y8/1灰白色～N4/0灰色	密	口縁:ヨコナデ、内面:ハケメ、外面:オサエ、外面下部:ナデ、外面に煤付着
435	瓦質土器	鍋	溝840	28.2	(7.8)	—	2.5Y7/2灰黄色～N3/0暗灰色	密	口縁:ヨコナデ、内外面:ナデ、外面下部:オサエ、外面に煤付着
436	焼締陶器(備前)	擂鉢	溝840	—	(6.9)	—	表面:10YR4/3にぶい黄褐色、断面:2.5Y6/1黄灰色	密	内外面:回転ナデ・鉄釉、内面に4本1組の擂り目
437	焼締陶器	鉢	溝840	—	(5.9)	—	5YR5/6明赤褐色	密	内外面:回転ナデ、内面下部に使用痕、外面下部に火だすき痕
438	白磁	椀	溝840	17.8	(3.7)	—	釉:5Y7/2灰白色、胎土:5Y7/1灰白色	密	内外面:回転ナデ・透明釉
439	白磁	皿	溝840	6.5	(0.9)	—	釉:10Y7/1灰白色、胎土:N7/0灰白色	密	内外面:回転ナデ・透明釉、底面:回転ケズリ・釉剥ぎ

No	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	胎土	調整、その他
440	青磁	椀	溝840	10.7	(3.3)	—	釉:2.5GY4/1暗オリーブ灰色、胎土:N7/0灰白色	密	内外面:回転ナデ・施釉、外面:鎬蓮弁文
441	青磁	椀	溝840	16.8	(5.2)	—	釉:5Y5/2灰オリーブ色、胎土:N7/0灰白色	やや密	内外面:回転ナデ・施釉、外面:鎬蓮弁文
442	青磁	鉢	溝840	26.2	(2.4)	—	釉:10Y7/1灰白色、胎土:N6/0灰色	密	内外面:回転ナデ・施釉、口縁上部に貝目痕
443	焼締陶器	壷	溝840	—	(4.0)	—	釉:7.5YR4/2灰褐色、胎土:2.5Y5/1黄灰色	密	内面:ナデ・オサエ・接合痕、外面:回転ナデ・沈線
444	石製品	石鍋	溝840	25.7	(7.0)	—	—	—	滑石製、内外面に成形痕残る、鍔～外面下部に煤付着
445	土師器	皿	溝440	7.9	1.7	—	7.5YR7/4にぶい橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
446	土師器	皿	溝440	8.8	2.1	—	10YR7/4にぶい黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、内外面に油煙付着
447	土師器	皿	溝440	12.4	(2.8)	—	2.5Y8/2灰白色	密	内外面:ヨコナデ、外面下部:オサエ
448	須恵器	鉢	溝440	(34.3)	(5.9)	—	N4/0灰色	密	内外面:回転ナデ、内面に使用痕
449	瓦質土器	鍋	溝440	28.6	(4.0)	—	N3/0暗灰色～2.5Y8/1灰白色	密	口縁内外面:ヨコナデ、内面:ハケメ、外面:オサエ、外面に煤付着
450	瓦質土器	羽釜	溝440	32.4	(11.2)	—	N4/0灰色	密	内外面:回転ナデ、鍔:ナデ、外面に煤付着
451	瓦質土器	壷	溝440	13.8	(3.5)	—	N5/0灰色	密	口縁内外面:ヨコナデ、内面:ナデ・ハケメ・指頭圧痕、外面:オサエ
452	施釉陶器(古瀬戸)	花瓶	溝440	—	(5.7)	5.8	釉:7.5Y6/3オリーブ黄色・10YR2/1黒色、胎土:2.5Y7/1灰白色	密	内外面:回転ナデ、底面:回転糸切り、外面上部に陰刻文、外面:鉄釉
453	焼締陶器(備前)	甕	溝440	—	(8.9)	—	10YR4/1褐灰色	密	内外面:回転ナデ・自然釉
454	青磁	椀	溝440	—	(5.5)	5.5	釉:5Y6/4オリーブ黄色、胎土:5Y7/1灰白色	密	内外面:回転ナデ・施釉、外面下部:回転ケズリ・削り出し高台、外面:縦方向の沈線文
455	青磁	皿	溝440	10.8	(2.1)	—	釉:5Y7/2灰白色、胎土:N7/0灰白色	密	内外面:回転ナデ・施釉、外面下部:回転ケズリ
456	輸入陶器	鉢	溝440	(23.2)	(2.7)	—	釉:2.5Y4/4オリーブ褐色、胎土:7.5YR/3にぶい褐色	密	内外面:回転ナデ・鉄釉、口縁端部に貝目
457	白磁	椀	土坑895	13.8	(3.2)	—	釉:5GY8/1灰白色、胎土:白色	密	内面:回転ナデ、外面:回転ケズリ、内面に陽刻(雷文・蓮弁文)
458	白磁	四耳壷	溝840	10.0	(3.4)	—	釉:2.5GY8/1灰白色、胎土:7.5Y7/3灰白色	密	外面:回転ナデ・透明釉、内面:ヘラ状工具で調整?
459	青白磁	合子蓋	造成土	4.3	1.3	—	釉:5G7/1明緑灰色、胎土:白色	密	外面上部:型成形のち陽刻、外面:型成形、内面上部:透明釉、内面下部:ナデ、口縁下端は溶着、はがす際に一部胎土が剥離
460	青白磁	合子蓋	柱穴700	5.4	1.7	—	釉:10GY8/1明緑灰色、胎土:白色	密	外面:型成形・釉、内面:釉、内面下部:回転ナデ、口縁下端:ケズリ
461	青白磁	合子身	土坑895	5.9	2.5	(2.6)	釉:10GY8/1明緑灰色、胎土:白色	密	内面:回転ナデ、口縁外面:回転ナデ、外面:型成形、内外面:透明釉
462	輸入陶器	四耳壷	造成土	—	(5.8)	—	釉:2.5Y7/4浅黄色、胎土:2.5Y6/1黄灰色～7.5Y5/8明褐色	密	内外面:回転ナデ、外面:沈線、把手を4箇所に貼り付ける
463	輸入陶器(華南)	盤	柱穴413	27.5	8.5	—	釉:緑色、胎土:10YR7/3にぶい黄橙色	やや粗	内外面:回転ナデ・施釉、外面下部～底面:回転ケズリ、見込み:陰刻文
464	墨書土器土師器	皿	溝840	(9.0)	2.0	—	2.5Y7/3浅黄色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、外面に墨書(人面)
465	墨書土器土師器	皿	包含層	(11.9)	2.8	—	10YR8/2浅黄橙色	密	内外面:ヨコナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、内外面に墨痕
466	墨書土器山茶椀	椀	石組1089	13.8	5.2	8.0	5Y7/1灰白色	やや粗	内外面:回転ナデ、底面:平底・回転糸切り、内面に墨痕
467	墨書土器白磁	椀	溝840	—	(1.8)	8.4	釉:2.5GY7/1明オリーブ灰色、胎土:5Y8/1灰白色	密	内外面:施釉、外面下部:削り出し高台、底面:回転ケズリ、底面に墨書「八」

付表３　軒丸瓦観察表

番号	瓦当文様の特徴	手法の特徴	備　考	出土遺構
瓦1	複弁8弁蓮華文。圏線中房、1＋8。蓮弁は山形。間弁は独立、輪郭線あり。外区なし。瓦1～3は類似し、1は中房径が大きい。	瓦当裏面、溝付丸瓦挿入成形。丸瓦接合位置低い。裏面平坦。	11世紀後葉。播磨産。 円勝寺(円勝団1972)ER001-A型式、 法勝寺池(上原ほか1975)図20-1と同文。	井戸1210・溝440、計2点。
瓦2	複弁8弁蓮華文。圏線中房、1＋8。蓮弁は山形。間弁は独立、輪郭線あり。外区なし。	瓦当成形不明。丸瓦接合位置低い。裏面平坦。	11世紀後葉。播磨産。 法勝寺(市埋文1996)390と同文。	調査区北東柱穴群・溝900、計2点。
瓦3	複弁8弁蓮華文。圏線中房、1＋8。蓮弁は山形。間弁は独立、輪郭線あり。外区なし。瓦2より蓮弁が長い。	瓦当裏面、溝付丸瓦挿入成形。	11世紀後葉。播磨産。 円勝寺(円勝団1972)ER001-E型式と同文。	溝900・溝840、計2点。
瓦4	単弁17弁蓮華文。圏線中房、1＋8。間弁は連続。外区なし。	瓦当成形不明。裏面平坦。	11世紀後葉。播磨産。 円勝寺(市埋文1996)490と同文。	溝900・攪乱、計2点。
瓦5	複弁蓮華文。圏線中房。間弁は連続。外区なし。	瓦当裏面、丸瓦貼付成形。丸瓦接合位置が低い。	11世紀後葉。播磨産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦63と同笵。 円勝寺(円勝団1972)ER017型式、 二ツ屋遺跡(春成2014)438と同文。	溝900・溝840、計2点。
瓦6	複弁8弁蓮華文。凸中房で端部盛り上がる。1＋4。間弁は独立。蓮弁輪郭が周縁となる。瓦7と類似し、中房形状・外区が異なる。	瓦当裏面、溝付丸瓦挿入成形。裏面平坦。	11世紀後葉。大和産。 平安宮真言院(京都市1976a)図22-5、 興福寺(薮中1991)Ⅵ丸A1と同文。	包含層、計1点。
瓦7	複弁8弁蓮華文。圏線中房、1＋6。間弁は独立。輪郭線あり。外区なし。	瓦当裏面、溝付丸瓦挿入成形。裏面平坦。	11世紀後葉。大和産。 薬師寺(山崎1987)Fig.36-56と同文。	井戸1210・溝900、計2点。
瓦8	単弁8弁蓮華文。凸中房。蓮子は周環、1＋4。周囲に蕊・珠点あり。蓮弁は上下2重で交互に配置。蓮弁輪郭線あり。間弁なし。外区に界線。	瓦当裏面、丸瓦貼付成形。裏面平坦。	11世紀後葉。大和産。 円勝寺(円勝団1972)ER024型式と同笵。 薬師寺(山崎1987)Fig.38-31と同文。	造成土、計1点。
瓦9	複弁5弁蓮華文。圏線中房、1＋5。間弁は連続。外区に珠文。	瓦当裏面、溝付丸瓦挿入成形。瓦当側面下半・裏面下半横ケズリ。	11世紀後葉。産地不明。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦11、 円勝寺(円勝団1972)ER007型式と同笵。	井戸620、計1点。
瓦10	複弁8弁蓮華文。凸中房、2重圏線、1＋4。蓮弁は上下2重で交互に配置。外区は珠文。瓦11・12と蓮弁形状が類似し、中房形状・外区が異なる。	瓦当裏面、溝付丸瓦挿入成形。	11-12世紀。丹波産。 朝堂院(平博1977)138、 王子窯(市埋文1996)1130と同文。	攪乱、計1点。
瓦11	複弁8弁蓮華文。凸中房、周囲に圏線、蓮子不明。蓮弁は上下2重で交互に配置。間弁は連続、基部は珠文となる。外区に密な珠文。	瓦当裏面、溝付丸瓦挿入成形。裏面平坦。	11-12世紀。丹波産。 平安宮真言院(京都市1976a)図22-2、 篠町A號瓦窯址(安井1960)第98図-16と類似。	溝900、計1点。
瓦12	複弁8弁蓮華文。凸中房で中央部一段高い、周囲に圏線。蓮子不明。蓮弁は上下2重で交互に配置。外区なし。	瓦当裏面、丸瓦貼付成形。	11-12世紀。産地不明。	溝900、計1点。
瓦13	複弁8弁蓮華文。凸中房、周囲に圏線。弁区一段高い。蓮弁の返り強い。外区なし。	瓦当裏面、溝付丸瓦挿入成形。裏面平坦。	11-12世紀。産地不明。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦90、 円勝寺(円勝団1972)ER012、 旧勧業館(市埋文1996)513と同文。	溝900、計1点。
瓦14	単弁10弁蓮華文。凹中房、1＋5。間弁は連続。外区に密な珠文31個。	瓦当裏面、溝付丸瓦挿入成形。裏面平坦。	11-12世紀。産地不明。 円勝寺(円勝団1972)ER026型式と同笵。	包含層、計1点。
瓦15	複弁6弁蓮華文。圏線中房、1＋4。中房に内向突起あり。蓮弁は線状。間弁なし。外区に界線、珠文12個、圏線。	瓦当成形不明。瓦当側面下半・裏面下半横ケズリ。	12世紀前葉。山城産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦13、 尊勝寺(奈文研1961)5型式、 南ノ庄田窯(市埋文1996)139と同笵。	包含層、計1点。
瓦16	複弁8弁蓮華文。圏線中房、1＋6。間弁は独立。外区に界線、珠文16個、圏線。瓦17～19と類似し、蓮弁形状が異なる。	瓦当裏面、溝付丸瓦挿入成形。瓦当側面下半・裏面下半横ケズリ。	12世紀中葉。山城産。 尊勝寺(奈文研1961)6型式と同文。	調査区北西柱穴群・包含層、計2点。
瓦17	複弁蓮華文。間弁は独立。外区に界線、珠文、圏線。	瓦当成形不明。	12世紀後葉。山城産。 内裏(平博1977)215と同文。	包含層、計1点。
瓦18	複弁7弁蓮華文。圏線中房、1＋5。間弁は独立。外区に界線、珠文10個、圏線。瓦17よりやや小さい。	瓦当裏面、丸瓦貼付成形。裏面オサエ、下半ケズリ。	12世紀後葉。山城産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦16、 尊勝寺(奈文研1961)7型式と同文。	溝900・包含層、計2点。
瓦19	複弁7弁蓮華文。圏線中房、1＋5。間弁は独立。外区に界線、珠文12個、圏線。瓦当面は楕円形。瓦18より小さい。	瓦当裏面、溝付丸瓦挿入成形。	12世紀後葉。山城産。 円勝寺(円勝団1972)ER009B型式、 栗栖野(市埋文1996)55と同文。	溝900は2点・溝840、計3点。
瓦20	複弁8弁蓮華文。圏線中房、1＋4。蓮弁結合、間弁なし。外区に界線、珠文16個、圏線。	瓦当裏面、丸瓦溝付挿入成形。裏面平坦。	12世紀代。山城産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦14、 尊勝寺(奈文研1961)8型式、 栗栖野窯(市埋文1996)56と同笵。	溝900は2点・包含層は2点・造成土は2点・溝840・調査区北西柱穴群・攪乱、計9点。
瓦21	複弁6弁蓮華文。凸中房、1＋4。外区に界線、珠文12個、圏線。	瓦当裏面、溝付丸瓦挿入成形。	12世紀前葉。山城産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦12、 尊勝寺(奈文研1961)31型式と同笵。	溝900、計1点。
瓦22	複弁8弁蓮華文。圏線中房、1＋4。子葉が三角形で離れる。間弁は連続。外区なし。	瓦当裏面、溝付丸瓦挿入成形。裏面平坦。	12世紀後葉。山城産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦25、 尊勝寺(奈文研1961)23型式と同文。	溝900、計2点。

番号	瓦当文様の特徴	手法の特徴	備　考	出土遺構
瓦23	単弁12弁蓮華文。凸中房、0＋3。間弁は連続。外区に珠文。	瓦当成形不明。	12世紀中葉。山城産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦19と同笵。	井戸1210、計1点。
瓦24	単弁10弁蓮華文。中房平坦、蓮子不明。間弁連続。外区に珠文。瓦当面は楕円形。	瓦当裏面、溝付丸瓦挿入成形。裏面平坦。	12世紀代。山城産。	造成土、計2点。
瓦25	単弁10弁蓮華文。圏線中房、中央に突起あり。間弁は連続。外区珠文は大7個・小2個。瓦当面は楕円形。	瓦当裏面、溝付丸瓦挿入成形。裏面平坦。瓦当側面下半・裏面下半横ケズリ。	12世紀後葉。山城産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦21、 円勝寺(円勝団1972)ER038型式、 南ノ庄田窯(高1998)図版3-16と同笵。	調査区北東土坑・溝840・攪乱、計3点。
瓦26	単弁蓮華文。中房平坦、蓮子不明。間弁は連続。外区に珠文。	瓦当成形不明。	12世紀中葉。山城産。	調査区北東柱穴群・井戸1210、計2点。
瓦27	単弁9弁蓮華文。圏線中房。間弁連続。外区に珠文。	瓦当裏面、溝付丸瓦挿入成形。	12世紀前葉。山城産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦18、 尊勝寺(奈文研1961)64型式、 栗栖野窯(吉村1993)図23-14と同文。	溝900、計2点。
瓦28	単弁蓮華文。間弁は独立。外区に界線と珠文。	瓦当裏面、丸瓦貼付成形。	12世紀代。山城産。 尊勝寺(奈文研1961)71型式に類似。	溝900、計1点。
瓦29	単弁8弁蓮華文。内区が1段高くなる。間弁連続。外区に密な珠文。	瓦当裏面、丸瓦貼付成形。	12世紀前葉。山城産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦20、 円勝寺(円勝団1972)ER032型式、 尊勝寺(奈文研1961)63型式と同文。	溝900、計1点。
瓦30	単弁10弁蓮華文。圏線中房、蓮子なし。間弁は線状で連続。外区に珠文。	瓦当裏面、丸瓦貼付成形。	12世紀代。山城産。 栗栖野窯(北田ほか1986)図版11-6と同笵。円勝寺(小檜山ほか2015)瓦38、 福勝院(上村1991b)図3-2と同文。	溝900、計1点。
瓦31	単弁4弁蓮華文。蓮子は1個で半球状。蓮弁はT字形、間弁は楕円形で独立。界線は花形。外区に密な珠文。	瓦当裏面、溝付丸瓦挿入成形。	12世紀後葉。山城産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦22と同笵。 法住寺殿(網ほか2011)図55-38と同文。	井戸1210、計1点。
瓦32	単弁12弁蓮華文。圏線中房、1＋4。間弁は連続。外区に界線。	瓦当裏面、溝付丸瓦挿入成形。	12世紀前葉。山城産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦28と同笵。 仁和寺円堂院(市埋文1996)図版13-23と同文。	包含層、計1点。
瓦33	単弁12弁蓮華文。凸中房、1＋4。間弁は連続。外区に界線あり。	瓦当裏面、丸瓦貼付成形。裏面盛り上がる。	12世紀前葉。山城産。 尊勝寺(上村ほか1996)26と同笵。	井戸1210、計1点。
瓦34	単弁8弁蓮華文。凹中房、1＋5。蓮弁は方形、子葉1ヶ所輪郭線に接する。間弁は独立。外区に界線あり。	瓦当裏面、丸瓦貼付成形。裏面盛り上がる。	12世紀中葉。山城産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦31、 延勝寺(近藤章2014)図23-瓦10と同笵。	溝440・包含層、計2点。
瓦35	単弁8弁蓮華文。凹中房、1＋8、周囲に蕊あり。間弁なし。周縁内側に輻線あり。	瓦当裏面、溝付丸瓦挿入成形。裏面平坦。	12世紀前葉。山城産。 尊勝寺(奈文研1961)96B型式と同文。	溝900、計1点。
瓦36	単弁8弁蓮華文。凸中房、蓮子不明、周囲に蕊あり。弁区1段高い。間弁なし。周縁内側に輻線あり。瓦37に類似し、外区が異なる。	瓦当裏面、丸瓦貼付成形。裏面平坦。	12世紀代。山城産。	井戸1210、計1点。
瓦37	単弁8弁蓮華文。凸中房、蓮子なし、周囲に蕊あり。弁区1段高い。間弁なし。外区なし。	瓦当成形不明。裏面平坦。	12世紀後葉。山城産。 鳥羽田中殿(杉山ほか1975b)図6-3と同文。	包含層、計1点。
瓦38	単弁8弁蓮華文。凹中房、周囲に蕊あり。間弁なし、周縁内側に輻線。	瓦当裏面、溝付丸瓦挿入成形。裏面平坦。	12世紀後葉。山城産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦42と同笵。	井戸1210、計1点。
瓦39	単弁蓮華文。凹中房、周囲に蕊あり。間弁なし。外区なし。	瓦当成形不明。裏面平坦。	12世紀後葉。山城産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦40と同文。	造成土、計1点。
瓦40	単弁8弁蓮華文。蓮弁は剣形、間弁なし。外区なし。瓦41に類似し、蓮弁形状が異なる。	瓦当成形不明。裏面平坦。	12世紀前葉。山城産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦36、 尊勝寺(奈文研1961)86型式と同文。	溝440、計1点。
瓦41	単弁8弁蓮華文。蓮弁は剣形、間弁なし。外区なし。瓦40より蓮弁外郭線細い。	瓦当裏面、丸瓦貼付成形。裏面平坦。	12世紀前葉。山城産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦35、円勝寺(円勝団1972)ER044型式、法勝寺金堂回廊(上村ほか1987)図版13-14と同文。	溝900、計1点。
瓦42	単弁8弁蓮華文。圏線中房。蓮弁は接し、弁輪郭が周縁となる。	瓦当裏面、丸瓦貼付成形。裏面平坦。	12世紀後葉。山城産。 尊勝寺(奈文研1961)81型式、 鳥羽南殿(細谷1968)第33図C6と同文。	溝900、計1点。
瓦43	単弁蓮華文。圏線中房、1＋4。蓮弁は単弁と素弁が混在する、1ヶ所横線2本配す。外区なし。	瓦当裏面、丸瓦貼付成形。裏面平坦。	12世紀後葉。山城産。 鳥羽金剛心院(前田2002)KM7A、 朝堂院(平博1977)228と同文。	溝840、計1点。
瓦44	宝相華文。中房は珠文。花弁は山形で4弁、子葉なし。間弁は独立。花弁周囲に唐草文。	瓦当成形不明。裏面平坦。	12世紀後葉。山城産。 白河北殿(五十川1981)図版34-8と同文。	溝900、計1点。

番号	瓦当文様の特徴	手法の特徴	備　考	出土遺構
瓦45	宝相華文。中房は珠文。花弁は山形。上下2重で、子葉有り無しを交互に配置。間弁なし。外区に界線、唐草文。瓦当面は楕円形。	瓦当裏面、溝付丸瓦挿入成形。裏面平坦。	12世紀後葉。山城産。 尊勝寺(上村ほか1996)図42-71、 南ノ庄田窯(高1998)図版3-19と類似。	井戸620、計1点。
瓦46	複弁8弁蓮華文。圏線中房、周囲に蕊。蓮子は周環、中房周囲に蕊と珠文。蓮弁は宝珠形。間弁なし。外区なし。周縁上面に密な珠文、圏線。	瓦当裏面、溝付丸瓦挿入成形。裏面平坦。	12世紀前葉。播磨産。 白河(田中2003)図14-54、 林崎三本松窯(春成2014)50と同文。	攪乱、計1点。
瓦47	複弁8弁蓮華文。凸中房、1＋5。周囲に蕊あり。間弁は連続。外区に界線、密な珠文32個。	瓦当成形不明。裏面盛り上がる。	12世紀前葉。播磨産。 尊勝寺(奈文研1961)25型式、 勝光明院(市埋文1979)PL13-21と同文。	溝900、計1点。
瓦48	複弁8弁蓮華文。凸中房、1＋4、周囲に蕊あり。間弁は連続し先端が水滴形となる。外区に密な珠文28個。	瓦当裏面、丸瓦貼付成形。裏面平坦。	12世紀前葉。播磨産。 尊勝寺(奈文研1961)24型式、 林崎三本松窯(春成2014)49と同文。	溝900・調査区北東土坑、計2点。
瓦49	複弁8弁蓮華文。凹中房、1＋8。周囲に蕊あり。間弁は連続し先端が水滴形となる。外区に界線。瓦50に類似し、蓮弁形状が異なる。	瓦当裏面、溝付丸瓦挿入成形。裏面平坦。	12世紀前葉。播磨産。 尊勝寺(奈文研1961)53型式、久留美窯(池田ほか1999)挿図42-NM6と同文。	柵2(柱穴411)、計1点。
瓦50	複弁8弁蓮華文。凹中房、周囲に蕊あり。間弁は連続し先端が水滴形となる。外区に界線。瓦49より文様平旦。	瓦当成形不明。瓦当裏面の中心部が円形に凹み、周囲土堤状になる。周囲上面ケズリ。	12世紀前葉。播磨産。 尊勝寺(奈文研1961)52A型式と同文。	井戸888、計1点。
瓦51	複弁8弁蓮華文。凸中房、周囲に蕊あり。子葉は三角形。間弁連続。外区に界線。	瓦当裏面、溝付丸瓦挿入成形。裏面平坦。	12世紀前葉。播磨産。 尊勝寺(奈文研1961)30型式と同文。	溝900、計1点。
瓦52	複弁8弁蓮華文。凸中房、1＋5。間弁は連続。外区なし。	瓦当裏面、溝付丸瓦挿入成形。裏面平坦。	12世紀前葉。播磨産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦62と同笵。	溝900、計4点。
瓦53	複弁8弁蓮華文。圏線中房、内向突起あり。外区に界線。瓦54～62に類似し、径・蓮子数・中房形状が異なる。	瓦当成形不明。裏面中央部凹む。	12世紀前葉。播磨産。	調査区北東柱穴群、計1点。
瓦54	複弁8弁蓮華文。圏線中房、1＋8。外区に界線。中房径8.3㎝。	瓦当裏面、溝付丸瓦挿入成形。裏面平坦。	12世紀前葉。播磨産。	溝900、計1点。
瓦55	複弁8弁蓮華文。凸中房、圏線あり。外区に界線。	瓦当裏面、溝付丸瓦挿入成形。裏面平坦。	12世紀前葉。播磨産。	溝900・溝440、計2点。
瓦56	複弁8弁蓮華文。圏線中房。外区に界線。	瓦当裏面、溝付丸瓦挿入成形。裏面平坦。	12世紀前葉。播磨産。	溝900・溝840、計2点。
瓦57	複弁8弁蓮華文。圏線中房、周囲に内向突起あり。外区に界線。	瓦当裏面、溝付丸瓦挿入成形。	12世紀前葉。播磨産。	溝440、計1点。
瓦58	複弁8弁蓮華文。圏線中房、1＋8。外区に界線。中房径7.3㎝。	瓦当裏面、溝付丸瓦挿入成形。裏面平坦。	12世紀前葉。播磨産。	溝900・造成土、計2点。
瓦59	複弁8弁蓮華文。圏線中房、1＋8。外区に界線。中房径6.7㎝。	瓦当裏面、溝付丸瓦挿入成形。裏面平坦。	12世紀前葉。播磨産。	溝900・包含層、計2点。
瓦60	複弁8弁蓮華文。圏線中房、1＋8。間弁は連続。外区に界線。中房径6.7㎝。	瓦当成形不明。裏面平坦。	12世紀前葉。播磨産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦60、 尊勝寺(奈文研1961)44型式、 林崎三本松窯(春成2014)12と同文。	溝900、計1点。
瓦61	複弁蓮華文。圏線中房。蓮弁上面に縦の筋あり。外区に界線。	瓦当裏面、溝付丸瓦挿入成形。裏面平坦。	12世紀前葉。播磨産。	溝900・溝440、計2点。
瓦62	複弁6弁蓮華文。凸中房、周囲に圏線。蓮子1＋6。外区に界線。中房径6.1㎝。	瓦当成形不明。裏面平坦。	12世紀前葉。播磨産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦65、 尊勝寺(奈文研1961)45A型式と同文。	包含層、計1点。
瓦63	複弁8弁蓮華文。圏線中房、1＋8。外区に界線。中房径4.5㎝。瓦64・65に類似し、径・蓮弁形状が異なる。	瓦当裏面、溝付丸瓦挿入成形。裏面平坦。	12世紀前葉。播磨産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦68と同笵。 尊勝寺(奈文研1961)46型式、 林崎三本松窯(春成2014)8と同文。	溝900、計1点。
瓦64	複弁8弁蓮華文。圏線中房、1＋8。外区に界線。中房径4.7㎝。	瓦当成形不明。裏面平坦。	12世紀前葉。播磨産。	造成土、計1点。
瓦65	複弁8弁蓮華文。圏線中房、1＋8。外区に界線。中房径4.6㎝。	瓦当裏面、丸瓦貼付成形。裏面平坦。	12世紀前葉。播磨産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦69と同笵。 最勝寺(吉村ほか1995)図28-19と同文。	溝900は2点・造成土、計3点。
瓦66	複弁8弁蓮華文。凹中房で中央盛り上がる。1＋6。蓮弁子葉部凹む。間弁は連続。外区なし。瓦67に蓮弁形状が類似し、中房形状が異なる。	瓦当成形不明。裏面中央凹む。	12世紀前葉。播磨産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦54と同笵。 尊勝寺(奈文研1961)9型式、 法金剛院(中谷1970)、 林崎三本松窯(春成2014)1と同文。	溝840、計2点。
瓦67	複弁蓮華文。圏線中房。蓮弁子葉部凹む。間弁は連続。外区なし。	瓦当成形不明。裏面平坦。	12世紀前葉。播磨産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦2、 法勝寺(市埋文1996)391、 法勝寺(西森2015)図39-4と同文。	溝440、計1点。

番号	瓦当文様の特徴	手法の特徴	備　考	出土遺構
瓦68	複弁8弁蓮華文。半球形中房、周囲に圏線、蓮子1＋4。間弁は連続。外区なし。	瓦当裏面、溝付丸瓦挿入成形。裏面円弧状のナデで、中央盛り上がる。	11-12世紀。播磨産。 白河(近藤奈ほか2005)584と同文。	溝900、計1点。
瓦69	複弁8弁蓮華文。圏線中房、1＋8。外区縮小し、弁端は周縁によって切られる。外区なし。	瓦当裏面、溝付丸瓦挿入成形。裏面平坦。	12世紀前葉。播磨産。 尊勝寺(奈文研1961)48型式、 林崎三本松窯(春成2014)17と同文。	溝840、計1点。
瓦70	複弁8弁蓮華文。凹中房で、中央がやや盛り上がる、1＋8。子葉部が凹む。間弁は連続。外区なし。	瓦当裏面、溝付丸瓦挿入成形。裏面平坦。	12世紀代。播磨産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦56と同笵。	調査区南西柱穴群、計1点。
瓦71	複弁9弁蓮華文。圏線中房、1＋6。蓮弁は上下に2重で内外に配置。間弁は連続。外区なし。	瓦当成形不明。裏面平坦。	12世紀前葉。播磨産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦71、 尊勝寺(奈文研1961)19型式、 (春成2014)26と同文。	溝900、計1点。
瓦72	複弁13弁蓮華文。圏線中房、1＋5。中房に内向突起5ヶ所あり、周囲に圏線。間弁は連続。外区なし。	瓦当裏面、溝付丸瓦挿入成形。裏面平坦。	12世紀前葉。播磨産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦70、 尊勝寺(奈文研1961)22型式、 林崎三本松窯(春成2014)54と同文。	溝900は2点・包含層、計3点。
瓦73	単弁8弁蓮華文。凸中房で中央やや盛り上がる、周囲溝あり、1＋6＋8。弁端切り込む。外区なし。周縁は内斜する。	瓦当裏面、溝付丸瓦挿入成形。裏面盛り上がる。	12世紀前葉。播磨産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦73と同笵。 尊勝寺(奈文研1961)47型式、 林崎三本松窯(春成2014)9と同文。	溝900、計1点。
瓦74	単弁8弁蓮華文。凸中房、1＋5。弁端切り込む。間弁なし。外区なし。中房径5.8㎝。	瓦当成形不明。裏面平坦。	12世紀中葉。播磨産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦81と同笵。 鳥羽金剛心院(前田2002)HM3A、 林崎三本松窯(春成2014)32と同文。	溝900は3点・調査区北東柱穴群・包含層、計5点。
瓦75	単弁6弁蓮華文。凸中房で中央凹む、1＋6。弁端切り込む。間弁なし。外区に2重界線。	瓦当裏面、溝付丸瓦挿入成形。裏面平坦。	12世紀前葉。播磨産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦77、 尊勝寺(上村ほか1996)33と同文。	溝900・溝440、計2点。
瓦76	単弁8弁蓮華文。圏線中房、1＋8、周囲に粗い蕊あり。間弁は連続し、基部が水滴状になる。外区に界線。瓦77に類似し、中房蕊・蓮弁形状が異なる。	瓦当裏面、丸瓦貼付成形。裏面下半円弧状ナデ。	12世紀前葉。播磨産。 尊勝寺(奈文研1961)55型式と同文。	造成土、計1点。
瓦77	単弁8弁蓮華文。圏線中房、1＋8、周囲に密な蕊あり。間弁は連続し、基部が水滴状になる。外区に界線。	瓦当成形不明。裏面平坦。	12世紀前葉。播磨産。 尊勝寺(奈文研1961)54型式、 法金剛院(小松ほか1998)図52-10、 林崎三本松窯(春成2014)51と同文。	井戸888、計1点。
瓦78	単弁8弁蓮華文。弁端尖る。蓮弁基部両側に半円形凹みあり。間弁連続。外区なし。	瓦当裏面、丸瓦貼付成形。	12世紀前葉。播磨産。 尊勝寺(奈文研1961)73A型式、 法勝寺(市埋文1996)398と同文。	溝900、計1点。
瓦79	単弁24弁蓮華文。凸中房、1＋6。周囲凹み蕊あり。蓮弁は線状。外区に密な楕円形珠文。	瓦当成形不明。裏面中央盛り上がる。	12世紀前葉。播磨産。 尊勝寺(奈文研1961)92型式、 法金剛院(中谷1970)図53-6と同文。	溝900、計1点。
瓦80	単弁蓮華文。圏線中房、1＋7。周囲に圏線。間弁は連続。外区無し。	瓦当成形不明。裏面平坦。周縁上面に板ナデ。	12世紀前葉。播磨産。	溝900、計1点。
瓦81	複弁8弁蓮華文。凸中房。蓮弁接する。外区に界線、密な珠文、圏線。	瓦当裏面、丸瓦貼付成形。裏面平坦。	12世紀前葉。丹波産。 尊勝寺(奈文研1961)1型式と同文。	溝900、計1点。
瓦82	複弁8弁蓮華文。圏線中房、1＋5。蓮弁は上下2重で交互に配置。間弁連続。外区に珠文22個。	瓦当裏面、溝付丸瓦挿入。裏面平坦。 瓦当側面下半・裏面下半横ケズリ。	12世紀前葉。丹波産。 尊勝寺(奈文研1961)40型式、 平安宮(市埋文1996)250と同文。	柵3(柱穴257)・包含層、計2点。
瓦83	単弁12弁蓮華文。間弁は独立。外区に界線、密な珠文、圏線。	瓦当成形不明。裏面平坦。	12世紀前葉。丹波産。 円勝寺(円勝団1972)ER029A型式、 東寺(森ほか1995)41と同文。	造成土、計1点。
瓦84	単弁8弁蓮華文。凸中房、1＋4。間弁は独立。外区に界線、珠文。	瓦当裏面、溝付丸瓦挿入成形。裏面平坦。	12世紀前葉。丹波産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦85、円勝寺(円勝団1972)ER030型式、丹波出雲神社(梅原1925)図版第33-6と同笵。	溝840・造成土、計2点。
瓦85	単弁6弁蓮華文。凸中房、周囲に圏線あり、1＋6。子葉は宝相華文である。間弁は単独。外区に界線、密な楕円形珠文18個。	瓦当裏面、丸瓦貼付成形。裏面平坦。	12世紀前葉。産地不明。 尊勝寺(奈文研1961)59型式、尊勝寺阿弥陀堂(上村1981)図版4-3と同文。	包含層、計2点。
瓦86	単弁8弁蓮華文。凸中房、1＋8。周囲に蕊あり。間弁なし。外区に界線。	瓦当成形不明。裏面平坦で中央凹む。	12世紀代。産地不明。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦92と同笵。 堺市法道寺、東大阪市客坊山遺跡(市本2001)図6と同文。	溝900、計1点。
瓦87	単弁9弁蓮華文。凸中房、中央は一段高くなる。弁端が界線となる。外区に珠文18個。	瓦当裏面、溝付丸瓦挿入成形。裏面平坦。	11-12世紀。産地不明。	造成土、計1点。
瓦88	右巻三巴文。頭は接し、尾は離れる。周囲に単弁18弁蓮華文を配す。外区は2重界線。	瓦当裏面、溝付丸瓦挿入成形。裏面平坦。	12世紀後葉。山城産。	溝840、計1点。

番号	瓦当文様の特徴	手法の特徴	備　考	出土遺構
瓦89	右巻三巴文。頭は離れ、尾は接し界線となる。外区に密な珠文22個。	瓦当裏面、溝付丸瓦挿入成形。裏面平坦。	12世紀後葉。山城産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦94、 尊勝寺(奈文研1961)119型式と同笵。	溝900は3点・溝840・井戸888、計5点。
瓦90	右巻三巴文。頭は離れ、尾は接し界線となる。外区に密な珠文。	瓦当成形不明。裏面平坦。	12世紀後葉。山城産。	溝900、計1点。
瓦91	右巻二巴文。頭は離れ、尾は接し界線となる。外区に密な珠文。	瓦当裏面、溝付丸瓦挿入成形。裏面平坦。	12世紀後葉。山城産。 白河(市埋文1996)576と同文。	井戸1210、計1点。
瓦92	右巻三巴文。頭は離れ、尾は周縁に接する。外区なし。	瓦当成形不明。裏面平坦。	12世紀代。山城産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦122と同文。	溝900は2点・井戸1210・包含層、計4点。
瓦93	右巻三巴文。頭は離れ、尾は周縁に接する。外区なし。瓦92より小さい。	瓦当成形不明。裏面平坦。	12世紀代。山城産。	溝840、計2点。
瓦94	右巻三巴文。頭は離れ、尾は接し界線となる。外区なし。巴文がやや平坦。	瓦当裏面、溝付丸瓦挿入成形。裏面平坦。	12世紀中葉。山城産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦118と同笵。 栢杜(杉山ほか1975a)f類と同文。	溝900、計1点。
瓦95	右巻三巴文。頭・尾は離れる。外区なし。	瓦当成形不明。裏面平坦。	12世紀後葉。山城産。	溝900、計1点。
瓦96	右巻三巴文。頭・尾は離れる。外区なし。瓦当面は楕円形のもの多い。	瓦当成形不明。裏面平坦。	12世紀後葉。山城産。	溝900・溝840・溝440は2点・攪乱、計5点。
瓦97	右巻三巴文。頭・尾は離れる。外区なし。巴文が平坦。瓦当面は楕円形。	瓦当成形不明。裏面平坦。	12世紀後葉。山城産。	溝900、計1点。
瓦98	右巻三巴文。頭・尾は離れる。外区なし。巴文は平坦。	瓦当成形不明。裏面平坦。	12世紀後葉。山城産。	造成土、計1点。
瓦99	右巻三巴文。頭は離れ、尾は周縁に接する。巴は平坦。瓦当面は楕円形。	瓦当裏面、溝付丸瓦挿入成形。裏面平坦。	12世紀後葉。山城産。	造成土、計1点。
瓦100	右巻三巴文。頭は連結、尾は離れる。外区なし。	瓦当裏面、溝付丸瓦挿入成形。裏面平坦。	12世紀後葉。山城産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦132と同笵。	溝900、計2点。
瓦101	左巻巴文。頭は離れ、尾は接し界線となる。外区に左巻唐草文。	瓦当裏面、溝付丸瓦挿入成形。裏面平坦。	12世紀後葉。山城産。	造成土、計1点。
瓦102	左巻三巴文。頭は離れ、尾は接して界線となる。外区に珠文。	瓦当裏面、溝付丸瓦挿入成形。裏面平坦。	12世紀後葉。山城産。	井戸1096、計1点。
瓦103	左巻二巴文。頭は離れ、尾は接し界線となる。外区に密な珠文19個。	瓦当成形不明。裏面平坦。	12世紀後葉。山城産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦114と同笵。	溝900、計1点。
瓦104	左巻二巴文。頭は連結、尾は接し界線となる。外区に密な珠文26個。文様平坦。	瓦当裏面、丸瓦貼付成形。裏面平坦。	12世紀後葉。山城産。	溝900、計1点。
瓦105	左巻二巴文。頭は連結、尾は離れる。外区に密な珠文。	瓦当裏面、丸瓦貼付成形。	12世紀後葉。山城産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦115と同笵。	溝900・溝840・包含層、計3点。
瓦106	左巻三巴文。頭・尾は離れる。外区なし。	瓦当成形不明。裏面平坦。	12世紀後葉。山城産。	溝900・溝400、計2点。
瓦107	左巻三巴文。頭は離れ、尾は接し界線となる。文様平坦。周縁上面に一部縄目あり。瓦当面は楕円形。	瓦当裏面、丸瓦貼付成形。裏面平坦。	12世紀後葉。山城産。	溝900、計1点。
瓦108	右巻巴文。尾は接する。外区に界線、密な珠文。文様平坦。	瓦当成形不明。裏面平坦。	12世紀代。播磨産。 尊勝寺(奈文研1961)147型式と同文。	溝840、計1点。
瓦109	左巻三巴文。頭は連結、尾は界線に接する。外区に太い界線、密な珠文。文様平坦。	瓦当裏面、溝付丸瓦挿入成形。裏面平坦。	12世紀代。播磨産。 尊勝寺(奈文研1961)146型式と同文。	溝900、計1点。
瓦110	複弁8弁蓮華文。凸中房、卍字を配す。間弁は連続。外区に珠文、圏線。小型瓦。	瓦当成形不明。裏面平坦。	13世紀代。山城産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦147、 円勝寺(円勝団1972)ER014型式と同笵。 常盤仲之町遺跡(鈴木ほか1978)図18-1と同文。	溝440、計1点。
瓦111	単弁蓮華文。蓮弁は円形浮文。外区に界線、珠文は2・3個1単位、圏線。	瓦当成形不明。裏面平坦。	13世紀代。産地不明。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦146、 醍醐大智院(杉山ほか1976)第15図-21、 四天王寺(市本2001)図9と同文。	包含層、計1点。
瓦112	右巻巴文。頭・尾は離れる。外区に界線、密な珠文、圏線。	瓦当裏面、溝付丸瓦挿入成形。丸瓦取り付け位置低い。裏面平坦。	13世紀代。山城産。	包含層、計1点。

付表４　軒平瓦観察表

番号	瓦当文様の特徴	手法の特徴	備　考	出土遺構
瓦113	内行3転唐草文。唐草は連続、中心上を弧線で繋ぐ。外区に界線・密な珠文49個。	段顎。瓦当成形不明。平瓦凸面無文叩きあり。	11世紀代。山城産。 高陽院(平尾ほか1982)38、 河上窯立会(市埋文2012)と同文。	溝900、計1点。
瓦114	内行3転唐草文。唐草は複線で連続。外区・周縁なし。	段顎。顎貼付成形。瓦当裏面オサエのち横ケズリ。	11世紀代。山城産。 円勝寺(円勝団1972)ER142型式、 法勝寺(市埋文1996)419と同文。	溝840、計1点。
瓦115	外行3転唐草文。中心は背向C字、唐草は連続、分岐点に蕾あり。外区に界線。 瓦116に類似し、中心文・唐草形状異なる。	段顎。顎貼付成形。瓦当凸面・裏面横ナデ。	11世紀後葉。播磨産。 円勝寺(円勝団1972)ER115型式、法勝寺金堂(京都市1976b)図14-7と同文。	調査区北東柱穴群、計1点。
瓦116	外行3転唐草文。中心文は背向C字、上・下を「へ」字形で繋ぐ。唐草は連続、分岐点に蕾あり。外区に界線。	段顎。瓦当成形不明。瓦当凸面・裏面横ナデ。	11世紀後葉。播磨産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦153、 法勝寺金堂(上原ほか1975)図14-5、 法勝寺金堂(京都市1976b)図8-1と同文。	調査区南東土坑、計1点。
瓦117	外行唐草文。中心文は背向C字、上を「へ」字形で繋ぐ。唐草は連続、分岐点に蕾あり。外区に界線。	段顎。顎貼付成形。瓦当凸面・裏面横ナデ。	11世紀後葉。播磨産。	溝440、計1点。
瓦118	外行唐草文。唐草は陰刻、連続。外区に界線。瓦119・120に類似し、唐草形状異なる。	段顎。顎貼付成形。瓦当凸面・平瓦凸面縦縄叩き。顎裏面横ナデ。	11-12世紀。播磨産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦233と同笵。 尊勝寺(奈文研1961)151D型式と同文。	井戸1210、計1点。
瓦119	外行2転唐草文。唐草は陰刻、連続。外区に界線。	段顎。顎貼付成形。瓦当凸面横ケズリ、裏面縦ナデ。平瓦凸面縦縄叩き。	11-12世紀。播磨産。	井戸1210、計1点。
瓦120	外行唐草文。唐草は陰刻。外区に界線。	段顎。顎貼付成形。瓦当裏面ヘラ痕跡あり。平瓦凸面縦縄叩き。	11-12世紀。播磨産。 円勝寺(円勝団1972)ER147型式と同文。	井戸1210、計1点。
瓦121	外行唐草文。唐草は連続。上外区に界線・密な珠文。	瓦当成形不明。	11世紀後葉。丹波産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦152、最勝寺推定地(内田ほか1995)図46-13と同文。	包含層、計1点。
瓦122	外行3転唐草文。唐草は連続。外区に界線、粗い珠文。	段顎。顎貼付成形。瓦当凸面・裏面横ナデ。	11世紀後葉。大和産。 平安宮真言院(京都市1976a)図23-6、 法隆寺(毛利光ほか1992)246Aと同文。	攪乱、計1点。
瓦123	内区に梵字「キャ・カ・ラ・バ・ア」を配す。外区なし。平瓦右側縁部に釘穴あり。円勝寺(市埋文1996)509と釘穴同様の位置。	曲線顎。瓦当成形不明。瓦当凹面横ケズリ、凸面横ナデ、平瓦凸面縦ナデ。	11世紀後葉。大和産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦159、 法勝寺塔(柏田2011)図83、 興福寺(藪中1991)Ⅵ平K1と同文。	溝900、計1点。
瓦124	外行4転唐草文。唐草は複線で連続。外区に界線。	蹄顎。顎貼付成形。瓦当凹面横ケズリ。	11世紀後葉。備前産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦160、円勝寺(円勝団1972)ER102型式、備前国分寺(宇垣2009)図159-110と同文。	溝900・溝440、計2点。
瓦125	中央部は右偏行、両側は左偏行唐草を配置。唐草は連続。外区に界線、粗な珠文。平瓦凸面にヘラ記号あり。	段顎。半折曲成形。	12世紀前葉。山城産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦161、 尊勝寺(奈文研1961)174型式、 栗栖野窯(吉村1993)図26-93と同笵。	溝900は3点・井戸1210、計4点。
瓦126	外行3転唐草文。唐草は連続。外区に界線。	段顎。瓦当成形不明。	12世紀代。山城産。	溝900、計1点
瓦127	外行3転唐草文。中心文は楕円形。唐草は連続。外区に界線。	段顎。半折曲成形。	12世紀前葉。山城産。 尊勝寺161型式(奈文研1961)、 栗栖野窯(吉村1993)図26-96と同文。	溝840、計1点。
瓦128	外行3転唐草文。中心文なし。唐草は連続。外区なし。平瓦凸面にヘラ記号あり。	段顎。半折曲成形。	12世紀前葉。山城産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦164、 円勝寺(円勝団1972)ER122型式、 尊勝寺(奈文研1961)171A型式、 栗栖野窯(吉村1993)図26-89と同文。	溝900は2点・包含層は2点・造成土・土坑895、計6点。
瓦129	外行3転唐草文。中心文は3重半裁花文。唐草は分離。外区なし。	段顎。完全折曲成形。瓦当面に布目、裏面曲げ皺あり。瓦当面に粘土を先に入れたと推定。	12世紀代。山城産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦173と同笵。 尊勝寺(奈文研1961)272B型式と同文。	溝900、計1点。
瓦130	外行3転唐草文。中心文は4弁花文。唐草は連続。外区なし。	段顎。完全折曲成形。瓦当裏面と平瓦の境に布目あり。	12世紀代。山城産。	土坑243、計1点。
瓦131	外行2転唐草文。中心文なし。唐草主茎は連続。外区なし。瓦132～134に類似し、支茎形状・個数異なる。	薄顎。完全折曲成形。瓦当裏面縄叩き、曲げ皺・布目あり。平瓦凹面にヘラ記号あり。	12世紀後葉。山城産。 尊勝寺(奈文研1961)181型式と同文。	溝900は2点・溝840、計3点。
瓦132	外行2転唐草文。中心文なし。唐草主茎は連続。外区なし。瓦131と類似し、支茎形状が異なる。	段顎。完全折曲成形。瓦当面に布目。裏面曲げ皺あり。	12世紀後葉。山城産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦170、 尊勝寺(奈文研1961)181型式と同笵。	溝900は2点・溝840、計3点。
瓦133	外行2転唐草文。中心文なし。唐草主茎は連続。外区なし。瓦131・132とは支茎数が相違。	薄顎。完全折曲成形。瓦当裏面曲げ皺あり。平瓦凹面にヘラ記号のものもあり。	12世紀後葉。山城産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦171、 尊勝寺(奈文研1961)181型式と同笵。 尊勝寺(上村ほか1994)図63-24と同文。	包含層は2点・溝900・溝840・溝440、計5点。
瓦134	外行唐草文。中心文なし。唐草主茎は連続。外区なし。瓦133と類似し、支茎形状が異なる。	段顎。完全折曲成形。瓦当面に布目。瓦当裏面に叩き・曲げ皺あり。	12世紀後葉。山城産。	溝840、計2点。

番号	瓦当文様の特徴	手法の特徴	備　考	出土遺構
瓦135	外行唐草文。外区・周縁なし。	薄顎。完全折曲成形。瓦当面布目。裏面布目・曲げ皺あり。	12世紀後葉。山城産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦167、 尊勝寺(奈文研1961)203型式と同文。	溝900、計1点。
瓦136	外行唐草文。唐草は連続。外区なし。	薄顎。完全折曲成形。瓦当裏面曲げ皺あり。	12世紀代。山城産。 尊勝寺(奈文研1961)185と同文。	包含層、計1点。
瓦137	外行3転唐草文。唐草は連続。外区なし。	薄顎。完全折曲成形。瓦当面に布目。裏面布目・曲げ皺あり。	12世紀中葉。山城産。 鳥羽(堀内ほか1986)図版41-8と同文。	溝440、計1点。
瓦138	外行唐草文。唐草主茎は連続し、上・下に枝茎多数。外区なし。	段顎。完全折曲成形。瓦当裏面・凸面叩き。裏面曲げ皺あり。平瓦凹面にヘラ記号あり。	12世紀後葉。山城産。	包含層、計1点。
瓦139	内行3転唐草文。中心の上下に「へ」字形あり。唐草は分離。外区に界線、密な珠文、圏線。	曲線顎。半折曲成形。瓦当凸面横ケズリ。	12世紀前葉。山城産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦175と同笵。 尊勝寺(奈文研1961)175型式と同文。	溝900、計1点。
瓦140	内行2転唐草文。唐草は連続。外区に界線あり。	曲線顎。半折曲成形。瓦当凸面横ケズリ。	12世紀前葉。山城産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦176、 法勝寺金堂(上原ほか1975)図13-2、 法勝寺塔(柏田2011)瓦65と同文。	溝840は2点・溝900、計3点。
瓦141	瓦140と同文で、左脇区・下外区を縮小。	薄顎。半折曲成形。	12世紀前葉。山城産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦176、 法勝寺金堂(上原ほか1975)図13-2、 法勝寺塔(柏田2011)瓦65と同文。	溝900、計1点。 計3点。
瓦142	右偏行唐草文。唐草は連続。外区なし。周縁一部残存。	曲線顎。半折曲成形。瓦当凸面横ケズリ。平瓦凸面にヘラ記号あり。	12世紀前葉。山城産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦179、 尊勝寺(奈文研1961)195A型式、 栗栖野窯(吉村1993)図26-87と同文。	造成土、計1点。
瓦143	右偏行3転唐草文。唐草は連続。外区なし。	段顎。折曲成形。	12世紀代。山城産。 法勝寺回廊(上村ほか1987)図版17-45の両端を縮小。白河(市埋文1996)597と同文。	井戸830・包含層、計2点。
瓦144	右偏行唐草文。唐草は連続、端部結合して紡錘形となる。外区なし。	段顎。半折曲成形。瓦当面に布目。	12世紀前葉。山城産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦182と同笵。 尊勝寺(奈文研1961)202型式、 平安宮豊楽院(平博1977)529と同文。	井戸1210、計1点。
瓦145	右偏行3転唐草文。唐草は連続。外区・周縁なし。	段顎。折曲成形。瓦当面に布目。	12世紀代。山城産。 尊勝寺(上村1991a)図63-25と同文。	溝900、計1点。
瓦146	右偏行唐草文。唐草は連続。外区・周縁なし。	段顎。半折曲成形。	12世紀前葉。山城産。 尊勝寺(奈文研1961)196B型式と同文。	溝900、計1点。
瓦147	右偏行唐草文。唐草は連続。外区・周縁なし。	段顎。半折曲成形。	12世紀前葉。山城産。 下鴨神社(近藤奈2010)29と同笵。 栗栖野窯(市埋文1996)87と同文。	包含層、計1点。
瓦148	左偏行唐草文。唐草は連続。外区なし。平瓦凹部にヘラ記号。	段顎。完全折曲成形。瓦当面に布目。瓦当裏面曲げ皺あり。	12世紀後葉。山城産。	溝440、計1点。
瓦149	外行唐草文。中心文は背向C字、上下を弧線で繋ぐ。唐草は連続。外区に界線。	バチ形顎。包込成形。	12世紀前葉。播磨産。	造成土、計1点。
瓦150	外行唐草文。中心文は背向C字。唐草は分離。外区に界線。	段顎。包込成形。	12世紀前葉。播磨産。 尊勝寺(奈文研1961)231型式と同文。	溝900、計1点。
瓦151	外行3転唐草文。中心文は背向C字。上に水滴形配す。唐草は連続。外区に界線。	段顎。包込成形。	12世紀前葉。播磨産。 円勝寺(市埋文1996)503と同笵。 神出堂ノ前(春成2014)263と同文。	溝840、計1点。
瓦152	外行3転唐草文。唐草は連続。外区に界線。瓦153～161に類似し、唐草形状が若干異なる。	バチ形顎。包込成形。	12世紀前葉。播磨産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦199と同笵。 円勝寺(円勝団1972)ER124型式と同文。	造成土、計1点。
瓦153	外行4転唐草文。中心文は2重花文。唐草は連続。支茎が主茎から離れ水滴形になる。外区に界線。	段顎。包込成形。平瓦凸面に平行叩き。	12世紀前葉。播磨産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦192と同笵。 最勝寺(吉村ほか1995)図28-23、 法金剛院(中谷1970)第56図-28と同文。	溝900、計1点。
瓦154	外行唐草文。中心文は2重花文、先端が尖る。唐草は連続。外区に界線。	段顎。包込成形。	12世紀前葉。播磨産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦194と同笵。	造成土・包含層、計2点。
瓦155	外行唐草文。中心文は2重花文、先端が尖る。唐草は連続。外区に界線。瓦155～161は主茎巻き込みに返りが付く。	バチ形顎。包込成形。	12世紀前葉。播磨産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦193と同笵。	溝900・攪乱、計2点。
瓦156	外行4転唐草文。中心文は2重花文、先端丸い。唐草は連続。外区に界線。	段顎。包込成形。	12世紀前葉。播磨産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦190と同笵。 林崎三本松窯(春成2014)150と同文。	溝900、計5点。

番号	瓦当文様の特徴	手法の特徴	備　考	出土遺構
瓦157	外行5転唐草文。唐草は連続。外区に界線。	バチ形顎。包込成形。平瓦凸面に平行叩き。	12世紀前葉。播磨産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦197、 円勝寺(円勝団1972)ER134型式と同笵。 林崎三本松窯(春成2014)150と同文。	溝900・造成土・溝840、計3点。
瓦158	外行3転唐草文。中心文は2重花文。唐草は連続。外区に界線。内区幅が狭い。	段顎。包込成形。	12世紀前葉。播磨産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦191と同笵。	包含層、計1点。
瓦159	外行4転唐草文。唐草は連続。外区に界線。	段顎。包込成形。	12世紀前葉。播磨産。 林崎三本松窯(春成2014)151と同文。	井戸620、計2点。
瓦160	外行唐草文。唐草は連続。外区に界線。	段顎。包込成形。	12世紀前葉。播磨産。	溝900、計1点。
瓦161	外行唐草文。唐草は連続。外区に界線。	バチ形顎。包込成形。	12世紀前葉。播磨産。	溝840、計1点。
瓦162	外行唐草文。唐草は連続。枝茎先端玉状になる。外区に界線。	曲線顎。瓦当成形不明。	12世紀前葉。播磨産。	溝900、計1点。
瓦163	外行唐草文。唐草は連続。外区に界線。	バチ形顎。包込成形。	12世紀前葉。播磨産。	溝840、計1点。
瓦164	外行唐草文。外区に界線。	段顎。包込成形。	12世紀前葉。播磨産。	溝900、計1点。
瓦165	外行唐草文。唐草主茎は直線的で連続、支茎は不定方向、外区の界線に接する。	バチ形顎。包込成形。	12世紀前葉。播磨産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦213、 尊勝寺(奈文研1961)278型式と同笵。	溝900、計1点。
瓦166	外行2転唐草文。中心文は下向きC字並列、中心上部に垂下線。唐草は分離、外区の界線に接する。瓦167～170は類似し、唐草形状が異なる。	段顎。顎貼付成形。瓦当凸面横ケズリ、裏面から平瓦凸面縦ナデ。	12世紀前葉。播磨産。 尊勝寺(奈文研1961)242型式、 神出窯(春成2014)363と同文。	井戸620、計1点。
瓦167	外行唐草文。唐草は分離。外区に界線。	曲線顎。顎貼付成形。瓦当凹面・凸面横ケズリ、裏面から平瓦凸面縦ナデ。	11-12世紀。播磨産。 尊勝寺(奈文研1961)242型式と同文。	溝900、計1点。
瓦168	外行唐草文。唐草は分離、外区の界線に接する。	段顎。成形不明。瓦当凹面横ケズリ、顎凸面・裏面横ナデ。	12世紀前葉。播磨産。 尊勝寺(奈文研1961)242型式と同文。	溝900、計1点。
瓦169	外行2転唐草文。中心文は下向きC字並列、中心上部に垂下線。唐草は分離、外区の界線に接する。	段顎。包込成形。	12世紀前葉。播磨産。 尊勝寺(奈文研1961)242型式と同文。	造成土、計1点。
瓦170	外行唐草文。唐草は分離、外区の界線に接する。	薄顎。完全折曲成形。瓦当面に布目。	12世紀。播磨産。 尊勝寺(奈文研1961)242型式と同文。	溝440、計1点。
瓦171	外行唐草文。中心文は背向C字、上下に水滴形配す。唐草は連続。外区なし。	バチ形顎。包込成形。	12世紀前葉。播磨産。 尊勝寺(奈文研1961)229B型式、 林崎三本松窯(春成2014)84と同文。	造成土、計1点。
瓦172	外行唐草文。唐草は連続。外区なし。	バチ形顎。包込成形。	12世紀中葉。播磨産。 鳥羽金剛心院(前田2002)HH1、 林崎三本松窯(春成2014)85と同文。	包含層、計1点。
瓦173	外行2転唐草文。中心文は下向C字。唐草は連続。外区なし。	バチ形顎。包込成形。平瓦凸面は平行叩き。	12世紀前葉。播磨産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦219と同笵。 尊勝寺(奈文研1961)253型式と同文。	溝900は2点・造成土・包含層、計4点。
瓦174	外行3転唐草文。中心下部に水滴形配す。唐草は分離。外区なし。瓦175に類似し、175のほうが支茎が多い。	バチ形顎。包込成形。	12世紀中葉。播磨産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦225、 尊勝寺(奈文研1961)222型式、 林崎三本松窯(春成2014)101と同文。	溝900・溝840、計2点。
瓦175	外行3転唐草文。中心下部に子葉配す。唐草は連続。外区なし。	バチ形顎。包込成形。	12世紀前葉。播磨産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦228と同笵。	溝900は2点・溝440、計3点。
瓦176	外行唐草文。左側3転・右側2転。中心文なし。唐草は連続。外区なし。瓦177・178に類似し、178は支茎が少ない。	バチ形顎。包込成形。平瓦凸面に平行叩き。	12世紀中葉。播磨産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦216と同笵。	井戸1210、計1点。
瓦177	外行2転唐草文。中心文なし。唐草は連続。外区なし。	バチ形顎。瓦当成形不明。平瓦凸面に平行叩き。	12世紀中葉。播磨産。 玉津田中(春成2014)482と類似。	溝900・包含層、計2点。
瓦178	外行3転唐草文。中心文なし。唐草は連続。外区なし。	バチ形顎。包込成形。平瓦凸面に平行叩き。	12世紀中葉。播磨産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦218と同笵。	溝840、計1点。
瓦179	外行唐草文。唐草は連続。外区なし。	段顎。包込成形。	12世紀中葉。播磨産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦225と同笵。 林崎三本松窯(春成2014)102と同文。	溝900・溝840、計2点。
瓦180	外行唐草文。中心文なし。唐草は分離。外区なし。	段顎。包込成形。	12世紀前葉。播磨産。 延勝寺(市埋文1996)529、 林崎三本松窯(春成2014)129と同文。	溝840、計1点。

番号	瓦当文様の特徴	手法の特徴	備　考	出土遺構
瓦181	外行唐草文。中心文は垂線。唐草主茎は連続。外区なし。	バチ形顎。包込成形。	12世紀中葉。播磨産。 円勝寺(円勝団1972)SR266型式と同笵。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦206、 尊勝寺(奈文研1961)266型式と同文。	溝900、計1点。
瓦182	外行唐草文。唐草は陰刻。外区なし。	段顎。包込成形。	12世紀前葉。播磨産。	溝440、計1点。
瓦183	外行唐草文。中心文なし。唐草は連続。外区なし。	バチ形顎。包込成形。	12世紀代。 尊勝寺(奈文研1961)156型式と同文。	溝900、計1点。
瓦184	外行唐草文。中心文なし。唐草は陰刻、連続。上下外区に界線。	段顎。包込成形。	12世紀前葉。播磨産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦234と同笵。 尊勝寺(奈文研1961)153型式、 林崎三本松窯(春成2014)133と同文。	攪乱、計1点。
瓦185	右偏行唐草文。唐草は連続。外区に界線。	バチ形顎。包込成形。	12世紀前葉。播磨産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦238、 尊勝寺(奈文研1961)218型式、 久留美窯(池田ほか1999)NH8、 林崎三本松窯(春成2014)131と同笵。	溝900、計1点。
瓦186	左偏行唐草文。唐草は連続、主茎端が珠文となる。内区1段凹む。外区密な珠文。	バチ形顎。包込成形。	12世紀前葉。播磨産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦240と同文。	溝900、計1点。
瓦187	外行3転唐草文。中心文は背向C字、上に水滴形、下にコンマ形配す。唐草は独立。外区に界線、密な珠文。	薄顎。完全折曲成形。瓦当裏面に曲げ皺あり。平瓦凸面・瓦当裏面・下面縦縄叩き。	12世紀前葉。丹波産。 円勝寺(円勝団1972)ER117A型式、平安宮真言院(京都市1976a)図24-20と同笵。	溝900、計1点。
瓦188	外行唐草文。外区に界線、密な珠文。	薄顎。完全折曲成形。瓦当裏面に曲げ皺・縦縄叩き。	12世紀前葉。丹波産。	溝900、計1点。
瓦189	外行唐草文。中心文は花文。唐草は陰刻で連続。外区は粗い珠文。	薄顎。完全折曲成形。瓦当凸面・裏面縦縄叩き。	12世紀前葉。丹波産。 円勝寺(円勝団1972)ER108型式と同笵。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦250、 尊勝寺(奈文研1961)151A型式と同文。	溝840・包含層、計2点。
瓦190	外行2転唐草文。中心文は花文。唐草は連続。外区に界線。下外区を縮小、下界線は追刻。	段顎。完全折曲成形。瓦当裏面・凸面に縄叩き、裏面に曲げ皺。瓦当面に布目あり。	12世紀前葉。丹波産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦251、円勝寺(円勝団1972)ER123B型式、最勝寺推定地(内田ほか1995)図46-11と同笵。	溝900・造成土、計2点。
瓦191	外行唐草文。中心文は花文。唐草は連続。外区に界線。	薄顎。完全折曲成形。瓦当裏面曲げ皺あり。	12世紀前葉。丹波産。	溝900、計1点。
瓦192	外行5転唐草文。中心文なし。唐草は分離。主茎端水玉状になる。外区に2重界線。瓦193に類似し、193は支茎が少ない。	段顎。完全折曲成形。瓦当面布目、凸面斜縄叩き、裏面縦縄叩き。裏面曲げ皺あり。	12世紀前葉。丹波産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦249と同笵。 円勝寺(円勝団1972)ER101A型式と同文。	溝900、計1点。
瓦193	外行唐草文。中心文なし。唐草は分離。外区に2重界線。	薄顎。完全折曲成形。瓦当面に布目。瓦当凸面に縄叩き、裏面曲げ皺あり。	12世紀前葉。丹波産。 円勝寺(円勝団1972)ER101型式と同文。	造成土、計1点。
瓦194	右偏行唐草文。唐草は連続。外区に界線。	完全折曲成形。瓦当凸面縦縄叩き。	12世紀前葉。丹波産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦252、 平安京左京六条院(原山ほか1981)X5-126と同文。	造成土、計1点。
瓦195	外行唐草文。中心文なし。唐草は連続。外区なし。	完全折曲成形。瓦当凸面縦縄叩き。	12世紀前葉。丹波産。	溝440、計1点。
瓦196	右偏行唐草文。唐草は連続。外区なし。	段顎。完全折曲成形。瓦当面布目。瓦当凸面・裏面縦縄叩き。裏面に曲げ皺あり。	12世紀前葉。丹波産。	井戸620・溝840、 計2点。
瓦197	外行唐草文。中心文は上向きC字。唐草は連続。外区に界線・粗い珠文。	曲線顎。瓦当成形不明。瓦当凹面・凸面横ケズリ、裏面斜ケズリ。	時期不明。産地不明。	溝840、計1点。
瓦198	唐草文。唐草は連続。外区に界線。	曲線顎。顎貼付成形。瓦当凹面布目、凸面横ケズリ、裏面から平瓦凸面縦ナデ。	時期不明。産地不明。	造成土、計1点。
瓦199	外行唐草文。唐草は連続。外区なし。	段顎。折曲成形。瓦当裏面接合部に圧痕あり。瓦当凹面布目、凸面・裏面横ナデ。	時期不明。産地不明。	溝440、計1点。
瓦200	外行唐草文。中心文なし。唐草は連続。外区なし。	曲線顎。瓦当成形不明。瓦当凹面布目、凸面・裏面横ナデ。	時期不明。産地不明。	包含層、計1点。
瓦201	外行唐草文。唐草は連続。外区なし。	曲線顎。瓦当成形不明。瓦当凹面布目。	時期不明。産地不明。	溝840、計1点。
瓦202	外行宝相華文。中心文なし。唐草は連続、分岐点が花文となる。外区なし。	バチ形顎。包込成形。	12世紀代。播磨産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦260と同笵。 林崎三本松窯(春成2014)117と同文。	溝900・溝840、計2点。
瓦203	外行3転宝相華文。唐草は連続。外区なし。瓦174・175に類似するが、主茎・枝茎先が子葉となるので宝相華文とした。	バチ形顎。包込成形。平瓦凸面平行叩き。	12世紀前葉。播磨産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦257と同笵。	溝900、計1点。

番号	瓦当文様の特徴	手法の特徴	備　考	出土遺構
瓦204	外行宝相華文。中心文は花文。唐草は連続、分岐点が花文となる。外区なし。	段顎。包込成形。	12世紀前葉。播磨産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦265と同笵。	調査区北東柱穴群、計1点。
瓦205	外行宝相華文。中心文なし。唐草は連続、分岐点に子葉が付く。外区なし。	段顎。包込成形。平瓦凸面平行叩き。	12世紀中葉。播磨産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦263、 円勝寺(円勝団1972)ER138型式と同笵。	溝900は4点・包含層は2点・溝440、計7点。
瓦206	宝相華文。中心文は花文、両側に花文2単位配置。外区なし。	バチ形顎。包込成形。	12世紀前葉。播磨産。 林崎三本松窯(春成2014)139と同文。	造成土、計1点。
瓦207	半裁花文。中心に上花文を配し、両側に上下交互に3単位配置。外区に界線。	段顎。完全折曲成形。平瓦凸面縦縄叩き。平瓦凹面にヘラ記号あり。	12世紀後葉。山城産。 白河(近藤奈ほか2005)図64-548に類似。	包含層、計1点。
瓦208	半裁花文。上下交互に配置。外区なし。	曲線顎。顎貼付成形。瓦当凹面布目端部横ケズリ、凸面から裏面・平瓦凸面斜縄叩き。	12世紀代。讃岐産。	溝900、計1点。
瓦209	雁巴文。雁行と巴文を3単位交互に配置。巴は左巻三巴で、頭・尾は離れる。外区なし。	薄顎。半折曲成形。	12世紀中葉。山城産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦272と同笵。 尊勝寺(奈文研1961)294型式、 栗栖野窯(市埋文1980)280と同文。	溝900、計1点。
瓦210	連巴文。巴文を5単位配置。巴は右巻三巴、頭は離れ尾は接して界線となる。外区なし。	薄顎。半折曲成形。	12世紀中葉。山城産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦273と同笵。 尊勝寺(奈文研1961)299型式、 栗栖野窯(市埋文1996)100と同文。	包含層、計1点。
瓦211	陰刻連巴文。巴文は左巻二巴、頭離れ、尾は界線に接する。	薄顎。包込成形。	12世紀中葉。播磨産。 尊勝寺(奈文研1961)302型式と同文。	溝840、計1点。
瓦212	蓮巴文。中心に巴文2単位、両側に蓮華文を配置。文様間の上にV、下に珠文を配す。蓮華文は単弁4弁、巴文は右巻三巴、頭離れ、尾は接して界線となる。	段顎。完全折曲成形。	12世紀後葉。山城産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦274、 平安宮真言院(京都市1976a)図23-17と同笵。	溝840、計1点。
瓦213	剣巴文。中心に巴文、両側に陰刻剣頭文配置。巴は右巻二巴、頭は離れ、尾は周縁に接する。剣頭文配置は放射状。	段顎。完全折曲成形。瓦当裏面曲げ皺あり。瓦当面に布目。	12世紀後葉。山城産。	包含層、計1点。
瓦214	剣巴文。中心に巴文、両側に陰刻剣頭文配置。巴は右巻三巴、頭・尾は離れる。剣頭文配置は放射状。	段顎。完全折曲成形。瓦当裏面曲げ皺あり。	12世紀後葉。山城産。 尊勝寺(奈文研1961)296型式と同文。	包含層、計1点。
瓦215	剣巴文。中心に巴文、両側に陰刻剣頭文配置。巴は右巻二巴、頭は接する。剣頭文配置は垂直。	薄顎。完全折曲成形。瓦当裏面接合部に凹型台の圧痕あり。	12世紀後葉。山城産。	溝440、計1点。
瓦216	陽刻剣頭文。剣頭は連続、配置は放射状。上外区に密な珠文。	段顎。半折曲成形。瓦当面に布目。	12世紀中葉。山城産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦282と同文。	攪乱、計1点。
瓦217	陽刻剣頭文。剣頭は単弁で独立する。配置は放射状。外区なし。	曲線顎。半折曲成形。	12世紀中葉。山城産。 尊勝寺(奈文研1961)287型式、 栢杜(杉山ほか1975a)Lと同文。	井戸620・溝900、計2点。
瓦218	陽刻剣頭文。剣頭は連続、配置は放射状。	曲線顎。半折曲成形。	12世紀中葉。山城産。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦284と同文。	溝900、計1点。
瓦219	陰刻剣頭文。配置は放射状。	段顎。完全折曲成形。瓦当裏面に縦縄叩き・曲げ皺あり。	12世紀後葉。山城産。	溝900、計1点。
瓦220	陰刻剣頭文。配置は放射状。	薄顎。完全折り曲げ成形。	12世紀後葉。山城産。	溝900、計1点。
瓦221	陰刻剣頭文。配置は垂直。	段顎。完全折曲成形。瓦当面に布目。	12世紀後葉。山城産。	井戸1205、計1点。
瓦222	斜格子文。外区なし。	曲線顎。半折曲成形。	12世紀中葉。山城産。	溝900、計1点。
瓦223	外行2転宝相華文。中心文は花文。唐草は分離、分岐点に花文を配す。外区に界線。瓦224に類似し、唐草形状異なる。	蹄顎。顎貼付成形。瓦当凹面布目、凸面・裏面横ナデ。裏面接合部に凹型台の圧痕あり。	13世紀代。産地不明。	溝840、計1点。
瓦224	外行唐草文。唐草は分離。外区に界線。	蹄顎。顎貼付成形。	13世紀代。産地不明。	溝840、計2点。
瓦225	外行唐草文。中心文は( )形。唐草は分離。外区に界線。	段顎。瓦当成形不明。裏面接合部に凹型台の圧痕あり。	13世紀代。産地不明。 東福寺(長谷川1990)57と同文。	溝840、計1点。
瓦226	内行唐草文。唐草は接合。外区なし。	段顎。顎貼付成形。裏面接合部に凹型台の圧痕あり。	13世紀代。産地不明。	包含層、計1点。
瓦227	幾何学文。複数斜線を交互に配置。外区に界線。	曲線顎。顎貼付成形。	時期不明。産地不明。 円勝寺(小檜山ほか2015)瓦301と類似。	包含層、計1点。

付表５　刻印瓦・ヘラ記号瓦・鬼瓦観察表

番号	種類	文様の特徴	手法の特徴	備　考	出土遺構
瓦228	刻印瓦	平瓦凹面に刻印あり。縦50㎜、横20㎜の隅丸長方形の枠に沿って凸線が巡り、その中に「東大寺」と陽刻する。	凹面ナデ。	13世紀代。備前産。 万富瓦窯跡(岡山1980)第35図1-1と同笵の可能性高い。	溝840、計1点。
瓦229	刻印瓦	瓦228の刻印と同笵。瓦228の方が文字の出が悪い。	凹面細かい布目、凸面二重格子叩き、離れ砂多量付着。広端面ヘラケズリ。重格子叩き、離れ砂多量付着。	13世紀代。備前産。 万富瓦窯跡(岡山1980)第35図1-1と同笵の可能性高い。	井戸888、計1点。
瓦230	刻印瓦	平瓦凹面に刻印あり。縦42㎜、横22㎜の隅丸長方形の枠に沿って凸線が巡り、その中に「万天堂」と陽刻する。	凹面布目、凸面二重格子叩き、離れ砂多量付着。	13世紀代。産地不明。	溝840、計1点。
瓦231	刻印瓦	丸瓦狭端面に「上」刻印あり。	凸面縦縄叩き。凹面布目。側面縦ケズリ。狭端面横ナデ。	12～13世紀代。産地不明。	溝440、計1点。
瓦232	ヘラ記号瓦	丸瓦完形。凸面狭端部に「Ⅸ」ヘラ書きあり。	凸面縦縄叩き。凹面布目。側面縦ケズリ。広端面横ケズリ。玉縁部凸面横ナデ。	12世紀代。山城産。	包含層、計1点。
瓦233	ヘラ記号瓦	平瓦凹面狭端隅部にヘラ書きあり。瓦233～235は同文様。	凹面・凸面縦ナデ、狭端部のみ横ナデ。狭端面横ナデ、側面縦ケズリ。	12世紀代。播磨産。	溝840、計1点。
瓦234	ヘラ記号瓦	丸瓦凹面、側面寄りにヘラ書き記号あり。瓦233～235は同文様。	凹面横ナデ、凸面縦ナデ、側面縦ケズリ。	12世紀代。播磨産。	溝840、計1点。
瓦235	ヘラ記号瓦	丸瓦凹面、側面・玉縁寄りにヘラ記号あり。瓦233～235は同文様。	凹面横ナデ、凸面縦ナデ、側面縦ケズリ。玉縁部凹凸面横ナデ。	12世紀代。播磨産。	溝840、計1点。
瓦236	鬼瓦	目・右頬・右上歯部が残存。眉間に縦の突起あり。外区に凸線廻る。裏面は平坦、固定施設なし。	笵型による成形。側面・剞形内縦ケズリ、裏面縦ナデ。	12世紀代。播磨産。 神出遺跡(春成2014)418に類似。	溝900、計1点。
瓦237	鬼瓦	歯左側・左頬残存。頬が高い。外区に界線・珠文・凸線あり。裏面中央凹む。	笵型による成形。表面ナデ。側面・剞形内ケズリ、裏面ナデ。	12世紀代。播磨産。	溝900、計1点。
瓦238	鬼瓦	鼻部・上歯が残存。裏面は平坦、縦方向の浅い溝あり。	笵型による成形。表面ナデ。剞形内ケズリ、裏面ナデ、浅い溝はケズリ。	12世紀代。産地不明。	溝900、計1点。
瓦239	鬼瓦	左眉毛・額残存。額に横皺あり。	笵型による成形。盛り上がり部に先行して粘土を入れて押さえる。	12世紀中葉。播磨産。 鳥羽金剛心院(前田2002)図版40-94、林崎三本松窯(春成2014)189と同文。	溝900、計1点。
瓦240	鬼瓦	右牙・右足残存。外区に凸線あり。裏面平坦。	笵型による成形。表面ナデ。側面・剞形内縦ケズリ、裏面ナデ。	12世紀代。播磨産。	溝440、計1点。
瓦241	鬼瓦	左足部残存。外区に珠文・界線・鰭あり。裏面平坦。	笵型による成形。表面ナデ。側面・剞形内縦ケズリ、裏面ナデ。	12世紀代。産地不明。	溝900、計1点。

付表３～５　瓦観察表　備考欄の参考文献

あ

網ほか2011：網　伸也・竜子正彦「法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡」『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成22年度』京都市文化市民局、2011年

池田ほか1999：池田征弘・森内秀造『久留美・跡部窯跡群－山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告ＸＸＸ－』兵庫県文化財調査報告第186冊、兵庫県教育委員会、1999年

五十川1981：五十川伸矢「瓦類」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ－白河北殿北辺の調査－』京都大学埋蔵文化財研究センター、1981年

市本2001：市本芳三「大阪地域の平安時代後期瓦の様相」『第４回摂河泉古代寺院フォーラム　中世寺院の幕開け－11・12世紀の寺院の考古学的研究－』摂河泉古代寺院研究会、2001年

上原ほか1975：上原真人・木村捷三郎・畑　美樹徳「京都市動物園爬虫類館建設に伴う“法勝寺”発掘調査報告」『法勝寺跡　京都市埋蔵文化財年次報告1974－Ⅱ』京都市文化観光局文化財保護課、1975年

上村1981：上村和直『六勝寺跡発掘調査概要　昭和55年度』京都市埋蔵文化財調査センター、1981年

上村1991a：上村和直「尊勝寺跡」『昭和62年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1991年

上村1991b：上村和直「岡崎遺跡・法勝寺隣接地」『昭和62年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1991年

上村ほか1987：上村和直・辻　裕司「瓦」『法勝寺跡発掘調査概報　昭和61年度』京都市文化観光局、1987年

上村ほか1994：上村和直・西大條哲「尊勝寺跡・岡崎遺跡１」『平成元年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1994年

上村ほか1996：上村和直・堀内明博・吉村正親「尊勝寺跡・最勝寺跡・岡崎遺跡」『京都市内遺跡立会調査概報　平成７年度』京都市文化市民局、1996年

宇垣2009：宇垣匡雅「瓦」『備前国分寺　赤磐市文化財調査報告　第３集』岡山県赤磐市教育委員会、2009年

内田ほか1995：内田好昭・丸川義広・平方幸雄「最勝寺跡・岡崎遺跡」『平成３年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1995年

梅原1925：梅原末治「出雲神社境内發見ノ古瓦」『京都府史跡勝地調査会報告　第６冊』京都府、1925年

円勝団1972：円勝寺発掘調査団「円勝寺の発掘調査（下）」『佛教藝術84号』毎日新聞社、1972年

岡山県1980：岡山県文化財保護協会『泉瓦窯跡・万富瓦窯跡　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告37』1980年

か

柏田2011：柏田有香「法勝寺・岡崎遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成22年度』京都市文化市民局、2011年

北田ほか1986：北田栄造・長谷川行孝『栗栖野瓦窯跡発掘調査概報　昭和60年度』京都市文化観光局、1986年

京都市1976a：京都市文化観光局文化財保護課編「平安宮真言院跡」『京都市埋蔵文化財年次報告1975』同課、1976年

京都市1976b：京都市文化観光局文化財保護課編「法勝寺金堂跡第Ⅱ次発掘調査概要」『京都市埋蔵文化財年次報告1975』同課、1976年

高1998：高 正 龍『南ノ庄田瓦窯跡　京都市埋蔵文化財研究所調査報告第18冊』同研究所、1998年

小檜山ほか2015：小檜山一良・近藤奈央・伊藤　潔・上村和直・李　銀眞『円勝寺跡・成勝寺跡・白河街区跡・岡崎遺跡　京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2014－13』同研究所、2015年

小松ほか1998：小松武彦・吉村正親・小檜山一良「平安京右京一条四坊・法金剛院境内」『平成８年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1998年

近藤章2014：近藤章子『延勝寺跡・岡崎遺跡　京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2014－1』同研究所、2014年

近藤奈2010：近藤奈央「復元小川と祭壇状遺構」『糺の森整備報告書』宗教法人賀茂御祖神社、2010年

近藤奈ほか2005：近藤奈央・木下保明『白河街区跡・岡崎遺跡　京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2005－4』同研究所、2005年

さ

市埋文1979：京都市埋蔵文化財研究所編「第43次（田中殿Ⅶ）発掘調査」『鳥羽離宮跡　国庫補助による発掘調査概要　昭和53年度』京都市文化観光局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1979年

市埋文1980：財団法人京都市埋蔵文化財研究所編『坂東善平収蔵品目録』同研究所、1980年

市埋文1996：財団法人京都市埋蔵文化財研究所編『木村捷三郎収集瓦図録』同研究所、1996年

市埋文2012：財団法人京都市埋蔵文化財研究所編「第２章 試掘・立会調査　Ⅰ 昭和54年度の試掘・立会調査概要　54-046 西賀茂瓦窯跡79RH-GE」『昭和54年度　京都市埋蔵文化財調査概要』同研究所、2012年

杉山ほか1975a：杉山信三・岩城　徹・梶川敏夫・清野紀子『栢杜遺跡調査概報』鳥羽離宮跡調査研究所、1975年

杉山ほか1975b：杉山信三・長宗繁一「鳥羽離宮跡第14次発掘調査概要－田中殿第２次発掘調査－」『鳥羽離宮跡・史跡西寺跡　京都市埋蔵文化財年次報告1974－Ⅳ』京都市文化観光局文化財保護課、1975年

杉山ほか1976：杉山信三・長宗繁一「昭和50年醍醐寺霊宝館宝聚院増築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報」『醍醐寺境内地に於ける埋蔵文化財発掘調査概報』醍醐寺・鳥羽離宮跡調査研究所、1976年

鈴木ほか1978：鈴木廣司・伊藤　潔・平尾政幸『常盤仲ノ町集落跡発掘調査報告　京都市埋蔵文化財研究調査報告－Ⅲ』同研究所、1978年

た

田中2003：田中利津子『白河街区跡・岡崎遺跡　京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002－17』同研究所、2003年

な

中谷1970：中谷雅治「法金剛院境内出土の古瓦」『埋蔵文化財発掘調査概報（1970)』京都府教育委員会、1970年

奈文研1961：奈良国立文化財研究所編「尊勝寺発掘調査報告－京都会館建設地の調査－」『平城宮跡第一次・伝飛鳥板葺宮跡発掘調査報告　奈良国立文化財研究所学報第十冊』同研究所、1961年

西森2015：西森正晃「法勝寺跡・岡崎遺跡」『京都市内試掘調査報告　平成26年度』京都市文化市民局、2015年

は

長谷川1990：長谷川行孝『東福寺防災施設工事・発掘調査報告書』東福寺、1990年

原山ほか1981：原山充志・小森俊寛『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査概報年報Ⅲ』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会、1981年

春成2014：春成秀爾「明石の古瓦集成２」『明石の古代Ⅱ』発掘された明石の歴史展実行委員会・明石市、2014年

平尾ほか1982：平尾政幸・辻　純一「平安京左京二条二坊（２)」『平安京跡発掘調査概報　昭和56年度』京都市文化観光局、1982年

平博1977：平安博物館編『平安京古瓦図録』雄山閣、1977年

細谷1968：細谷義治「鳥羽離宮跡出土軒瓦の整理」『埋蔵文化財発掘調査概報（1968)』京都府教育委員会、1968年

堀内ほか1986：堀内明博・鈴木久男・北田栄造「第113次調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概報　昭和60年度』京都市文化観光局、1986年

ま

前田2002：前田義明「瓦」『鳥羽離宮跡Ⅰ－金剛心院跡の調査－京都市埋蔵文化財研究所調査報告第20冊』同研究所、2002年

森ほか1995：森　郁夫・鈴木久男・上村和直・前田義明「瓦」『新東寶記　東寺の歴史と美術』東寺、1995年

毛利光ほか1992：毛利光俊彦・佐川正俊・花谷　浩『法隆寺の至寶－昭和資材帳－』第15巻瓦、小学館、1992年

や

安井1960：安井良三「篠町Ａ號瓦窯址」『亀岡市史　上巻』亀岡市、1960年

藪中1991：藪中五百樹「平安時代における興福寺の造営と瓦」『佛教藝術　第194号』毎日新聞社、1991年

山崎1987：山崎信二「瓦塼」『薬師寺発掘調査報告　奈良国立文化財研究所学報第45冊』同研究所、1987年

吉村1993：吉村正親「栗栖野瓦窯跡の調査（その２)」『栗栖野瓦窯跡発掘調査概報　平成４年度』京都市文化観光局、1993年

吉村ほか1995：吉村正親・尾藤徳行「尊勝寺跡・最勝寺跡」『京都市内遺跡立会調査概報　平成６年度』京都市文化観光局、1995年

付表６　土製品観察表

No.	種類	遺構名	寸法(cm)	色調	胎土	調整、その他
土1	土製円塔	溝900	鍔直径5.4、円塔直径4.0、高さ2.3	釉:暗緑色 胎土:10YR7/3にぶい黄橙色	密	施釉・布目圧痕あり、裏面に粘土充填痕
土2	土製円塔	溝900	鍔直径5.4、円塔直径4.1、高さ2.2	釉:暗緑色 胎土:2.5Y8/2灰白色	密	施釉・布目圧痕あり
土3	土製円塔	造成土	鍔直径(5.5)、円塔直径4.4、高さ2.3	釉:暗緑色 胎土:10YR7/4にぶい黄橙色	密	施釉・布皺あり
土4	土製円塔	溝900	鍔直径5.9、円塔直径4.7、高さ2.5	釉:5Y7/4浅黄色 胎土:2.5Y8/3淡黄色	密	施釉・布皺あり
土5	土製円塔	溝900	鍔直径(5.2)、円塔直径5.0、高さ2.9	釉:緑灰色 胎土:2.5Y8/2灰白色	密	施釉・布皺あり、裏面に爪圧痕？
土6	土製円塔	包含層	鍔直径(6.1)、円塔直径5.2、高さ3.1	釉:緑灰色 胎土:2.5Y8/1灰白色	密	施釉・布目圧痕あり
土7	土製円塔	土坑335	鍔直径(5.6)、円塔直径5.3、高さ2.9	釉:2.5GY3/1暗オリーブ灰色 胎土:10YR7/4にぶい黄橙色	密	施釉・布皺あり
土8	土製円塔	包含層	鍔直径(6.4)、円塔直径5.3、高さ2.3	釉:2.5Y8/2灰白色 胎土:2.5Y5/3黄褐色	密	施釉・布皺あり
土9	土製円塔	造成土	鍔直径(5.6)、円塔直径5.4、高さ(2.9)	釉:5Y5/3灰オリーブ色 胎土:2.5Y8/1灰白色	密	施釉
土10	土製円塔	土坑1024	鍔直径(5.6)、円塔直径5.7、高さ2.8	釉:2.5GY3/1暗オリーブ灰色 胎土:10YR8/3浅黄橙色	密	施釉・布皺あり
土11	円盤状 土製品	包含層	直径3.8、厚さ1.2	N4/0灰色	やや密	瓦質土器盤の底部片を円形に加工
土12	硯	溝900	長さ(7.6)、幅(5.7)、高さ3.5	2.5Y7/1灰白色	密	全面は丁寧なケズリ調整、硯面及び脚部裏面に墨痕あり

付表７　金属製品観察表

No.	種類	遺構名	材質	寸法(cm)	重さ(g)	備考
金1	銭貨	溝440	銅	残存径2.22、孔径0.4、厚さ0.1	3.04	「開元通寶」、短頭元、不跳元、唐銭(621年鋳造)
金2	銭貨	土坑616	銅	残存径2.3、孔径0.5、厚さ0.1	2.11	「皇宋通寶」、篆書、北宋銭(1038年鋳造)、両面磨滅著しい
金3	銭貨	包含層	銅	残存径2.25、孔径0.4、厚さ0.12	2.89	「元豊通寶」、行書、北宋銭(1078年鋳造)、裏面磨滅
金4	銭貨	包含層	銅	残存径2.17、孔径0.55、厚さ0.16	2.91	「元豊通寶」、篆書、北宋銭(1078年鋳造)、裏面が少し磨滅
金5	銭貨	包含層	銅	残存径1.75、孔径0.35、厚さ0.1	1.45	「元符通寶」、篆書、北宋銭(1098年鋳造)、両面磨滅著しい、磨輪
金6	銭貨	土坑616	銅	残存径2.11、孔径0.56、厚さ0.1	1.33	「紹興元寶」、真書、折二銭(二文銭)、磨輪、南宋銭(1131年鋳造)、両面磨滅、輪の周囲を削る
金7	銭貨	包含層	銅	残存径2.5、孔径0.29、厚さ0.15	4.16	「洪武通寶」、背一銭、小平銭(一文銭)、明銭(1368年鋳造)、両面磨滅著しい
金8	銭貨	包含層	銅	残存径2.2、孔径0.2、厚さ0.15	2.11	「寛永通寶」、両面磨滅著しい、錆付着
金9	飾り金具	包含層	金銅	長さ(3.5)、幅3.3、厚さ0.6	4.1	花菱形、周縁を花弁状に丸く加工、平面も花弁形に打ち出す、中央と十字の位置に孔(5箇所)あり、表面に渡金、一部欠損・変形
金10	簪	土坑107	真鍮	長さ8.3、幅1.4、厚さ0.2	3.1	髪に挿す部分はU字形、先端は耳かき、表裏面に魚子文様、先端が変形

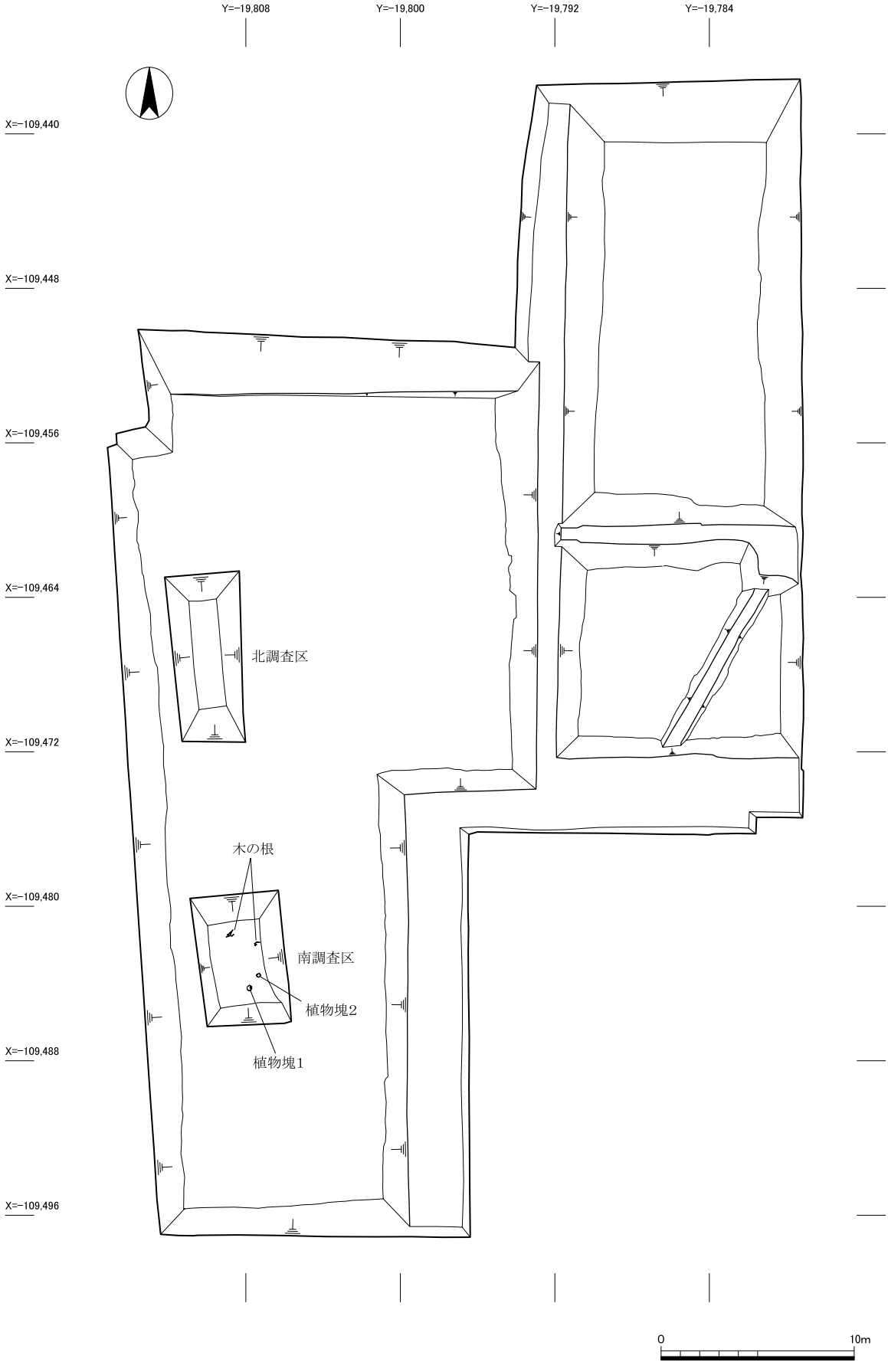
付表８　石製品観察表

No.	種類	遺構名	材質	寸法(cm)	重さ(g)	備考
石1	原石	調査区北西柱穴群	サヌカイト	長さ18.5、幅10.5、厚さ6.25	1,260	裏面や側面に自然面、表面に大きな剥離、全体的に風化
石2	剥片	流路1100	チャート	長さ4.7、幅3.5、厚さ0.85	16	背面:自然面、腹面:上部打点の剥離、側面:所々に押圧剥離痕
石3	紡錘車	造成土	滑石	直径3.95、高さ2.0、孔径0.5	40.9	表面:平滑・平坦、裏面:すり鉢状に削り取り、中央に穿孔、全体的に磨滅著しい
石4	石鍬？	溝840	粘板岩	長さ(11.7)、幅(9.0)、厚さ(0.9)	81	裏面・下部は欠損、表面・側面は丁寧に研磨、使用痕残る
石5	管玉	流路1100	碧玉	直径0.4、長さ(1.2)、孔径0.2	0.3	二方向穿孔、全面を丁寧に研磨
石6	石棒	流路1100	紅簾片岩	長さ(17.05)、幅4.4、厚さ1.9	253.4	加工時の剥離痕残る、上部折損
石7	磨石	包含層	花崗岩	長さ9.95、幅9.0、厚さ4.4	648.5	表裏面:平滑・平坦、右側面:敲打痕？
石8	磨石・敲石	流路1100	砂岩	長さ8.25、幅7.15、厚さ6.6	567.5	平滑に研磨、上下部:敲打痕
石9	磨石	流路1100	玄武岩？	長さ7.1、幅6.2、厚さ4.3	275.6	平滑に全面を研磨
石10	敲石	流路1100	砂岩	長さ9.2、幅8.0、厚さ8.1	747	平滑に研磨、下部に敲打痕、1/3に焼成痕あり
石11	敲石	包含層	閃緑岩	長さ9.2、幅5.9、厚さ4.4	407	中央にくびれ、両側面に敲打痕
石12	不明	土坑267	砂岩	長さ29.4、幅18.6、厚さ13.6	10,000	欠損部分以外は平滑に研磨・面取り
石13	硯	溝900	堆積岩	長さ(7.3)、幅6.9、高さ(1.3)	95	全体的に錆付着、硯池は欠損、周縁は大半が欠損、硯面・側面に墨痕残る
石14	温石	包含層	滑石	長さ6.4、幅12.1、厚さ2.9、孔径1.1	290	口径22cmの石鍋を転用、中央付近に穿孔、鍔部を削り取って平坦にするが、加工痕は残る
石15	砥石	包含層	珪質粘板岩	長さ9.7、幅4.0、厚さ4.8	133	上部欠損、その他全面使用により平滑、刃物による擦痕が多数あり
石16	砥石	建物4(柱穴627)	凝灰岩(白色)	長さ(10.9)、幅6.2、厚さ(5.8)	432	欠損部分以外平滑、刃物による擦痕が多数あり
石17	台石	包含層	閃緑岩	長さ23.4、幅15.6、高さ12.0	7,000	表面・裏面・上側面:研磨、その他側面:割れ痕、上側面が被熱、煤付着

付表９　木製品観察表

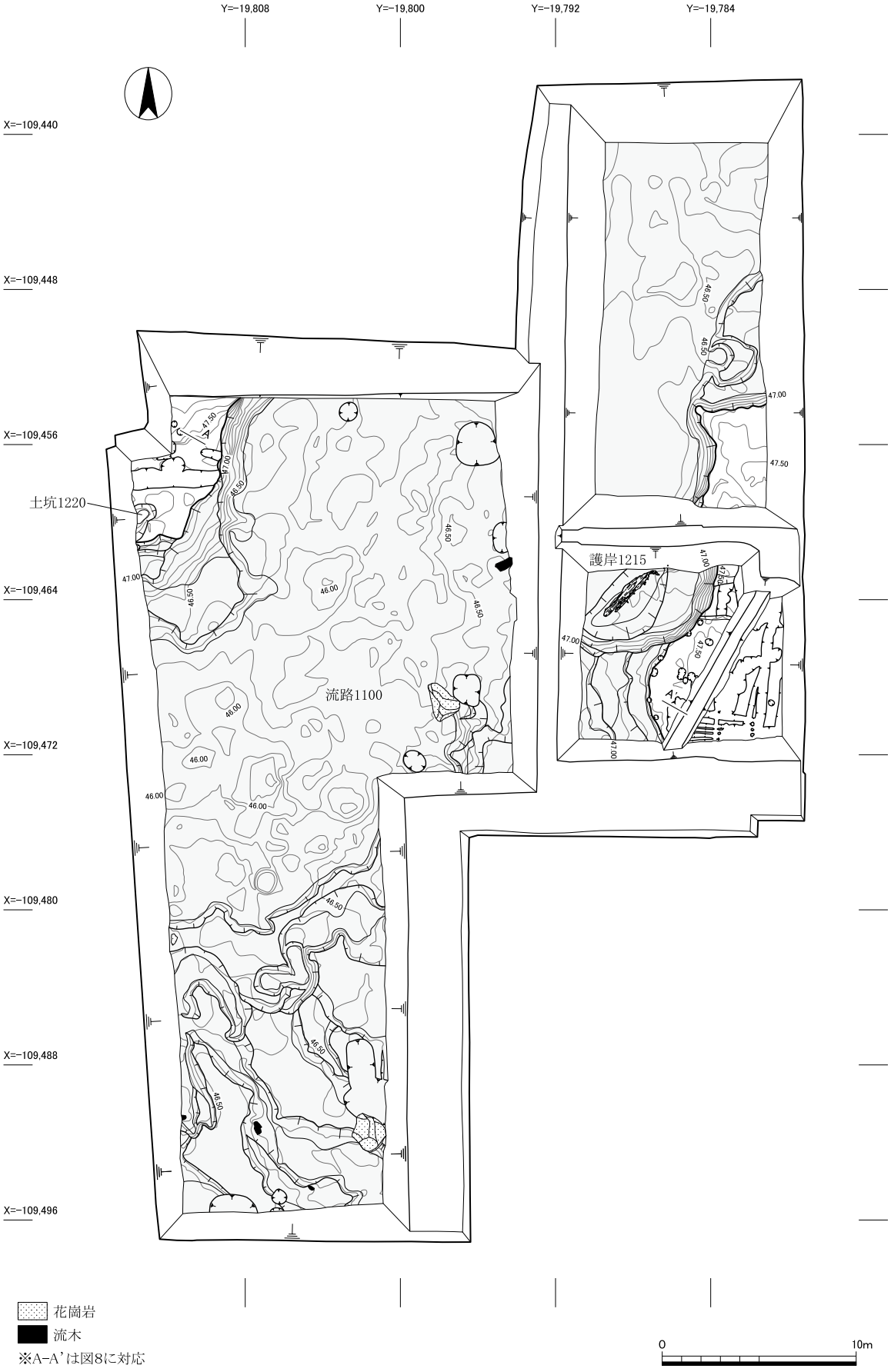
No.	種類	遺構名	樹種	寸法(cm)	備考
木1	梯子	流路1100	コウヤマキ	長さ(65.6)、幅23.3、最大厚10.4	推定上部2段分、表裏面に工具痕、裏面に孔が並ぶ
木2	杭	護岸1215	コウヤマキ	長さ(55.4)、幅7.6、厚さ6.8	断面方形のち角を面取り、先端を三角錐に加工
木3	杭	護岸1215	コウヤマキ	長さ(49.4)、幅8.1、厚さ5.6	断面方形のち角を面取り、先端を三角錐に加工、先端が潰れている
木4	杭	溝900	スギ	長さ(55.4)、幅6.1、厚さ6.6	断面隅丸長方形、先端を加工
木5	不明	土坑1024	スギ	長さ24.5、幅24.1、厚さ2.2	板3枚重ね、釘穴・複数の刃物痕・穿孔(直径1.6cm)あり、U字形の鉄釘残る
木6	下駄	造成土	ヒノキ	長さ22.0、幅10.5、厚さ3.5(歯厚さ含)	3箇所に表から裏へ孔あり、側面すべて面取り、歯は押し切り
木7	漆器椀	溝440	ブナ	口径16.9、器高(5.2)	内外面の黒漆地に朱漆で文様を描く
木8	漆器椀	溝900	ヒノキ	口径16.7、器高(5.1)	口縁部内面の黒漆地に朱漆で文様を描く
木9	曲物底板	土坑1024	スギ	直径14.8、厚さ0.5	表面に複数の刃物痕、側面に木釘痕(直径0.1cm、深さ1cm)あり
木10	曲物底板	溝440	スギ	長さ(29.7)、幅(10.0)、厚さ0.9	表面に細かい刃物痕、側面に木釘痕(直径0.35cm、深さ0.7cm)あり
木11	曲物底板	井戸1210	コウヤマキ	直径18.1～18.6、厚さ0.4	表面全体に刃物痕、裏面端に刃物痕あり
木12	折敷底板	造成土	スギ	一辺(20.0)、厚さ1.8	2つに割れている、裏面が全体的に腐食
木13	曲物	井戸888	スギ	口径27.0、器高12.4	底板側面3箇所に木釘痕(断面方形、一辺0.3cm、深さ0.3～0.6cm)あり、底面2箇所に黒色化した凹み
木14	箸	井戸830	ヒノキ	長さ3.6、幅0.55、厚さ0.35	全面に面取り加工、先端が炭化、火付け木に転用
木15	箸	井戸830	コウヤマキ	長さ(19.75)、幅0.6、厚さ0.45	全面に面取り加工
木16	箸	溝900	スギ	長さ24.4、幅0.85、厚さ0.45	全面に面取り加工
木17	人形 または題箋	土坑1024	スギ	長さ13.35、幅1.3、厚さ1.3	切れ目を入れ、部分的に削り取るなど全面を加工
木18	小刀柄	井戸1210	カキノキ	長さ(8.0)、幅(2.6)、厚さ1.3	目釘痕(直径0.5cm)あり、柄頭・合口部分は欠損、内部に鋲残る
木19	軸	井戸1210	カヤ	直径1.3、長さ17.1	両端側面に工具痕、墨痕あり
木20	題箋	造成土	コウヤマキ	長さ(21.7)、幅2.5、厚さ1.05	下部を杭状に加工
木21	火付け木	土坑1024	スギ	長さ19.8、幅1.15、厚さ1.05	先端は炭化、後端は切断、火付け木用に加工
木22	火付け木	溝900	スギ	長さ(20.75)、幅1.6、厚さ0.25	先端は炭化、2箇所斜めの孔あり、折敷側板の転用か
木23	曲物枠板	井戸830	スギ	口径49.1、器高22.9	桜皮紐・木釘によって、敷板の枠板を留める
木24	井戸枠縦板	井戸830	スギ	長さ(59.3)、幅9.9、厚さ1.8	表から裏へのみ状工具によって穿孔、枘穴は長方形
木25	井戸枠縦板	井戸830	スギ	長さ(57.0)、幅9.4、厚さ1.9	表から裏へのみ状工具によって穿孔、枘穴は正方形
木26	井戸枠縦板	井戸830	スギ	長さ(48.0)、幅9.1、厚さ2.3	左側面に刳り込み
木27	井戸枠縦板	井戸830	スギ	長さ(51.9)、幅8.1、厚さ3.5	表面・左側面に刳り込み
木28	井戸枠縦板	井戸1210	スギ	長さ(59.3)、幅23.4、厚さ2.6	両面とも複数の幅広の加工痕、下端は丁寧に切断
木29	井戸枠縦板	井戸1210	スギ	長さ(51.7)、幅28.0、厚さ3.4	表面全体に加工痕、下端は丁寧に切断
木30	井戸枠縦板	井戸1210	スギ	長さ(60.3)、幅8.2、厚さ3.2	表から裏へのみ状工具によって穿孔
木31	井戸枠縦板	井戸1210	スギ	長さ(67.4)、幅7.4、厚さ2.6	表から裏へのみ状工具によって穿孔、先端付近に圧痕
木32	井戸枠縦板	井戸1210	スギ	長さ(62.1)、幅9.4、厚さ1.2	右側面に刳り込み
木33	井戸枠縦板	井戸1210	スギ	長さ(53.6)、幅6.7、厚さ2.2	左下側面を丁寧に加工

図　　版

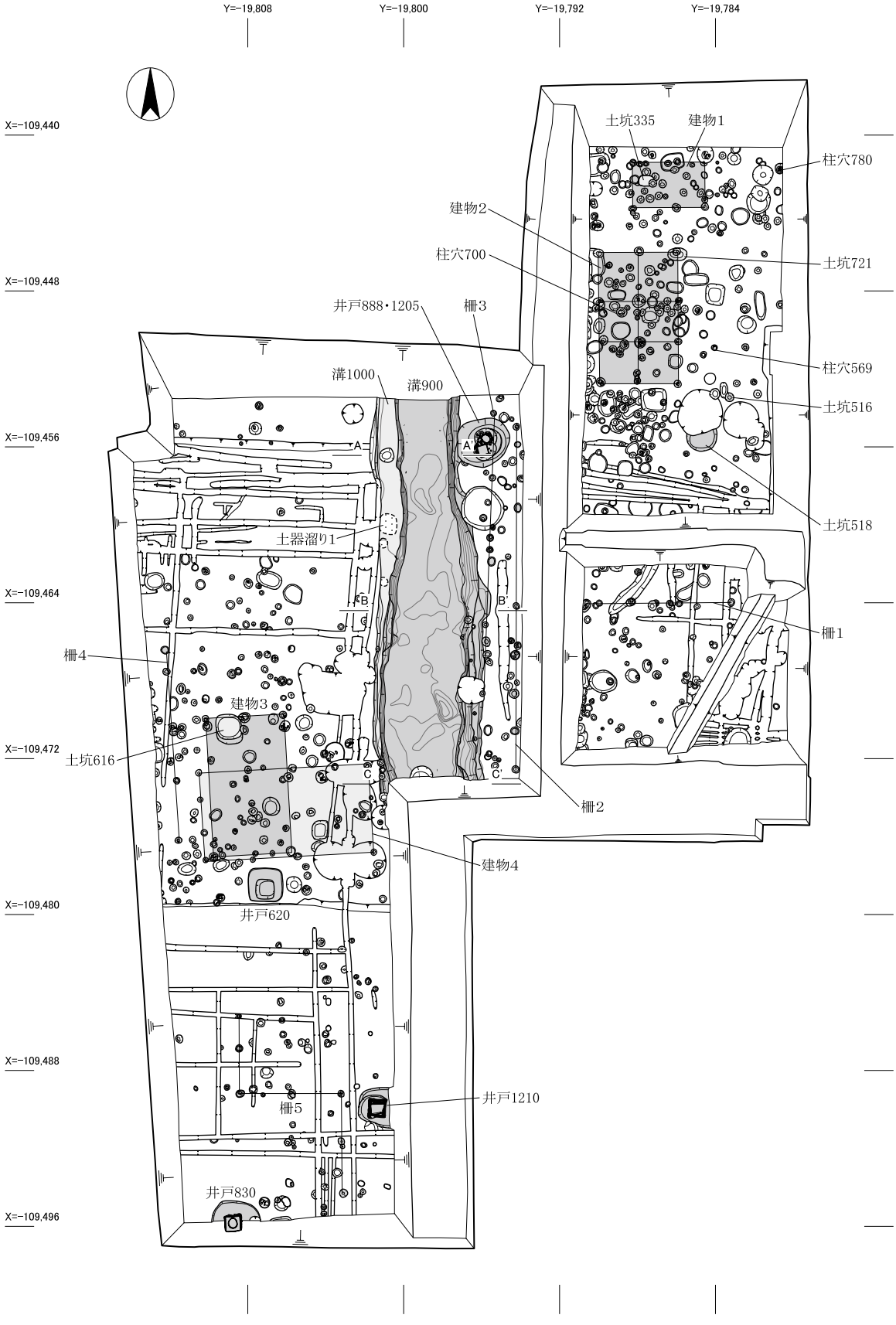

Y=−19,808
Y=−19,800
Y=−19,792
Y=−19,784
X=−109,440
X=−109,448
X=−109,456
X=−109,464
X=−109,472
X=−109,480
X=−109,488
X=−109,496
北調査区
木の根
南調査区
植物塊2
植物塊1
0
10m

第３面平面図（１：300）

図版２　遺構

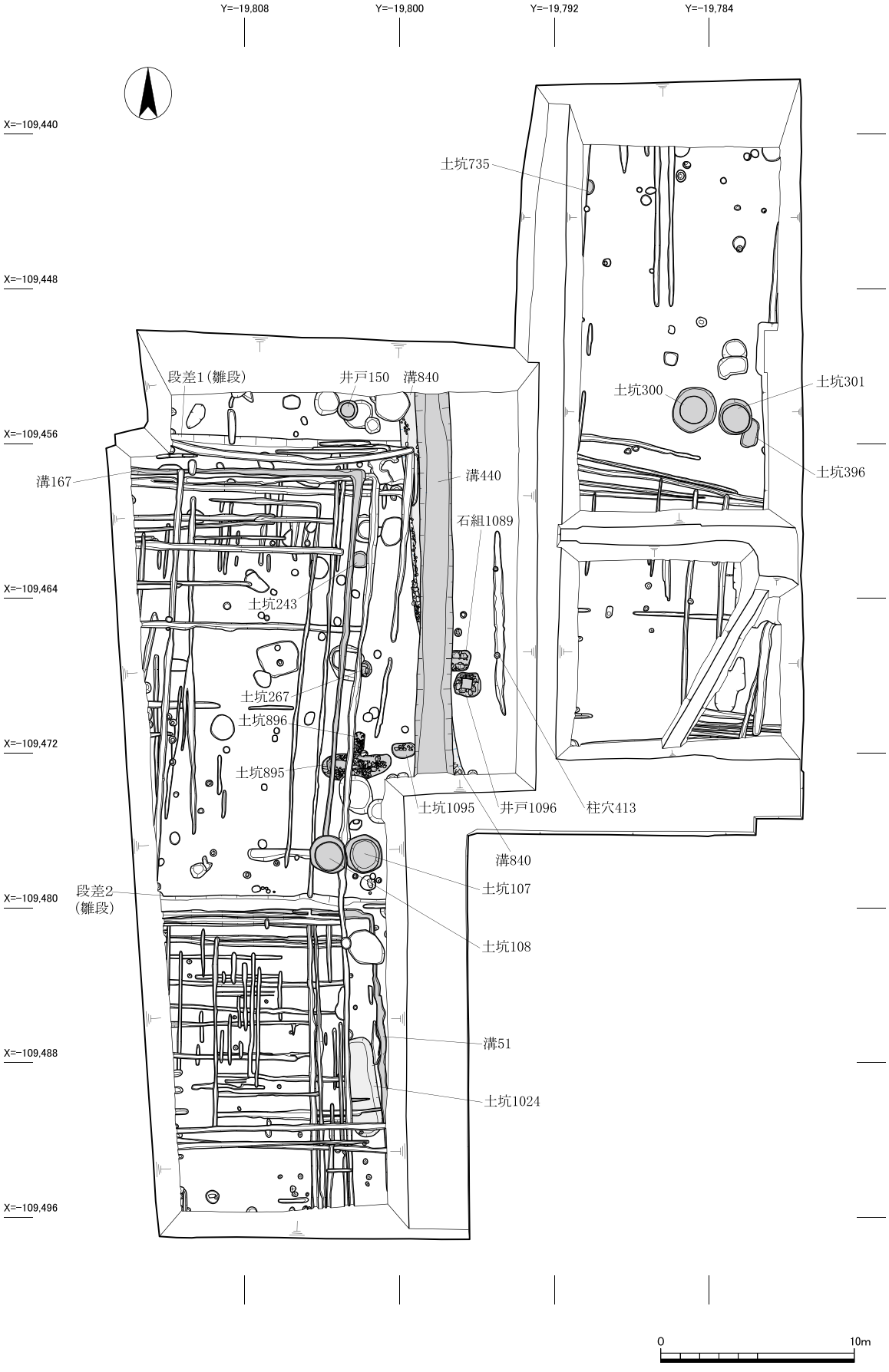


第２面平面図（１：300）

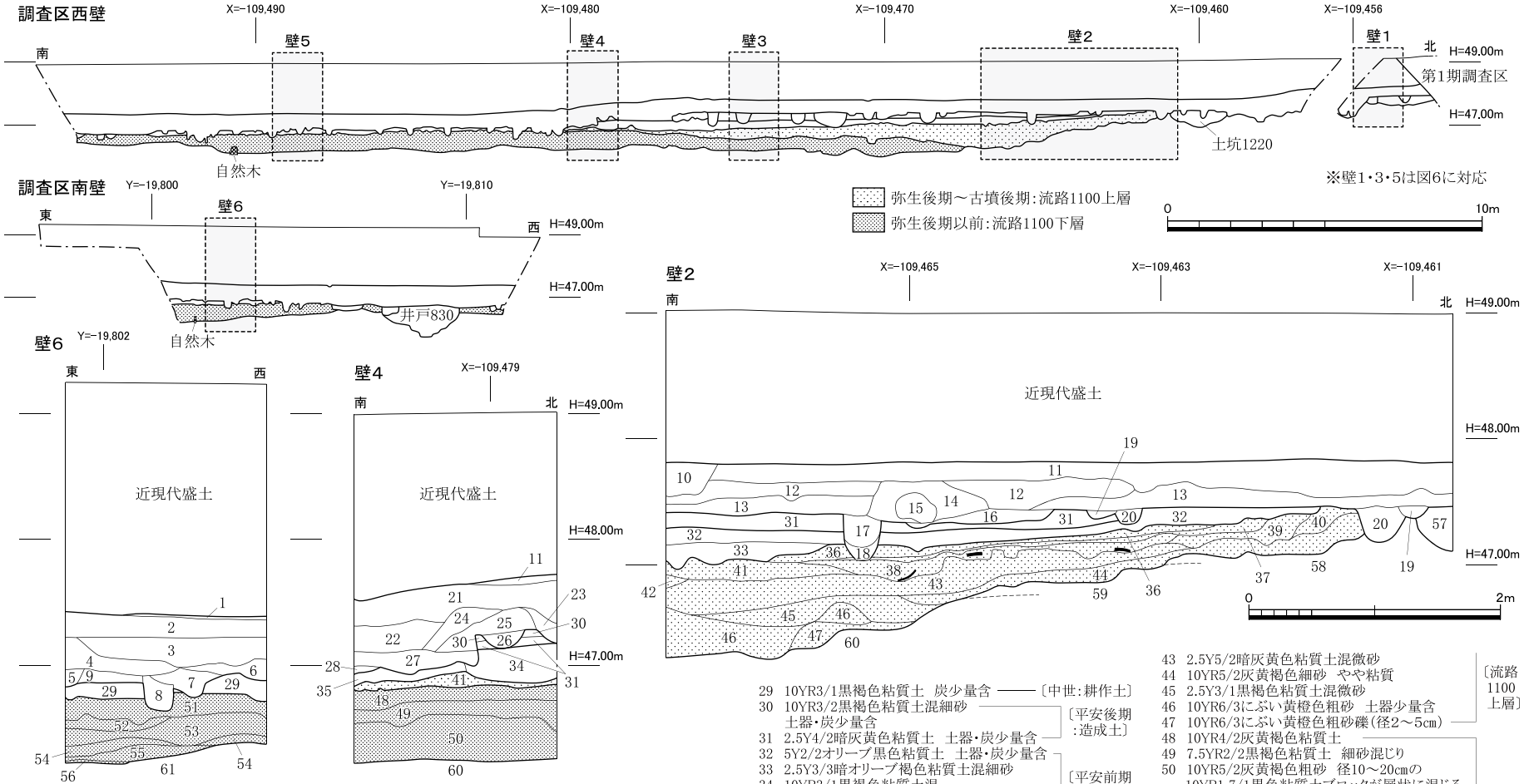


※A−A'・B−B'は図版15、C−C'は図13に対応

第１面２期平面図（１：300）



第1面1期平面図（1：300）



1 5Y4/2灰オリーブ色粘質土
2 2.5Y4/2暗灰黄色砂質土 粘性あり
3 7.5Y4/1灰色粘質土混2.5Y7/3浅黄色粗砂
4 2.5Y4/4オリーブ褐色粘質土 シルト混じり
5 2.5Y4/2暗灰黄色砂質土混粗砂
6 5Y3/2オリーブ黒色砂質土混微砂
7 10YR4/1褐灰色粘質土混粗砂
8 2.5Y4/1黄灰色粘質土
9 2.5Y4/4オリーブ褐色砂質土 やや粘質
10 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土 粗砂含
11 2.5Y5/3黄褐色砂質土 粗砂含
12 7.5Y4/1灰色砂質土 やや粘性
13 2.5Y4/4オリーブ褐色砂質土 粘性強
14 5Y4/1灰色粘質土と細砂・粗砂の互層
15 2.5Y5/6黄褐色粗砂
〔江戸:耕作土〕
〔江戸:畦畔〕

16 2.5Y4/3オリーブ褐色砂質土
17 5Y3/1オリーブ黒色粘質土混粗砂
18 2.5Y4/1黄灰色粘質土 細砂少量含
19 2.5Y4/1黄灰色砂質土
20 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土 微砂少量含
21 5Y3/2オリーブ黒色砂質土 細砂少量含
22 5Y4/1灰色シルト混2.5Y6/1灰色粗砂
23 2.5Y4/2暗灰黄色砂質土 やや粘質、粗砂含
24 10YR4/2灰黄褐色砂質土
25 2.5Y5/1黄灰色砂質土と
2.5Y7/3浅黄色粗砂の互層
26 10YR3/1黒褐色砂質土混微砂
27 2.5Y3/2黒褐色砂質土と
2.5Y6/3にぶい黄色粗砂の互層
28 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土混細砂
〔江戸:耕作土〕
〔江戸:畦畔〕
〔江戸:耕作土〕

29 10YR3/1黒褐色粘質土 炭少量含
30 10YR3/2黒褐色粘質土混細砂
土器・炭少量含
31 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土 土器・炭少量含
32 5Y2/2オリーブ黒色粘質土 土器・炭少量含
33 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質土混細砂
34 10YR3/1黒褐色粘質土混
10YR8/2灰白色細砂ブロック(径1～2cm)
35 2.5Y3/1黒褐色粘質土
シルト～細砂・土器・瓦少量含
36 10YR2/1黒色粘質土 微砂・土器・炭少量含
37 2.5Y3/1黒褐色粘質土 炭含、細砂～粗砂少量含
38 2.5Y5/1黄灰色粘質土(シルト質)と
2.5Y6/4にぶい黄色粗砂の互層 土器少量含
39 10YR4/1褐灰色粘質土 径3～5cmの10YR2/3
黒褐色シルトブロック・土器少量含
40 5Y5/2暗灰黄色粘質土混微砂
41 2.5Y3/1黒褐色粘質土
微砂・木片・炭少量含、腐植質
42 10YR2/3黒褐色粘質土
10YR8/1灰白色細砂と2.5Y5/4黄褐色粗砂が
葉脈状に所々混じる、腐植質
〔中世:耕作土〕
〔平安後期:造成土〕
〔平安前期以前:包含層〕
〔流路1100上層〕

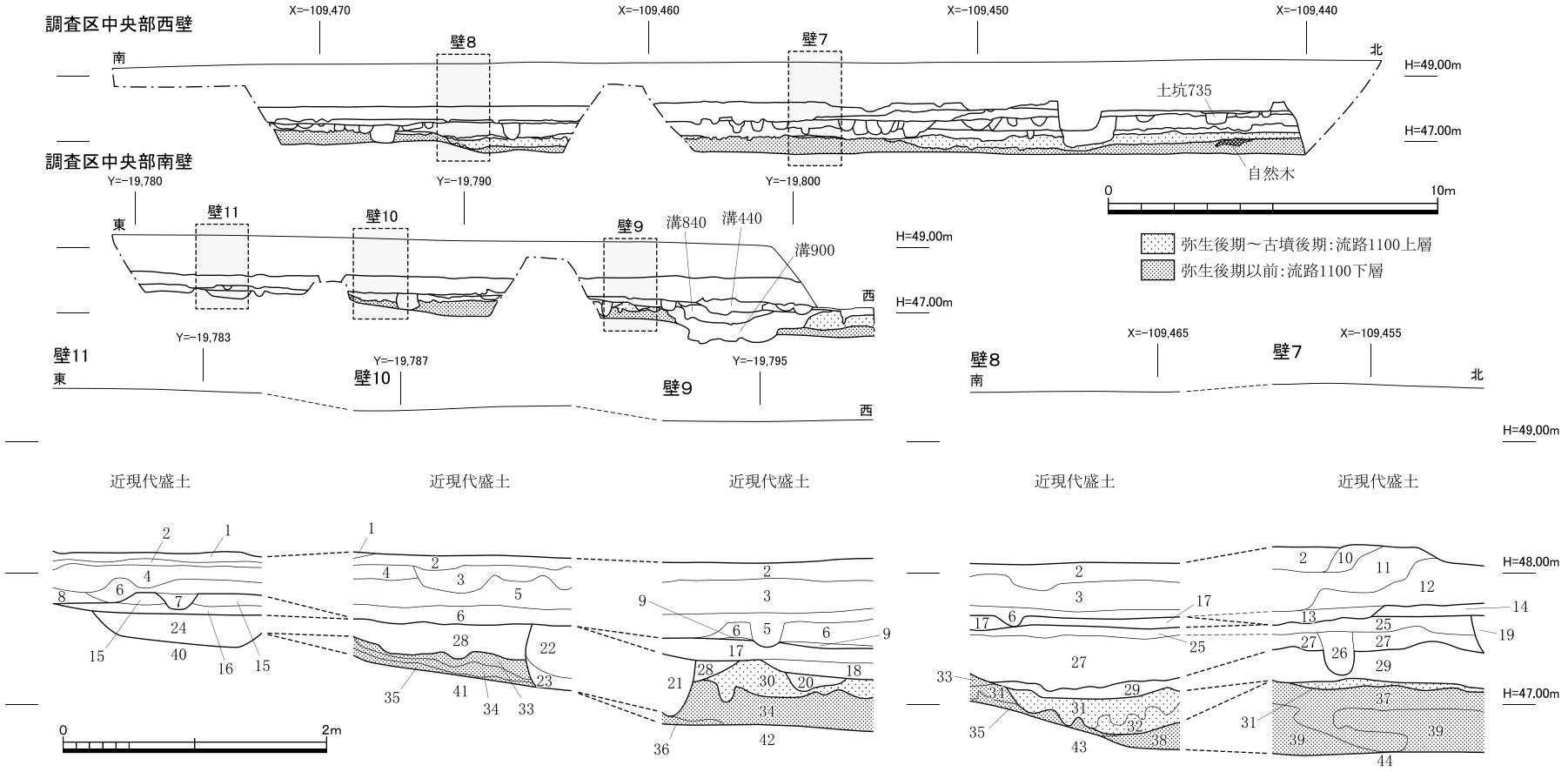
43 2.5Y5/2暗灰黄色粘質土混微砂
44 10YR5/2灰黄褐色細砂 やや粘質
45 2.5Y3/1黒褐色粘質土混微砂
46 10YR6/3にぶい黄橙色粗砂 土器少量含
47 10YR6/3にぶい黄橙色粗砂礫(径2～5cm)
48 10YR4/2灰黄褐色粘質土
49 7.5YR2/2黒褐色粘質土 細砂混じり
50 10YR5/2灰黄褐色粗砂 径10～20cmの
10YR1.7/1黒色粘質土ブロックが層状に混じる
51 7.5YR3/2黒褐色粘質土 炭少量含
52 7.5YR2/1黒色粘質土混シルト
53 10YR2/1黒色粘土
54 10YR2/1黒色粘土
混10YR5/6黄褐色微砂ブロック(径5～10cm)
55 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質土 腐植土
56 5Y3/2オリーブ黒色粘質土
シルト少量含、腐植土
57 7.5YR3/1黒褐色粘質土
粘性強、炭少量含
58 5Y7/2灰白色微砂
59 2.5Y7/3浅黄色細砂
60 5BG6/1緑灰色粗砂礫(径1～10cm)
61 2.5GY7/1明オリーブ灰色粗砂
径1～3cmの礫含
〔流路1100下層〕
〔弥生以前？:風倒木、土坑1220〕
〔流路1100底面形成層〕

調査区西壁・南壁断面図（1：200、1：50）

図版5 遺構

図版の 遺構

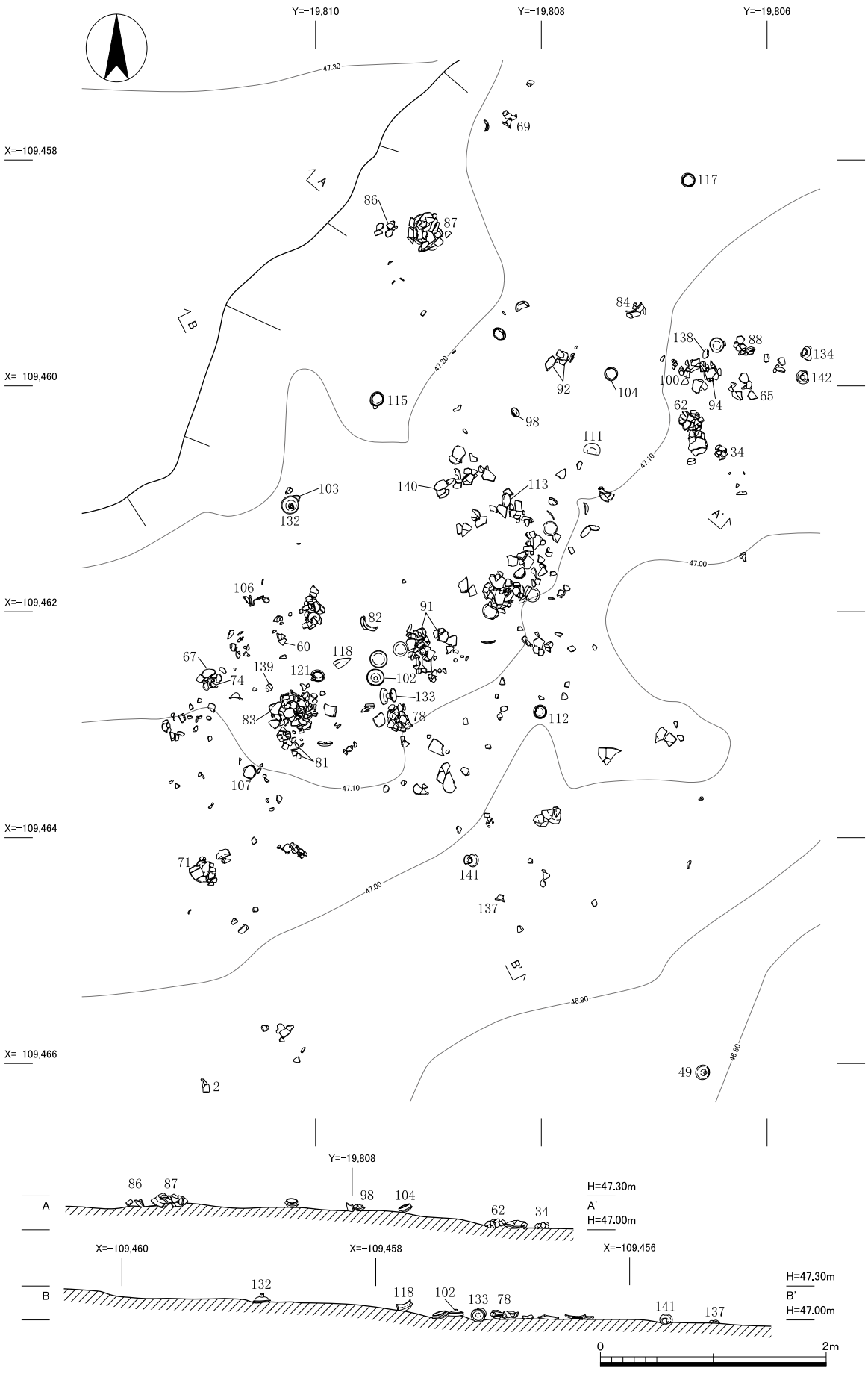
調査区中央部西壁・中央部南壁断面図（1：200、1：50）



1　2.5Y4/1黄灰色粘質土混細砂
2　5Y4/2灰オリーブ色粘質土
3　5Y3/2オリーブ黒色粘質土混細砂
4　2.5Y4/2暗灰黄色砂質土　粘性あり
5　2.5Y4/3オリーブ褐色粘質土
　と2.5Y7/3浅黄色粗砂の互層
6　2.5Y4/3オリーブ褐色粘質土混粗砂
7　5Y5/2灰オリーブ色砂質土
8　2.5Y5/2暗灰黄色砂質土　やや粘質、細砂少量含
9　2.5Y8/1灰白色粗砂
10　10YR4/1褐灰色砂質土　粘性あり、粗砂含
11　2.5Y7/4浅黄色粗砂礫（径1～2cm）
　混2.5Y3/2黒褐色粘質土
12　2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土混粗砂
13　2.5Y4/4オリーブ褐色砂質土
14　2.5Y3/1黒褐色砂質土　〔江戸：耕作土〕〔室町以降：耕作土〕

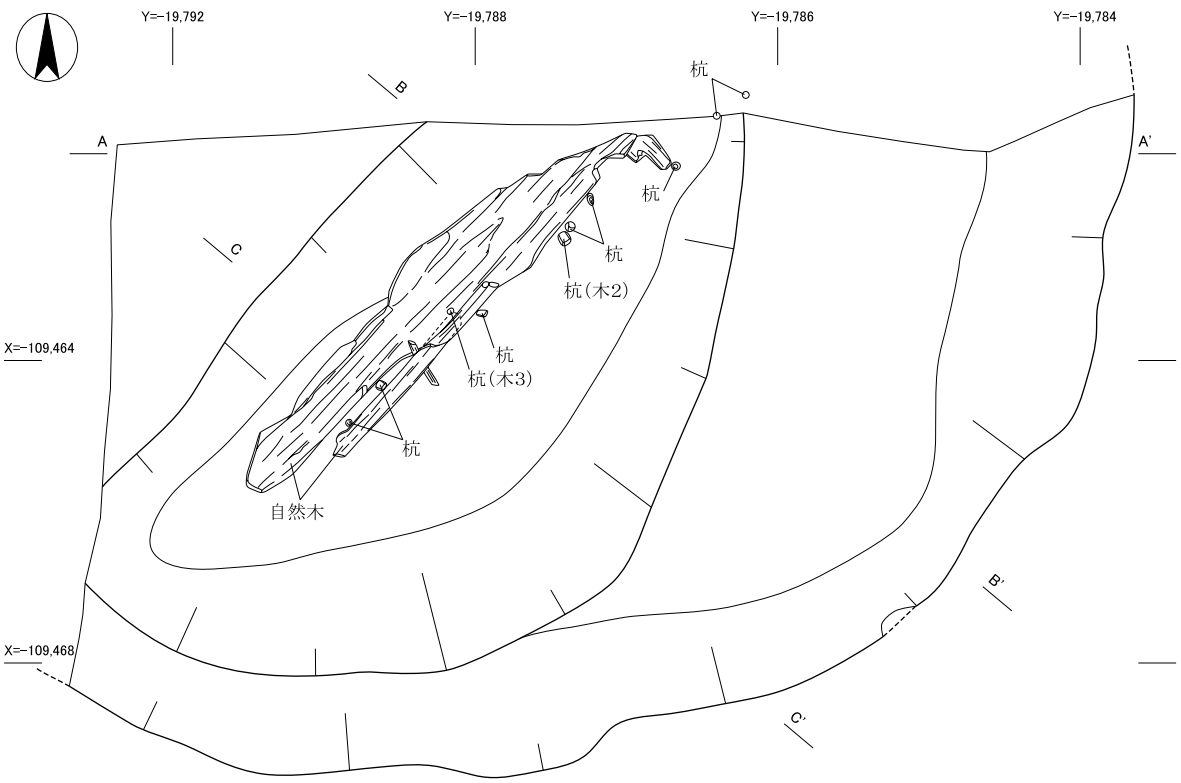
15　2.5Y5/3黄褐色粗砂
16　2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土　粘性あり　〔中世：耕作土〕
17　10YR3/2黒褐色粘質土　土器少量含
18　2.5Y3/2黒褐色砂質土混細砂　土器少量含　〔鎌倉前期：造成土〕
19　2.5Y3/2黒褐色粘質土混微砂　土器・炭少量含
20　2.5Y3/1黒褐色粘質土混微砂　土器少量含
21　5Y3/1オリーブ黒色粘質土　細砂・土器少量含
22　2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質土混細砂
　土器・炭少量含
23　2.5Y5/1黄灰色粘質土　炭少量含
24　2.5Y4/4オリーブ褐色砂質土　土器少量含　〔平安後期：遺構〕
25　10YR3/2黒褐色粘質土　細砂・土器・炭少量含　〔平安後期：造成土〕
26　2.5Y3/1黒褐色粘質土　微砂・土器・炭少量含　〔平安後期：柱穴？〕
27　10YR2/2黒褐色粘質土混粗砂　土器・瓦少量含　〔平安後期：造成土〕
28　10YR3/2黒褐色砂質土　土器・炭少量含
29　2.5Y2/1黒色粘質土　〔平安前期以前：包含層〕

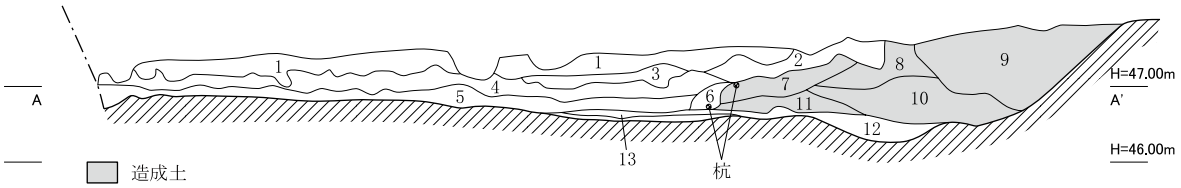
30　10YR2/2黒褐色粘質土　土器少量含
31　10YR8/6黄橙色粗砂と
　2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質土の互層　〔流路1100上層〕
32　10YR3/2黒褐色粘質土　木片含、土器少量含、腐植土
33　10YR4/1褐灰色粘土　粗砂少量含
34　10YR4/1褐灰色粘土
35　10YR4/1褐灰色粘土混7.5GY7/1明緑灰色細砂～粘土
36　10YR4/1褐灰色粘土
　5BG7/1明青灰色粘土・2.5Y7/4浅黄色シルトブロック含　〔流路1100下層〕
37　5Y8/3淡黄色微砂に
　2.5Y2/1黒色細砂が葉脈状に多く混じる
38　5Y8/1灰白色粗砂混10YR3/2黒褐色粘質土
39　2.5Y8/1灰白色細砂と2.5Y2/1黒色細砂の互層
40　2.5Y6/4にぶい黄色粗砂
41　10Y5/1灰色粘土
42　2.5GY5/1オリーブ灰色粗砂礫（径1～5cm）　〔流路1100底面形成層〕
43　7.5GY7/1明緑灰色細砂～粘土
44　5Y8/1灰白色粗砂

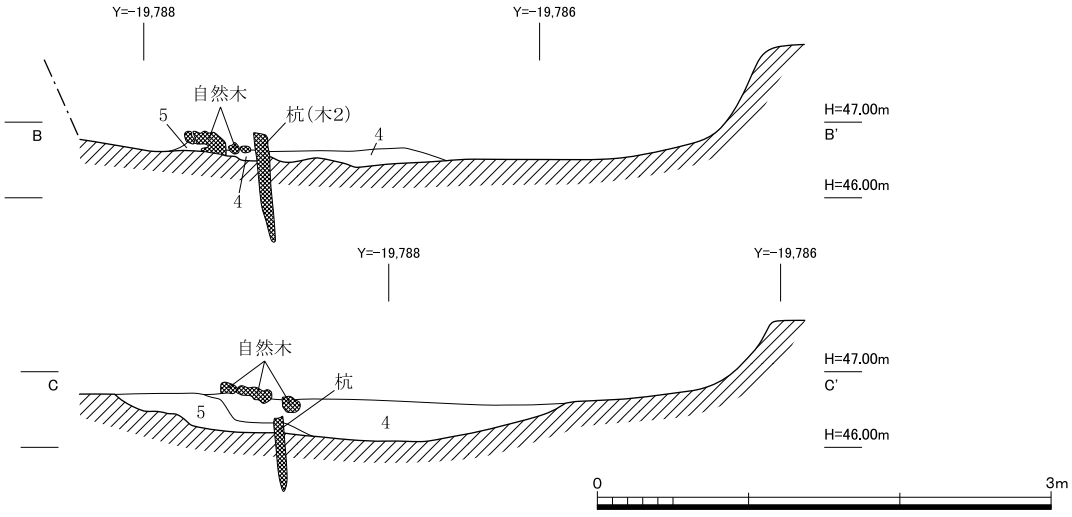


流路1100西岸遺物出土状況図（１：50）

図版8 遺構

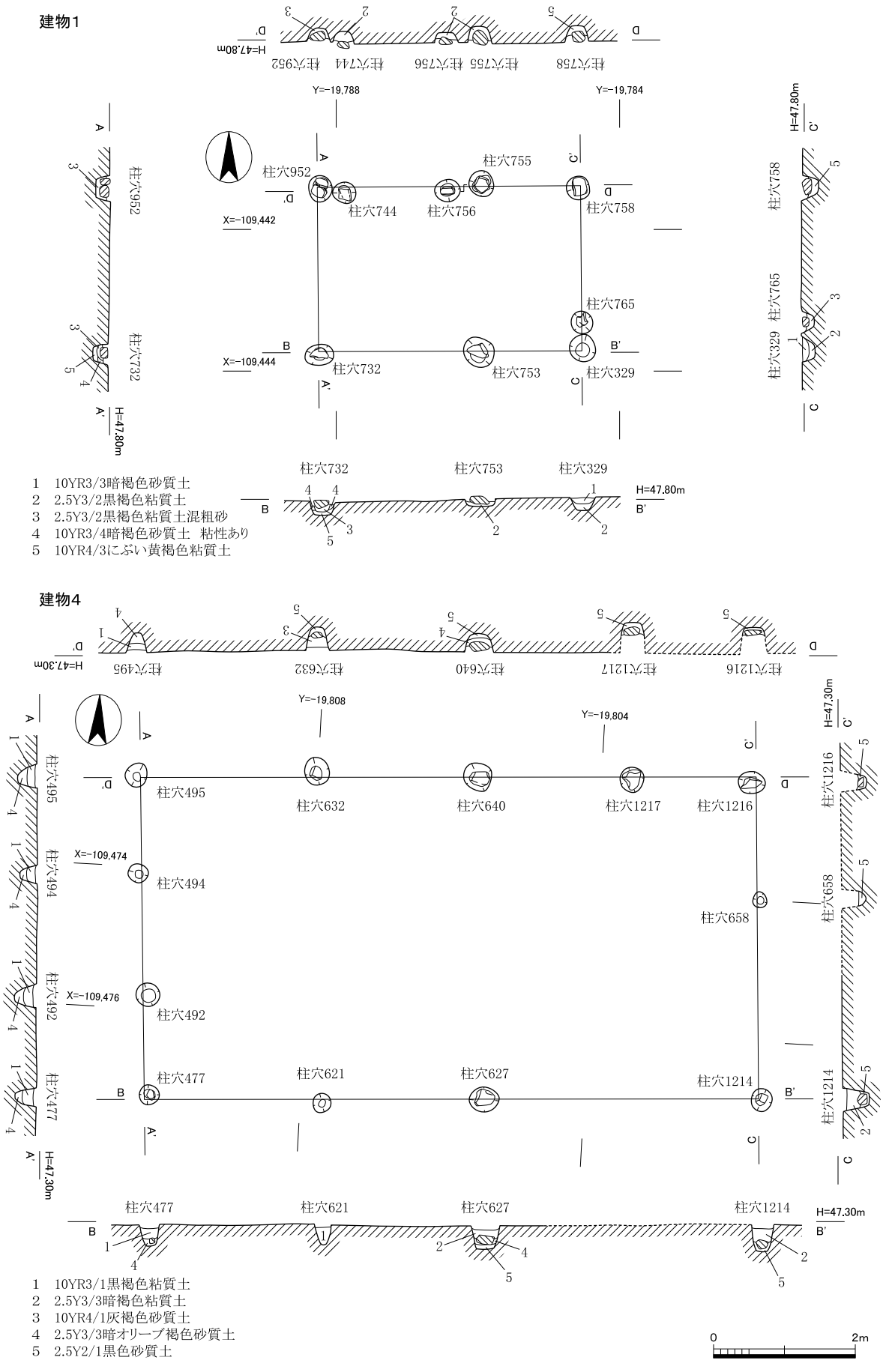




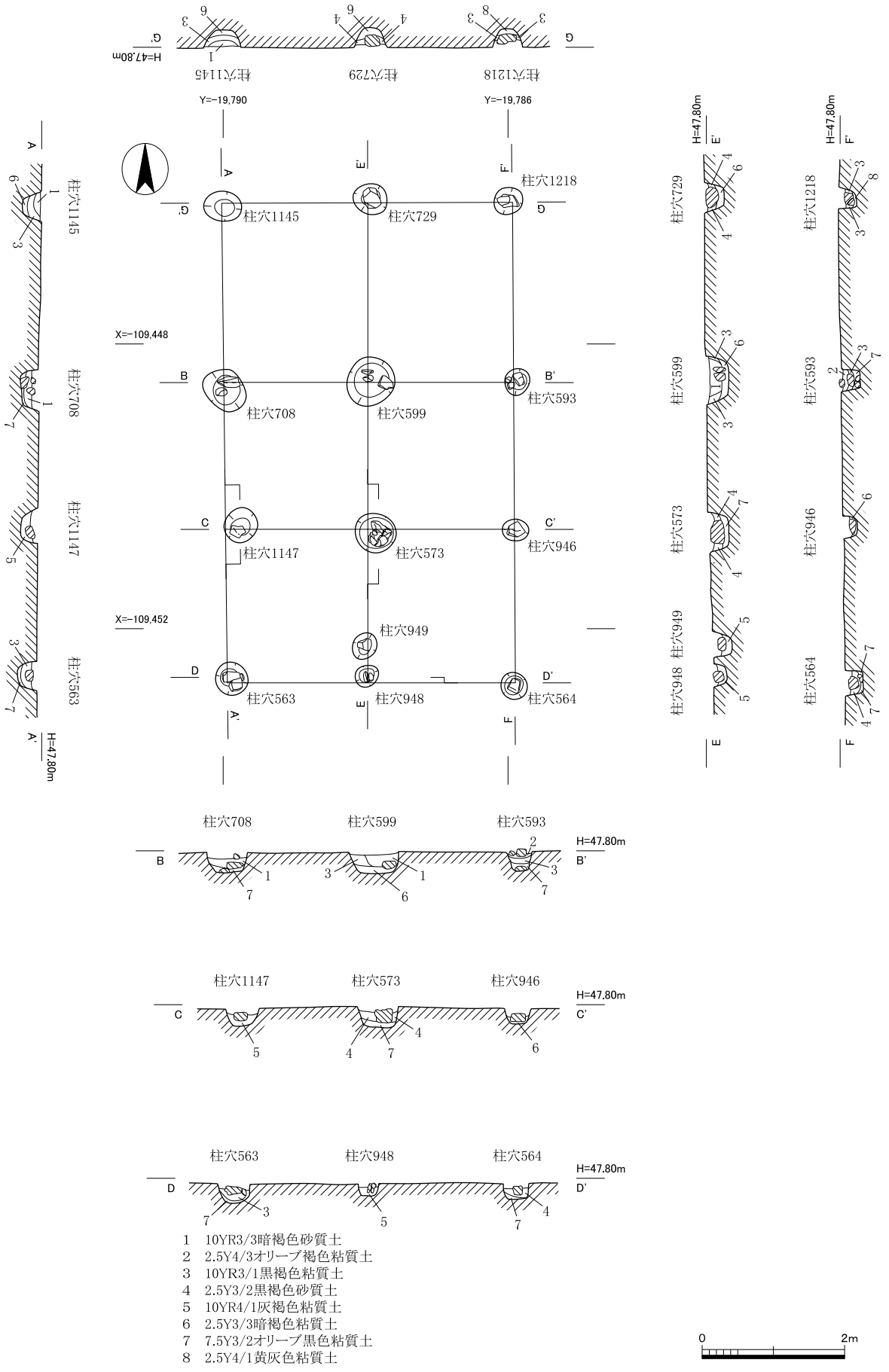


1　10YR8/6黄橙色粗砂と7.5YR3/2黒褐色粘質土(粗砂混じり)の互層　土器多量含
2　5Y2/1黒色粘質土　粗砂混じり、径1～2㎝の礫・土器少量含
3　2.5Y4/3オリーブ褐色細砂～粗砂
4　10YR1.7/1黒色粘質土　土壌化
5　10YR3/2黒褐色粘質土　腐植土、木片含、土器微量含
6　7.5YR3/1黒褐色粘質土混2.5Y7/3浅黄色粗砂
7　5YR3/1黒褐色粘質土　粗砂含
8　10YR5/2灰黄褐色粘質土　粗砂少量含
9　2.5Y4/3オリーブ褐色粘質土混粗砂礫(径1～3㎝)
10　10YR3/3暗褐色粘質土　細砂混じり
12　5YR2/1黒褐色粘質土　腐植土
13　10YR2/3黒褐色粘質土　腐植土

護岸1215実測図（１：50）


建物1
柱穴952
柱穴744
柱穴755
柱穴756
柱穴758
柱穴765
柱穴732
柱穴753
柱穴329
Y=−19,788
Y=−19,784
X=−109,442
X=−109,444
H=47.80m
1　10YR3/3暗褐色砂質土
2　2.5Y3/2黒褐色粘質土
3　2.5Y3/2黒褐色粘質土混粗砂
4　10YR3/4暗褐色砂質土　粘性あり
5　10YR4/3にぶい黄褐色粘質土
建物4
柱穴495
柱穴632
柱穴640
柱穴1217
柱穴1216
柱穴494
柱穴658
柱穴492
柱穴477
柱穴621
柱穴627
柱穴1214
Y=−19,808
Y=−19,804
X=−109,474
X=−109,476
H=47.30m
1　10YR3/1黒褐色粘質土
2　2.5Y3/3暗褐色粘質土
3　10YR4/1灰褐色砂質土
4　2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土
5　2.5Y2/1黒色砂質土
0
2m

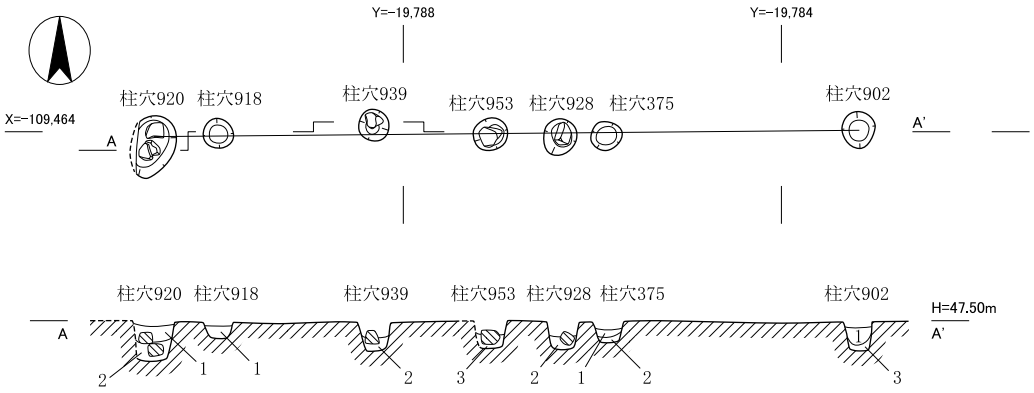
建物１・４実測図（１：80）



1　10YR3/3暗褐色砂質土
2　2.5Y4/3オリーブ褐色粘質土
3　10YR3/1黒褐色粘質土
4　2.5Y3/2黒褐色砂質土
5　10YR4/1灰褐色粘質土
6　2.5Y3/3暗褐色粘質土
7　7.5Y3/2オリーブ黒色粘質土
8　2.5Y4/1黄灰色粘質土

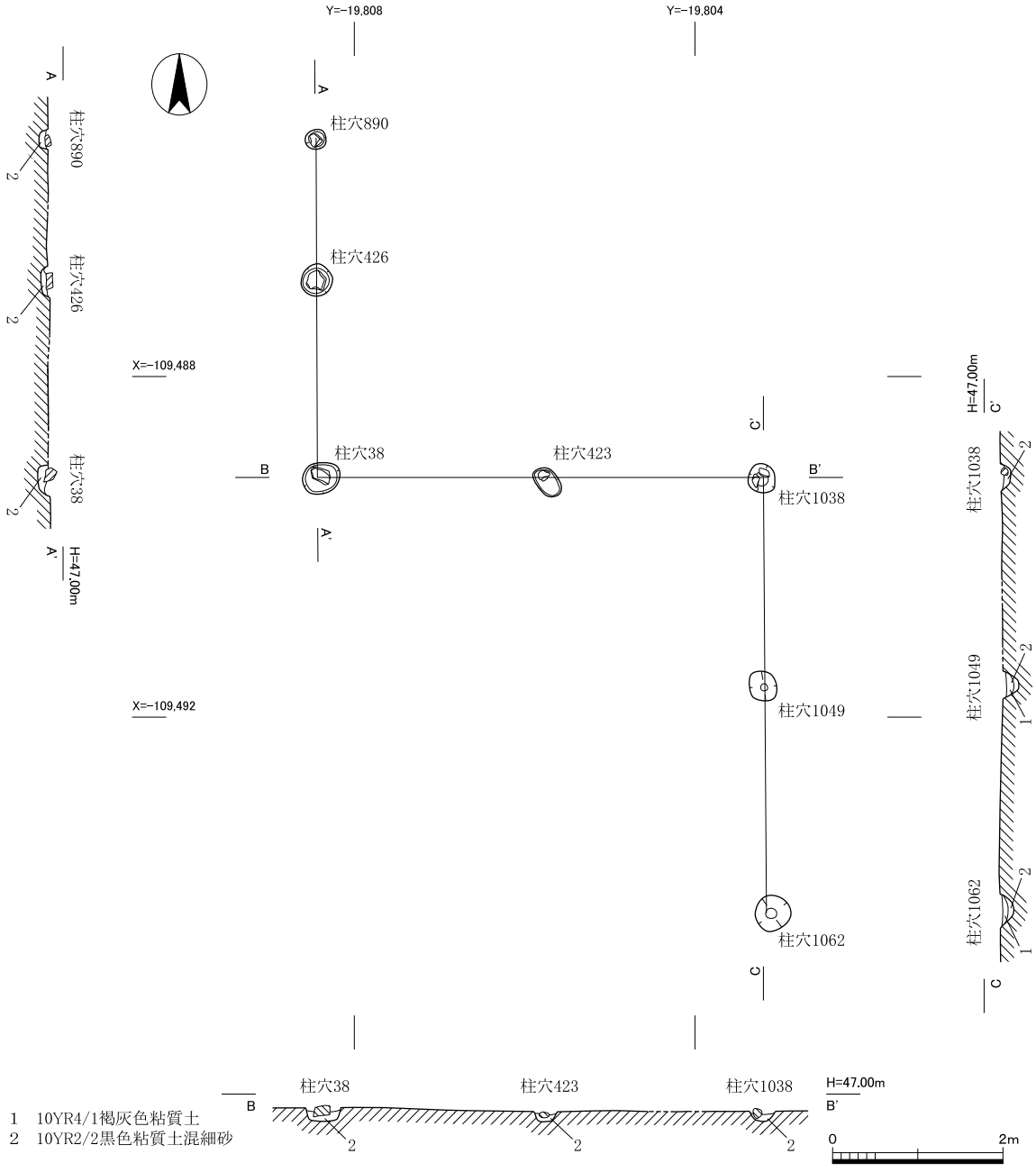
建物２実測図（１：80）

柵1



1　2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土　粘性あり
2　10YR4/2灰黄褐色粘質土
3　10YR3/3暗褐色粘質土

柵5

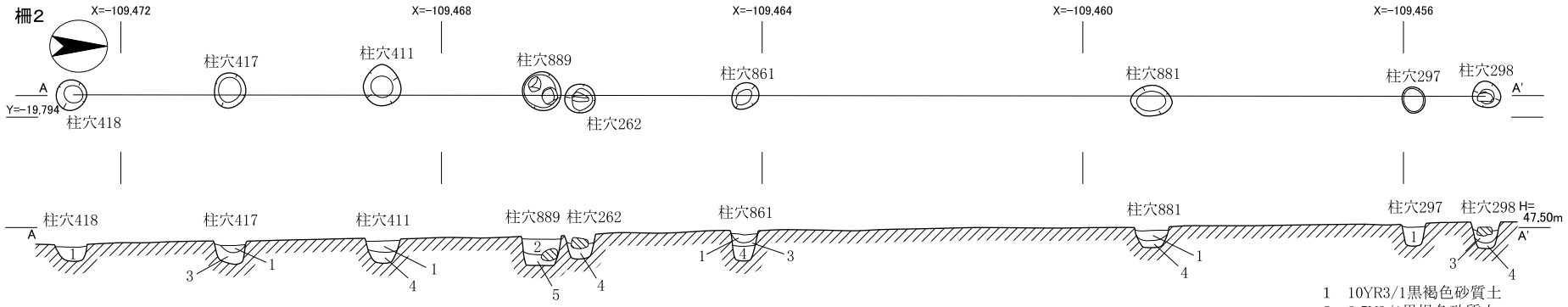


1　10YR4/1褐灰色粘質土
2　10YR2/2黒色粘質土混細砂

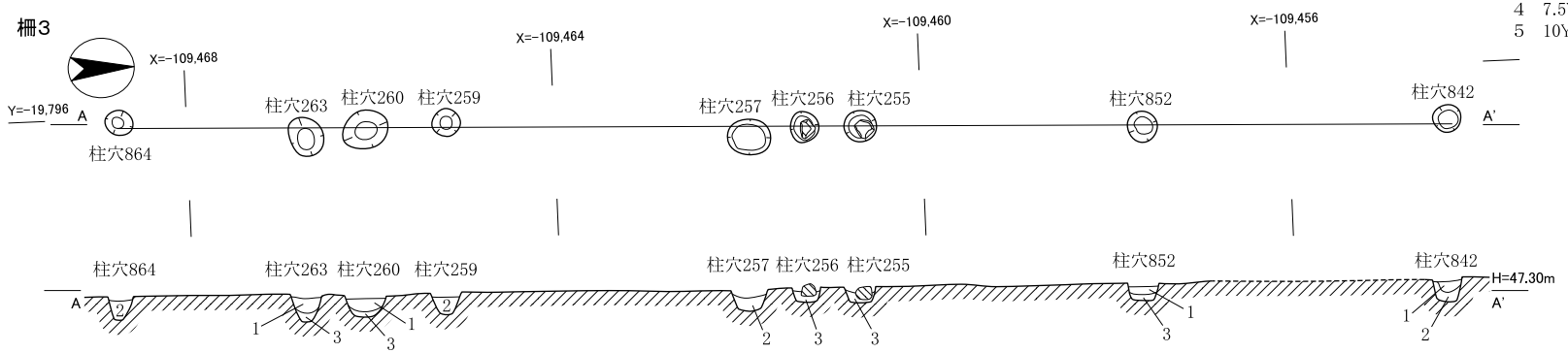
柵1・5実測図（1：80）

柵２～４実測図（１：80）

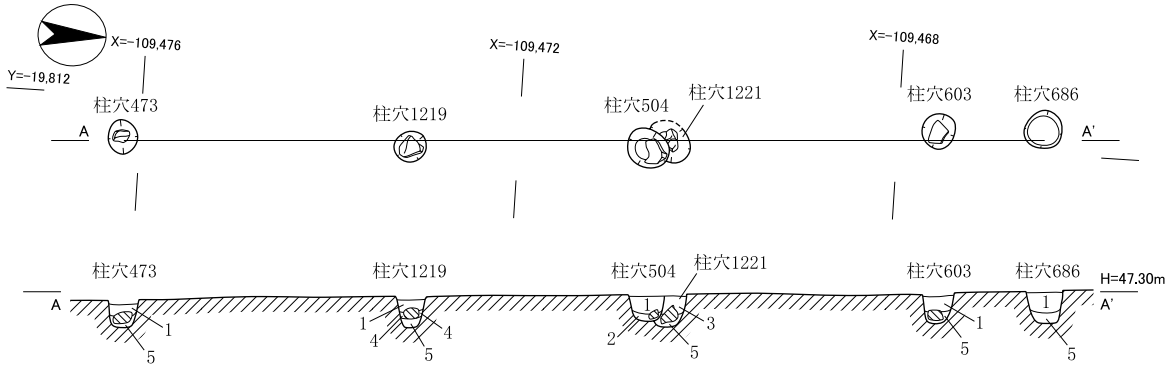
柵2



柵3



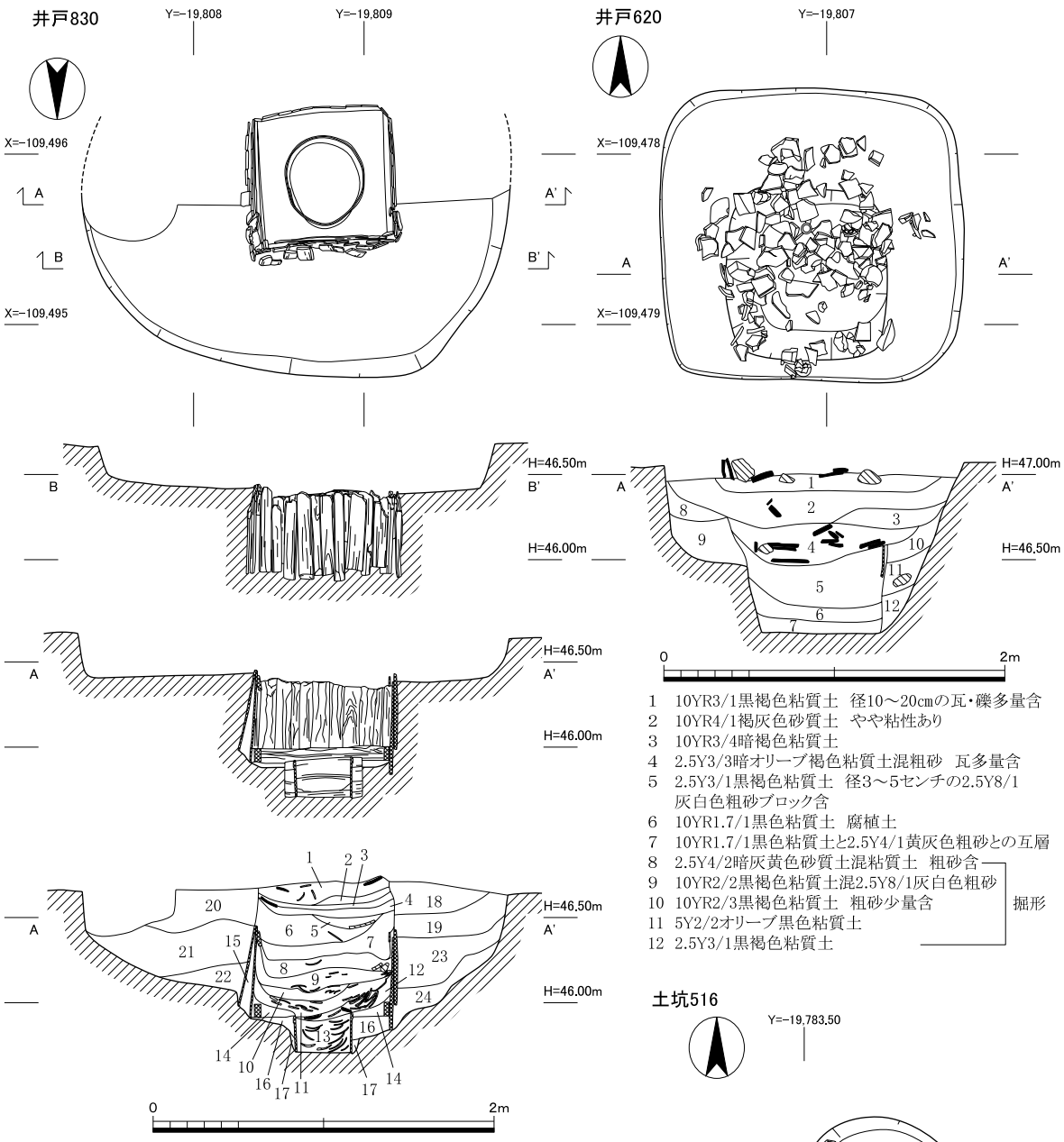
柵4



1　10YR3/1黒褐色砂質土
2　2.5Y3/1黒褐色砂質土
3　2.5Y3/2暗オリーブ褐色粘質土
4　7.5Y3/2オリーブ黒色粘質土
5　10YR4/3にぶい黄褐色粘質土

1　10YR3/1黒褐色粘質土
2　10YR3/4暗褐色粘質土
3　2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質土

1　10YR3/2黒褐色砂質土
2　10YR3/3暗褐色砂質土
3　2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土
4　10YR3/1黒褐色粘質土
5　2.5Y2/1黒色砂質土



1 10YR3/1黒褐色粘質土 径10～20cmの瓦・礫多量含
2 10YR4/1褐灰色砂質土 やや粘性あり
3 10YR3/4暗褐色粘質土
4 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質土混粗砂 瓦多量含
5 2.5Y3/1黒褐色粘質土 径3～5センチの2.5Y8/1灰白色粗砂ブロック含
6 10YR1.7/1黒色粘質土 腐植土
7 10YR1.7/1黒色粘質土と2.5Y4/1黄灰色粗砂との互層
8 2.5Y4/2暗灰黄色砂質土混粘質土 粗砂含
9 10YR2/2黒褐色粘質土混2.5Y8/1灰白色粗砂
10 10YR2/3黒褐色粘質土 粗砂少量含
11 5Y2/2オリーブ黒色粘質土
12 2.5Y3/1黒褐色粘質土

掘形

1 2.5Y4/1黄灰色砂質土 粘性あり、瓦・土器少量含
2 2.5Y2/1黒色粘質土 炭少量含
3 N1.5/0黒色粘質土 炭層
4 2.5Y6/1黄灰色粗砂
5 5Y6/1灰色粘質土
6 7.5Y7/1灰白色粘土混2.5Y5/1黄灰色粘質土混2.5Y3/2黒褐色粘質土(粗砂混じり)
7 7.5Y7/1灰白色粘土混シルト 径1～2cmの2.5GY8/1灰白色粘土ブロック少量含
8 10YR2/1黒色粘質土 シルト質、炭含
9 5Y2/2オリーブ黒色粘質土 細砂混じり、木片・土器含、腐植土
10 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質土 細砂少量含、木片含、腐植土
11 10YR3/1黒褐色粘質土 土器・木片・箸多量含、腐植化
12 10YR4/1褐灰色粘質土 土器多量含、木片含、腐植化
13 2.5Y3/1黒褐色粘質土 土器多量含、腐植化
14 2.5Y3/2黒褐色粘質土 木片・粗砂含、腐植化
15 7.5Y2/1黒色粘質土 細砂～粗砂少量含
16 5Y7/1灰白色細砂と10YR2/2黒褐色粘質土の互層
17 5Y8/1灰白色粗砂礫(径1～3cm)

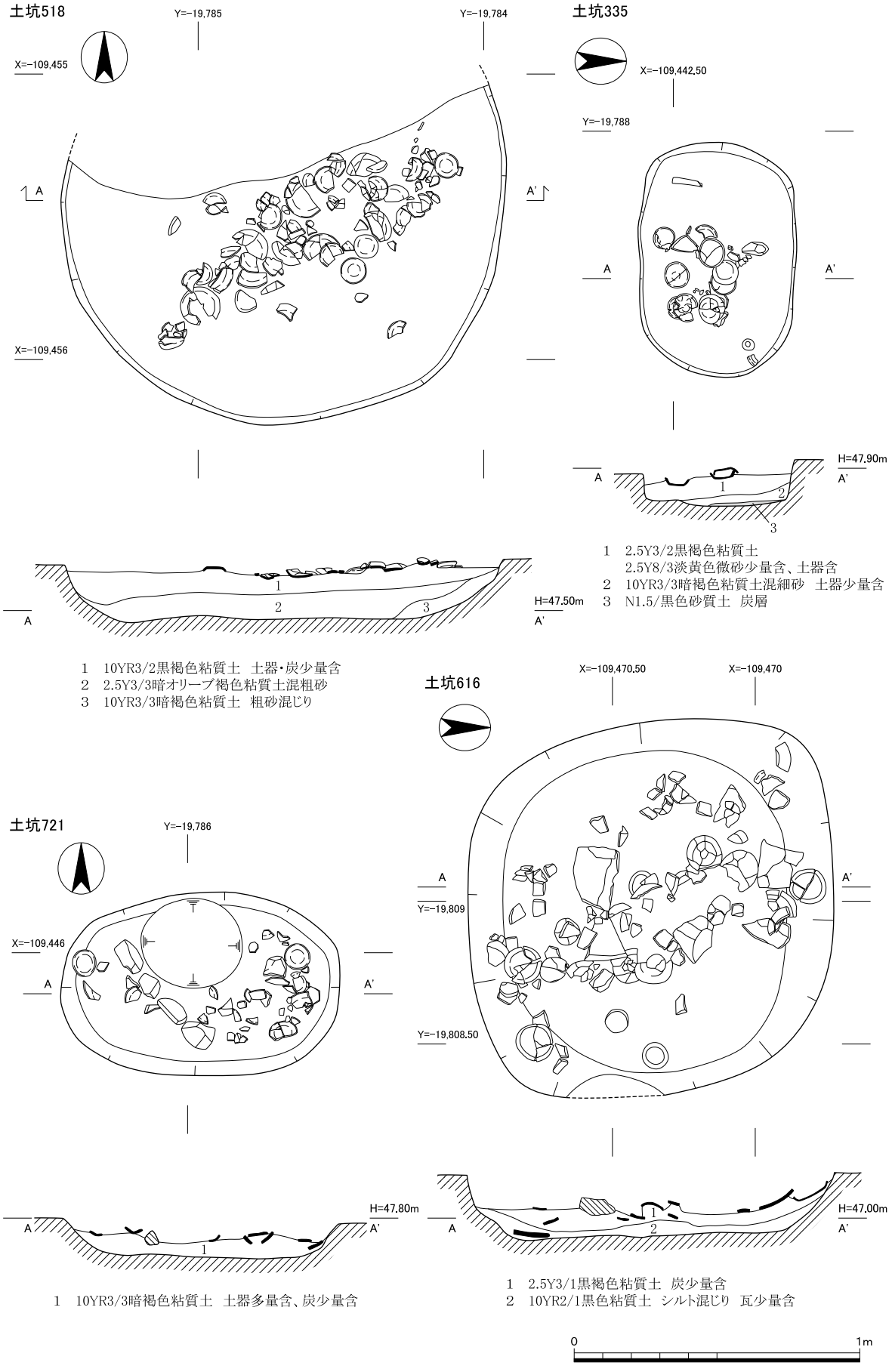
曲物掘形

18 5Y7/1灰白色粗砂 径1～2cmの礫少量含、径10～15cmの2.5Y4/1黄灰色粘質土ブロック含
19 10YR8/1灰白色粗砂礫(径1～3cm) 径2～5cmの2.5Y4/1黄灰色粘質土ブロック含
20 2.5Y3/2黒褐色粘質土 粗砂含
21 10YR2/2黒褐色粘質土混2.5Y8/1灰白色粗砂 径1～2cmの礫・土器少量含
22 5Y8/1灰白色粗砂礫(径1cm) 径1～5cmの10YR2/2黒褐色粘質土ブロック含
23 7.5Y6/1灰色細砂～粗砂礫(径1～2cm) 径2～5cmの10YR3/2黒褐色粘質土ブロック少量含
24 2.5GY6/1オリーブ灰色細砂 径10～15cmの10YR2/2黒褐色粘質土ブロック多量含

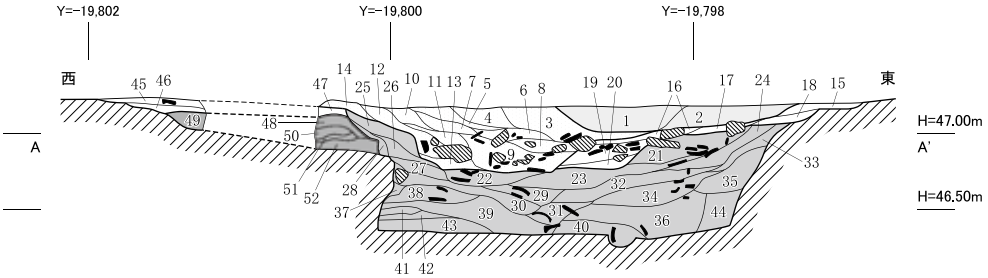
掘形

1 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土
2 10YR4/1褐灰色砂質土

井戸830・620、土坑516実測図（1：20、1：40）



土坑335・518・616・721実測図（1：20）

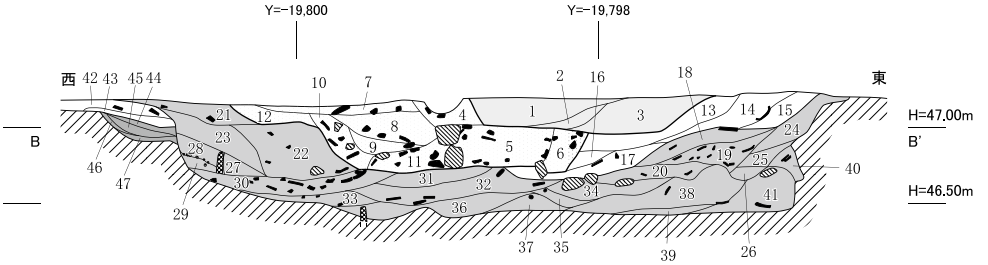


1 5Y3/1オリーブ黒色粘質土
2 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土混微砂
3 2.5Y2/1黒色砂質土 径5～10cmの礫・瓦・土器少量含
4 2.5Y4/2暗灰黄色砂質土混細砂 粘性あり、径10～20cmの礫・瓦少量含
5 5Y3/2オリーブ黒色砂質土 シルト質
6 10YR3/1黒褐色砂質土 粘性あり、瓦・土器少量含
7 10YR4/3にぶい黄褐色粗砂
8 2.5Y3/2黒褐色粗砂混砂質土 径5～10cmの礫含
9 10YR4/2灰黄褐色粗砂礫(径5～20cm) 瓦含
10 10YR3/3暗褐色粗砂
11 2.5Y4/2暗灰黄色粗砂礫(径5～20cm) 瓦多量含
12 10YR3/2黒褐色砂質土混粗砂礫(径5～15cm) 瓦含
13 5Y2/2オリーブ黒色砂質土混細砂～粗砂 やや粘性あり
14 10YR3/3暗褐色砂質土 粗砂少量含、10YR8/8黄橙色細砂ブロック少量含
15 10YR3/3暗褐色砂質土
16 2.5Y3/1黒褐色粘質土 粗砂混じり、瓦含
17 5Y2/2オリーブ黒色粘質土混粗砂
18 2.5Y3/1黒褐色砂質土
19 2.5Y4/1黄灰色粘質土 粗砂含、径10～25cmの礫・瓦多量含
20 2.5Y5/1黄灰色粗砂 径5～10cmの礫・瓦含
21 5Y2/2オリーブ黒色粘質土 瓦含、土器・炭少量含
22 2.5Y7/4淡黄色粗砂と2.5Y4/1黄灰色粘質土(細砂少量含)
23 2.5Y6/4にぶい黄色粗砂 径3～10cmの礫・瓦含
24 5Y3/2オリーブ黒色粗砂
25 10YR3/1黒褐色粘質土 細砂混じり
26 2.5Y2/1黒色砂質土 やや粘質
27 2.5Y8/3淡黄色粗砂 瓦少量含
28 5Y2/2オリーブ黒色砂質土 やや粘質

溝440
溝840
溝840掘形
溝900上層
溝900

29 10YR2/1黒色微砂～シルト混10YR8/2灰白色粗砂木片多量含、腐植土
30 2.5Y3/1黒褐色シルト 木片少量含
31 2.5Y8/1灰白色粗砂
32 10YR4/3にぶい黄褐色粗砂 径2～5cmの礫・瓦含
33 2.5Y3/2黒褐色粗砂
34 2.5Y4/1黄灰色粘質土混粗砂～微砂 瓦多量含
35 10YR3/1黒褐色粘質土混細砂 炭少量含
36 2.5Y3/1黒褐色粘質土 粗砂含
37 2.5Y8/2灰白色細砂と2.5Y3/3暗オリーブ褐色微砂(粘性弱)の互層
38 2.5Y4/1黄灰色粘質土と2.5Y8/2灰白色細砂の互層 瓦多量含、木片少量含
39 2.5Y7/2灰黄色粗砂～細砂 瓦含
40 2.5Y7/4浅黄色粗砂 瓦含
41 2.5Y6/4灰黄色粗砂
42 2.5Y2/1黒色粘質土〔崩落土〕
43 2.5Y8/1灰白色粗砂礫(径1～3cm) 瓦少量含
44 2.5Y5/2暗灰黄色粗砂 瓦少量含
45 10YR3/3暗褐色砂質土 粘性あり、瓦多量含
46 10YR4/2灰黄褐色粗砂混10R4/1褐灰色粘質土
47 2.5Y3/1黒褐色粘質土
48 2.5Y4/4オリーブ褐色粗砂 2.5Y2/1黒色粘質土が層状に混じる
49 10YR3/1黒褐色粘質土 粘性強い、炭・土器少量含
50 5Y3/1オリーブ黒色粘質土
51 7.5Y6/1灰色粘土 シルトが層状に少し混じる
52 2.5Y2/1黒色粘質土 7.5Y6/1灰色粘土がマーブル状に混じる

溝900
平安後期造成土
溝1000



1 5Y4/1灰色粘質土
2 2.5Y4/1黄灰色砂質土
3 10YR3/2黒褐色粘質土混微砂
4 10YR6/3にぶい黄橙色粗砂 瓦少量含
5 10YR4/4褐色粗砂礫(径1～10cm)瓦・ベンガラ粒(径0.5cm)含
6 2.5Y4/3オリーブ褐色細砂 径5～10cmの礫含
7 2.5Y4/2暗灰黄色砂質土混細砂径5～10cmの礫・瓦多量含
8 2.5Y3/1黒褐色砂質土 やや粘性、径3～5cmの礫・瓦少量含
9 10YR4/2灰黄褐色粘質土と10YR8/1灰白色細砂の互層
10 10YR2/1黒色粘質土混微砂 径5～10cmの礫・瓦含
11 10YR5/6黄褐色粗砂 径2～10cmの礫・瓦多量含
12 10YR7/2にぶい黄橙色細砂～粗砂 径1～3cmの礫・瓦含
13 10YR3/1黒褐色砂質土 細砂混じり、瓦・土器少量含
14 10YR2/1黒色粘質土混細砂 土器・炭少量含
15 5Y3/1オリーブ黒色粘質土 微砂・炭・土器少量含
16 2.5Y3/1黒褐色微砂 やや粘質、細砂・径5～10cmの礫・瓦少量含
17 10YR4/1褐灰色微砂
18 2.5Y3/1黒褐色砂質土
19 10YR2/1黒色粘質土混微砂 炭・土器含
20 7.5YR3/1黒褐色微砂 土器少量含
21 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土 土器・炭少量含
22 2.5Y2/1黒色砂質土混粘質土 土器少量含
23 2.5Y3/2黒褐色砂質土 粘性あり、細砂少量含
24 2.5Y4/1黄灰色砂質土 粘性あり、粗砂含、土器少量含

溝440
溝840
溝840掘形
溝900上層
溝900

25 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土 微砂少量含
26 10YR2/1黒色粘質土 炭少量含
27 2.5Y3/1黒褐色微砂～シルト
28 10YR3/1黒褐色砂質土 粘性あり、細砂少量含
29 5Y3/1オリーブ黒色微砂
30 2.5Y3/2黒褐色粗砂礫(径1～5cm) 瓦多量含
31 10YR2/2黒褐色微砂～細砂 径3～5cmの礫・瓦多量含
32 2.5Y5/3黄褐色粗砂礫(径2～5cm) 瓦含
33 2.5Y4/2暗灰黄色粗砂礫(径2～5cm) 瓦多量含
34 10YR6/4にぶい黄橙色粗砂 径2～3cmの礫・瓦少量含
35 2.5Y7/2灰黄色粗砂径2～10cmの10YR3/3暗褐色粘質土ブロック多量含
36 10YR6/2灰黄褐色粗砂礫(径1～3cm)
37 10YR5/1褐灰色粗砂礫(径2～3cm)と細砂礫(径1～2cm)の互層
38 2.5Y6/3にぶい黄色粗砂 土器少量含
39 2.5Y5/4黄褐色細砂～粗砂礫(径1～2cm)土器・径1～3cmの2.5Y3/2黒褐色粘質土ブロック少量含
40 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土 シルト質、所々に2.5Y7/2灰黄色細砂(層状)・土器少量含
41 5Y5/2灰オリーブ色粗砂礫(径3～8cm) 瓦少量含
42 2.5Y4/2暗灰黄色砂質土 粘性あり、瓦少量含
43 2.5Y4/1黄灰色粘土
44 7.5Y6/1灰色粘土
45 2.5Y4/2暗灰黄色細砂混粘質土(層状)
46 10YR3/1黒褐色粘質土 粘性強
47 2.5Y3/1黒褐色粘質土 細砂混じり

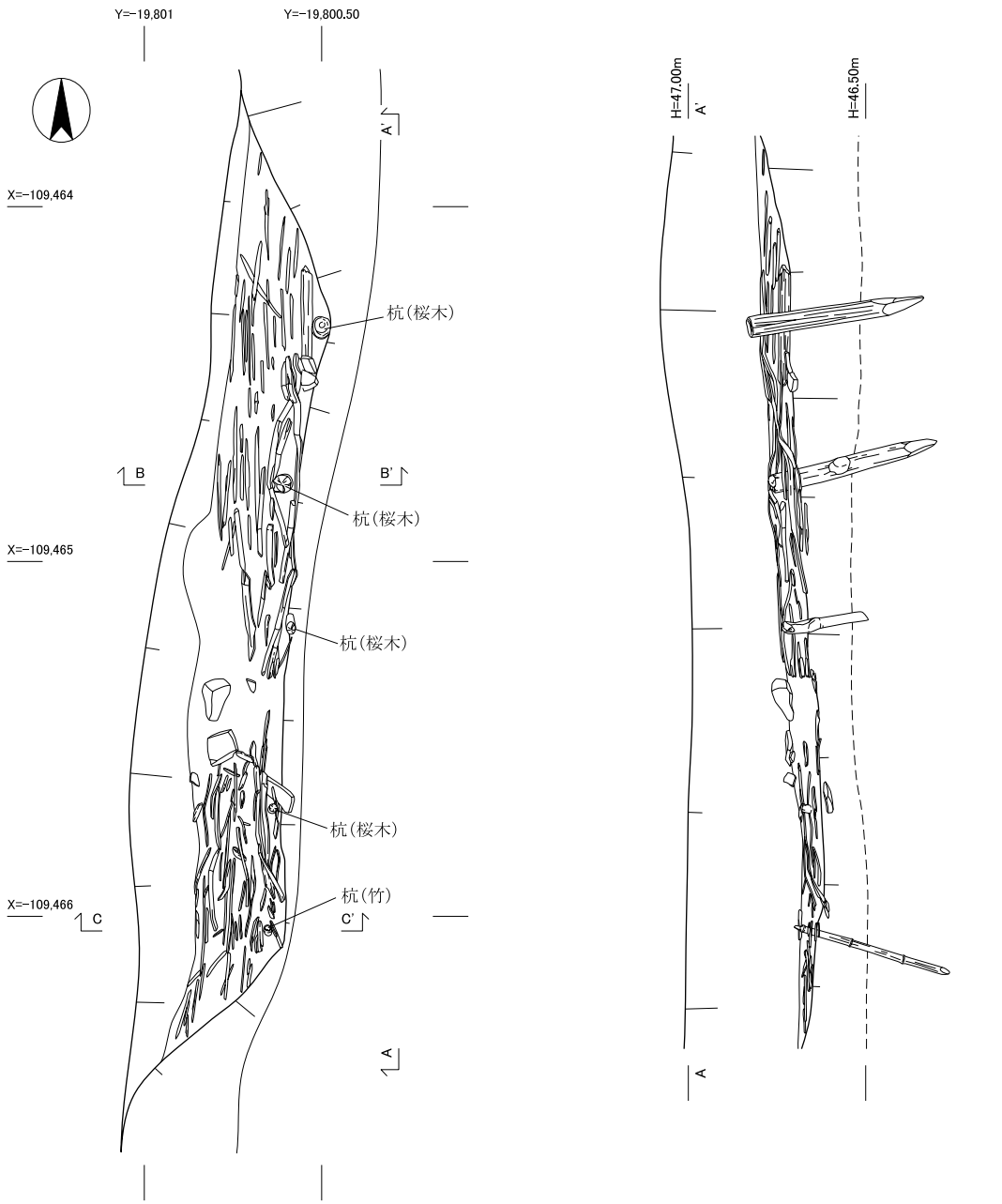
溝900
平安後期造成土
溝1000

溝440
溝840
溝900
溝1000

※ A-A'・B-B'は図版3に対応

0 2m

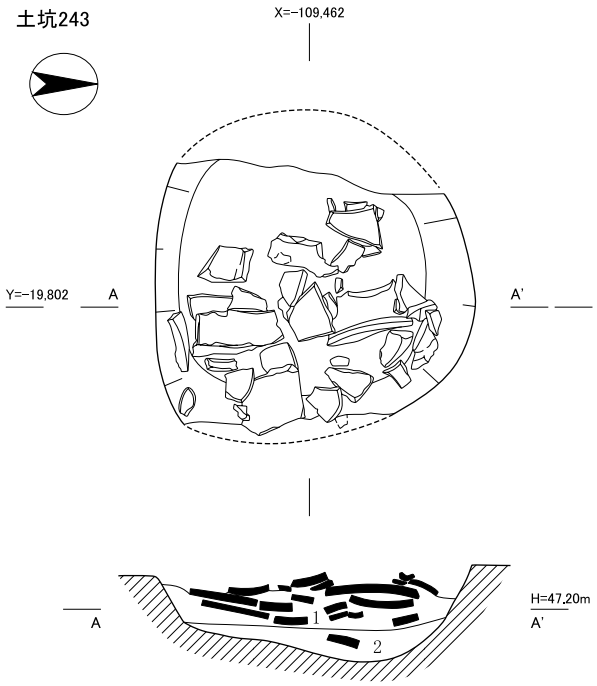
溝440・840・900・1000断面図（1：50）



1　2.5Y4/2暗灰黄色粘質土　微砂質
2　10YR3/3暗灰色砂質土　やや粘性あり
3　10YR2/2黒褐色砂質土
4　2.5Y3/1黒褐色粘質土　微砂質
5　2.5Y5/1黄灰色粗砂　径1～5㎝の礫・瓦多量含

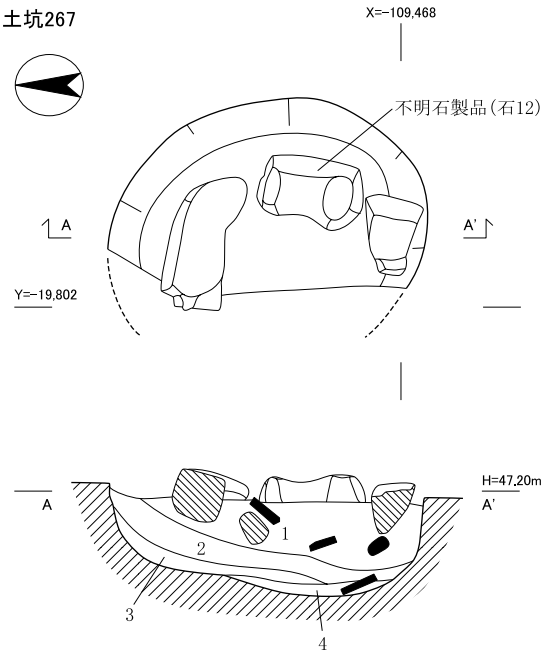
溝900西肩護岸実測図（1：20）

土坑243



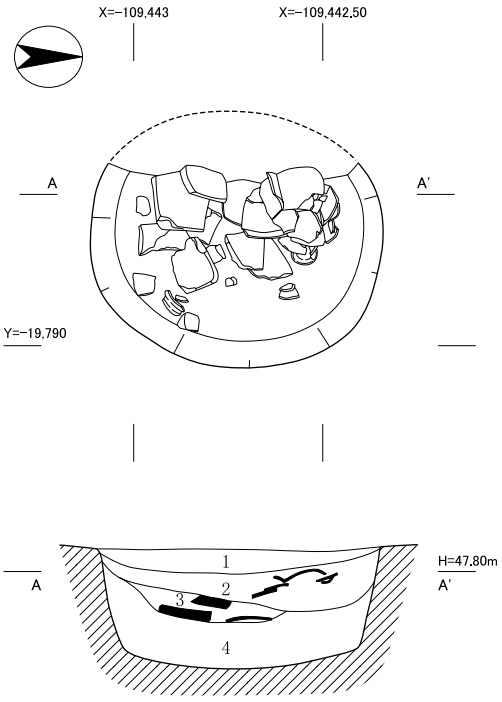
1　10YR3/1黒褐色砂質土　微砂混じり
2　2.5Y3/2黒褐色粘質土　微砂混じり、土器含

土坑267



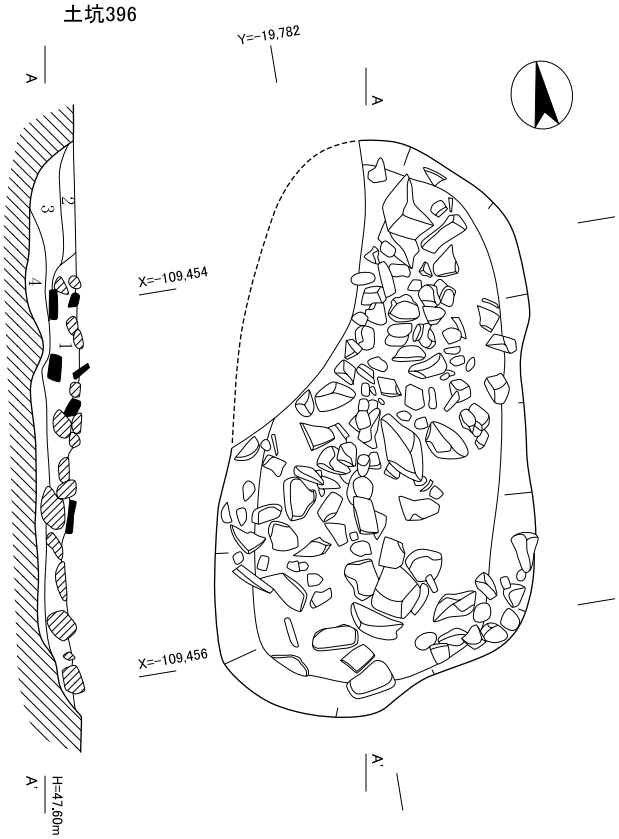
1　10YR3/1黒褐色砂質土　粗砂混じり
2　10YR2/1黒色粘質土　細砂・土器少量含
3　2.5Y4/1黄灰色粘質土
4　2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質土混シルト　瓦少量含

土坑735



1　10YR2/2黒褐色粘質土　粗砂混じり、炭・焼土含
2　2.5Y3/2黒褐色粘質土　土器含
3　2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質土　土器少量含
4　2.5Y2/1黒色粘質土混粗砂　土器・炭少量含

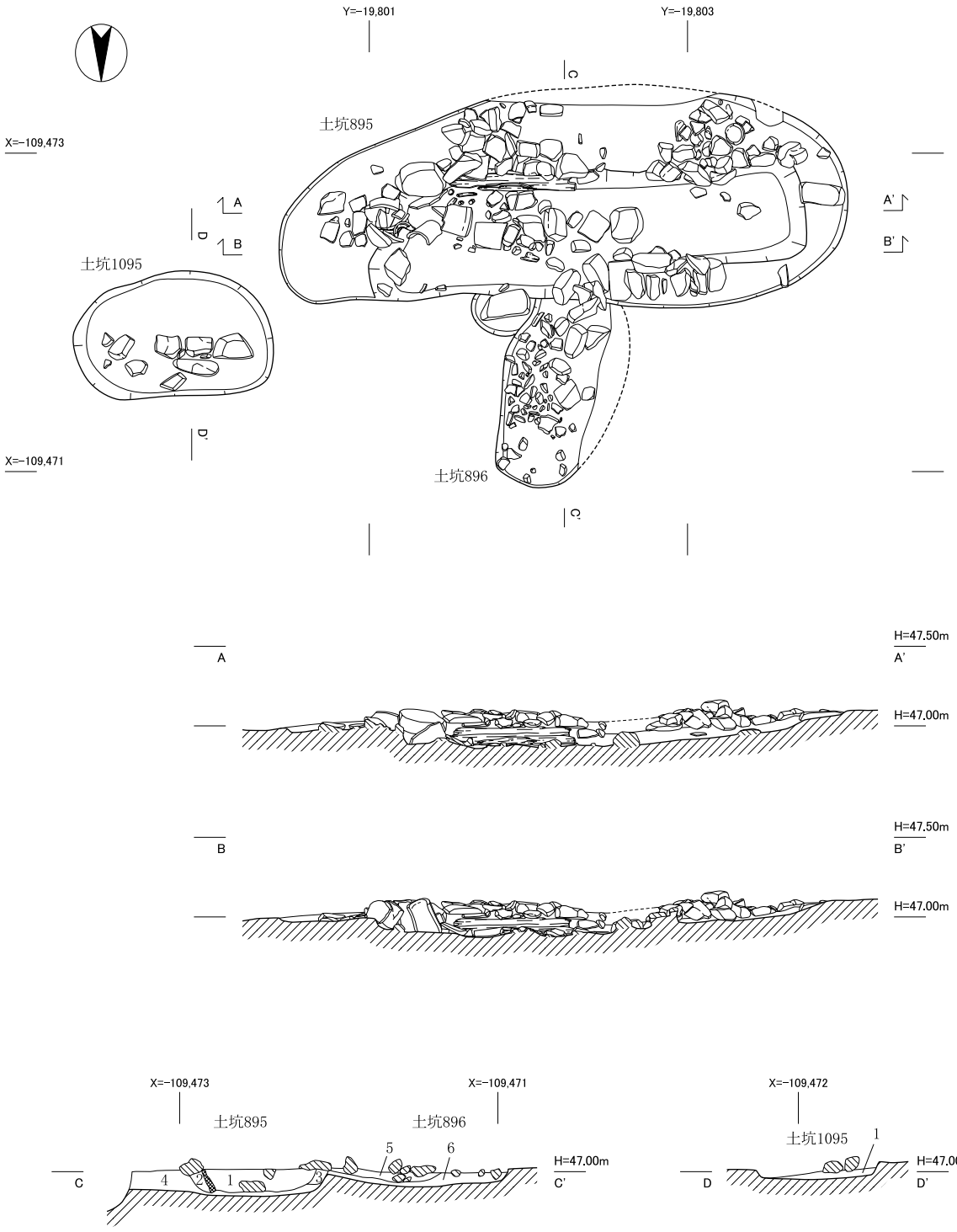
土坑396



1　10YR3/1黒褐色粘質土　径3～15㎝の礫・瓦多量含
2　2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土
3　2.5Y4/1黄灰色粘質土混細砂
4　2.5Y2/1黒色粘質土混粗砂

0　1m

土坑243・267・735・396実測図（1：20）

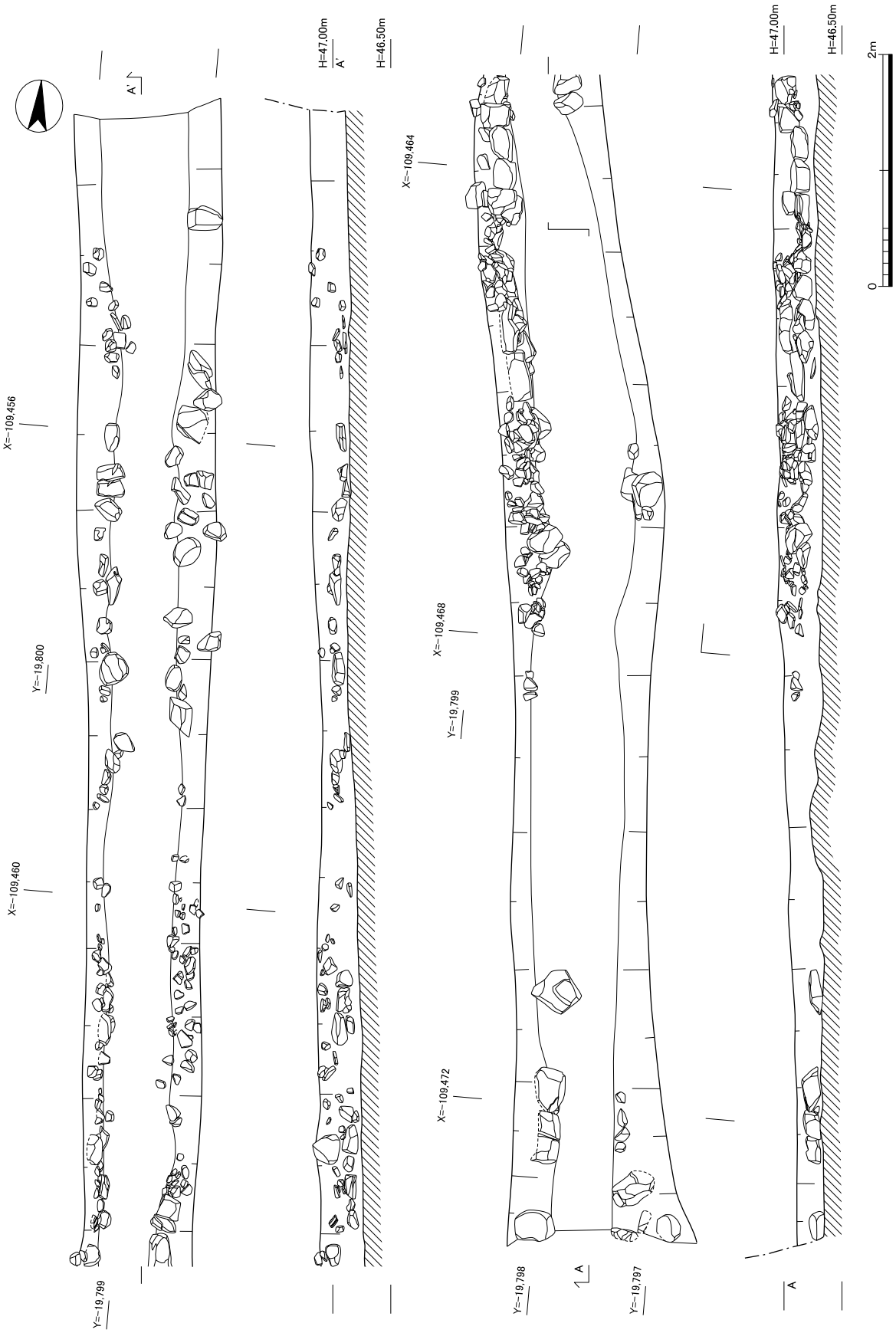


土坑895・896
1　2.5Y3/1黒褐色粘質土　粗砂少量含
2　5Y3/1オリーブ黒色砂質土　粘性あり、粗砂含
3　10YR3/4暗褐色砂質土
4　10YR2/2黒褐色砂質土　2.5Y7/6明黄褐色粗砂が層状に堆積、径1～2㎝の礫・土器少量含
5　7.5YR2/1黒色粘質土　粗砂少量含、径15～25㎝の礫・瓦多量含
6　10YR1.7/1黒色粘質土　炭・土器少量含

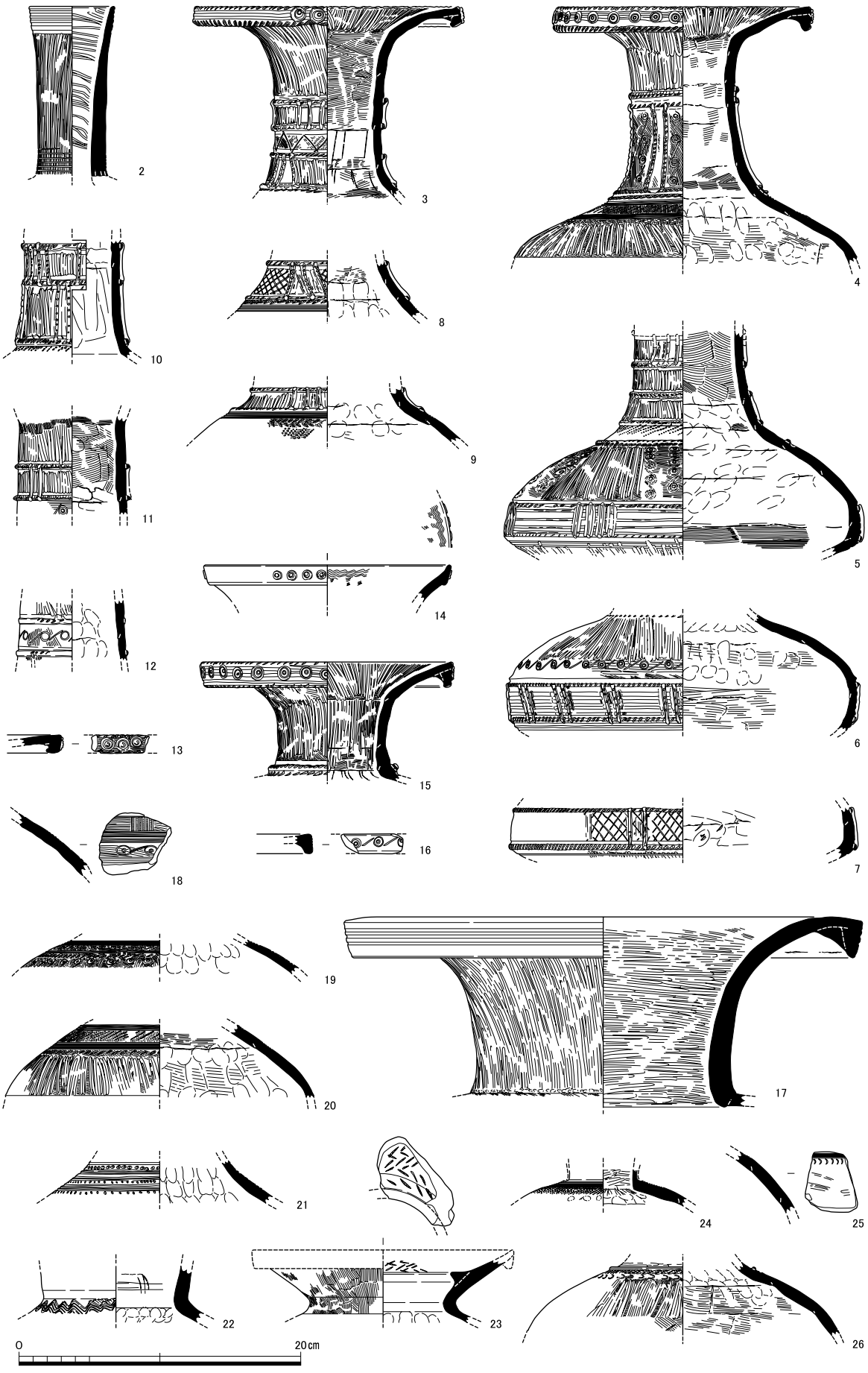
土坑1095
1　10YR4/2灰黄褐色細砂

0　2m

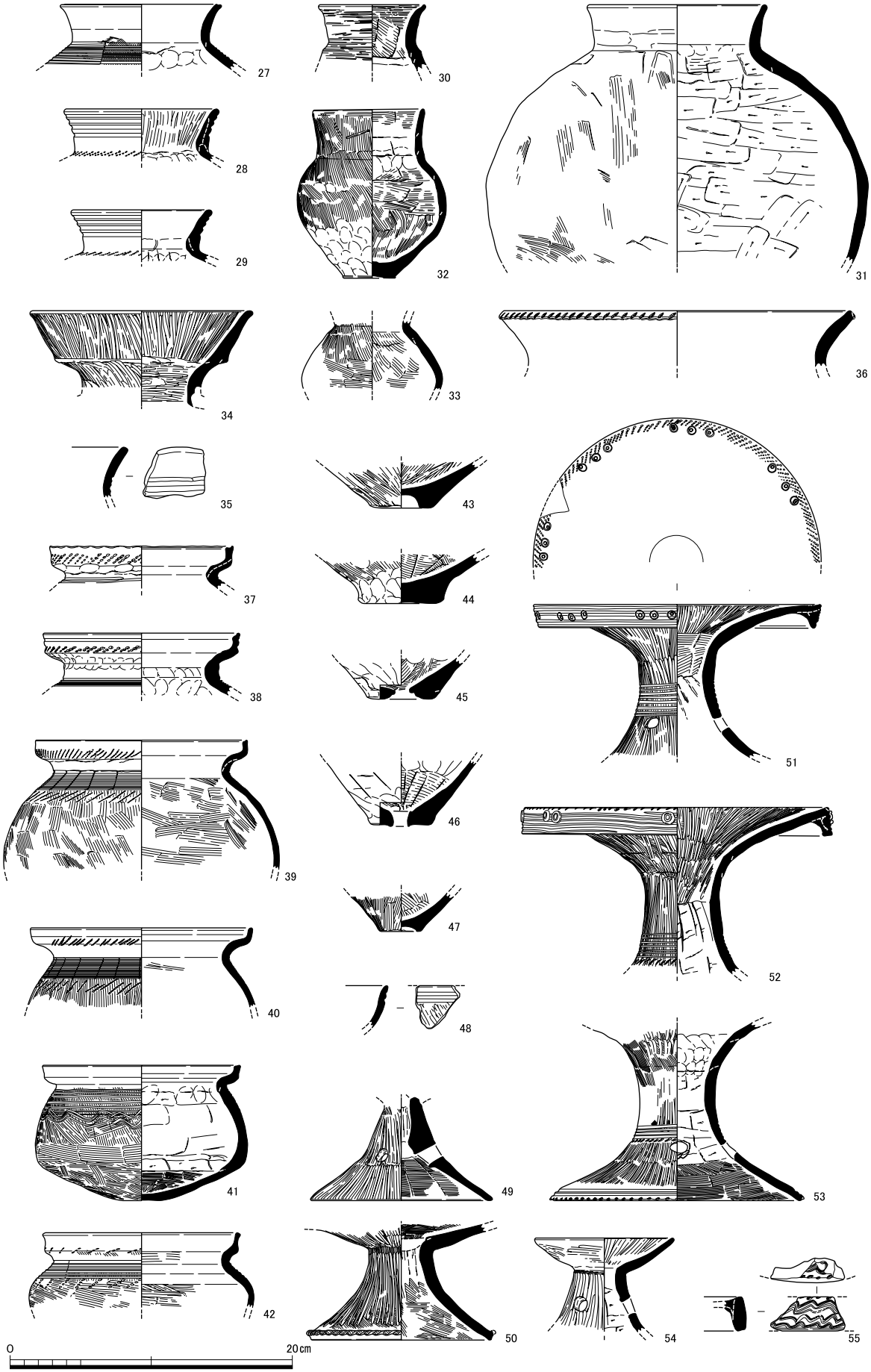
土坑895・896・1095実測図（1：40）


H=47.00m
A'
H=46.50m
X=-109,456
Y=-19,800
X=-109,460
Y=-19,799
X=-109,464
X=-109,468
Y=-19,799
X=-109,472
Y=-19,798
A
Y=-19,797
A
H=47.00m
H=46.50m
0
2m

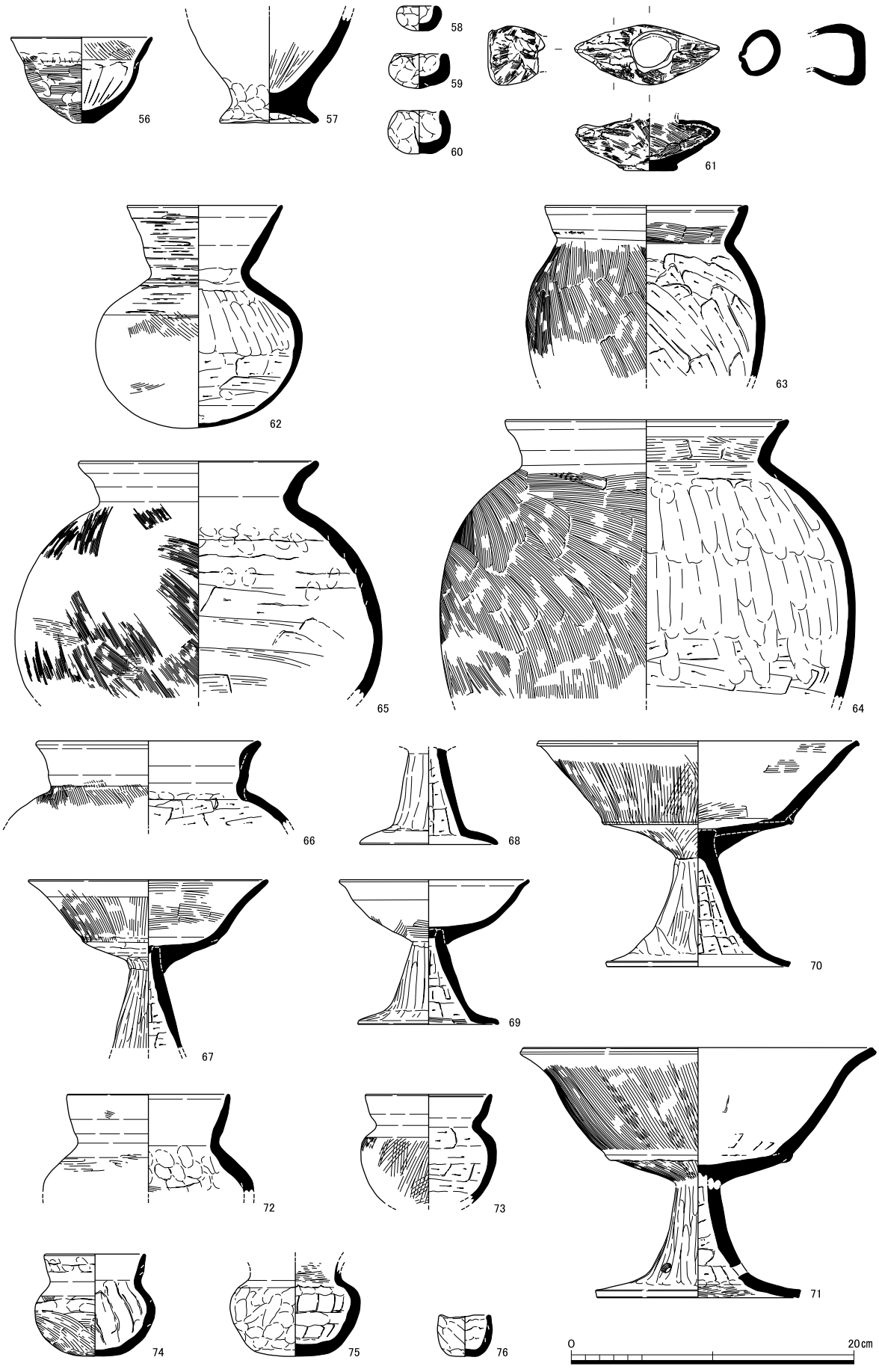
溝840実測図（1：50）



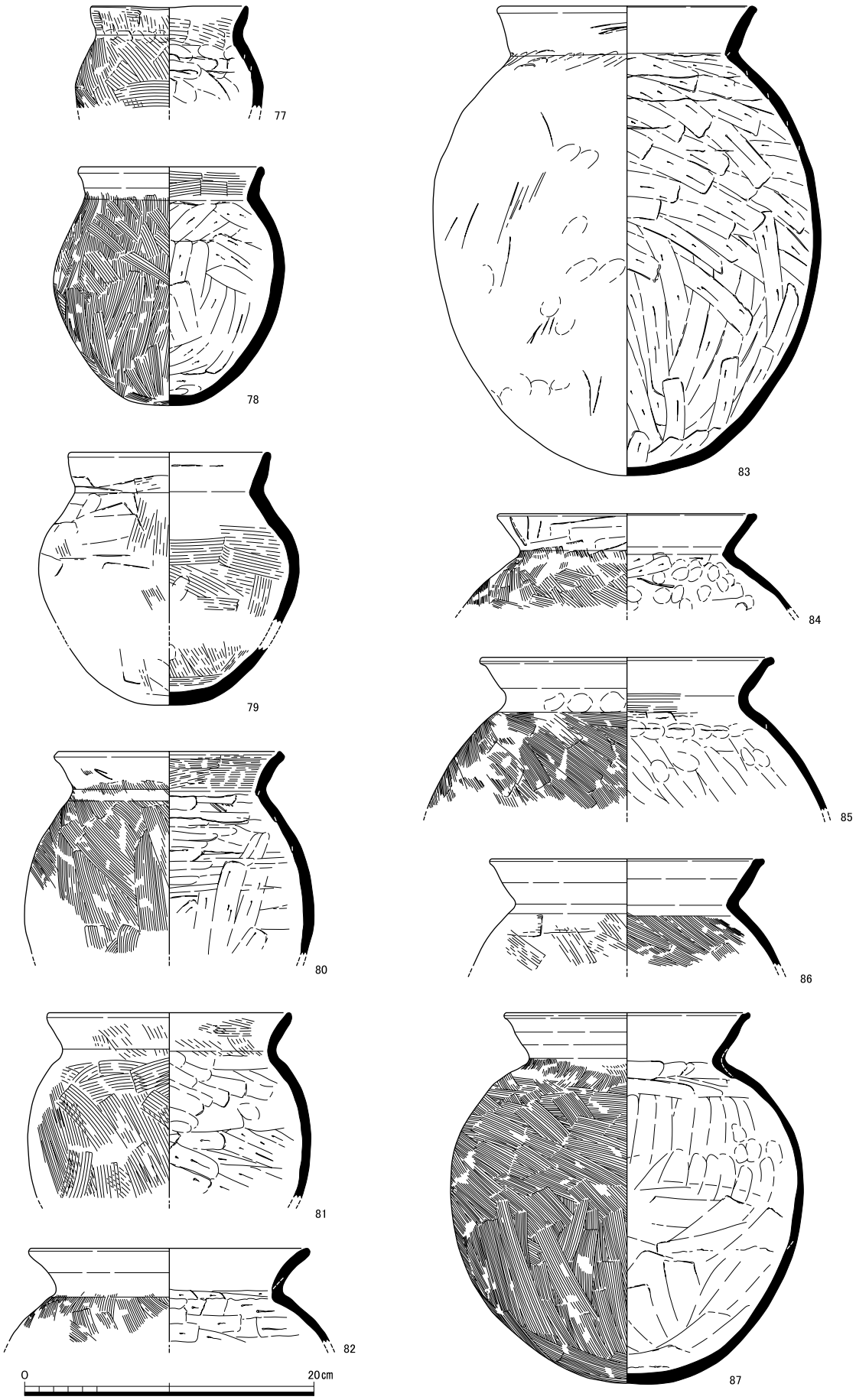
流路1100西岸出土土器実測図１（１：４）



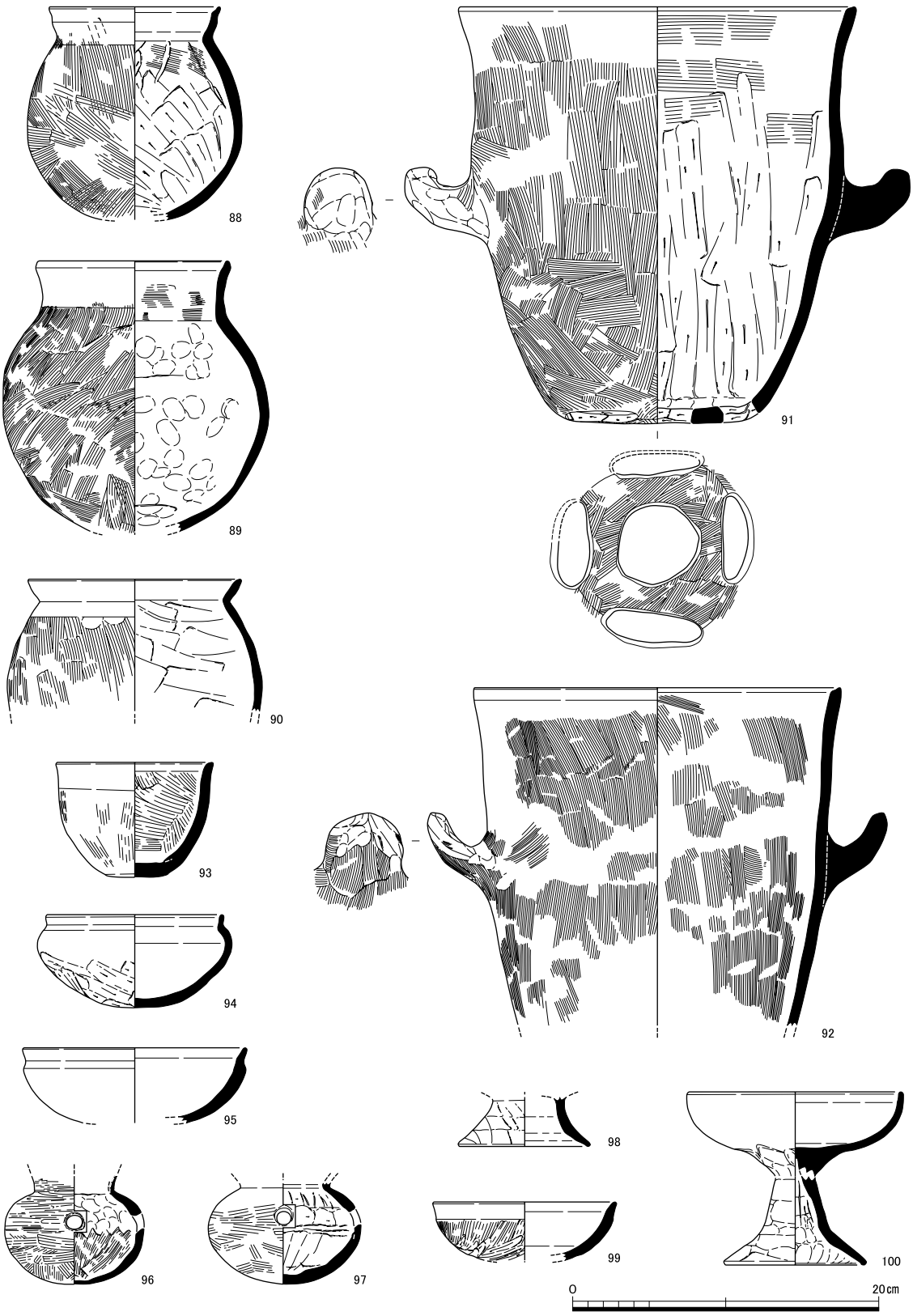
流路1100西岸出土土器実測図２（１：４）



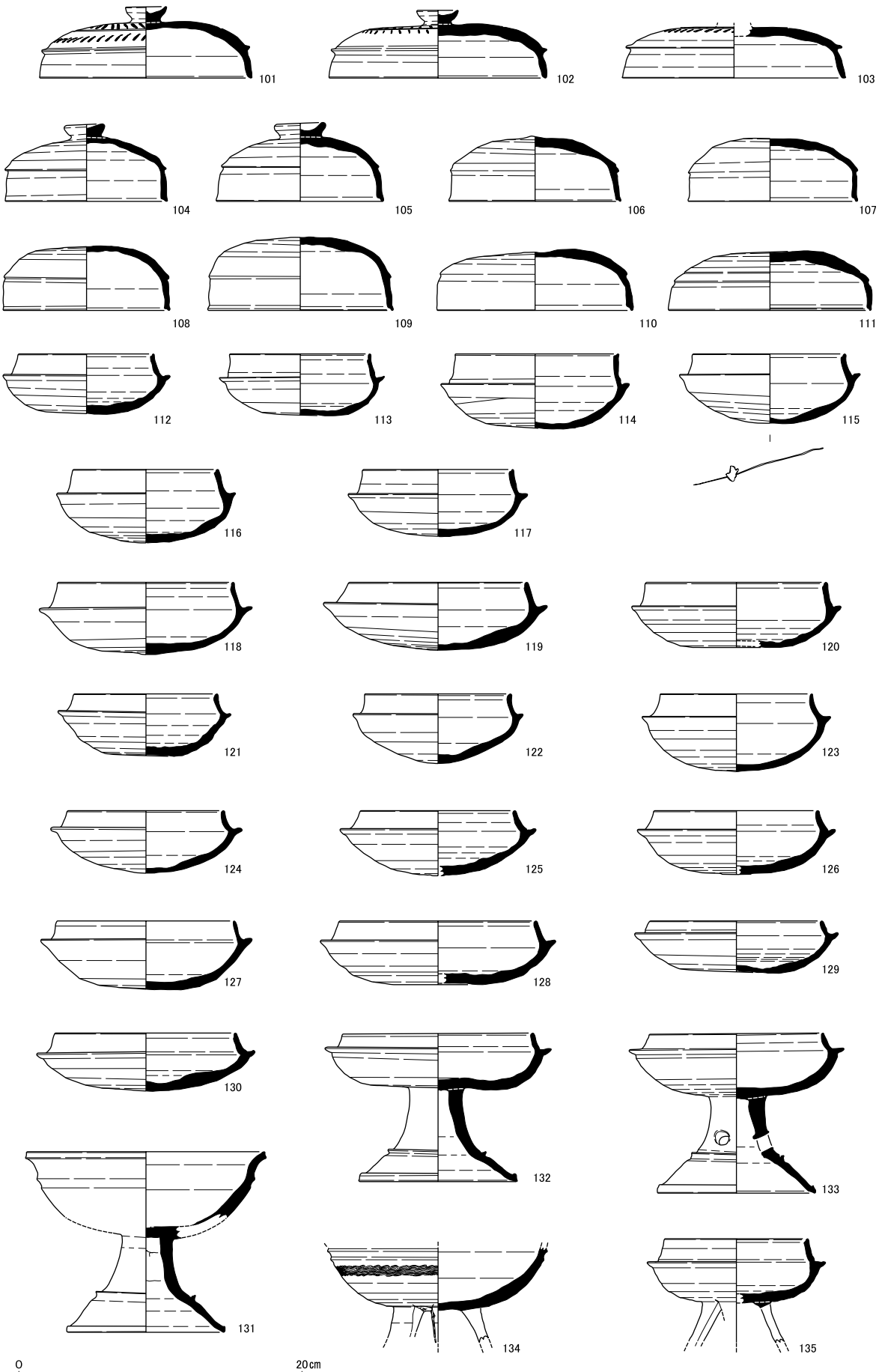
流路1100西岸出土土器実測図３（１：４）



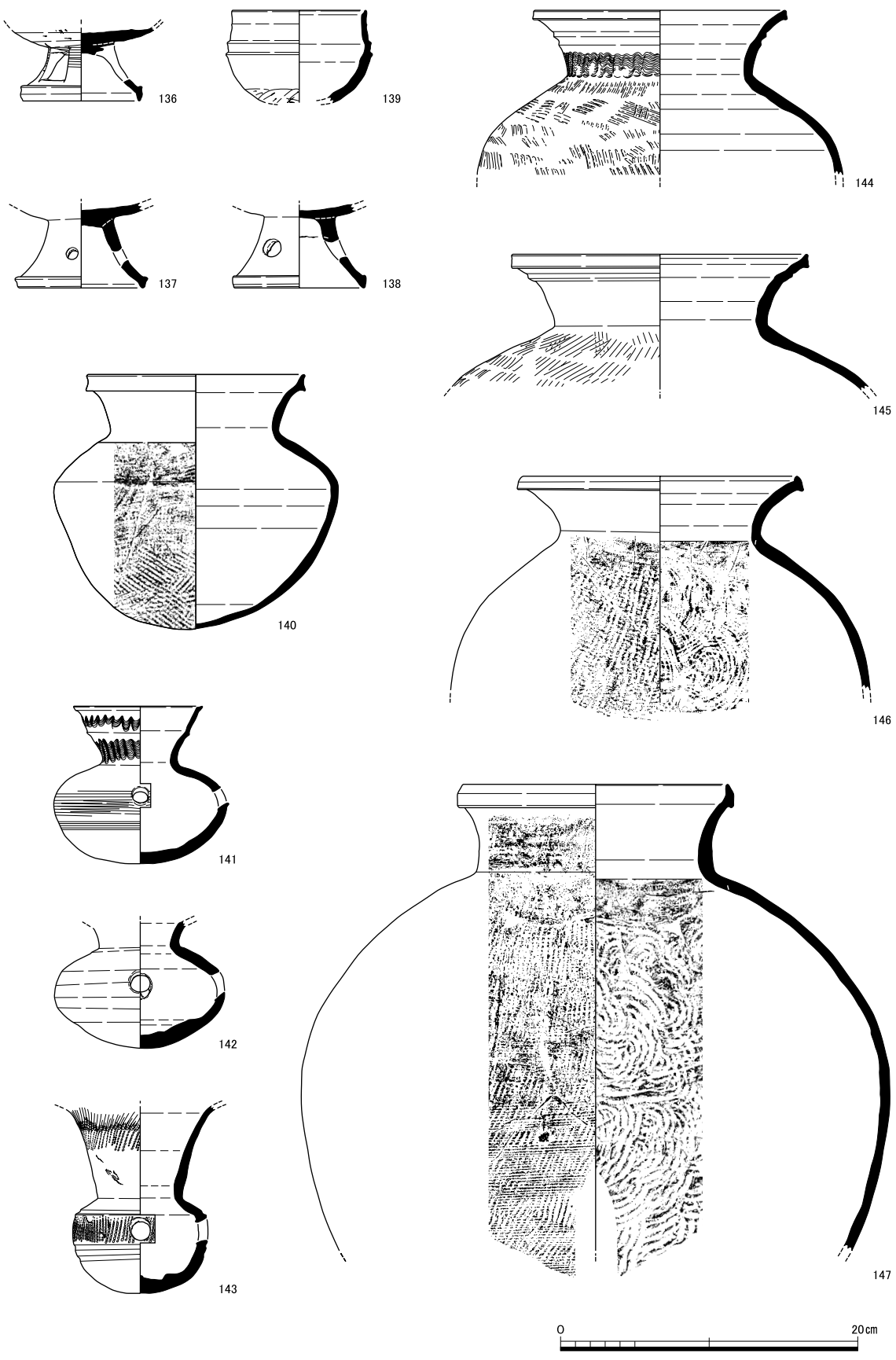
流路1100西岸出土土器実測図４（１：４）



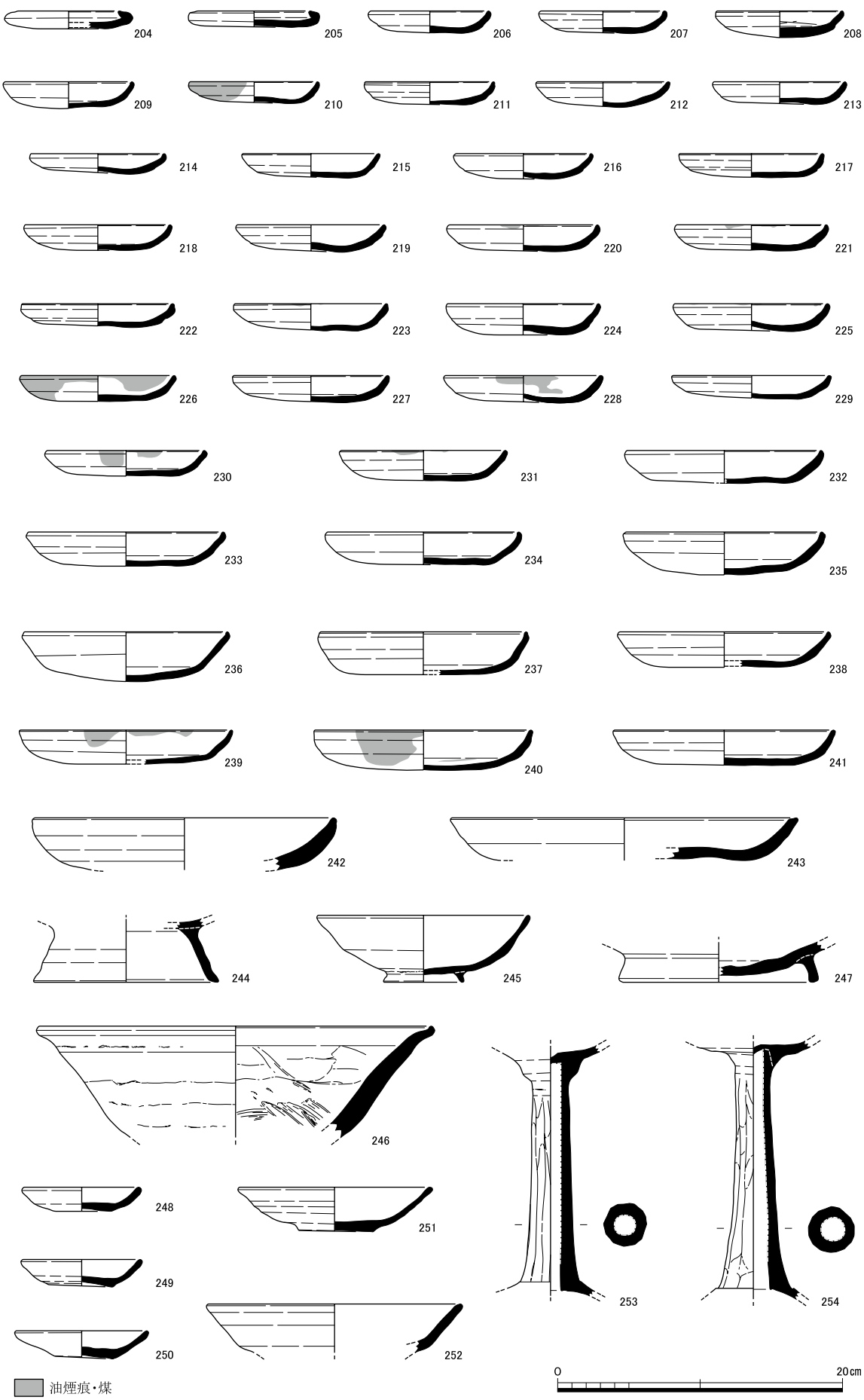
流路1100西岸出土土器実測図５（１：４）



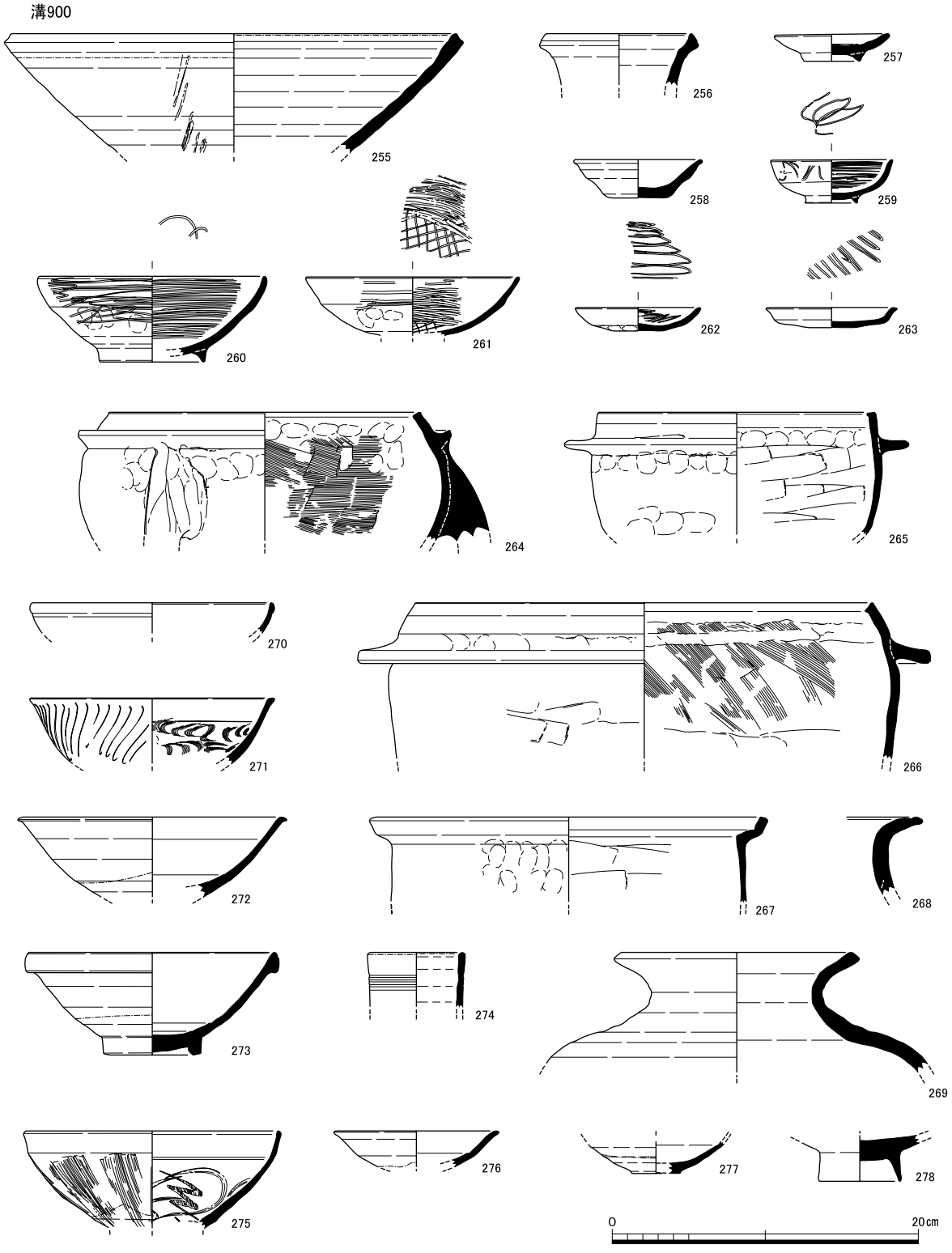
流路1100西岸出土土器実測図６（１：４）



流路1100西岸出土土器実測図７（１：４）

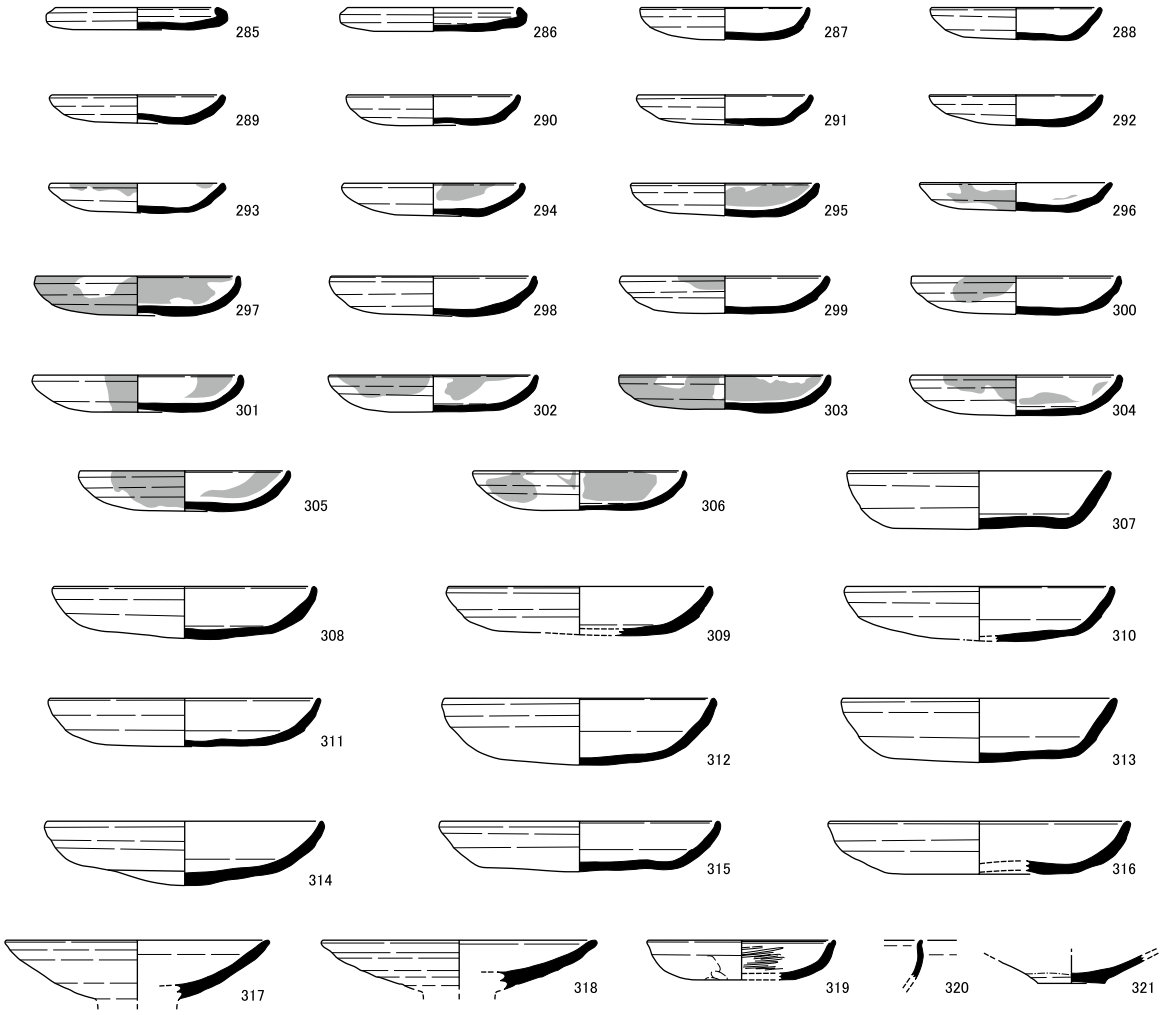


溝900出土土器実測図１（１：４）

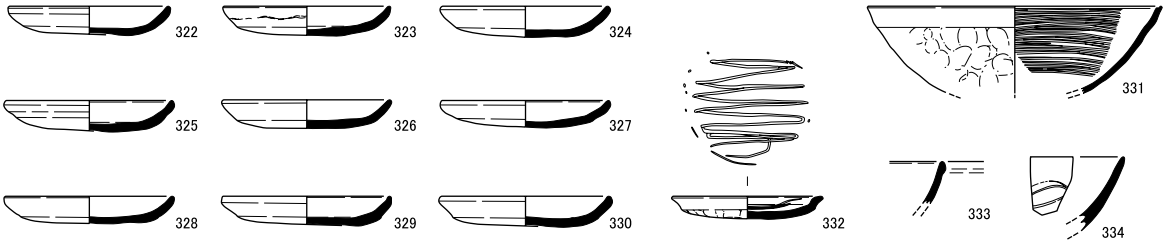


溝900出土土器実測図２、土坑516出土土器実測図（１：４）

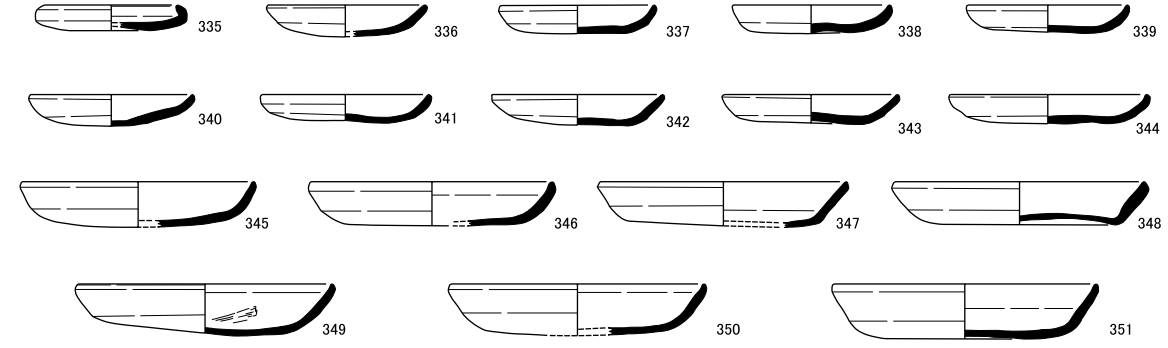
井戸830



土坑335



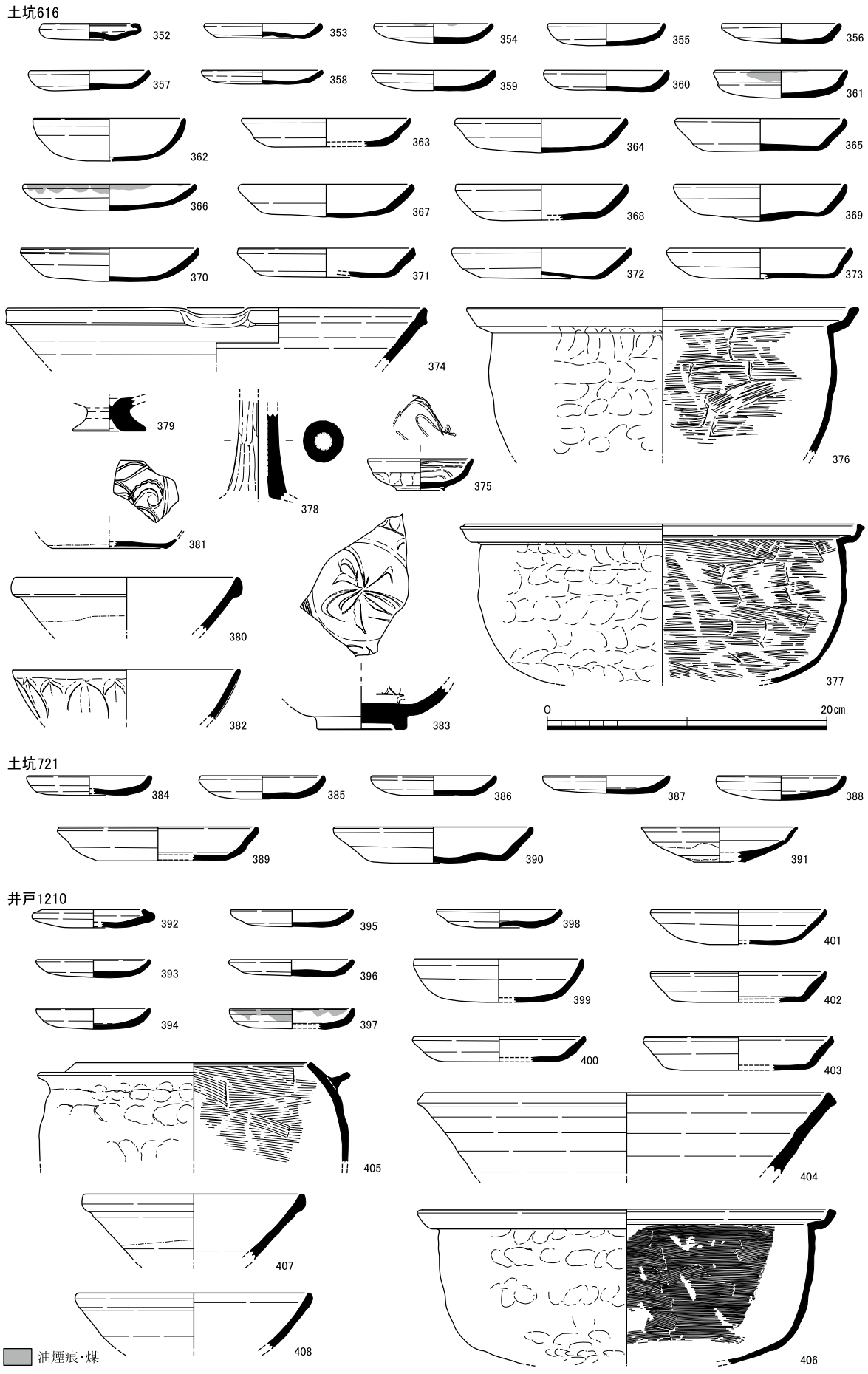
土坑518



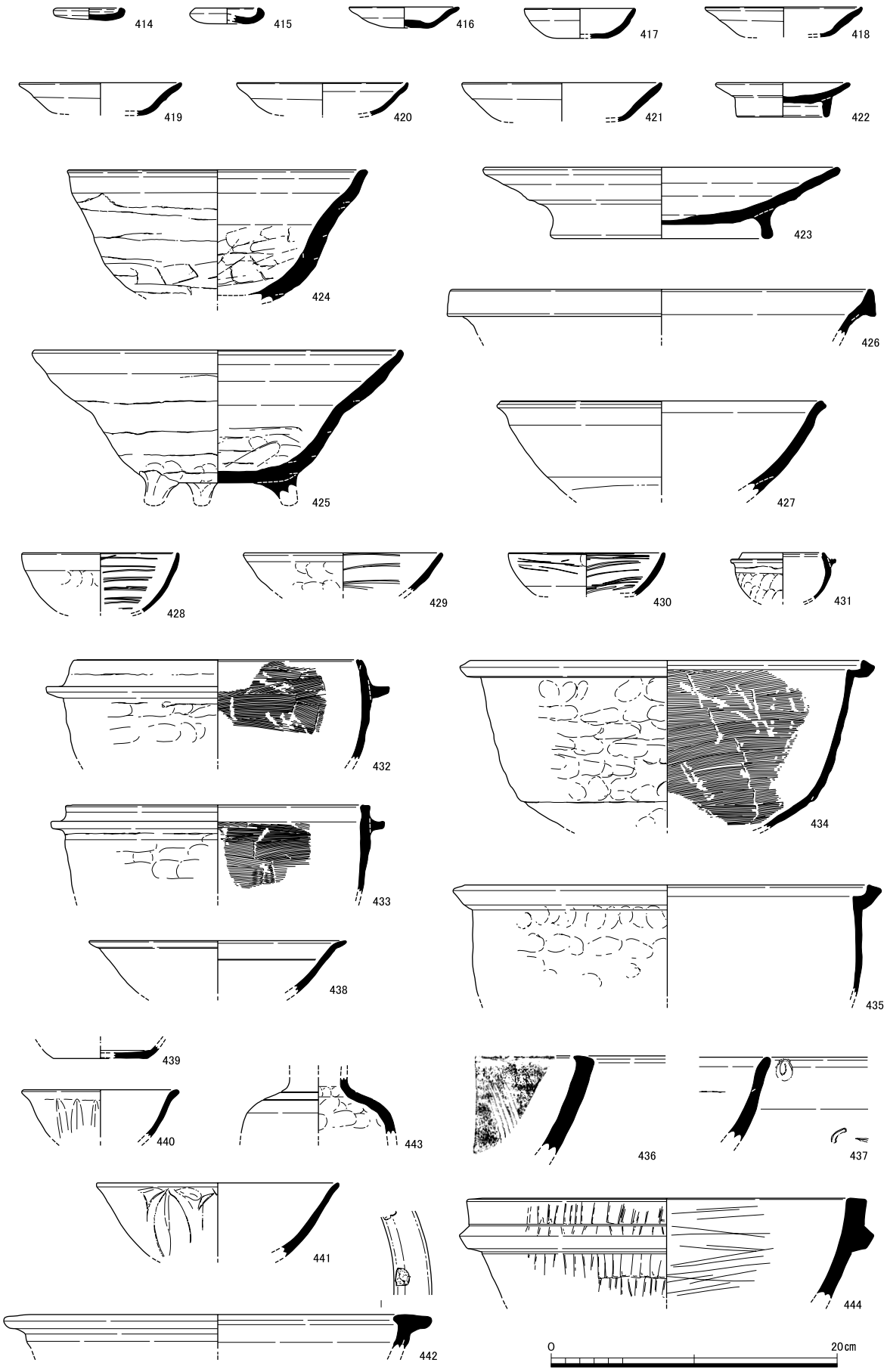
油煙痕・煤

0 20cm

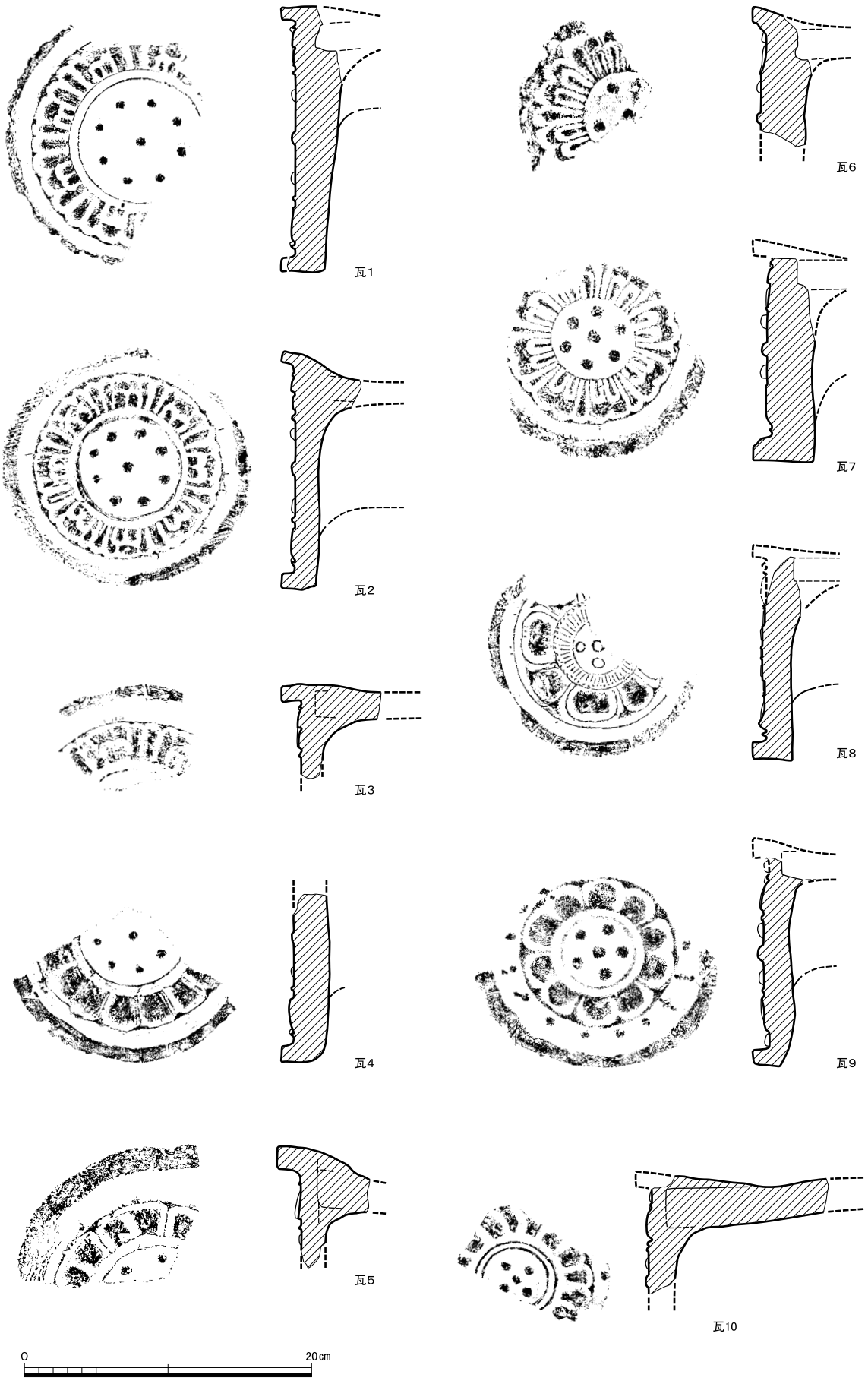
井戸830、土坑335・518出土土器実測図（1：4）



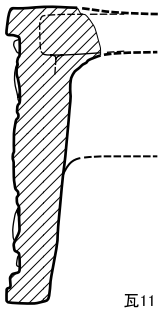
土坑616・721、井戸1210出土土器実測図（1 : 4）

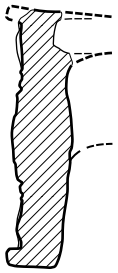


溝840出土遺物実測図（１：４）

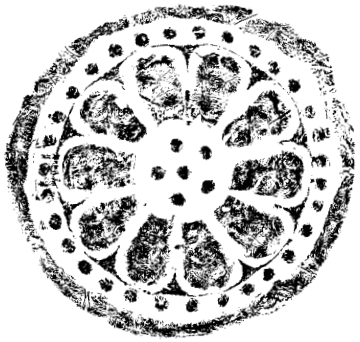
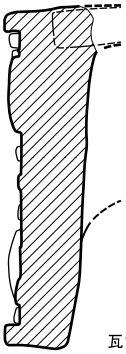


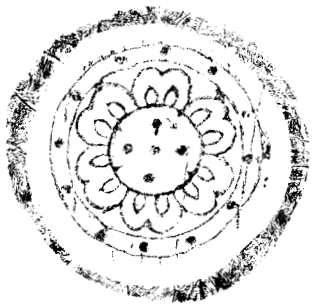
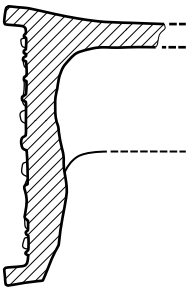
軒丸瓦拓影及び実測図１（１：４）

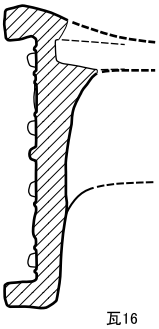

瓦11

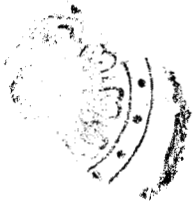
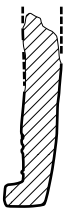

瓦12

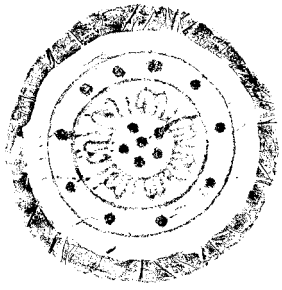
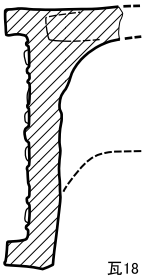
瓦13

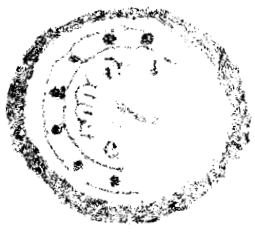
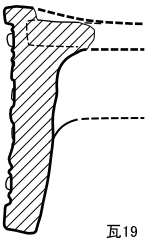


瓦14



瓦15

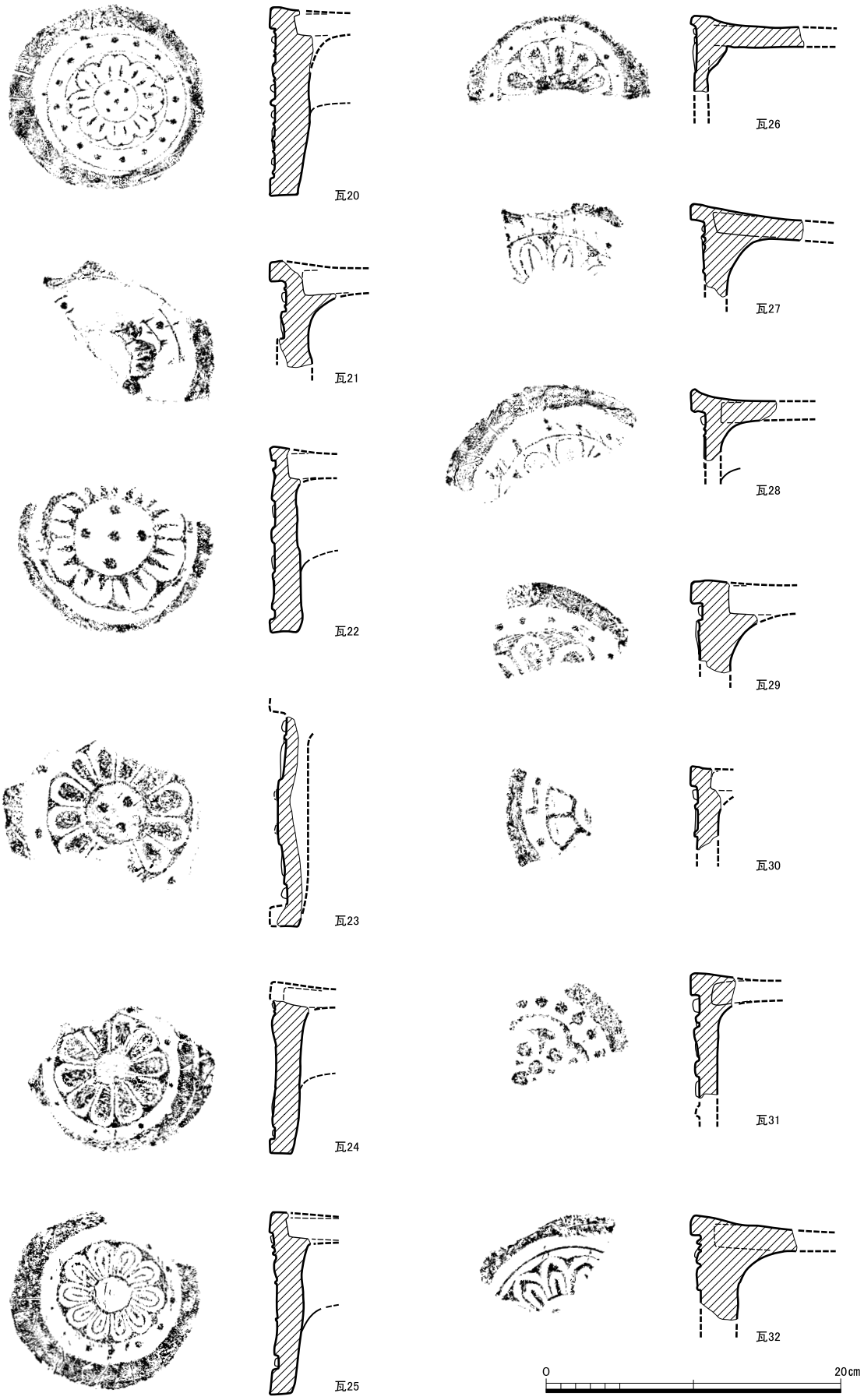

瓦16



瓦17

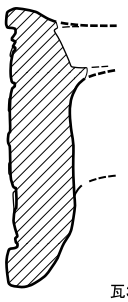


瓦18

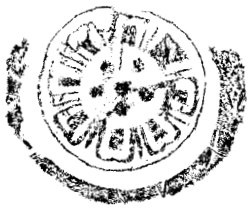
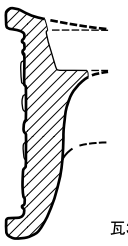


瓦19

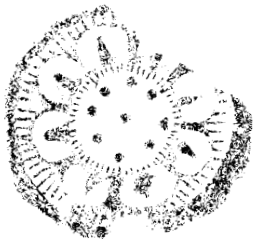
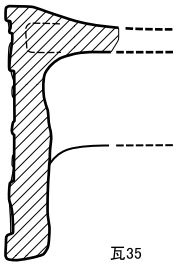
軒丸瓦拓影及び実測図２（１：４）

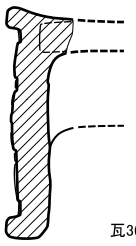


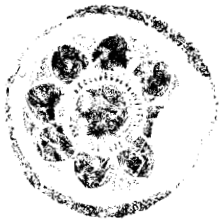
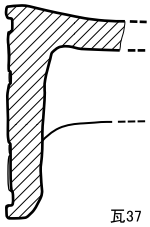
軒丸瓦拓影及び実測図３（１：４）

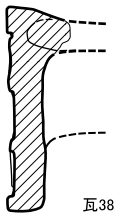

瓦33



瓦34



瓦35


瓦36

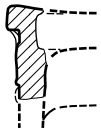


瓦37

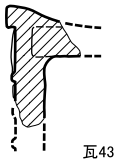

瓦38

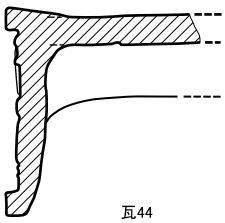
瓦39

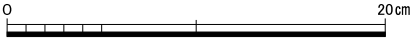
瓦40

瓦41

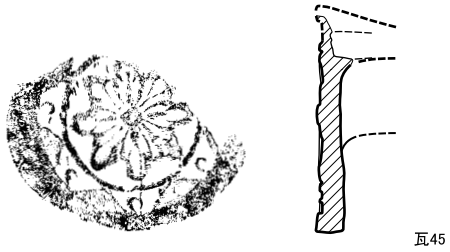

瓦42

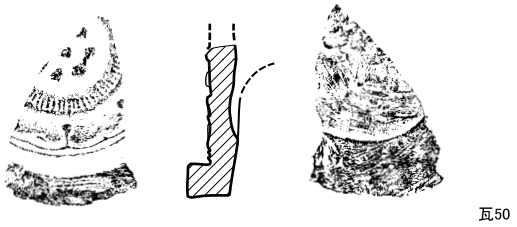

瓦43

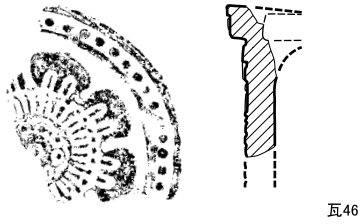

瓦44



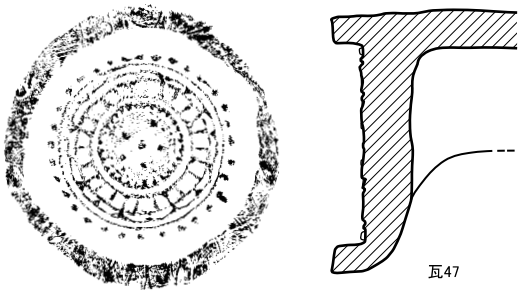
軒丸瓦拓影及び実測図４（１：４）

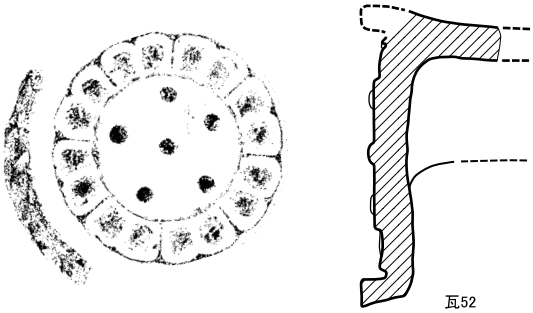

瓦45

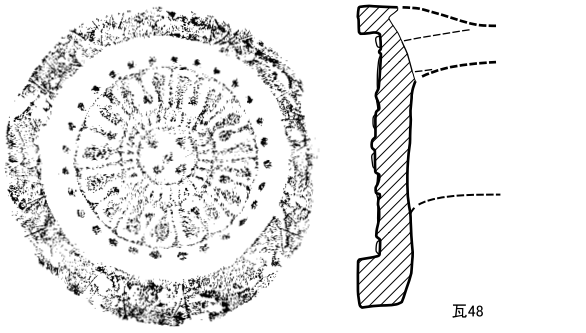

瓦50

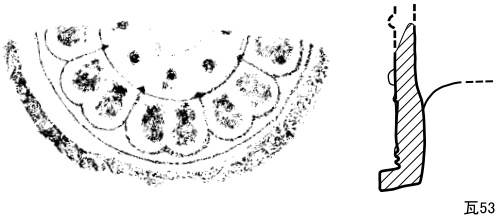

瓦46

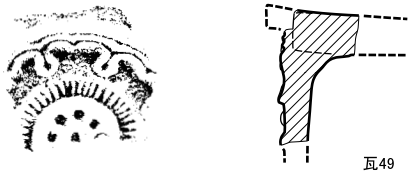
瓦51

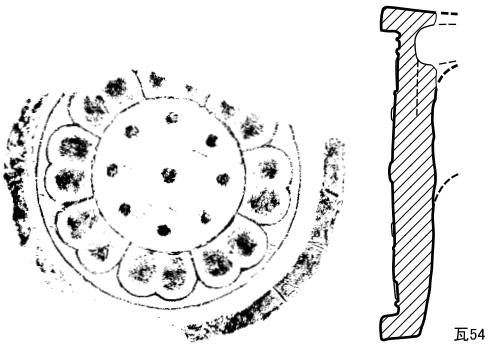

瓦47


瓦52

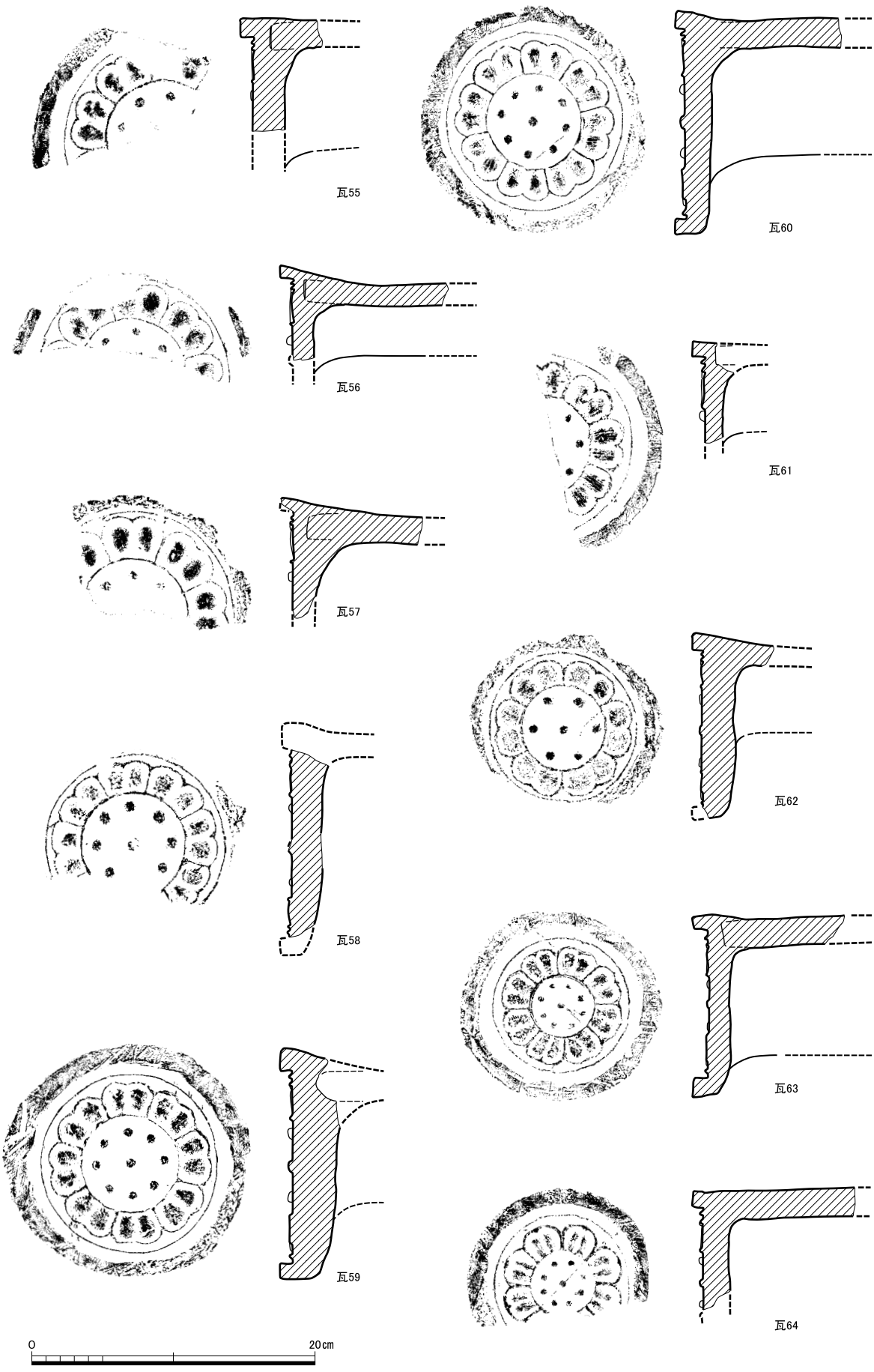

瓦48


瓦53

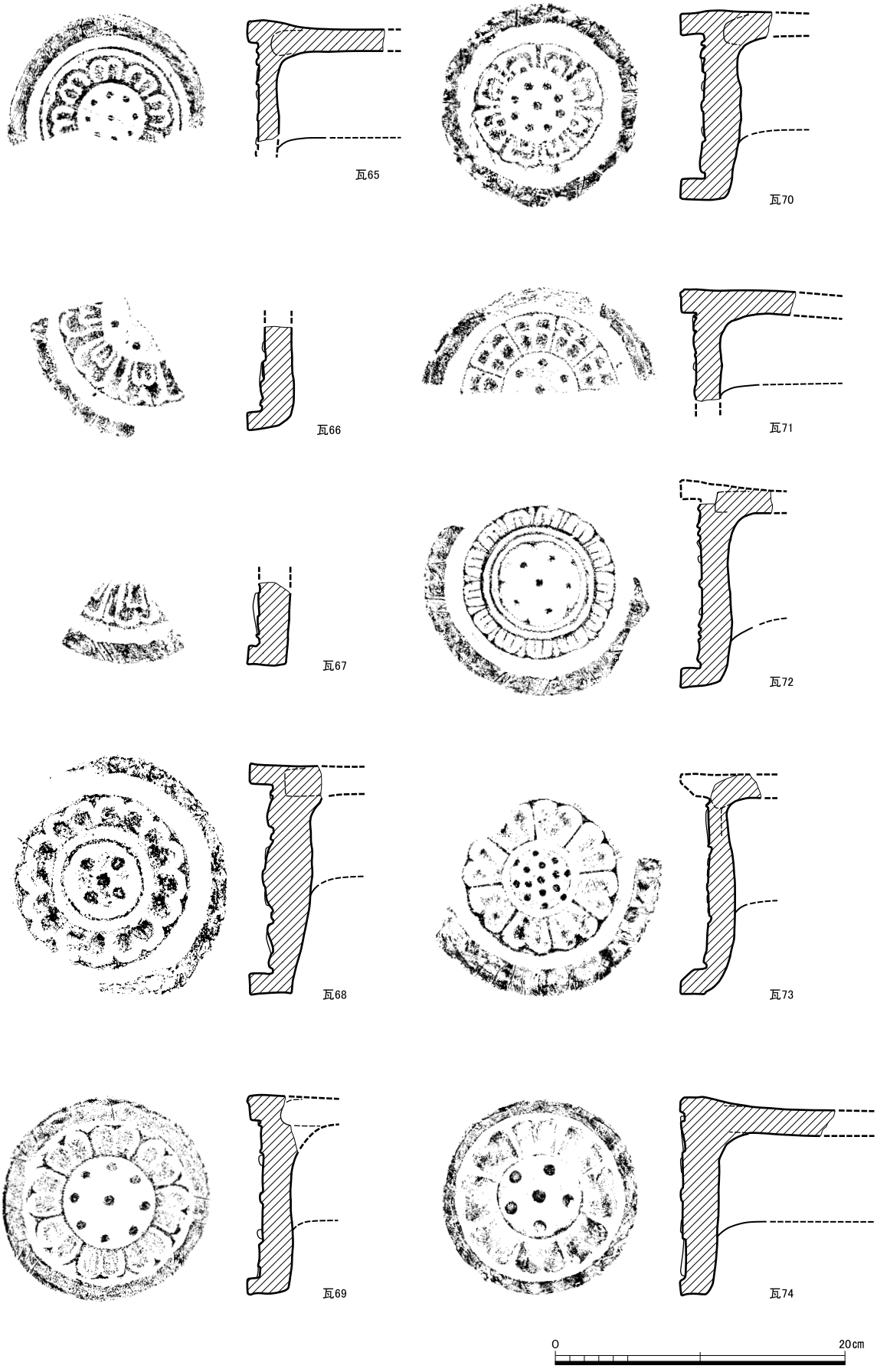

瓦49


瓦54

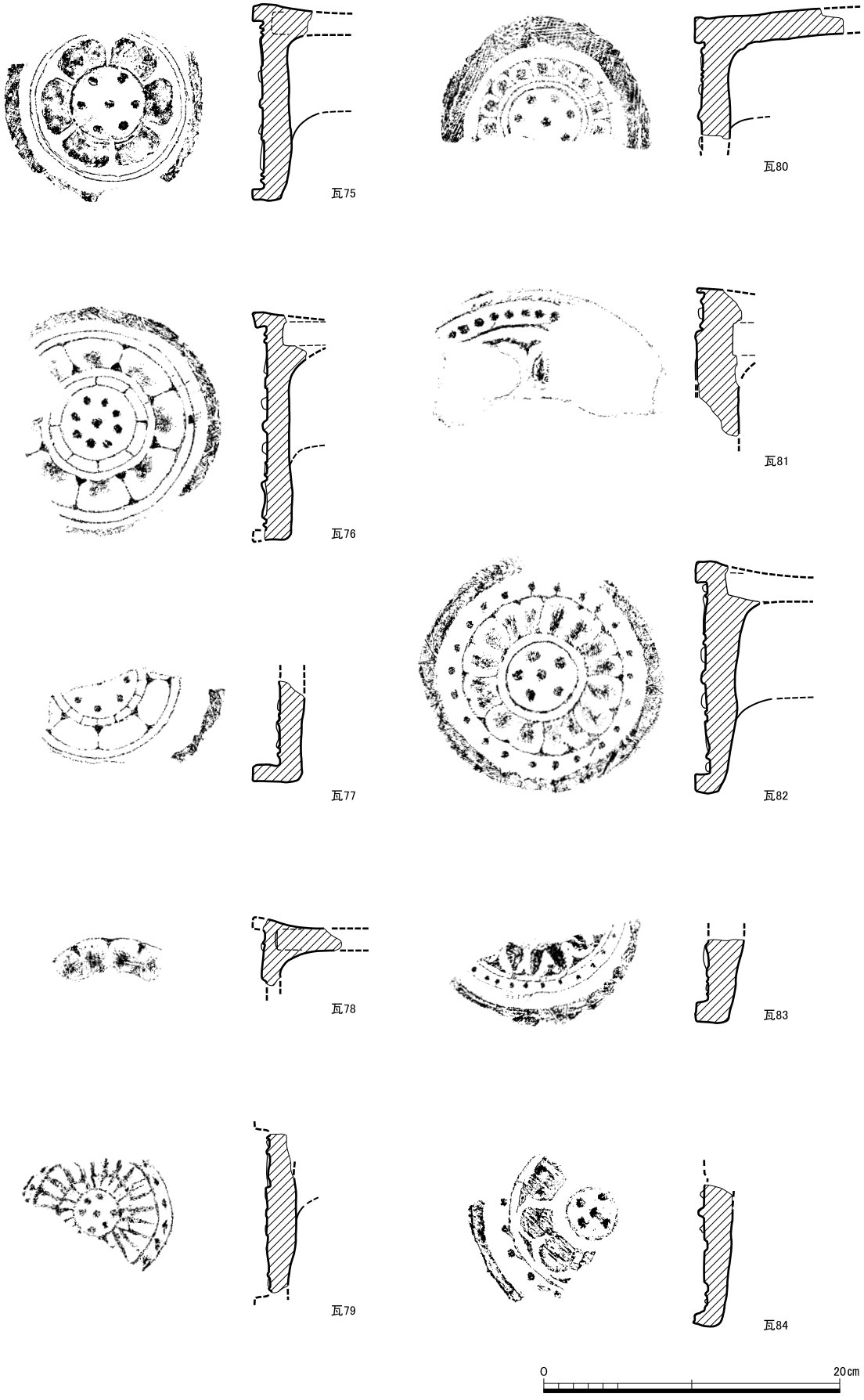
軒丸瓦拓影及び実測図５（１：４）



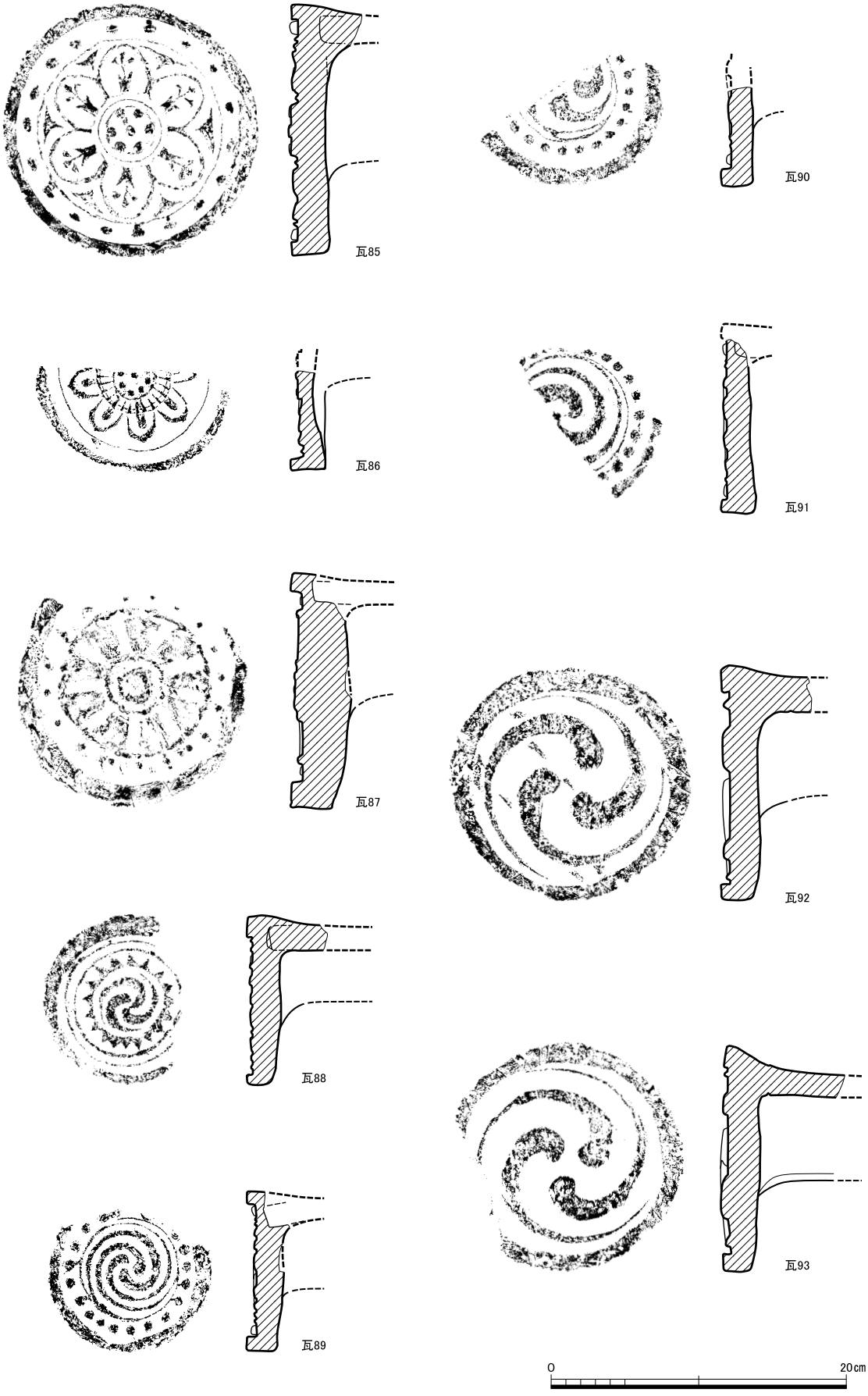
軒丸瓦拓影及び実測図６（１：４）



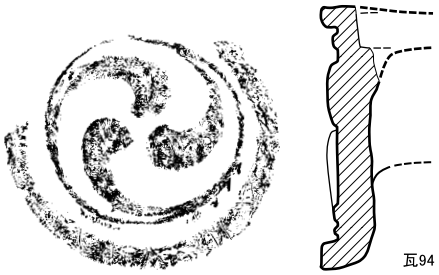
軒丸瓦拓影及び実測図７（１：４）

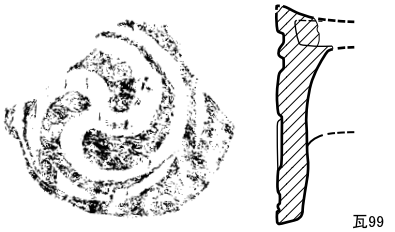


軒丸瓦拓影及び実測図８（１：４）

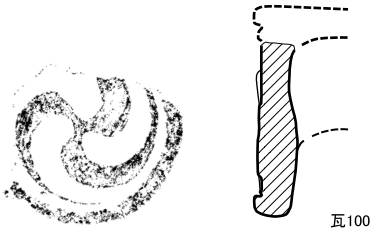


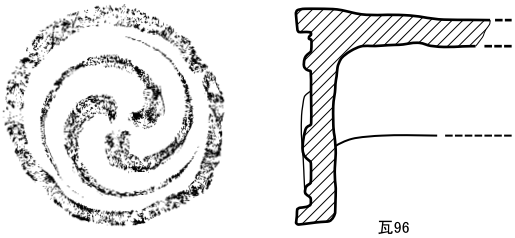
軒丸瓦拓影及び実測図９（１：４）

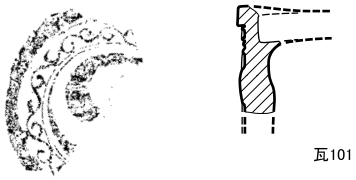

瓦94

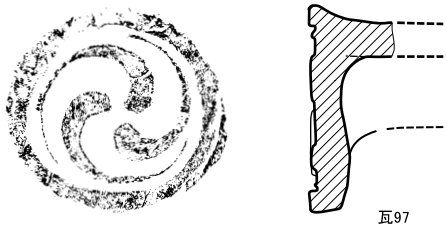

瓦99

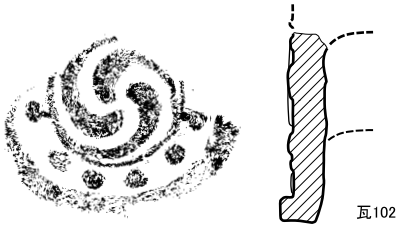
瓦95


瓦100

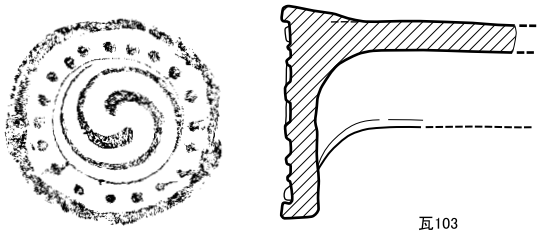

瓦96


瓦101

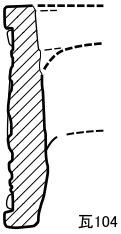

瓦97

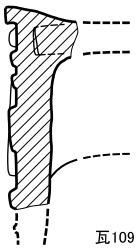

瓦102

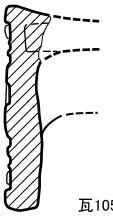
瓦98


瓦103

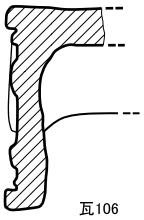
軒丸瓦拓影及び実測図10（１：４）

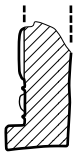

瓦104

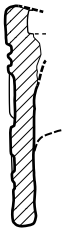

瓦109

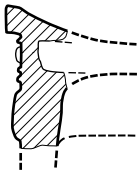

瓦105

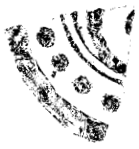
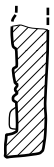
瓦110

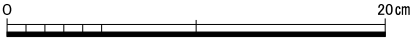

瓦106


瓦111

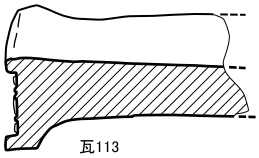

瓦107

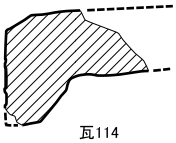

瓦112

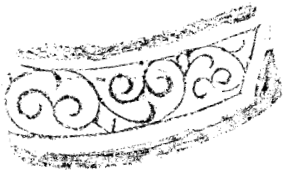


瓦108

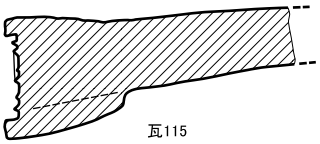


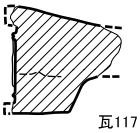
軒丸瓦拓影及び実測図11（１：４）

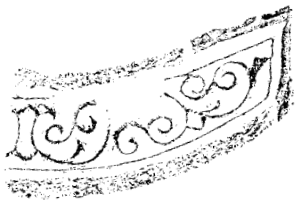


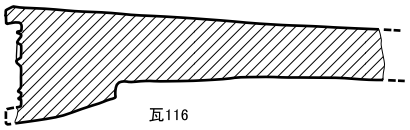


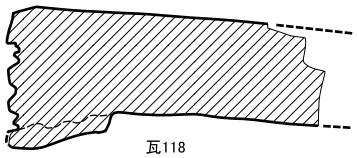


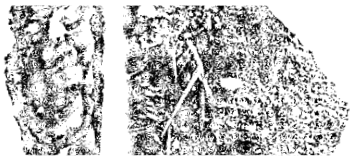


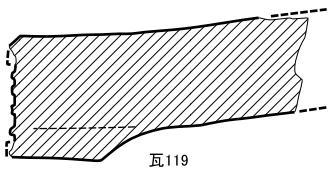




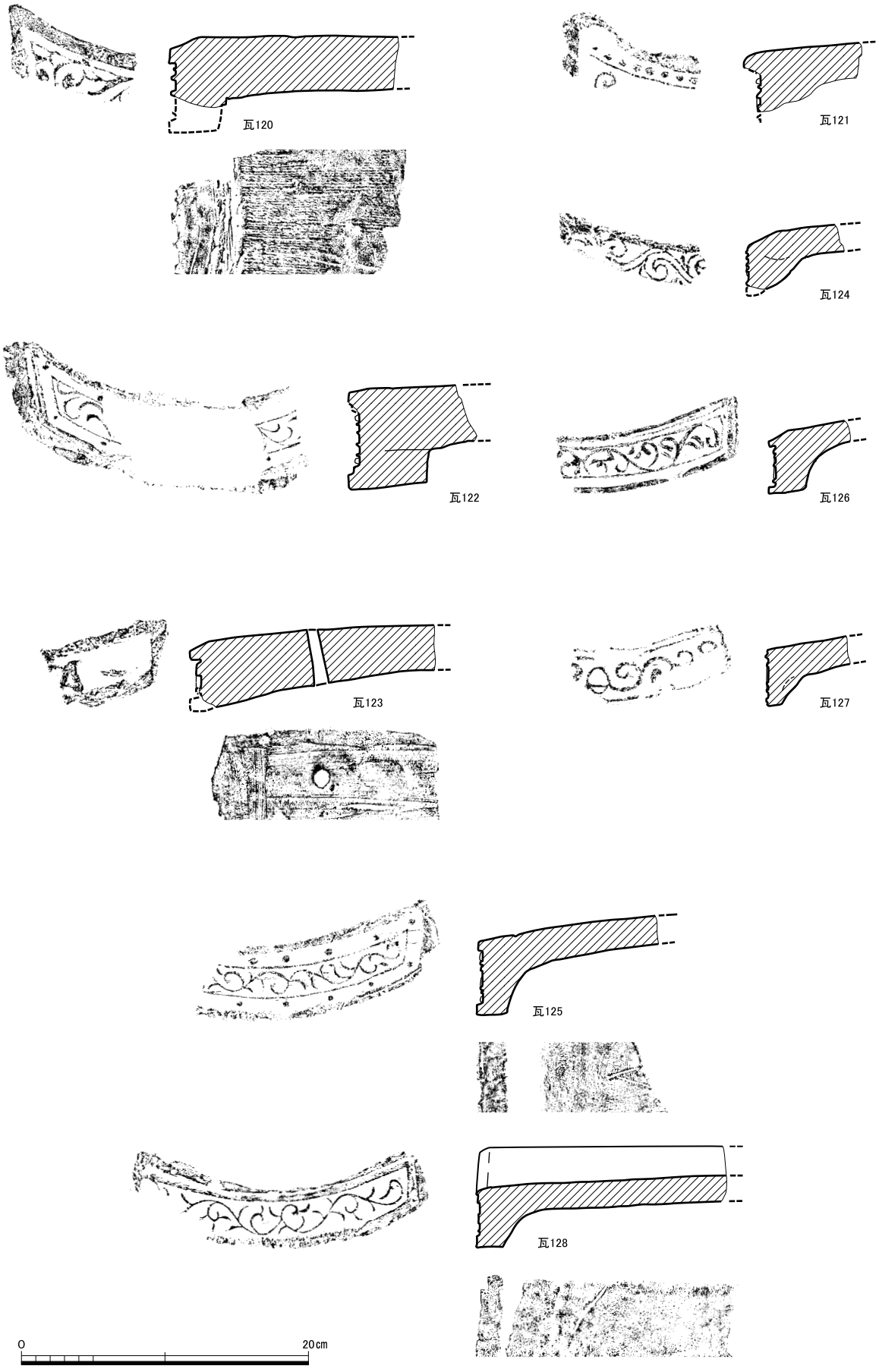




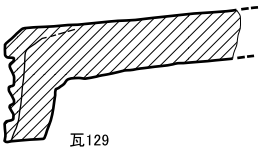




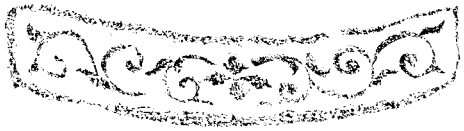
軒平瓦拓影及び実測図１（１：４）

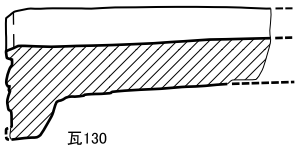


軒平瓦拓影及び実測図２（１：４）

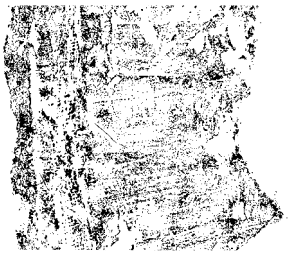


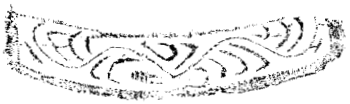
瓦129



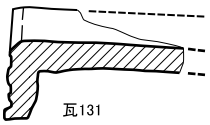


瓦130

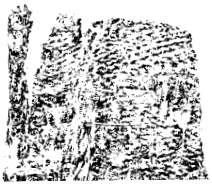


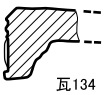


瓦132

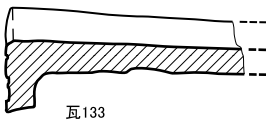


瓦131

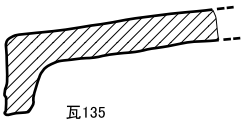




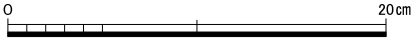
瓦134



瓦133

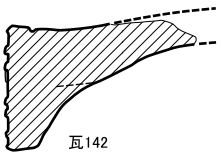


瓦135



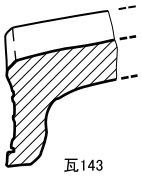
軒平瓦拓影及び実測図３（１：４）

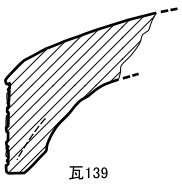
瓦136

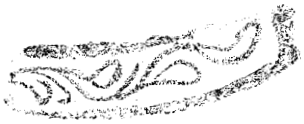
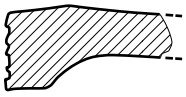

瓦142

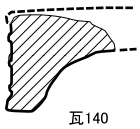
瓦137

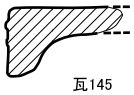
瓦138

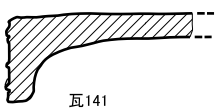

瓦143

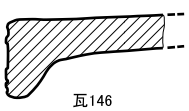

瓦139



瓦144


瓦140

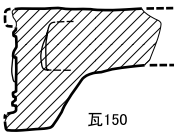

瓦145

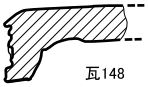

瓦141

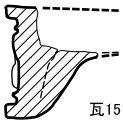

瓦146

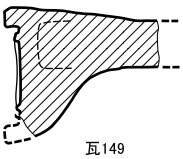
軒平瓦拓影及び実測図４（１：４）

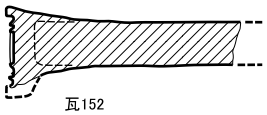
瓦147

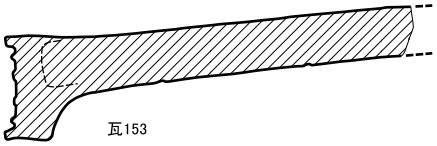

瓦150

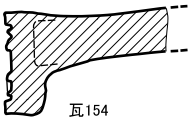

瓦148

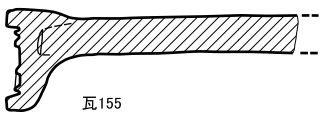

瓦151


瓦149

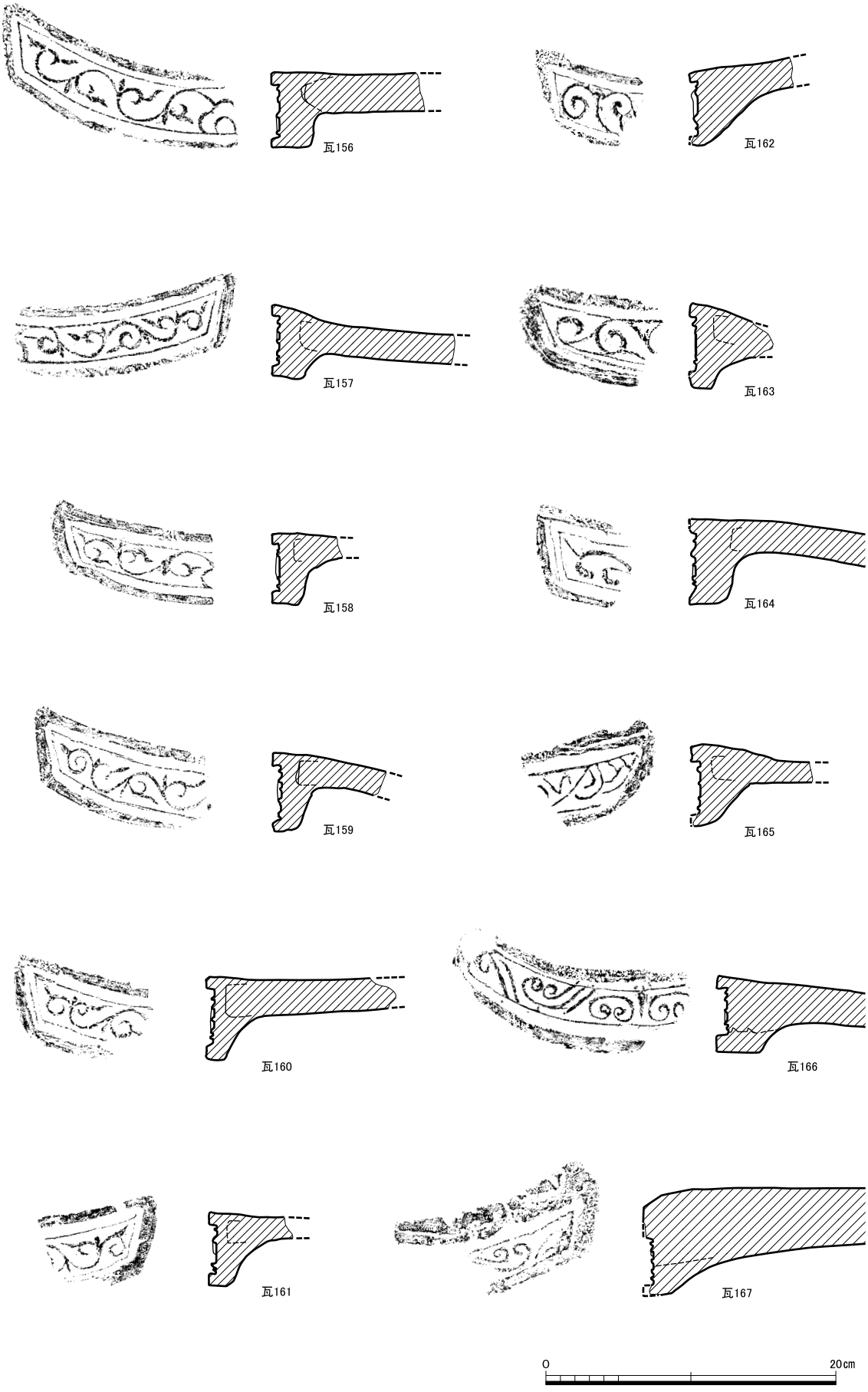

瓦152


瓦153

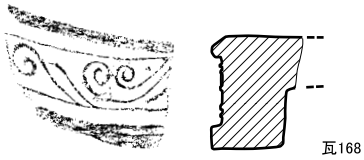

瓦154


瓦155

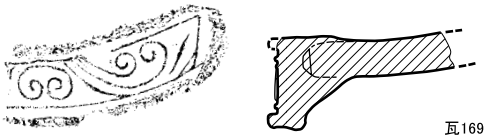
軒平瓦拓影及び実測図５（１：４）



軒平瓦拓影及び実測図６（１：４）


瓦168

瓦174

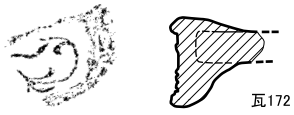

瓦169

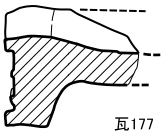
瓦175

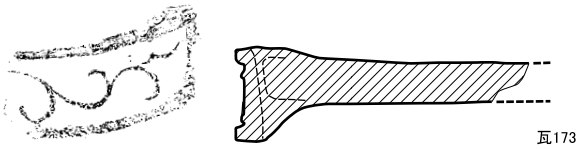
瓦170

瓦176

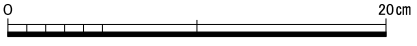
瓦171


瓦172

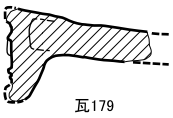

瓦177

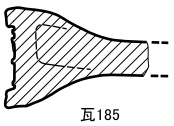

瓦173

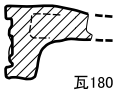
瓦178

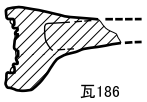


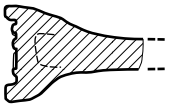
軒平瓦拓影及び実測図７（１：４）

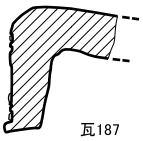

瓦179

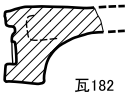

瓦185

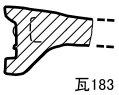

瓦180

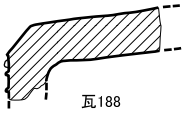

瓦186

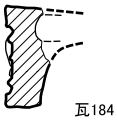

瓦181


瓦187


瓦182

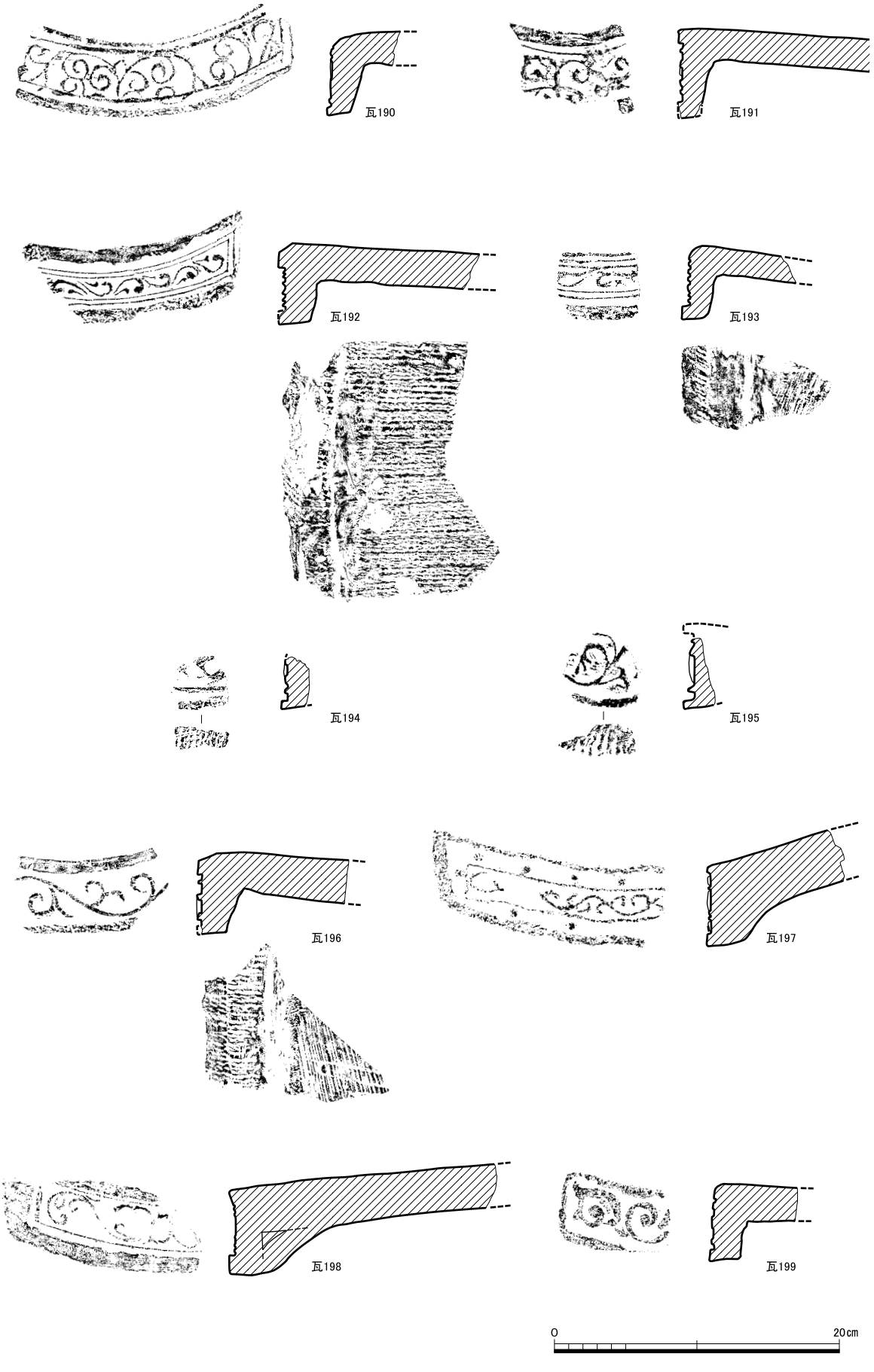

瓦183


瓦188

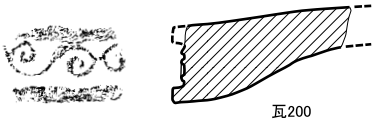

瓦184

瓦189

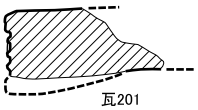
軒平瓦拓影及び実測図８（１：４）

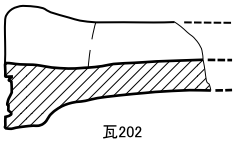


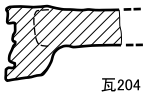
軒平瓦拓影及び実測図９（１：４）

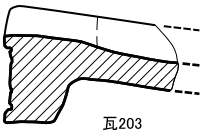


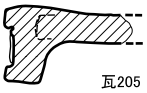
瓦200

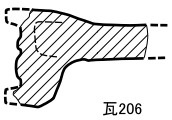
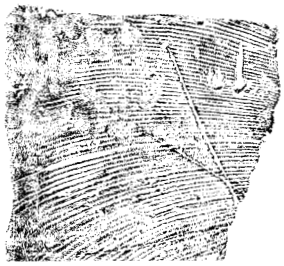

瓦201

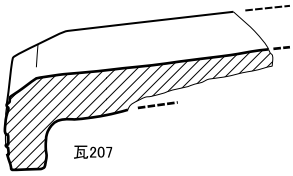
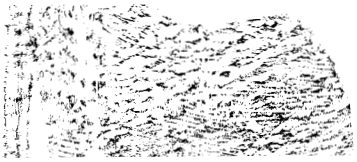

瓦202

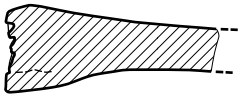

瓦204

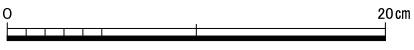

瓦203


瓦205

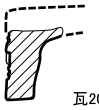

瓦206


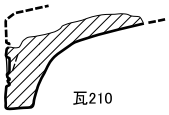

瓦207


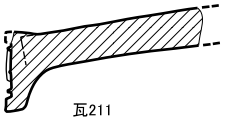

瓦208

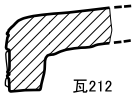


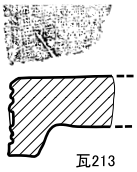
軒平瓦拓影及び実測図10（１：４）

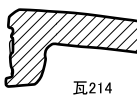

瓦209


瓦210


瓦211


瓦212


瓦213


瓦214

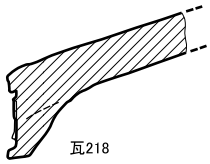
瓦215

0　20cm

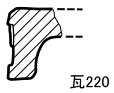
軒平瓦拓影及び実測図11（１：４）

瓦216

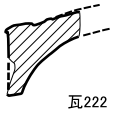
瓦217

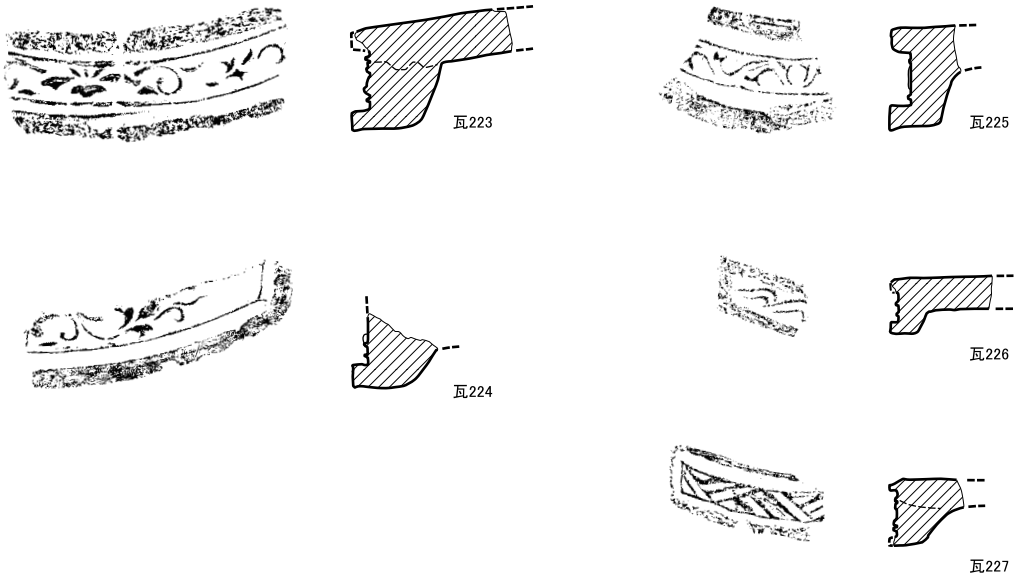

瓦218

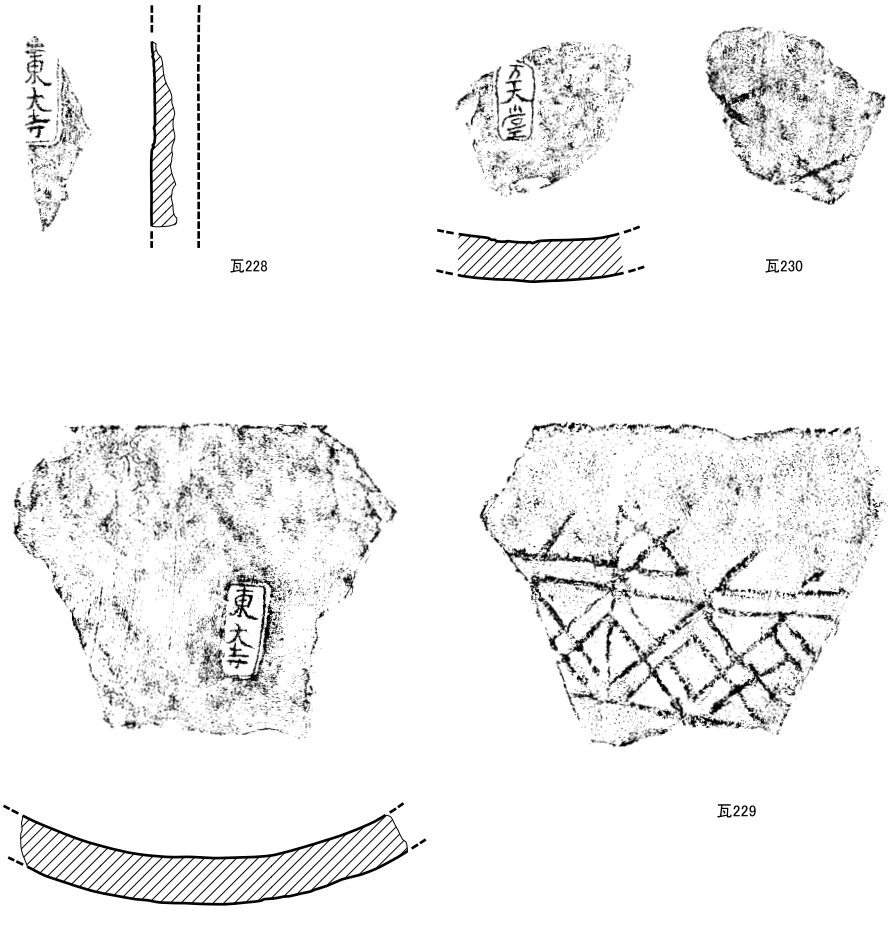
瓦219


瓦220

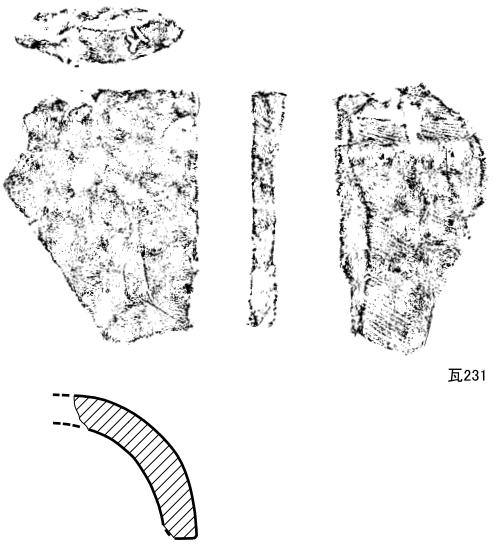
瓦221

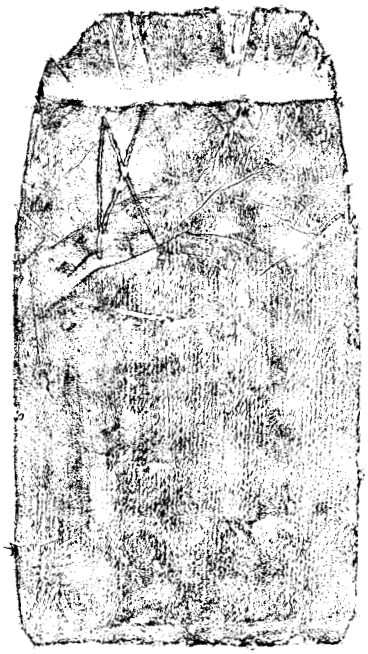

瓦222

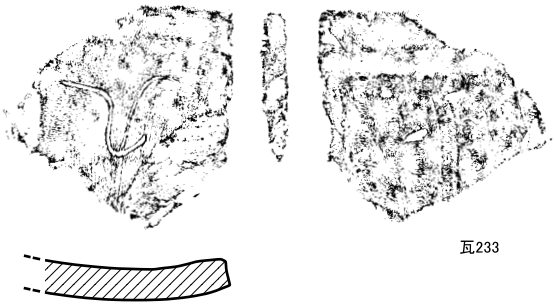


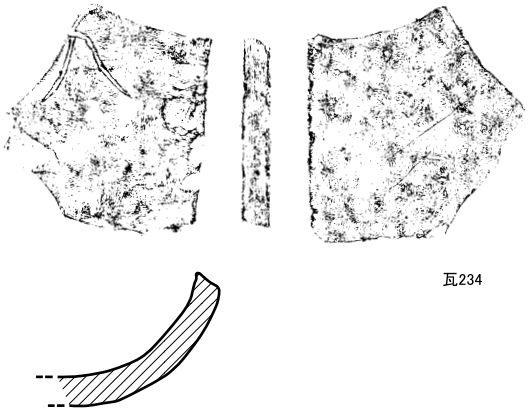


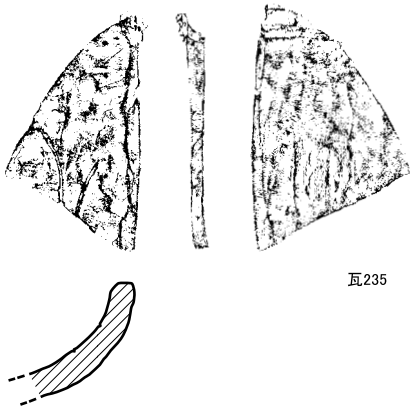
軒平瓦拓影及び実測図12、刻印瓦拓影及び実測図１（１：４）


瓦231


瓦232

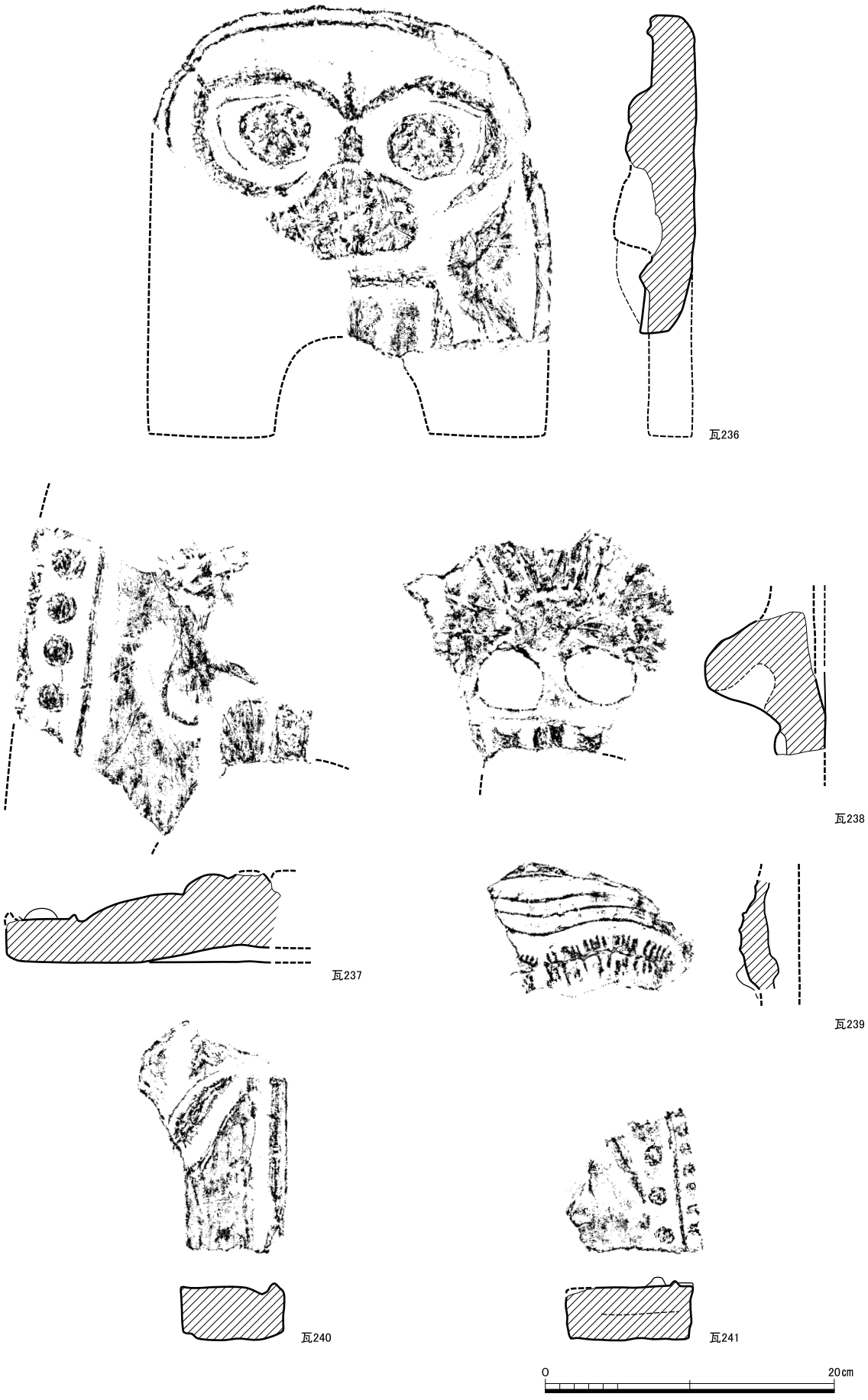

瓦233


瓦234


瓦235

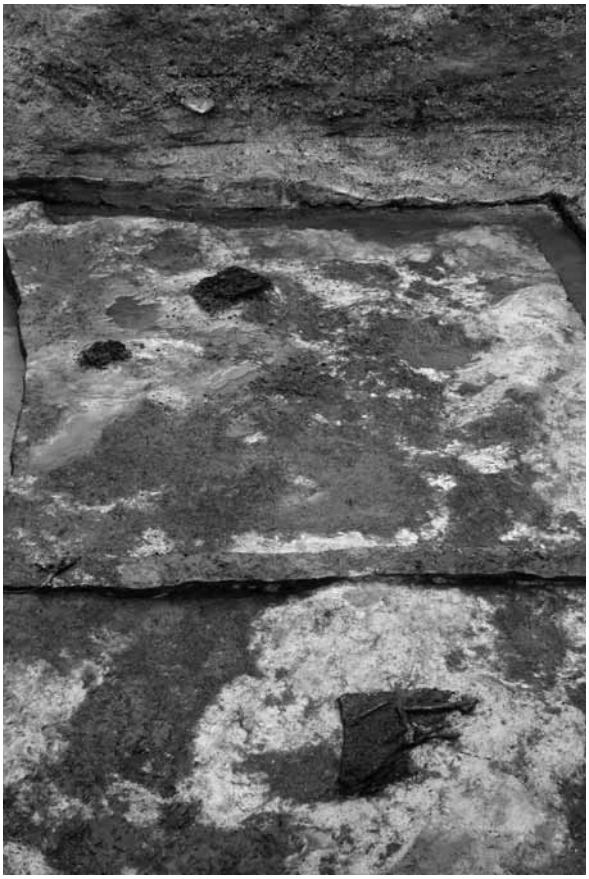
0　20cm

刻印瓦拓影及び実測図２、ヘラ記号瓦拓影及び実測図（１：４）



鬼瓦拓影及び実測図（１：４）

1　第３面　調査区西半　北調査区全景（北から）



2　第３面　調査区西半　南調査区全景（北から）

3　植物の塊検出状況（南調査区、北東から）

4　木の根検出状況（南調査区、北から）

1　第２面　調査区西半全景（北東から）

2　第２面　調査区北東全景（北西から）

1　第２面　調査区南東全景（北東から）

2　流路1100西岸断面（調査区西半、東から）

1　流路1100遺物出土状況（調査区西半、北東から）

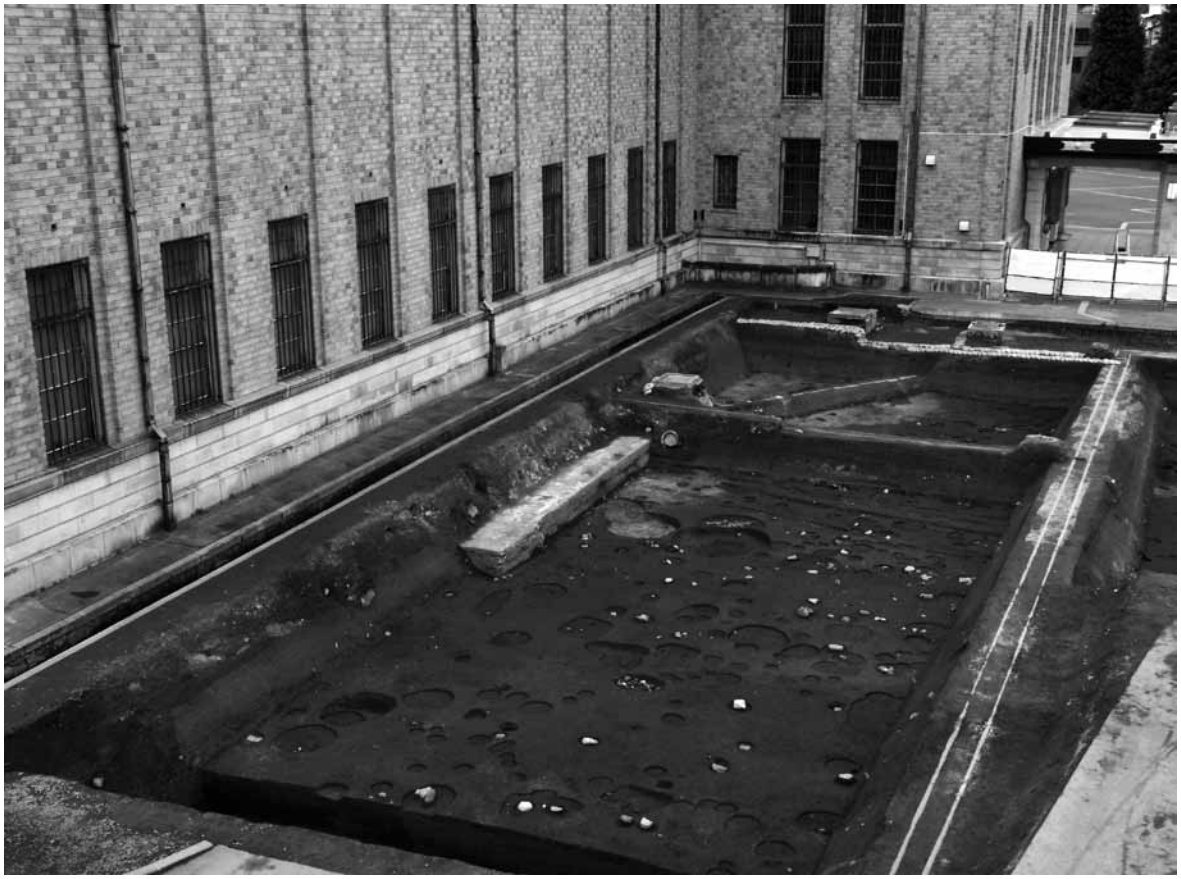
2　流路1100遺物出土状況（調査区北西部、東から）

3　流路1100西岸遺物出土状況（北から）

1　流路1100東岸（調査区北東部、北東から）

2　護岸1215（東から）

1　第１面２期　調査区西半全景（北から）



2　第１面２期　調査区東半全景（北西から）

1　溝1000全景（北から）

2　溝1000遺物出土状況（北西から）

3　溝1000断面（A－A’地点、南から）

1　井戸830縦板外面（北から）

2　井戸830埋土断面（北から）

3　井戸830完掘状況（北から）

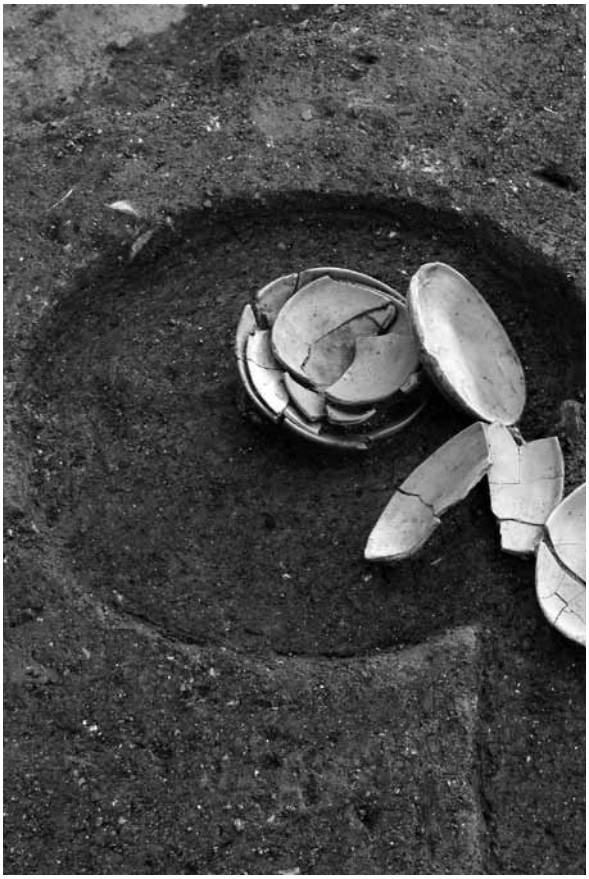
4　井戸1210（北西から）

1　井戸888・1205（北東から）

2　井戸888曲物出土状況（南西から）

3　柱穴569平瓦・軒丸瓦検出状況（東から）

4　柱穴780平瓦検出状況（南西から）



5　土坑516（北から）

1　土坑335（西から）

2　土坑518（北東から）

3　土坑616（北から）

4　土坑721（東から）

1　溝900中央断面・西岸護岸検出状況（南西から）

2　溝900北端、上層東岸検出状況（北西から）

1　溝900東肩遺物出土状況（北西から）

2　溝900西岸護岸杭（南から）

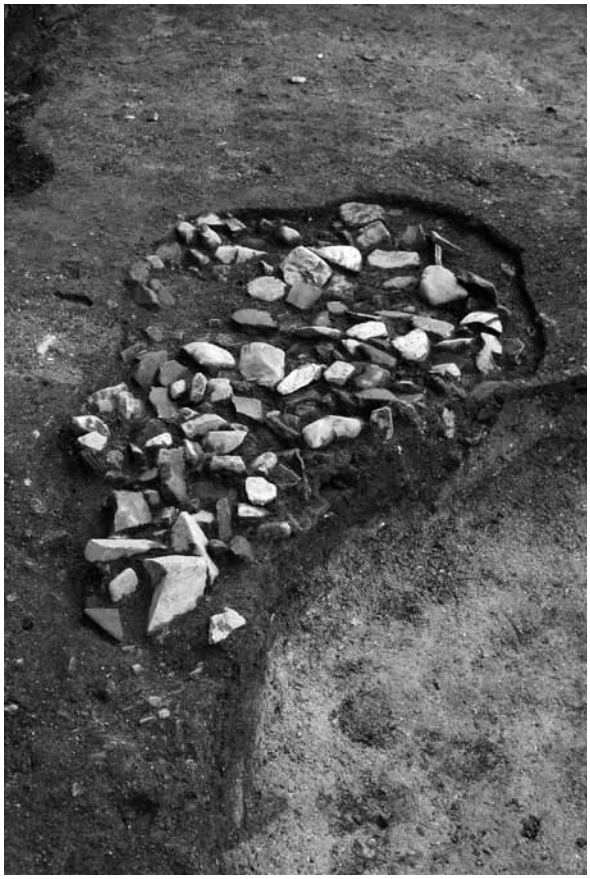
3　溝900鬼瓦出土状況（南西から）

4　溝440・840・900断面（C－C’地点、北西から）

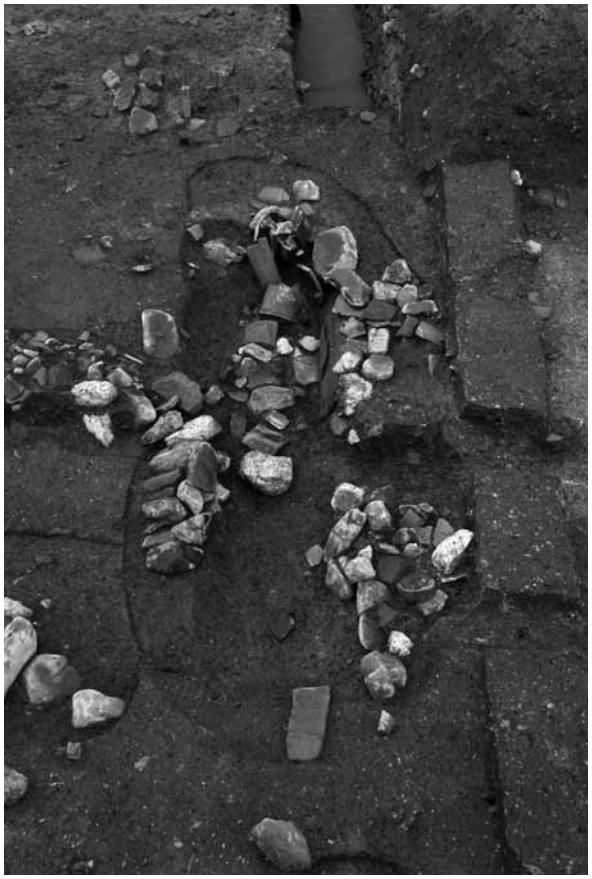
1　第１面１期　調査区全景（北から）

2　井戸1096（東から）

3　石組1089（西から）



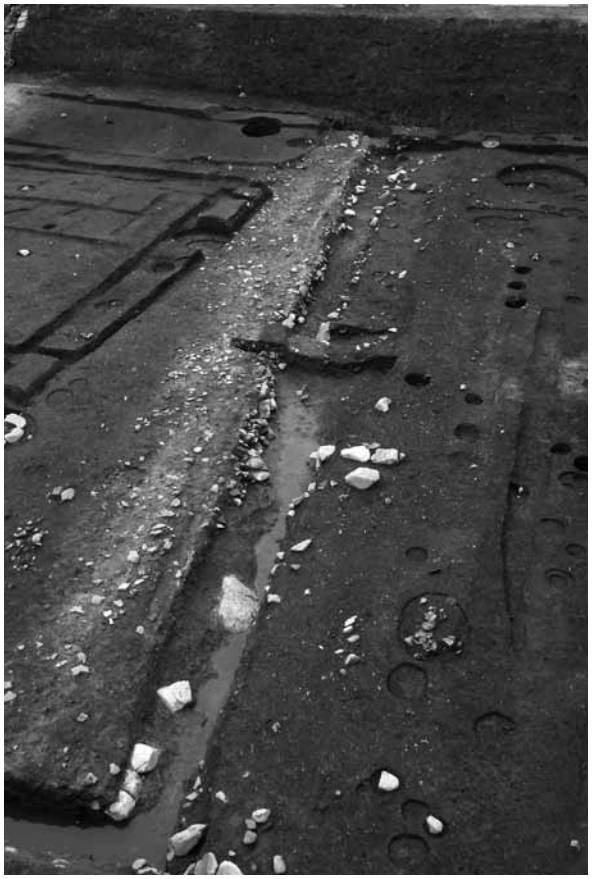
1　土坑396（北から）



2　土坑895（西から）

3　土坑243（東から）

4　土坑267（北東から）



5　溝840（南東から）

1　溝840西岸石組（南東から）

2　溝840東岸下層石組（北西から）

4

5

3

2

32

15

17

30

34

31

流路1100出土土器1

38

51

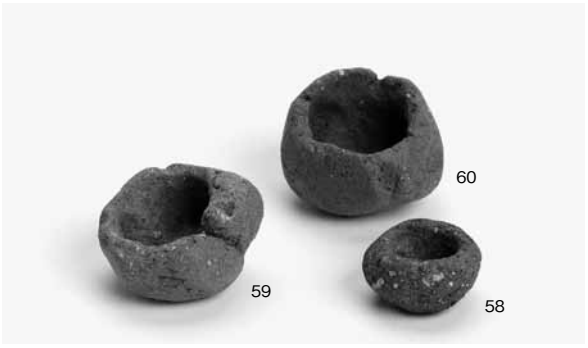
41

52

50

53

54


60
59
58

56

61

流路1100出土土器２

62

70

63

71

64

69

74

65

76

流路1100出土土器３

78

79

88

89

83

87

91

流路1100出土土器4

93

94

96

97

100

101

102

104

107

108

111

流路1100出土土器5

112

115

119

121

127

130

131

132

133

134

135

流路1100出土土器6

140

141

143

147

167

168

170

172

176

流路1100出土土器7

180

200

182

352

183

354

186

357

188

366

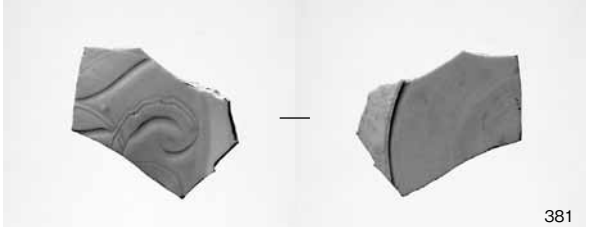
189

367

190

372

191


381

溝1000・井戸620・土坑616出土土器

205

207

211

220

224

231

234

240

245

248

251

257

259

275

溝900出土土器

332

410

411

413

416

422

423

431

443

452

457

459

1

464

土坑335・735・溝440・840出土土器、輸入磁器、縄文土器、墨書土器

瓦1

瓦7

瓦2

瓦8

瓦3

瓦10

瓦4

瓦11

瓦6

瓦12

軒丸瓦1

瓦14

瓦36

瓦16

瓦37

瓦18

瓦44

瓦33

瓦45

瓦35

瓦46

軒丸瓦２

瓦59

瓦79

瓦68

瓦80

瓦69

瓦82

瓦72

瓦85

瓦76

瓦87

軒丸瓦３

瓦88

瓦101

瓦107

瓦109

瓦110

瓦113

瓦114

瓦115

瓦116

瓦117

瓦118

軒丸瓦４・軒平瓦１

瓦122

瓦140

瓦128

瓦151

瓦130

瓦166

瓦131

瓦167

瓦133

瓦187

瓦138

瓦189

軒平瓦２

瓦190

瓦206

瓦192

瓦207

瓦196

瓦208

瓦197

瓦216

瓦198

瓦217

瓦203

瓦218

軒平瓦３

瓦229

瓦239

瓦230

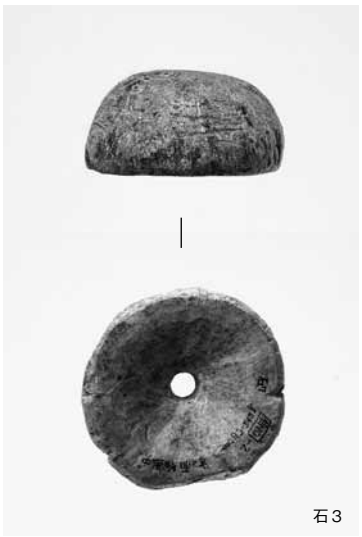
瓦237

瓦236

刻印瓦・鬼瓦

土12

金10


石3

金9

石11

石1

土製品、金属製品、石製品

木1

木6

木17

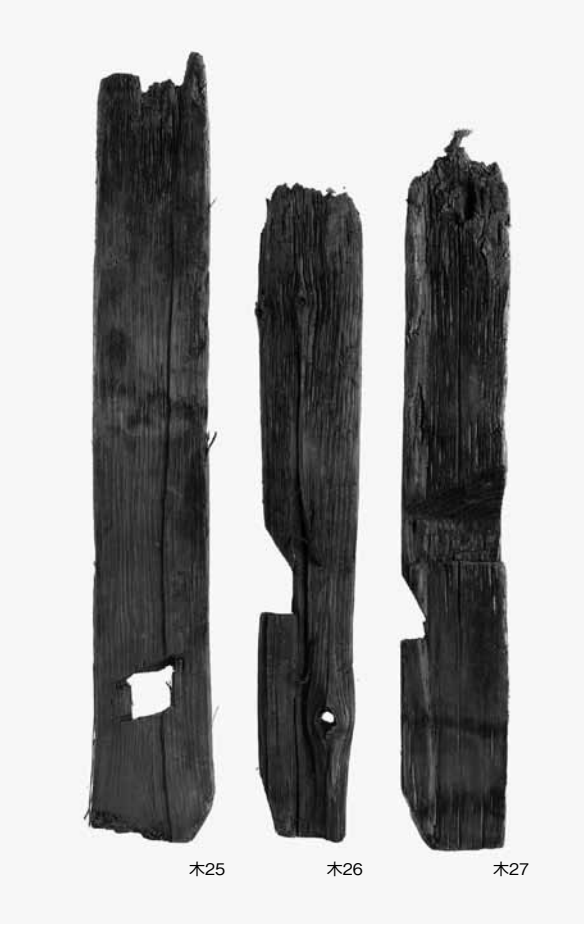
木19

木7

木18

木5

木23


木25 木26 木27

木製品

報　告　書　抄　録

ふりがな	えんしょうじあと・じょうしょうじあと・しらかわがいくあと・おかざきいせき
書名	円勝寺跡・成勝寺跡・白河街区跡・岡崎遺跡
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
シリーズ番号	２０１５−１７
編著者名	近藤奈央、上村和直、松吉祐希
編集機関	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
発行所	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
発行年月日	西暦2016年12月28日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
円勝寺跡（えんしょうじあと） 成勝寺跡（じょうしょうじあと） 白河街区跡（しらかわがいくあと） 岡崎遺跡（おかざきいせき）	京都市左京区（きょうとしさきょうく） 岡崎円勝寺町（おかざきえんしょうじちょう）	26100	417−4 417−5 417 418	35度 00分 47秒	135度 46分 59秒	2015年10月13日〜2016年２月29日	1,294㎡	美術館再整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
円勝寺跡	寺院跡	弥生時代後期〜古墳時代後期	流路	縄文土器、弥生土器、古式土師器、土師器、須恵器、石製品、木製品	弥生時代から古墳時代の流路、護岸施設などを検出。円勝寺・成勝寺を区画していたと考えられる南北溝と、その周辺で建物や井戸などを検出。寺院の敷地端に「雑舎」が集められていた可能性が高い。
成勝寺跡	寺院跡				
白河街区跡	寺院跡 邸宅跡	平安時代中期〜鎌倉時代前期	建物、柵、井戸、土坑、溝	土師器、須恵器、灰釉陶器、白色土器、瓦質土器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦類、土製品、石製品、金属製品、木製品	
岡崎遺跡	集落跡	鎌倉時代後期〜室町時代	井戸、石組、土坑、溝	土師器、須恵器、山茶椀、瓦質土器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦類、石製品、金属製品、木製品	
		江戸時代	井戸、土坑、溝	土師器、施釉陶器、国産磁器、焼締陶器、金属製品	

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2015-17

円勝寺跡・成勝寺跡・白河街区跡・岡崎遺跡

発行日　2016年12月28日

編　集
発　行　公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

住　所　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435　℡ 075-415-0521
http://www.kyoto-arc.or.jp/

印　刷　三星商事印刷株式会社

住　所　京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093　℡ 075-256-0961